

love laughs at locksmith.

- 年の差恋愛の始め方、続け方 -

ワイニスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love laughs at locksmiths . . . 年の差恋愛の始め方、続け方 -

【Nコード】

N1832T

【作者名】

ワイニスト

【あらすじ】

34歳の男。17歳の少女。倍の年の差の恋は、なんでこんなに苦しいんだろう？ 想いを伝えても、素直になれない。心に負った傷を、口に出せない。傷つけないから応えないのに、答えてくれないから傷ついてしまう。悩む男の苦悩は深く、支えになりたいと願う少女はまだたったの17歳なのだ。……そんな上手くない恋と二人の成長を描く物語です。

“Boyed” meets Girl

もうすぐ時刻は、深夜12:00を回る。

街はいつも通り静かだった。ネオンやサインは見当たらない。

明かりといえば街灯と信号機の赤・黄・青だけで、每晚通るこの国道はこの時間、ほとんど人通りがないから、彼はいつものように気持ちよく自転車を漕いでいた。

風を切って滑るように、速く。速く。

水無月の夜風は、日中と比べてやや涼しい。湿気を帯びた風はすれ違うと彼のシャツや髪をしっとりと撫でるように通り過ぎる。それがこそばゆいようで、何だかちよっと気持ちいい。

彼の名前は廣瀬トオル。

この『都会じゃない街』で暮らす、ごく普通の男だ。歳は今年で34歳になった。現在バツイチ、彼女ナシ。

仕事はこの街で雇われのイタリアン・シェフをやっている。

まあ、シェフといっても、従業員は彼しかない小さな店なのだが、それでも人口における高年齢層の多いこの街で、いわゆる『洋食』で生き残っていくのは大変なことなのだ。需要の少ない媒体であることは間違いない。そんな中で“6年目”の彼の店『カーサ・エム』は、地域では1・2を争う人気店である、とひそかに自負していた。

毎朝7時には家を出て、買い出しと仕込み。終わるのは早いときで10時頃。

常連さんが来たり、仕込みが多かったりすると、日をまたいでしまうこともある。

労働時間は、長い。

そのせいで飲食就業者は、気が付くと休みの日も含め『家』職場・

職場・家・時々コンビニ』という生活ゾーンが固定化されがちだが、まんまともって彼は固定化されていた一員であった。これはまるで呪いだ。決して出不精というわけではないのに、休みの日は外に出ていても『生活ゾーン内』でしつかりと済ませてしまえる性が恨めしい。

それはカフェも、スーパーも、本屋も、美容院も、全部がゾーン内にあるのもいけない理由の一つなのだろうけれど、もう一つ言うのなら、そのことを指摘してくれる身近な人間がいないのもまた問題なのかもしれない。

今夜は、親しい友人が奥様の誕生日を祝う会を催したいとの事だったので、場所の提供に一肌脱いだ。

おかげでああ、こんな時間だ。

和気あいあいに弾んだ会話。うまい料理に、楽しいお酒。なかなか見つからない落とし所は、気が付くと日付が変わる勢いだった。片づけが終わって、売上げの計算、明日の発注、残りの仕込み……。やることは結構あって、一人でやっていると慣れてはいてもそれなりの時間になる。それも仕方ないことだとわかつてはいるけれど、こうしてだれも歩いていない夜道を帰宅することになると、家に着けばちよつと物悲しい気分になったりもする。

100mおきに足元を照らす街灯。

そのたびに広がる、直径数mの小さな光りの輪は、まるでスポットライトのようだ。

上から注ぐ光で出来たちよつちやな世界は、歩道沿いにポツン、ポツンと、規則的に続く。誰もいないその歩道の無機質に照らされたステージみたいな場所は、見ようによつてはまるでテレビで観た宇宙飛行士の立つ月面の映像のように、空気のない冷たい世界みたいだった。

その光景もまた、今のトオルの心情的にはちよつと物悲しく映る。

沈んだ気持ちになりそんな自分を奮い立たせるように、トオルはさらにスピードを上げて自転車を走らせた。視界も彼と同じくスピードを上げてぐんぐん進む。足元を照らす街灯の明かりが、明・暗・名・暗、とシグナルのように点滅し、肌に触る風もざわざわからシユツシユツと音を変えてゆく。

こんな時間に誰もいるはずがないから、不謹慎にもトオルは普段だったら出さないような速度で自転車を走らせた。風の音がさらに鋭く変わる。

ふと、視界に影のようなモノが映った気がしたが、明かりの少ない夜道でははっきりしない。街路樹の葉でも揺れたのかと思い目を凝らしてみるが、そもそも大したものはないと確信しているから、視線を送るにしたりおざなりだ。

そしてざっと見回しても、やっぱり何もない。
気を取り直し、ふっと軽く息を吐いて、ペダルを強く踏み込んだ。
トオルが視線を真っ直ぐに戻して走り出した瞬間、

まるで息でも殺していたかのように、すぐ横に植わった街路樹の陰から、何かがわさつと飛び出してきたのだ。トオルは息を呑んだ。

白っぽいブレザーに、緑と黄色のタータンチェックのスカート。
明るい色の服なのに、その存在に気付いたのはもう自転車の前輪に飛び込んで来たあとだった。

ブレーキをかけても、もう絶対に間に合わない。
トオルはともかく避けるのに必死で、無理矢理ハンドルを切ってしまった。その瞬間、バランスを崩した自転車は『キイイツ』と聞いたこともないくらい甲高い音を響かせて、コントロールを失った。

あつという間にトオルの視界がぐるっと回った。

「キャアーツ！」

トオルの耳に悲鳴が飛び込んでくる。けれど、直後にトオルの体は右肩から激しく地面に打ちつけられてしまう。

うつ、となつて空気が肺を飛び出していく。勢いそのままスライドする自転車に引つ張られ、体がアスファルトの上を滑り、右半身が地面を強く擦る。

摩擦であちこちの皮が削れた感じがした。歯を食いしばって耐えるが、焼けるような感覚に目がくらみそうになる。

それでも、肘を突っ張る。熱が痛みか、区別のつかないような感覚が脊髄に走り、奥歯の辺りがじんとして顔をしかめた。全身の接地している部分に精一杯力を込めて踏ん張ると、それでなんとか体は横滑りを止めた。

自転車はまだ滑り足りないのかも少し歩道の先まで行つて、やがてガシャンと何かにぶつかって止まったようだ。

「……あつ、つつっ！。いつててて」

あつという間の出来事に無意識に止まっていた息を呻き声のように吐き出してから、新しい空気を深く吸い込んだ。停止していた思考が、時間をかけて一つずつ現状を理解しようと活動を始めた。

頭が活性化したおかげでまっ先に痛みがやってくる。右半分が焼けたように熱い。

地面にぐったりとしていた体をなんとか起こそうとしたが、さすがにちよつとめまいがした。ともかくうつ伏せに体を入れ替え、肘をつき、いつもより速く廻る地球が大人しくなるのを待つ。

気分は遊園地のアトラクションの何十倍も最悪な感じた。それでもトオルはなんとか体を起した。

辺りを見回すと、自転車は数m先のガードレールに激突して止まっていた。

それから自分の様子を確認しようと全身そっくり見回してみると、こっちはかなり痛々しかった。ジーンズは膝の部分は切れてボロボ

口だったし、その下の膝からは結構派手に血がにじみ出ている。右肘のところも大きく擦れて血が出ていた。他にもあちこち赤黒くなっている。まあ、着ていたのが半袖の服でなくてまだよかった。

「はあ、なんだ、あちこち傷だらけだな」

ため息交じりにトオルは呟いた。今夜のシャワーは痛いんだろうなと想像してしまう。それでも不幸中の幸いか、骨折のような大事には至らなかったようだ。あの勢いで転倒した割にこのくらいの怪我で済んだというのは、ツイているほうと言うべきなのだろうか。

トオルはポリポリと頭を搔いた。考えてみれば、いい大人なんだからもう少し社会のルールに沿った運転を心掛けるべきなのだ。神様は時として罪より大きな罰を与えるのかもしれない。そういえば、この数年、お参りなんて行った記憶もない。

心の中で適当に幾つかの神様にお詫びをして、ゆっくりと立ち上がるトオル。痛む足を引きずりながら横倒しの自転車がある場所まで歩いていくと、上半身に力を入れて「ぐっ」と起こす。膝は痛くて力が入らなかったので、痛む側を庇うのに自転車を使った。

ふと、何か目に入った。そして急に大事なことを思い出した。

その存在を、すっかり忘れていたのだ。

トオルは慌てて目を凝らした。10mくらい向こうの暗がりには、白い影がぼんやり浮き出て見えた。トオルは膝の痛みも忘れて足を動かし、影のそばへと近づいていく。そしてあと数歩ほどに近づいたとき、ようやくその存在の輪郭がハッキリ見えた。

そこには長い髪の少女がぺたりと尻餅をついていた。

口は悲鳴を上げた時のまま閉じるのを忘れたようで、半開きのまま固まっていた。顔色は月明かりでもわかるくらいに蒼白で、近づいて来るトオルを追って、目だけがゆっくりと上向いていく。

トオルがスタンドをかけて自転車を止め、ゆっくりとした足取りで彼女の方へ近づいていく。彼が立ち止まるのと一緒に、少女の虚

るな色の目が定位置を見つけたみたいに『ピタッ』と動きを止めた。世界の終わりが来たわけじゃないのに、貼り付いたみたいに表情を固くした少女の真横に辿り着くと、体を投げ出すように座った。

膝から流れた血が固まってしまったらしい。曲げようとする引っ張られる痛みがひどい。

それでもなんとか笑顔でもって、出来る限り警戒させないよう努めて明るく振る舞い、トオルは少女の顔を覗き込んで言った。

「ごめんね。大丈夫だった？」

トオルが声をかけると、少女はまるで死角から声をかけられた猫のように派手にビクツとした。あんまり飛び跳ねるものだからトオルの方も思わず身を引いてしまった。

「あー、いや。あの、さ……怪我、とかない？」

「は、ひゃっ……」

震える声で少女は答えるのだが、その返事は明らかに失敗だった。鳴き声にしては間が抜けていたし、意思表示にしては判断に困るような中途半端な回答だ。

「大丈夫、だよな？」

「は、ひゃああ……」

彼女の二言目は、一言目とほぼ同じ失敗をしていた。表情もますますこわばってしまった。そして、もう一回。

「ひゃっ、はひゃっ、ひ」

「プッ、くっっ……」

それが、何だかトオルにはちよつとツボだったのだ。

今のこの場の雰囲気。張り詰めた表情の少女。

不謹慎かもしれないけれど、どうしても我慢が出来なかった。C級、三流の駄作なホラー映画顔負けの少女のリアクションが、おかしくっておかしくって、ついトオルは笑ってしまったのだ。

「く、くくくっ、なんだ、そのリアクション……！ ははは、い、いてっ、いててっ！」

彼はくの字に腹を抱えて笑い出したせいで、曲げた体のあちこち

から激しい痛みに襲われた。

ひーひー言いながら苦痛に顔を歪めたが、それでも笑いは止められなかった。

あんまりにカラカラと笑うトオルを呆然と見ていた少女の目は、最初のうちはまるで不可解な現象を見ているかのようなだった。

けれどその目は次第に色を取り戻していく。その表情も青白いのから赤いのへ、ザーと音を立てるように変わっていった。特徴的な大きな瞳の目尻が、キツと鋭く釣り上がった。

「ちよつと、何よつ?! なんでそんなに笑ってんのよ!」

「はははっ、……へっ、何?」

急に話しかけられてすぐには彼女の言葉が耳に入らなかったトオルは、まだ肩を揺らしながら少女に向かって聞き返した。

だが、彼女はそれがまた気に入らない。ますます目には怒りの炎がメラメラとした。

「何がおかしいのよ? ちよつと、そのうすら笑いもやめて」

「いや、悪い。……くくく」

「笑わないでって言うてるでしょ! ちよつともうつ、いいから黙れって言うてんのよっ、ジジイ!」

少女は余程気に入らなかったらしく、血相変えて怒鳴り散らした。よく見ると見た目は清楚な雰囲気さえ感じさせる長い黒髪に、最近の子にしては控えめなメイク。スカートこそ今どきの子達と同様にちよつと短かめだけれど、おそらく学校指定の制服を指定のまま着こなしているのだろう。道でただすれ違ったら『お淑やか』と形容できそうなその少女の口からは、とうとう「ジジイ」とまで出てきた。

喋る言葉は捲し立てるように荒っぽく、見た目とはだいぶギャップがあった。

トオルは一瞬キョトンとしたが、もうそれから我慢できなかった。今度は全開で笑ってしまった。

「あっはは、凄いいね。『ジジイ』だって……マジかよ! はははは

っ！」

そのトオルの言葉でハツとなった少女は、急に自分の口を抑えて小さくなってしまった。

あんまり激しく怒って我を忘れたから、思っていることもないことも全部口にしてしまった、といったところか。さっきまでとは違った色でみるみる赤くなっていく顔がやけに可愛らしかった。そんな表情を盗まれたのに気付いたのか、今度はまるで借りてきた猫のように、急に居心地悪そうに俯いてしまう。

その様子がますます可愛らしい。

トオルはさすがにやりすぎたと反省した。みればどうやら女子高生のようなだし、それなのに自分ときたら初対面の相手に大笑いだ。大人げないを絵に描いたような振る舞いに、ちよつと鼻をぐしくしとした。

「ごめん、ごめん。いや、悪いのは俺のほうだった」

「……………」

「ぼーっとして自転車を走らせてたし。危うく、君を撥ねるところだった。それに笑ったのも。ごめん、俺が悪かったよ。ほんと、ゴメン」

トオルは自分の無礼を詫びる。素直に頭を下げた。しばらくそうしたまま少女の出方をみようとした。怒りが晴れるならそれもよし、そうでないならもう一声するまでだ。

しかし少女からの言葉はなかった。諦めてトオルが顔を上げると、目の前の表情はやっぱりまだ怒ったままだ。だがトオルもこのままというわけにはいかない。『カツ』と目を見開いてみせると、その仕草に気を取られた少女に向かって思い切り目顔で『ゴメンツ！！』の電波を送ってみた。それが果たしてトオルの意図した通りに伝わったかはわからない。

けれどとうとう少女も観念して、「ぷっ……………」と唇を緩めたのだ。トオルは無言のままバンザイの仕草を試みせた。作戦の成功を満了した笑顔だ。

対して少女の方は、折角ひいた鉄壁の守りを崩されてことにちよつと不満そうな表情だ。彼女はペタリとついていたお尻を持ち上げて立ち上がると、スカートの裾を手でパタパタはたいた。

「ほんと、ゴメンね」

「……別に。気にしてません、大丈夫です」

言葉とは裏腹にたつぷりと気にしたままのほったな少女。そんな様子もまた可愛らしかった。トオルは今度は自分の胸の内だけで微笑んだ。こうしてみるとなかなか綺麗な子だ。均整のとれた顔立ちをしていたし、立たせてみると割に背が高くスラっとした体つきをしていた。長い髪も艶やかで、大人になったらきつといい女になるだろう。

「そう……じゃあ、最後にもう一回。ごめんね」

トオルもゆっくりと立ち上がる。

「いててっ……」

力を入れた右の膝がミシミシ言った。固まった血がパリパリ音をたてて剥がれた。多少、筋肉を痛めたのか動きが鈍重な気もする。トオルは何度が右足だけ屈伸して自分の体の様子を確認してみた。まあ、そうはいつでも家に帰って寝ればちよつとはよくもなるだろうと、楽観的な思考でもって腿の辺りを揉んでみた。とりあえず、たどり着けさえすればいいのだ。トオルにしたらその程度のことだった。

——が、少女は違った。

その仕草を見た少女の目が、何かに気付いてまた顔色を真っ青にしまった。

「あっ、あ、ああ」

少女は言葉を失った。何事だろうと思ったトオルは彼女の顔を覗

き込む。もしかして、今になって痛むところが出てきたなら心配だ。そういえば彼女からは、体の状態や怪我については何も聞き出せていなかった。なにかあったかもしれない——そう思い、覗き込んだ。

目が、合った。

それは明らかに動揺を浮かべ、震える目をしていた。その目が近づいたトオルの目元に何かを見付けてたのが、その表情と瞳の動きでトオルにもすぐわかった。すると少女の目はさらに見開かれて、今度は体ごと震え出してしまった。

見つめていた目が、キラキラと輝いて見えた。だがそれは急速に膨らんで、すぐにボロボロと目元からこぼれ出したのだ。少女の突然の涙に、トオルはギョツとした。

「私、そんな、……ご、ごめん、なさい。ごめ、……さい、」

少女は突然顔をおさえると、手のひらお向こうから何度も何度もそう言うのだ。

「ちよつ、ええっ?! 別にキミは悪くないって。だから、ぜんぜん謝らなくてもいいんだよ!」

「ちが……ご、ご、……ごめ、ごめんなっ」

何度も、何度も、何度も。

彼女は顔をおさえたまま、必死になって何度もトオルに謝った。

途中から涙と鳴咽だけになって言葉も出せなくなっただが、それでも頭を下げて、なんとか謝罪しようとしていた。

何を言っても、何をしても。

少女はずっと首を振ったままだ。

トオルはどうすることも出来なかった。慰めようにも理由はわからないし、話しかけてもちっとも彼の声は届かなかった。ひたすら頭を下げるばかりだ。

どうしたもんかなー、とトオルは頭をかいた。

第一、女子高生と話すのなんて、自分が高校生の頃以来だ。なんて言って声をかけたらいいのかもわからないのだ。

道沿いの段差を椅子がわりにして座る30半ばの男と高校生の少女。

こんな不思議な組み合わせは、きっと真っ昼間だってそんなには見掛けないだろう。ましてや深夜零時をまわった今、人目に付けばどんな勘違いをされるか。

だが、この街の夜はいつも静かだ。辺りに人の気配はない。

少女はだいぶ落ち着きを取り戻したものの、ときどきまた思い詰めたような表情をしては、ポロツと涙をこぼした。深夜の静寂のなかにそのすすり泣く声だけが響くのだ。たとえどんなに薄情な男だって無関心ではいられないはずだ。

本当は何か言葉をかけてあげたいと思う。けれど、トオルに彼女を慰めるようなうまいセリフはなかなか思いつかなかったし、そもそも声をかけるタイミングもうまくつかめなかった。頃合を見計らって、いざ口を開こうとしても、すぐに新しい涙の跡をつくる彼女の横顔をみてしまうと折角頭に浮かんだ慰めの言葉だって呆気なく何処かにいってしまった。

結局、トオルにできることなんて、ただぼんやりと空を見上げて待つくらいなのだ。

多分、年頃の女の子が初対面の男なんか泣き顔を見せたくないだろう。「すんつ」として鼻をすする音だって、無理に呑み込んだ嗚咽で逆にむせ返すのだって、トオルは聞こえないふりをしてあげべきだと思った。

だから、夜空を見上げていた。

星を数えていた。

そうしてしばらく時間が過ぎるのを、ただ、じっと待っていた。

『この年になるとどうでもいいことは気にならなくなる』とまでは言わないけれど、こうやってぼんやりと夜空を見上げるなんて、一体、どれだけひさしぶりか。もう、記憶をたどっても思い出せない。

そのせいだろうか、最近忙しさにかまけて何か大きな物をなくしてしまったような気がしてならなかった。

それは、『余裕』だろうか……

違うとは言い切れない。ただ、それだけでもないと思う。一言に表すには複雑すぎる心のパーツなのかもしれない。トオルは自分が大切な『それ』を、知らないうちに何処かに落としてきたような気がして、なんとなくちよつと寂しくなってしまった。

だからこんなにも驚き、新鮮に感じてしまうのではないだろうか。夜空には見渡す限り満天の星の輝き。すぐ隣りにはガラス造りの今にも壊れそうな心。

どちらもきらきらと輝いて美しいけれど、どちらも手に触れることは出来ないモノ。社会や現実揉まれて鈍化してしまった自分の感性では、手にとって確かめられないものはなくてもよいものだと心のどこかで考えてしまったのかもしれない。

空に散りばめられた星々が、彼の頭上の街灯と街路樹の葉先の向こうに、どこまでもずっと続いていく。

ただ無心で美しいと思うことができた。ただ、自分はどうかやらそんなことすらも忘れていたのだ。

トオルは、膝に顎をのせて数m先に視線を落としている少女の顔をちらつと覗いた。

彼女もきつとそうなのだろう。時間だけがこの子に教えてくれるものは、きつとあるはずだ。

随分と長くそうしていただろうか。

気付くと少女は膝を抱え、小さく丸まるようになっていた。

トオルはゆつくりと腰を上げた。

「んん……っ」

日中は暖かいとはいえ夜はまだまだ涼しい。しばらく座っていた体はなんとなく強ばっていて、トオルは腕を伸ばしたり、首を鳴らしたりして、春宵に同化しそうだった体を活性化させる。そんな彼の気配を感じたからか、少女もゆつくりと顔を上げた。まだ頬に残る微かな涙の跡を、右手の甲が何度かこすった。

「行こっか？」

少女は無言のまま頷いた。

聞けば、彼女の家は電車で一つ隣の駅だった。

けれどここは『都会じゃない街』。都内と違ってひと駅ひと駅の間はかなり距離があるのだ。ひと駅あれば小旅行、ふた駅だったら歩いて帰るのはまず諦めたほうがいい。終電のつくに行ってしまったこんな時間に、女の子を家に送り届けるならタクシーを利用するほかはない。

「駅まで、歩ける？」

彼が訊ねると、少女はコクリと頷いた。

トオルは一度、自分の自転車を取りにガードレールのところまで歩み、起こした自転車を手押ししながら駅に向かって歩き出した。少女はそのちよつと後ろを黙ってテクテクと付いてくる。時折、チラツと振り返ってみたが、彼女は大人しく付いてきた。

二人は駅までの道のりを無言で歩き続けた。カラカラカラツ、と自転車の車輪が廻る渴いた音が辺りに響き、二人のカツカツと鳴る足音がそれを追いかけた。

あまりに静かで、時折、電球の古くなった街灯がジジジツと鳴るのが聞こえるくらいだった。お互い話すことも見付からなかったのに、尚更静寂が際立った。

しばらく歩くと信号機が見えてきた。あの交差点を左に曲がれば、駅はすぐそこだった。

ふと気が付くと、足音の一方が遅れているのに気が付く。

カツツ、カツツ、カツツ——と。

振り返ると、さっきまですぐ後ろにいたはずの少女がずいぶん離れて歩いている。トオルは立ち止まって彼女が来るのを待とうと思ったのだが、そうすると少女も同じように立ち止まってしまった。辺りが急に静かになったので、不気味なくらいくつきりと信号の点滅音が聞こえた。

カチ、カチ、カチ、——じつと二人は立ち止まったまま。

トオルは、ずっと感じていた。多分この子はこんな時間に出歩くタイプの子じゃない。おそらく何か事情があるんだろう、と。

けれど10代女子の悩みなんて大抵の男は専門外だ。だから彼は待つことにした。彼女が自分で考えてどうするかを待つ。30過ぎのトオルに出来るのはそれくらいの気がしたのだ。くたびれたオジサンの意見なんて、女子高生にはきつと必要ないはずだ。

少女は、まだ立ち止まったまま。

トオルは少女の顔を見たが、俯いた彼女がどんな表情をしているかまではわからない。声をかけるべきか、かけないべきか。迷ったが、それでも結局は待つことにした。押していた自転車のスタンドを立てると、カタツツと鳴ったその音に、少女の肩はビクンツと反応した。臆病な娘なのかなとトオルは口元を緩めた。

けれど、そんな娘がこんな時間に一人でこんな場所にいるのだ。そうしなければならなかった事情は、軽いものではないのかもしれない。

少なくとも、彼女にとっては。

どのくらい経っただろうか。トオルはとうとう待つことを諦めて自分から少女に歩み寄っていった。トオルが近づいていっても、少女は下を向いたまま動き出す様子はない。ただ彼女の心中をおもん

ばかりのは、もう十分な気がしていたのだ。これだけ時間を使っても解決できない何かがあるのなら、そこには自分が手を差し出してあげてもいいように思ったからだ。

「……!？」

少女はまたビクツと反応したが、トオルは気にしなかった。彼の差し出した手が少女の手を掴んで引き、そして再び前へと歩き出す。そうするとトオルが思ったとおり、彼女もつられて素直に歩き出した。

すぐ側まで来ていた交差点を曲がると、前にはロータリーが広がり、そしてその先には駅舎も見えた。駅名を記した看板が暗闇の中で煌々と明かりを灯していて、まるで迷宮から脱出した冒険者みたいな気分になる。

トオルはほんのちよつとだけほつとした。あとはタクシーを拾って、この少女を見送るだけ。それでトオルは自分の責任を果たせる気がした。

ところが、ふと繋ぐ手に力が入るのを感じたのだ。あとを付いてくる一步の足取りが急に重くなる。それでも、もうトオルは黙って手を引き続けた。もう立ち止まるつもりはなかった。

「……何にも」

今度は明らかに抵抗の意思をもって、彼女の足が止まった。

「うん？」

トオルは振り返った。

「何にも、訊かないんですね……」

少女はようやく顔を上げて、目はじつとトオルのほうを見ていた。その表情はまるで決意の表情だった。トオルと視線が重なった瞳こそちよつと不安な色をしていたが、口はきゅつと引き結び、眉間の辺りにも力が入っている。

「なんでこんな時間に一人にいるか、とか。な、なんで……あなた
の自転車の前に、とつ、……飛び出したのか、とか。何にも訊かないですね」

「……………」

トオルはしばらく黙って少女のことを見返していた。大きく一つ息をつく。彼女の言葉はそれ以上続かなかったから、トオルは仕方なく口を開いた。

「キミは、さ」

できるだけ普通に言っただつたのだが、眉間に皺がよつたのが見えた。眉がきつく歪むのもわかった。たった一言を待つためにそこまで悲愴な顔をされてしまったら、トオルだってもうどんなふうに答えたらいいかわからなくなる。トオル自身、眉間に皺をよせた。

けれど、このまま黙り込んでもしようがない。トオルは一度小さく息を吸い込むと、思い切つて言葉を続けた。

「君は一体、どうしたいの？ 問い詰められたいの？」

「……………」

「それとも、俺に慰めてもらいたいのか？」

その一言に少女は強く反応する。大きくかぶりを振った。

「そつ、そんなんじゃない…… 私、そんなふうに思つてなんか

……ない、です」

「そ。でも、別にキミが何を考えていかなんて、悪いけど俺には興味ないんだ。だからわざわざ『なんで？』なんて訊くつもりもないよ」

トオルは苦笑してみせる。冷たい言い方かもしれないけれど、これ以上踏み込んで自分にも出来ることはないはずだ。

少女はすつと俯き、もう一言こぼした。

「けど、あなたはこんな怪我を……私、そんなつもりじゃなかった……」

そして彼女はまた、涙をこぼした。

駅の時計を見てトオルはちょっと驚いた。時刻はもうすぐ深夜の三時をまわろうとしていた。そんなに時間が経っていたとは思わなかったから、おもわず「うわぁ……」と口に出してしまつて、後悔した。トオルの一言で、横にいた少女がまた肩を落としてしまつた。トオルは慌てて口をつぐんだ。

しかし、こんな時間だから当然といえば当然なのだが、乗り場にタクシーは一台も停まっていなかった。見れば駅前も閑散としていて、普段感じたことがないくらいにロータリーの広さを実感した。明かりがついているのは駅名の看板くらいで、覗き込むと駅構内もほとんどの電気が消えていた。

「はぁ、まいったな」

トオルは立ちすくんだ。これはちょっと計算外だつた。

駅に着いたら彼女をタクシーに乗せ、運転手にいくらか渡せば御役御免のつもりだつた。

こういう展開はまったく想定していなかったから、トオルも困惑するしかない。まさかここに彼女をほつて帰るわけにはいかないし、かといつていつまで待てば次のタクシーが来るのかなんて、ちょっと見当も付かない。最悪、明け方まで待つて最初のタクシーをつかまえる方法もあるが、それにしたつてずっとここで待つているのも得策とは思えない。

これが男だつたら自分の店に連れて行つて、椅子でもどこでも好きに寝ろつてこともアリなんだろうが、女の子相手にそれはちよつとまずい気がする。どんなに口でその気はないと言つたつて、誤解するなというのが無理な話だ。

トオルは困つた顔になる。

「うーん……」

難問に立ち向かうにはどうしても必要なものがあつたが、胸のポケットをまさぐつて、そして思い出した。煙草はちよつと前にやめたのだ。

悪癖はなかなか直らない。頭を掻いたら自然と深い溜息が突いて出てしまった。

「ははは、……せめて君が男の子だったらなあ」

トオルは少女に向かって自嘲気味に笑いかけた。八方ふさがりの状態に有用な案など出ない。出るのはため息とくだらない冗談だけだ。

少女は目だけでトオルを見ると、その瞳のなかをくるりとした。言葉の意味がよくわからないといった感じた。

トオルは溜息よりも力のない声で『そうしたら、二人乗りして送ってちゃうんだけどね……』と言って、また笑ってみせた。彼の自転車はいわゆるママチャリだが、荷台のついていないタイプだった。二人乗りするにはフレームに足をかけて立ち乗りさせなければならぬ。スカートだってヒラヒラするし、まあ、女の子にさせることじゃあない。

「はははは、はああ……」

情けない顔でする笑いは、最後はため息のように夜の静寂に溶けていく。声もでなくなると、肩くらいしか落とすところはなかった。ところが、だ。

気が付くと、くいくいとシャツの裾を引っ張られていた。振り返ってみると、すぐ近くにあった彼女の顔が首をコクコクと縦に振った。トオルは最初なにかと思ったのだが、すぐに彼女が指さすのを見て合点がいった。

「えっ、ほんと?! じゃあッ!」

トオルはニコチンの助力を借りずにこの事態を解決することができそうだと、なんだか急に意気揚々としてきた。

再び走りだした自転車は、最初はゆっくりとした安全運転だった。それでも人も車もない深夜のサーキットなら、ストレス・フリーでぐんぐんと疾走することができる。ついさっき安全運転を誓った

ばかりなのに、いつも走るこの道が同じ景色の違う世界みたいに感じられると、なんだか子供のように胸が踊ってしまう。

上機嫌なのは深夜の街を我が物顔で走れるからか、それとも背中から漂うほんのり香りのせいかな。

目の前に丁字路が迫ってくる。

「ねえ、どっちっ!？」

トオルが背中に向かって叫ぶ。

「左っ!！」

少女が左手のひとさし指をかがげて答えた。

「りよおつつつかあい!！」

キャプテンからの指示に従い、舵をきるトオルは大海原にでた海賊のような気分だ。

水無月の夜の空気をいっぱいに浴びて。

しつとりとした風に頬を撫でられて。

二人は街を走り抜けた。人気のないトンネルを、荘厳な雰囲気の子神社の脇を、誰もいないコンビニの前を、静まり返った踏切を疾走していく。

「ねえっ!！」

ふいに首を後ろに向けたトオルが、少女に声をかけた。

「何っ!？」

目をくるると、それに気付いた美純は叫んだ。ぶつかってくる風のせいで二人共自然と声が大きくなる。

「名前っ!！」

「えっ?」

「名前っ、教えてよ! 何ていうのっ?!」

少女はちよつと黙って考えていたが、やがてトオルの頭の上でもごもごと答えた。けれど彼にはそれがちつとも聞こえなくても一度大声で聞き返した。

「ねえーっ、な・ま・えっ!！」

「もっうっ、……み・あ・や! 四方美純っ!！」

ちよつと不満そうに言つてムスツとした顔をする少女の名は、美純。

それを横目でみて満足したトオルは、自分も名乗りを上げた。

「俺は、廣瀬トオル。『ト・オ・ル』はカタカナッ！」

「何それっ、変なのっ！ オジサンみたい！！」

鼻に皺をつくつて言つと、口を尖らせてみせてくる。美純はわざとなのか不機嫌そうな顔をした。するとトオルは意地悪な気分になつてブレーキをかけて、自転車を急停止させた。キツ、キツと奥歯のほうまで響きそうな甲高い音が鳴つた。

「わっ！？」

美純はびっくりして大きな声を上げた。勢い余つた美純の体がトオルの背中に突つ伏してくる。

「ちよつとお、あぶな……ひゃっ！」

トオルが首だけ振り返ると、思ひのほか美純の顔は近くにあつた。彼女はトオルの背中に抱きつくような格好でいたのだ。トオルのほうもちよつとドキツとしたが、それ以上に美純は目をまんまるにして、飛び退く。トオルの肩を強く押して、両手を突つ張つた。

「まあ、オジサンだしね。それに単純な名前だから覚えやすいだろ？」

トオルは下から覗き込むと笑顔を作つた。そこはやっぱり大人の余裕つてやつを見せつけるところだろう。けれど頭の真つ白になつたような顔をしている美純には、まったく効果ナシだ。使いどころを間違えた空振りの貫禄が意気消沈とする。

トオルは小さく一息つき、それからもう一度、呆然としている美純を見た。すると急に『ハッ』と息を飲んだ美純は、慌てて顔を背けてしまった。彼女はちよつと上擦つた声でもつて、なんとか自分の不利を取り戻そうとトオルに抵抗してくるのだ。

「何ソレ、ば、ばつかじゃないっ！！ あっ、あなた、ちよつとは言い返しなさいよ。オジサンなんて言われてるんだからっ」

「はははっ。実際、おじさんだからねえ。……こつ見えて34だし」

「さ、34っ!? 私の倍なのっ!? きゃー、それじゃ『オジサン』通り越して、もう『オジイサン』」

くつくつと笑いながら、トオルは再び自転車を走らせ始めた。

「いいよ、別に何でも。美純の好きなように呼んでくれて」

そう言つてトオルはスピードを上げる。

美純から答えはなかった。ただ、頭の上で彼女がもごもご何かを言っているのを聞くと、それだけでなんとなくトオルは満足だった。風のせいでよくは聞こえないのだが、大人の余裕はどうやら効果アリのようだった。

彼女の家に到着すると、トオルの第一声が「おーっ!」だった。

立派な門。そこから玄関までの長い距離。暗くてよくは見えないけれど、隣、近所の1・5倍くらいはありそうな建物のシルエツト。言葉通りの立派な豪邸に、しかし娘の帰宅をいまかと待つ温度は感じられない。

「……ご両親は?」

「今日は仕事だから、……居ないんです。あつ、そ、それに姉が一人いますが、き、き、今日は仕事へ」

急に敬語になる美純に、トオルはまたちよつと笑ってしまった。

「くくくつ。ほんと面白い娘だよね、美純は。どうしたの? 別に今更敬語なんか、いいのに」

そう言われて美純は顔を赤くする。

「ちょ……ちよつと、あなたってほんと失礼な人ね! 折角、ちゃんとお礼を言おうと思つてたのに、そんなんじゃ、感謝する気も失せるじゃないっ!」

「別に。礼なんて言われるほどのことでもないし」

そういつて、トオルは肩をすくめてみせる。

「無事に送り届けたし……じゃあ、行くね」

「あ……っ!」

トオルは一度歩きだしたが彼女の声で振り返った。

美純はまだ何かを言い足りないような顔をしていて、トオルと組んだ自分の手を何度も見比べモジモジとした。

「もう、……帰るよ？」

「あ、あつ、あのっ……！」

切り出しかけた美純の言葉は、やはりそれからあとに続かない。でもトオルは小さくなって俯く彼女の表情で、なんとなくその先を汲み取ってあげることが出来る。

「あのさ……『カーサ・エム』ってイタリア料理店にいるから」

そう言つてトオルは美純と別れた。

「バイバイ、美純！」

全身傷だらけで、しかも襲ってきた眠気に頭はふらふらする。なのに向こうの空から朝日が顔を出そうとしているのが見えていた。まだ早朝だというのに、多分今日一番のため息が出してしまった。そしてトオルは無いのを知りつつもまた、胸のポケットを探るのだ。

新しい朝が来た。

誰かが言っていた。これはどうも希望の朝だそうだ。

——キャプテン・オーロックか○ラック・ジャックか。

頬にビツて走る傷跡。

あの時、美純が見てびっくりしていたのはこれか、とトオルは納得した。鏡に映る自分の顔を覗き込んで、触ってみる。右目の下あたりから頬に向かって擦り切れた傷跡は、血が渴いて赤黒い色になって残っていた。正直、かなり目立った。

昨日の夜（今日の朝？）は家に着くなり、早々に寝てしまった。

朝は慌ただしくシャワーだけ浴び、家を飛び出した。朝食は週に三度はお世話になる某ハンバーガーショップで朝のセットを購入する。いつもの店員さんがカウンター越しに『おはようございます』と声をかけてくれる。トオルも『おはよう』と返す。

週に何回か、同じ時間に何年も通い続ければ、いくらマニュアル重視のチェーン店だって『いらっしやいませ』の後が『今日は何になさいますか？』から『いつものでよろしいですか？』に変わるくらいの関係にはなるものだ。それは確かに、あくまでカウンターを挟んでの『店員と客』というシチュエーション限定の間柄であって、もし道端でばったり会った時にはむしろ気まづくなってしまう程度の希薄な関係性なのだが、まあそんな二人の間は、けれど今朝に限って妙によそよそしい空気だった。

その時初めてトオルは、自分の顔の違和感に気が付いた。

（俺の顔、何か付いてるか？）

言うべきか、言わざるべきか。片一方だけが発する独特の緊張感……。

笑ってやった方がいいのか、触らないのが吉なのか。踏み込むときは『ギャンブル覚悟』の危ない橋。

『奥様、最近またお綺麗になられた感じがいたしますが?』

『あら、そう? きつと、旦那と別れてせいせいしたからよ』

トオルの過去の苦い経験は、……まあこれは初期設定が今回とは異なるので例えにはならないか。

……何か、どこではない。

この歳になれば勲章でも何でもない。これではただの恥ずかしい中年男子だ。

そして、そんな傷跡を見て高らかに笑う男がいる。

「はははっ! お前、それはないだろ!? まあ、自分の顔、見たか? はははっ!」

まったく遠慮なしな笑いが、オープン前の店内に高らかに響き渡る。肩と白髪交じりの頭を一緒になって派手に揺らし、トオルに向かって指を差す。

カウンターに腰かけて煙草をふかしながらバンバンと膝を手で打ち大笑いする男、平井哲平。42歳。この『カーサ・エム』のオーナー。つまりトオルの上司である。

「今どきの30歳は、チャリをぶっ飛ばしてこけるもんなのかよ?」

「哲さん、俺、34ッす……」

「はははっ、だからなんだよ!? 弁解にもなってねーぞ」

「まあ、おっしゃる通りなんですけどね……」

煙草をくゆらせ、まだ「くっくつ」と笑いを洩らす哲平を、トオルはちよつと恨めしそうに見る。実際、彼が恨めしいのはいつまでも顔の傷を笑う大人気ない上司の方ではなく、煙草の方――。哲平はトオルが禁煙することにしたのを聞くと「そうか、今日からお前も敵か」なんて言っつて、それからちよつとも遠慮するどころか、盛

大に目の前で吸うようになった。『カーサ・エム』は普段は完全禁煙の店なのだが、オープン前のこの時間、哲平だけは治外法権だった。そのせいでトオルはほぼ毎日鬱々とした気分で営業を始めることになるのだ。哲平にしてみたら、気に言っただけ人間にちよつと悪戯をする程度のある種『愛情表現』のつもりで、だからこそ尚性質が悪いのだが、トオルにはどうすることも出来ないので諦めていた。とはいえ、哲平のそんな子供みたいところがトオルは嫌いではなかった。

哲平はしばらく煙草とトオルの傷、出されたエスプレッソを満喫してから、最後の洋服を吸い終わると「それで……」と来週末に予定していた宝石店とのコラボ・イベントの話を始めた。

土曜の夜、店内を貸し切って行う予定のイベント。――『カーサ・エム』の店内全部をつかつて、宝石・アクセサリーの販売会、購入者には宝石店側からという名目で『カーサ・エム』の料理が振る舞われる――このイベントは、今回で5回目の開催を迎える。

きっかけは、哲平が彼の友人のアクセサリーショップオーナーに話を持ちかけたことから始まった。第一回目が好評だったおかげでふた月に一辺のペースで定期的に行われるようになったのだ。派手な買い物をして満足げな顧客が、シャンパンを傾け豪華な食事で愉悦に浸る……やりたくてもそれに応える環境のないこの『都会じゃない街』では、ニーズはあっても実現できなかったこと。そのニーズを見抜き、形にする。簡単なようで第一歩を踏み出すのはとても難しかっただろうことを、哲平は見事にやってのけた。

トオルの料理とサービスを使って、顧客の満足を充実させる。顧客が「また……」となれば、次のイベントを企画する。それに顧客はイベントとは別に『カーサ・エム』を利用するものもいた。今では、大切な常連客の一人だ。

『Win & Win』の関係が、出来上がる――。

哲平の本業は運送業の社長だ。『カーサ・エム』は彼が知人から譲り受けたもので、副業的なものだ。けれど、彼の発想は畑違いの業界に対し独創的且つ理にかなっていて、……おかげで『カーサ・エム』の経営は順調だった。トオルは、そんな哲平の優れた経営眼に憧れに近い感情を持っていた。彼の下で6年。今も彼の下で働き続けているのは、そんな哲平という人間の魅力によるところが非常に大きかった。

ランチタイムが始まる頃になると、哲平はいつものように出かけてしまった。

トオルは彼が残っていた痕跡を消すため、消臭スプレーを撒き、ニシキを焦がし、そして自分用のエスプレッソ・コーヒーを炊くポットを火に掛け、偽の香り付けをする。そうすると複数の香りが入り交じった、妙に落ち着かない臭いが出来上がる。入口の扉を開放し、換気扇を“強”で回して、それで今朝の証拠の隠滅は完了する。

ポコポコと、コーヒーが沸く音が仕出す。

彼がエスプレッソ・コーヒーを入れるために使っているのは直火型のコーヒーポットで、大きく分けると三つのパーツに分かれた造りだ。下部のタンクのような部分に水を入れ、その上にフィルター状の部品がついた漏斗（じょうご）を取り付け、コーヒー豆を挽いたものをそこに入れる。上部にもう一つの部品を取り付け、ちょうど上下の部品で豆の入った漏斗をはさむようにセットする。そして火に掛ける。

上部のパーツは金属製の蓋の付いたマグカップのような作りで、カップの底部にあたる部分の中心から天井に向けて、ニョキと柱のような部品が突き出している。下部の水が加熱され水蒸気となつて、漏斗を、コーヒー豆の層を通り、最後は柱の中を登ってくる。柱の先端には幾つか小さな穴が空いていて、そこから吹き出してくる水蒸気が、焦げ茶色の香り立つ——『エスプレッソ・コーヒー』である。

ポコポコと音がするのは、その穴から水蒸気が吹き出す際にそう

いう音がするのだ。

——ポコポコ、ポコポコ。割とコミカルな音だ。

ポット自体は機能重視の案外素っ気ないデザインだけに、聞こえてくる音が尚更滑稽に思える。

そして出来上がりの合図。ポコポコ音が聞こえなくなって、シュッと空気の抜けるような音に変われば完成だ。

トオルは出来立てのコーヒーをカップに注ぎ、飲む。

習慣のように毎朝飲むこのコーヒーが、彼にとってのスタートラインだ。ごく稀にだが、この神聖な儀式を邪魔する早起きの客がいる。そういう日はなんだか全部が上手くいかなくなる。まあ、何にしろ最初が肝心、である。仕事も、遊びも、……出会いも。なんでもそうなんじゃないかと、トオルは思う。

朝の天気予報は見てこなかったから、昼過ぎに降り出した雨はちよつと驚きだった。

出がけは晴天だったし、今の今までもそんな気配はなかった。オーダーをひと皿作って、使った鍋を洗って、それで気がついた。『ザアザア』と雨足はかなり強い。

出されたパスタを食べながら、「あら、もう降ってきちゃった」と呟く女性客。

どうやらこの雨は確定的な未来だったらしい。侮るなかれ、天気予報。まあ、見てもいないタオルに侮る権利はないが。

飲食店——だけに限ったことではないだろうが——は、雨にすこぶる弱い。『通り雨に喫茶店』のような一時避難の場合はともかく、もともと降るといわれた雨は人間の行動を抑制するらしい。そうか、だから今日はこんなに暇なのか、とタオルは合点がいった。

いつもだったら賑わうこの時間帯、今日は満席にならなかった。窓から見える往来の人影も、そう思っで見るとずいぶんとまばらな気がした。

タオルはキッチンから出ると、店の出入口の側に立てかけてある看板類を雨に当たらないように屋根の下に避難させる。ほとんどは耐水性の素材やペンで書かれた物なので問題は無いのだが、『今日のラ……、イ……パゲ……イ』毎朝チヨークで書き換える黒板だけはひどい有様だった。書き直すにしても雨を吸ってビショビショに濡れた黒板はしばらくどうにもならないだろう。タオルは黒板を店内に取り込むと、キッチンに戻りコーヒーの準備をする。ちょうどパスタを食べ終わった客の前に空いた皿と入れ替わりにコーヒー

を差し出す。

「デザートは、……召し上がります？」

「うーん。この雨だし、今日は止めておきます」

「です、ね」

そうして今日のランチタイムは営業時間半ばにして、開店休業となってしまう。コーヒーをすすっていた客も、雨足が弱まったのを見つけるとそそくさと帰ってしまった。店内に誰も居なくなってしまったせいで、トオルの周りを静寂が包み込む。聞こえるのは雨音とトオルが洗い物をするカチャカチャという音だけだった。

あれからひと組みの客も来ないまま、ランチタイムはクローズとなってしまった。

割と早い時間から誰もいない状態だったので、片付けやら仕込みやらも捗り、トオルは手持ち無沙汰だった。こんな日は自分用の食事を作る気にならない。元々トオル一人でやっている店だから、よくいう『まかない飯』なんてモノもここには存在しない。食べたければあるものを食べるし、そうでなければ何もしない。

トオルはエスプレッソをすすった。

これもずいぶん前に入れたものだったので、今やぬるいを通り越した冷たい液体だ。かといって新しいコーヒーを炊く気にもならない。トオルは仕方なく一度深呼吸をした。店内の空気を味わった。

……雨は、気だるい。

仕方のないことだけれど、雨は気だるく、憂鬱だ。人間を能動的でなく受動的にさせる。

黒板は書き直されることなく、入口の横に立てかけたままだ。自分がやらなければ何も変わらないのは知っているのだけれど、出来ることなら他の誰に書き直してほしいくらいだ。

ディナータイムまでは、まだ随分と時間があつた。

トオルは客席の椅子に深く座り込むと、窓の外を眺めた。今だ強い雨足。彼はもう一度長い深呼吸をすると、目を閉じた。ちよつと早めの、長くて深い休憩を取ることにする。

最初、意識の底で何かを感じたような気がして、目が覚めた……。それが何なのかわからなかったが、気配はすぐに気が付いた。

トン、トン、トン、……。

何かを叩く音がする。振り返ると、入口の扉を叩く音がしていた。

トン、トン、トン、……。

はて、業者だろうか、とトオルは不思議に思う。届く予定の品はない。それとも、何かの営業だろうか？トオルはゆっくりと体を起こすと、扉に向かう。かかっていた鍵を外し、扉を開けてやった。「はい？」

そこには、昨夜の彼女が――美純が立っていた……。

外は傘を指しても尚歩くのも厄介なくらいに、土砂降りの雨だった。

そんな中、扉の前に佇んでいた美純は制服の肩をうつすらと濡らしていた。

彼女の顔はちょっと思い詰めたような表情に見えた。まるで、外の雨模様をそのまま持ってきたように、薄く暗く傘を指しているような顔。

「どうしたの？……は、いいか。まずは入りなよ。そんなところにいたら風邪引く」

室内を促すトオルに、美純は何故か躊躇していた。扉を押し開けたままの体勢のトオルは「ん、ほら」と顎で店の中を示し、もう一度中に入るよう促した。それでも美純は黙って俯いていていた。

彼女の後ろの車道ではバシャバシャと派手な水音を立てて車が走って行く。道を歩いている人は誰もいない。こんな天気の中をこの少女は歩いてやってきたのだ。まあ、事情あつてのことだろう。

土砂降りの雨は優しくない。ただただ地面を強く叩くのみ、だ。いつまでもそんなところにこの子を立たせておくわけにはいかない。「……美純っ」

トオルは昨日初めて会ったばかりの少女の名前を呼んだ。

ぴくりと彼女は肩を震わせ、そしてやっとトオルの顔を見上げてきた。

目が合って、気が付いた。

美純の顔は、なんだか戸惑いと決意が入り交じったような複雑な表情をしていたのだ。

彼女はまだ室内に入るのを躊躇っている。まるでそうすることを拒んでいるかのようにだった。じっとトオルを見つめる目は、けれど何かあつたら今にもすぐ逃げ出してしまいそうな、怯えた瞳に見える。

た。

しかし彼は目顔で「おいで……」と意志を送った。その目が告げるからなのか、美純の顔から自然と後ろへ向いた気持ちが消えていくのを感じた。

何故だろうか？ 彼女にとってトオルの『その目』は、突き返すことのできない強制力であったようだ。

そしてとうとう美純は、一步、また一步と『カーサ・エム』の店内へ足を踏み入れてきた。見届けたトオルは扉を閉めると手近にあった椅子を引き寄せ、彼女にそれを勧めた。立つたままなか座ろうとしないでいる彼女に、トオルは「美純……」と声をかけて肩を小突いてやった。そうしなければずっと立ち尽くしたままだったかのように、美純は緊張を解いて椅子に座った。

トオルは一度キッチンに向かうとやかんを火にかけ、それからまた店内のほうに戻った。カウンターの下をゴソゴソと探ってタオルを一枚取り出し、それを美純に手渡す。

しかし美純は自分の手に収まったその一枚をじっと眺めて黙り込んでしまった。

「やれやれ……」

トオルはちよつと呆れてため息をつき、頭を掻いた。

近付いていつて彼女の手からすつとタオルを奪い取ると、それを広げて美純の肩にバサリとかけた。渴いたタオルの生地の上を彼女の肩に沿って撫でる。美純の服を濡らしていた水分がじわりとタオルのほうに移っていく。トオルは濡れた肩だけでなくその周辺をバサバサと拭いたやった。そのまま背中流れる彼女の長い髪にタオルを這わせる。すると美純はちよつと肩をびくりさせたのだ。あまり気にせずに撫でたその美しい黒髪は、タオル越しにさわってみてもとても丁寧到手入れされるのがよくわかった。艶やかで、柔らかい少女の髪だ。

「はい、おしまい」

ひとしきり世話してやると「あとは自分でやりなよ」と無造作に

丸めたタオルを再び彼女の掌に押し込めた。

そしてトオルは再びキッチンの中へと戻っていく。その頃には火にかけたやかんの中はすでに湯が沸騰していた。

「あつ……」

美純が小さく言うのが聞こえたが、そこは聞こえないふりであえてトオルは振り返らなかった。きつとまた昨日と同じく言葉は続かないのだ。トオルは手際よくフィルターやデカンタを用意し始め、コーヒー豆の入った缶を棚から取り出した。

手元を動かしながらチラリと横目で見ると、美純はまた自分の手に収まったタオルに視線を落とし、ぼんやりと見つめていた。トオルはもう呆れたような苦笑いしかできない。

「ねえ、コーヒー、飲める？」

キッチンから一度顔だけのぞかせたトオルは、美純にむかって訊ねた。

「……………エッ？」

すぐに答えられずに口ごもる美純を見て、トオルはちょっとだけ考えてみた。

「あー、うん、いいや。多分、飲めるよね。オーケー、オーケー、飲める、飲める……」

ひとりごちつて何度か頷くと、トオルは要は済んだとばかりに美純の返事を待たずにキッチンへと引っ込んでしまった。そのやりとり、自分ほうを見てポカンとしている美純の顔が、なんだか音に反応して振り向いた小動物みたいで可愛らしい。

だいたい、考えてみれば彼女が飲もうと飲むまいと自分はすっかり飲む気なのだから、いちいち訊かずとも勝手にいれてしまえばいいのだ。まあ、彼女の好みを知らない今はあまりビターな味わいにするのはよくないと、トオルはいつものブレンドよりも少しだけモカの配合を増やしてからセットした。傾けたポットから静かに落ちる湯の音が、コポコポコポツと店内に響く。クローズタイムの間は一切BGMも流していなかったから、まるでその音がBGMの代

わりみたいはこの場の雰囲気を作り出した。
すると。

キッチンから響くその音をぼんやりとして聞いていた美純が、それまで固くしていた表情をふと緩めたような気がしたのだ。立ち込める香ばしくてほのかに甘い香りも、おそらくそれには一役買ってくれたに違いなかった。

しばらくして、タオルは両手に一つずつカップを持ってキッチンを出た。片方はマグカップで、外側が赤一色のデザイン。普段自分用に使っているもので、所々欠けたり削れてたりはしているが、ちよつと愛着のあるものだ。もう一方は、白地に青の太いラインが入ったシンプルなデザインのカップ。その白と青のカップの方を、美純の目の前のテーブルの上に置いた。

「ミルクは？」

タオルが訊くと、彼女は「うん……」と頷いた。

「待ってて」と言つて微笑みかけたタオルは、もう一度キッチンに戻る。それでまた店内はしばらく静まり返つてしまつが、すぐに『ピピピ、ピピピ、』と電子レンジが完了を示す電子音を鳴らしたおかげで、部屋の中は重苦しい沈黙にはならずにするんだ。

「はい」

「ありがと。……ごつつ、ごさいまひゅっ！」

美純は先程から店内に漂うコーヒーの薫りにすっかり気が緩んでしまったのか、すっかり気の抜けた返事をして、慌てて言葉を丁寧にしようとした。

顔の上下だけで軽く返事をしたタオルは、そんな彼女の様子を眺めながら近くの椅子を引き寄せて自分も腰掛けると、持っていたマグカップを傾けた。

いれたての熱いコーヒーがゆっくりと口内に流れ込むと、その香ばしくも甘い薫りが鼻腔を通つて頭の芯まで廻っていく。心地よい苦味とほのかな酸味が舌の上に広がる。体の中から温められたからか、どうやら彼も気が緩んでしまったようだ。

「……くくくくっ」

急にタオルはぐぐもった声を漏らし始めた。最初のうちは控えめにしていたのだが、そのうち我慢できなくなつた。とうとう堰を切

ったように遠慮ない笑いが飛び出た。

「ははは、はッ。……くくくッ」

なんとか笑いを押し殺そうと俯いてみたり別のことを考えたり、と努力した。しかしチラッと覗き見た美純の顔が再びトオルの笑いに火をつけてしまう。

さすがに美純も眉間に皺を寄せた。

理由のよくわからない笑いに美純だって不満を感じたのだろう。むっとした顔をして下唇がぷくつと膨らんだ。顎の先っぽに皺を作ったそんな彼女の顔があんまりに可愛らしくって、トオルはさらに吹き出してしまった。思わず顔の前で手のひらをあわせて『ゴメンね』のポーズをしてから大笑いし出した。

「……なんで、囁むのか。……ひっ……『ひゅ』って、……言っただけ」

トオルとしては弁解のつもりだった。けれど相手にしたらそんなふうには聞こえない。馬鹿にされたと思ったのだろう、美純は色白の小さな顔をみるみる赤くし出したのだ。

「ち、ちよっと、何よッ！！ そんなに、わ、笑うほどのことじゃないでしょ！？」

恥ずかしいのと腹立たしいのをまぜた感情が美純の目の周りをかつかとさせている。息巻く彼女は急に立ち上がるうとするが、手に持ったコーヒークップとソーサーが一緒になってカチャカチャ音を鳴らし、顔色を変えた美純をなだめようとした。

しかしそれをわずらわしそうにテーブルの上へ荒っぽく置いて、がばつと立ち上がった美純はトオルを見下ろしてきた。

自分の言動に反省しても、もう遅い。

「いやまあ、そうなんだろうけれど……。なんかさ、俺、好きなんだよね。一所懸命なのに全然上手いじゃないの人とか物とか……」
なんとかうやむやにできないかとした弁解もさらにうまくない。トオルのそんな言いぐさに、美純はますます火が点いたようにカッとなった。

「あなたッ！！ やっぱり失礼よっ。人のこと、見下してッ」

一歩迫ってきた美純の顔は、口を引き結んで目をつり上げてトオルのことを鋭く睨みつけた。その真っ直ぐぶつかってくる少女の感情に、トオルも感化されたのだろうか。

「なんか、まるで自分のことを見てるようで。半分は、思い出し笑い……かな」

思わず本音が出た。

「えっ？」

「ゴメンね。気分を悪くさせちゃったね。謝るよ」

トオルは視線を自分のカップに落とすと、ポツリ呟くように言った。

それで美純も何となく言い返せなくなったようで、ゆっくりと座り直していた。

しばらく2人の間に会話はなかった。

店内は静まり返っていて、時折『ブウン……』と冷蔵庫の低い稼動音が響くだけだった。

窓の外、雨はまだ止みそうにない。むしろ雨足は強くなる一方だ。けれど、その雨が窓を叩く音を飲み込むくらい深い沈黙が、今のトオルと美純の間を流れていた。

ふと、トオルは自分のカップをのぞき込んだ。中はもう空っぽだった。

新しいコーヒーを入れようと立ち上がりかけたとき、美純の聲がして引き止められた。

「あなたの……」

「うん？」

最初、彼女の声は聞き取れないくらい小さな声だった。トオルは無意識で聞き返していた。

「あなたのそういうところ、私、嫌い……。だって、そこまで笑うことないでしょ。あなたがどんな理由でそうしたかは知らないけれど、私がどんなに一所懸命だったか、考えたこと、ある？ ……嫌

な人」

『嫌な人』……結構響く言葉だなと、トオルは美純の方を見て思った。

トオルは一度座り直してから、美純に向けていた視線をゆっくりと床に落とした。フローリングの床板の一枚一枚を目でなぞってみる。

「ああ、そう。……悪いね、嫌なヤツで」

口から出た言葉は随分と大人気ないものだった。

それにちよつと自嘲した。

「……で？」

「えっ！？」

トオルの口から出てきた言葉の意味を、美純はすぐには理解することができない。

「それで……今日、君がここに來たのは、俺に嫌なヤツの認定をするためだけ？」

『あつ』と言った彼女の顔が、三段階ほど表情を変えて狼狽していく様は面白かった。

「い、いいえっ！ きよ、ちがッ……今日、來たのはッ！ あ、あのっ」

あたふたの見本を教材にするならこんな感じだろうと思えるくらいの見事な動揺をして、美純は言葉を囁む。急に立ち上がろうとしたお尻がすぐ脇のテーブルの角にぶつかって、その上にあつたコーヒーカーップがガシヤガシヤと不機嫌そうに鳴った。うっ、と呻いてちよつと涙目になって、でもそれ以上は声を出さないよう耐える美純の顔は、普段女の子が見せることのないような結構すごい顔つきだ。

その様子を、トオルは黙って見詰めていた。

やがて、じわじわと表情を取り戻していく彼女の顔は、水に入れると膨張するワカメを連想させて内心笑ってしまったが、さすがにもうそれは顔には出さないでいた。

「きよ、今日は、その……えつと……」

さつきまでの強気な口調の彼女はどこへやら、だ。

大慌てで言葉を探す美純は、『あ』とか『え』しか口から出てこない。

しばらくはそんなふうに狼狽やもじもじを繰り返す美純を、トオルは根気良く眺めていたのだが、しかしいつになってもそれ以上進展しない会話に焦れた彼の首は、そのうちだんだんと左に傾いてきってしまう。

だから、というのは言い訳に過ぎないのだが。

次に出てきた彼女の言葉にトオルが悪いとは思ったけれど笑ってしまったのは、誓って言うが悪意ではなかったのだ。

「い、い、ごめんなしゃひっ!」

「ぷつ。……あつ」

今度はすぐにしまったと思った。

しかしやってしまった失敗はもう取り返すことはできない。トオルはおそろおそろ覗き込むように美純の顔を見たのだ。

「あー、ごめん。ホント、悪気はないんだ。でも、ごめん」

彼女の目は大人には到底手にできないくらい澄んだ黒色だった。

けれど今はきらきらと光の角度で乱反射して七色に見える。不自然に力の入った口元が一生懸命に嗚咽を噛み殺してた。

ただ、それも長くは持たない。

堪えきれなくなつて顔じゅうがクシャツとなる。それまでギリギリの緊張感で溜め込んでいた潤いが、とうとう太い糸のようになつて彼女の頬を伝いこぼれ落ちた。

「キライツ！ もう、大っキライツ！！」

泣きじゃくるといふのはこんな感じなんだ、と。

そういうのは大人になつてからはまず聞くことはないから、さすがにトオルも慌てた。

『泣いたもん勝ちキレたもん勝ち』とはよくいったもんだと、そう思うのだった。

ぐしつ、と。

静まり返った『カーサ・エム』の店内に、小さく鼻を吸る音が響く。ようやくと落ち着きを取り戻した美純。目尻を真っ赤に張らせて。

たつぷり泣いたせいか、長い髪は乱れて、ちよつと憔悴した顔をしていた。

「ぐしっ」

「はい……」

「……………ありがとう」

美純はトオルに渡されたティッシュペーパーで鼻をかんだ。

彼女、たつぷり10分は泣きわめいていただろうか。トオルはその間、どうにもバツの悪い気持ちで、けれど一体何をしてやればいいのかも分からなかった。で椅子に浅く腰掛けてじっとしていた。

美純は本当によく泣いた。わーん、わーん、と、まるで小さい子供みたいにいつぱい声を上げて泣いていた。外が雨でなかったら、きつと店の外にまで漏れただろうくらいの大声だった。

「ごめん。悪気はなかったんだけど……本当に、ごめん」

トオルは今度は素直に謝った。さすがに彼も反省した様子だった。美純は何となく目をトオルに向けた。その目は彼のことを捉えているようにも、そうでないようにも見えた。彼女は表情を作る元氣もなかったのだが、唇だけはさっきのトオルの仕打ちを覚えてるみたいに、ちよつと拗ねて突き出していた。

「——もう、いいです。なんか、いつぱい泣いたから。…………ちよつと、スツキリしちゃいました」

そう言つて、美純はトオルが新しく用意してくれたミルクのたつぷり入ったコーヒートをズズとすすめるのだった。ミルクの甘みとコーヒーのほのかな苦味がとてもバランス良く混ざり合つた、今の美純にとってはとても優しい味わいの飲み物だった。胸に、体に、みるみる染み渡っていくのがわかつた。

トオルも自分用に用意したブラックコーヒーに口を付けた。彼女のカフェ・オレ用に濃いめに入れたそのコーヒーは、ストレートで飲むにはちよつとビターな味わいだった。トオルの胸にチクチクと刺さる苦みだった。10代の女の子を、どういう理由であれこんなに

も泣かせてしまった、だいぶ後ろめたい味わいだった。

美純は、乱れた髪を簡単に手ぐしで整える。

そして一度座り直すと、真っ直ぐにトオルに向き直った。

目はまだ真っ赤に腫れたままだったが、表情には張りが戻っていた。というより、決意が見えた。

唇に、一度力が籠って……それが一旦躊躇したが、またもう一度力が籠った。

腫れぼったい目の奥からトオルに向けて発せられる意思に、トオルもまた美純を真っ直ぐ見据える。

「あの――」

先に美純の口が動き出した。

「うん？」

「今日は、……謝りに来ました。ごめんなさい」

「あー、うん。……で、何を？」

「何を、って?!……だから、昨日のことです」

美純は、ちよつとだけ不満そうな顔をして続けた。

「……昨日はご迷惑おかけしました。ゴメンナサイ」

「うーん、別に迷惑だとは思ってないけれど。まあ、……はい。わかりました」

「えっ!?! 怒ったり、問い詰めたりとか……ないんですか?」

「あー、別に。何で?」

今度は怪訝な顔をする、美純。

「だって、私……昨日、私、あなたの自転車の前に飛び出して……。それであなたは、そんなに怪我をして……」

「ん、コレ?……くくくつ、今朝からオーナーに大笑いされたよ。『ハクを付ける歳でもないだろう?』ってね。人をジジイみたいに言っ……」

トオルは思い出して、苦笑いした。今朝、哲平が座っていたカウンターをちらつと眺めた。

美純は申し訳なさそうな顔になった。

それを見てトオルは小さく首を振った。「いいよ、気にしてない……」彼は呟いた。

「……」

トオルの言葉を最後に、しばらく沈黙が続いた。

時折、彼がするコーヒーの音が店の中によく響いた。

トオルは、壁に掛かる時計を見た。時刻はもうすぐ16:00を回る。さて、そろそろ夜の準備を始めようか、とトオルは立ち上がりかける。

すると、美純がゴソゴソと鞆の中をあさって、それから一枚の紙を取り出してきた。彼女の前のテーブルに、それを置いた。

トオルは、ふとその紙をのぞき込んだ。A4サイズの紙には、真ん中に大きく枠でスペースがとってあって、そこに何かを書き込むものようだった。枠の上下に小さな字で説明書きがしてあった。そして一番上には、見出しのようにちよつと大きなフォントでこう書かれていた……

「“進路希望調査書”。提出は早めに……」

トオルはなぜ今これが登場したのか、釈然としない顔をした。

そんな彼の様子に美純はまったく気付かず、けれど彼女の表情は何か思いつめているようだった。それはさっき、扉の前に立っていた時の彼女の表情とまったく同じものだった。

思いつめた——という言葉が、まさにピッタリの表情。

そして、思いつめるにはだいが役不足な一枚の紙切れ。

この二つの共通点を、トオルは見出せないでいた。と、いか何故、
今、＜進路希望調査書＞？

「『提出は早めに』……だね」

「ええ。提出期限は二週間近く前だったんですけれど……」

「……何時？」

「5月の……ゴールデン・ウィーク明け……」

「一ヶ月前……じゃないか？」

「……………」

美純は一度何か言おうとして、けれど黙ってしまふ。

彼女の視線はその紙切れ一点だけを見つめて、動かなくなった。

そして椅子に座ったまま、じっと身動きもしくなくなった。

トオルはきつと彼女の方から何か言ってくるのだろうと思っていた
ので、もう一度椅子に座り直して彼女がしゃべり出すのを待つこと
にした。

じっとして、待った——。

——そして、5分経った。

二人は互いに一言もしゃべらないまま、妙な緊張感だけ残して時間
は過ぎた。

飲みかけのコーヒーはとうとう空になった。

これ以上待つ理由はないよな、とトオルは思った。会ってたつたの
二日。ちよつとした話題を楽しむくらい仲にはなっても、複雑怪
奇な謎をかけたり解いたりする間柄ではないはずだ。

トオルは立ち上がった。

「さて、つと……」

こんな天気でも来てくれる客がいるかもしれない。きちんとした準備を整えて置かなければ……。

「あ、あのっ!!」

不意に美純が叫んだ。

立ち上がりかけるトオルの顔を見上げ、彼女は精一杯の決意で言った。

「しよ、将来って、…進路ってどうやって決めたらいいんですか?!?」

びくつ、とトオルの肩は揺れた。

(これって、笑っていいのかよ……?)

一体この娘は、どれだけ自分の笑いのツボを刺激すれば気がすむのだろう? そのクセ、笑えば怒るし泣くし……。なんだかトオルはちよつとイラつとした。

「わ、私……やりたいこととか言われても特にないし、成りたいものなんて見付からないし!! で、でも、クラスの子達はみんなちやんとそういうのがあつてっ! それに進学する子がほとんどだから『○○大学 科』とか書いて……。私、そんなのも決まらないから、先生に『君は一体何がしたいんだね』って言われて……。わかりませんって言ったら、……ママが学校に呼ばれて……」

真剣、なんだろうというのはわかる。けれど、真剣だから腹が立つこともあるだろう? 大体、俺は進路相談員か何かか?!

トオルは、この何だかよくわからない事態にだんだんイライラがつのってきた。

(こういうタイプの女なんて大概、言いたいことだけ言っ、そのくせ自分じゃ大したことはしないだろう?! おまけに女子高生、もつと面倒臭いじゃないか!? イヤな奴だ嫌いだ言っ、た拳句、泣いたり怒ったり、最後は『私、どうしたらいいですか?』かよっ! ? 何のドッキリだっ! まったく、…面倒臭い!!)

トオルは今にも立ち上がりたい衝動を何とか抑えて、彼女のしゃべり終わりから一呼吸だけ置いて、話し出した。

「そんなもの、——適当に書いて出しゃいいんじゃないのか？ 君の担任だって、そうしてくれて言ってるだろう？ だけど、君がいうことをきかないから、面倒にも親を呼びつけなくちゃならなくなるだよ……」

「そんなっ！ ……そんなこと、私、言われてなんか……」

「純粹ぶるのはどうなんだ！？ それとも本当に純粹培養の馬鹿なのか？ 俺は、何でもこんなことを聞かされなきゃならない？ 君は、俺に何をしたくてここに来たんだったっ！！」

「わ、……私、……そんな、……ただ、謝りたくて……」

とうとうトオルの怒りは沸点にたどり着いてしまった。大人気ないとかそんなこと、もうどうでもいいっ！！

「だったらもう、済んだらうっツ！！ いいからさっさと出てってくれ！！ 君は毎日楽しく適当に学生生活を楽しんでいるんだろうが、俺は今、仕事なんだ！！」

「て、適当って……、そんな言い方……私……」

泣くかな、とトオルは思った。けれど、もうどうでもよかった。ともかく早く出て行って欲しかった。ひどい言い方をして、嫌われたかもしれないけれど、だからなんだ？ ……第一、なんでこんな女子高生が俺と関わりを持つ必要があるんだ？ 少なくとも、俺の方にそんな用はないぞ？

トオルはまったく理由がわからずに巻き込まれたこの事態が、最低だけれど最短の方法で解決するよう、あえてひどい言い方をした。

「わかったら、もう、出てってくれないか……」

けれど、彼の胸は痛んだ。だから最後の一言は俯いてしか、言えなかった…。

「……わ、私ッ、適当になんかつ！ て、適当になんかつ！！」

しかし、美純は引き下がらなかった。泣かなかった。

「……何をしろって言われれば、何だってするのにッ！ 何をするなって言われれば、絶対そんなことしないッ！ ……パパの言うこともママの言うことも、みんなの言うこともちゃんと訊くのにッ！

！　そうしてきたのにッ！！」

彼女の表情は悲痛だった。これまで、本当にそうしてきたのだろう。これからも、きっとそうするのだろう。

……なんて馬鹿馬鹿しいッ！！

「そんなんだから、何にもわからないんだ。不自由のない、恵まれてた生活をおくってる奴のセリフだね。……忌々しいッ」

トオルは吐き捨てた。

その言葉に、美純は異様に反応した！　ガバツと立ち上がると、物凄い勢いでトオルに体当たりしてきた！

ドンッ！！

トオルの体は押された勢いで、椅子から転げ落ちた。背中を強く打って『ウツ！』と呻いた。美純が彼の体に馬乗りになってきた。顔を赤くして、歯を食いしばって襟元に喰ってかかった。

「みんな、……最後は、そう言う。私が……家が裕福だからって……、満たされてるから、不自由がないからって……。そんなの、私には関係ない……！　満たされてるのは、私じゃない……！」

「……………」

トオルは、何も言えなくなっていた。

自分の上に覆いかぶさる少女の顔は、思いつめた……本当に思いつめた顔をしていた。

そしてそんな顔を——　かつて自分もしたことがあるのを思い出した……。

美純は、とぎれとぎれに苦しそうにしゃべり続ける。

「……何かひとつでも壊れたら、崩れて自由を失ったら、私のやるべきことが見つかるのかも。……それならそれでいいと思った。だから、あなたの自転車に飛び込んだ。死んじやうのは怖かったから、車には飛び込めなかった。……だけど、こんなにあなたに酷い怪我を負わせるなんて、思ってたなかった。私の自由は失われなくて、あなたの自由が奪われた……。ごめんなさい……。本当に、ごめん

なさい……」

そうか、と思った。

何が自分を苛々させていたのか――。

そっくりだったのだ。

純粹培養の馬鹿な――あの頃の……自分に。

美純は落ち着きを取り戻すまで、随分時間が掛かった。

その間に『カーサ・エム』はディナータイムの営業時間に入り、トオルはバタバタとオープン準備を整え、（実際は間に合わずに、所謂『おっつけ作業』というやつになったのだが）、その様子を美純はカウンター席の片隅でぼんやりと見つめることになった。

『カーサ・エム』はオープンキッチンの店で、カウンター席はそのキッチンの真正面に5席ある。

（洋食店のカウンターなんて誰が座るんだろう？）最初、トオルは不思議に思ったものだが、そんなことはなかった。むしろ、こちらの方が需要は多いくらいだった。

女性の一人客、というのは実はなかなか入れる店が多くないらしい。確かに、某牛丼屋さんや立食いの駅蕎麦なんかで女性の一人客をみると、彼女達は自然な行為なのだが自分の方がちよつとドキツしたりする。

——どうやら、ここ『カーサ・エム』のカウンターは居心地がいらしい。

トオルと話しながら食べる食事、勧められて飲むワイン、煎れたての香りを嗅ぎながら手元に届くまで待つコーヒー……。

それを期待してくる客は非常に多いのだ。仮にカウンターが満席でテーブル席はガラガラでも、『ゴメン、また来るね……』なんて帰ってしまう客もいる。

もちろん、今の美純がどうか……というのはわからない。

たぶん、彼女はそれどころではないだろし、かといって、どこか片隅に荷物のように置いておくのも嫌だった。店から放り出すこともできなかった。自分の目が届くところに置いておきたかった。だからトオルは彼女をカウンター席に座らせた。

美純は最初、抜け殻みたいな顔をしていた。顔色も茶色っぽくなっ

て、まるで魂が抜けてしまったようなふうだった。その時はなんだかとても話し掛けられなかった。自分もバタバタに準備で忙しかったから、それどころではなかったし。

時間が経ち、幾つもの匂いがキッチンから立ち上ってくると、少しずつだが美純に精気が戻ってくるのが見て取れた。

さっきまでのぼんやりと焦点の合わなかった視線も、ちよつとちよつと何かを追うようになった。

トオルには今週末に迫るイベントの仕込みもあったから話しかけることはしなかったが、それでも彼女の様子はよく観察していた。おそらく職業柄、習慣のようなものだが、ほんのちよつと動いたり少しだけ大きく息を吸ったり……こんな動作だけで、トオルの視線は相手を追う。美純は時折座り直すようになった。少し落ち着かなくなつた。

ふつと、目がトオルとあつた――。

トオルはその視線を捕まえると、今度は自分の方が視線を流した。店の奥のちよつと暗い場所、そこにある扉に視線を投げてみせた。そしてまた、美純に視線を戻す。ちよつとだけ、口角を上げて見せる。

しばらくして、それが何なのかわかった美純は、ちよつと恥ずかしそうにしながら立ち上がると扉に向かって行つた……。

時刻は18:45。

今だ外の雨は降り止まず、『カーサ・エム』の窓を強く叩く。

日が長くなつたおかげで、表はまだほんのりと明るい。けれどさつきから小一時間、人は一人も歩いていない。

（ちよつと、今日はどうにもならんかもしれない……）

さすがにこんな天気じゃ人も歩かないよな、とトオルは思った。第一、自分だつて出たくなかつた。

本当は三軒隣のスーパーに切らしていたマスタードを買いに行かなければ、と思つていたのだが、美純もいたのでなかなか出掛けられなかつた。そして多分、――美純のことは本当は関係なかつた。自

分に言い訳をつくって出かけたくなかったただけなのだ。

雨足は弱まることはなく、むしろどんどんと強くなるばかりだ。

トオルは火口の一つに『カフェテリア』をのせて、火を付けた。例の、機能重視の無骨なデザインのコーヒーマットだ。その隣でミルクポットのミルクを温める。だんだんと店内は香ばしい香りで満たされていく。

美純がトイレから戻ってきた。ちよつと恥ずかしそうな、ちよつと恨めしそうな顔をしていた。

トオルはそれに気付かないふりをして、出来たカフェオレを彼女の前に置いた。

今回は電子レンジで温めたミルクではなく、ゆつくりと加熱したミルク。その味の違いは雲泥の差だ。もちろん電子レンジを否定するつもりはないが、どうしてか美味しさは違うのだ。と、いうより別の飲み物と考えたほうがいくらいである。

ちらつと上目遣いでトオルを見上げた美純だが、すぐにカップに目を落とすと『フーフー』しながらカフェオレを飲んだ。そして、びっくりした顔をみせた。

トオルは内心、ちよつと嬉しかった。食べ物を作る人間というのは、『自分が美味しいと思ったものを、美味しいと感じてくれる人に悪い奴はいない』と考える、ちよつと短絡的思考がある。

今、トオルの中で美純という存在はく面倒臭い変な女子高生くからくちよつとは共感できる女の子くくらいまでランクアップした感じだった。

だからだろうか？ …… もう一度美純と目があつたとき、トオルはこんなことを訊ねた。

それはトオル自身、あとから考えたら『何でそこまでしたんだろう？』と不思議に思うことなのが。

もしかしたら、ちよつとだけランクアップした『トオルの中の美純』という存在に、彼が少し勘違いをしておきたく事故くみたいなものだったのかもしれない。

でも、その時は余り考えていなかった。思わずトオルの口から溢れてしまった。

そして『カーサ・エム』、今夜最初のお客様をお迎えすることになる……。

「なあ、美純。お前、腹減ってないか？——」

T h e r a i n c a m e d o w n . S h e c a m e u p t o m

大変失礼いたしました。

T h e r a i n c a m e d o w n . S h e c a m e u p
t o m e e t h i m . 9

UP完了いたしました。

誤UP後、なんとか削除しようと試みましたが、うまくできません
でした。

たくさんの方が私のミスにアクセスしているのを拝見し、猛省いた
しました。

心からお詫び申し上げます。

ワイニスト

美純は最初、『ポカン……』としてトオルを見ていた。

それからちよつと考えるような素振りをみせ、結局「……空いた」とぼそつと呟いた。

トオルは「O・K・」と小さく答える。ニコリと微笑むと、使い慣れたペティナイフを取った。冷蔵庫から取り出した食材を、手早くカットし始める……。

美純から見えるトオルの姿は胸から上くらいまでで、カウンター席に座った状態では彼の手元は見ることはできなかった。だからカウンターを挟んだ向こう側で今何が起こっているのか、彼女はちよつと気になっていた。かといって立ち上がるのはなんだか浅ましい気がしたし、だからそこは思い留まるようにした。

『シュツシュツ』とか『カチャカチャ』とか、おおよそ料理というより技術的作業のような音がキッチンから響く。

美純はあまり料理を自分でした事がないし、また家族が料理をしているのを見た事もあまりなかったので、『トントントン』とか『コトコト』なんて、料理をするときはそんな音が聞こえるんだろうと思っていたけれど本当はちよつと違うんだなあ、とぼんやりとして様子を伺っていた。

トオルが時々自分の方を見るのに気が付いてはいたが、嫌な感じはしなかったし、余り気にもならなかった。自分の表情やちよつとした仕草を、トオルの目はその都度追いつけてきた。そのくせ手元は忙しく動き回った。包丁なんて、手元も見ないで動かしていた。すごいなあ、と思った。

しばらくして、トオルが顔を上げた。

「お待たせ。………はい」

カウンターの向こうから美純の前に出てきたのは、透明に近い薄い

白色のなにかが皿の上に広げられたものだ。ミニトマトやフレッシュハーブで彩りを添えて、鮮やかな仕上がりの一品。

「これ……………」

「ヒラメのカルパッチョ。ライムの風味のソースがアクセントにかかってる」

はあー、と美純はため息をついた。赤や白や緑の色とりどりで出来たそのひと皿は、キラキラと輝いていた。『なんだか、食べるのもじやないみたい…………』と美純は思った。

そして、トオルを見上げた。

「食べていいの？…………で、っすか？」

「今更かよ。それに、そのぎこちない敬語ッ！…………やめてくれ。笑いを誘うんだよ」

「そ、そんなこと言っただって…………」

美純は見上げる顔を、ちよつと不満そうにした。

「おまけに笑うと怒るし。なっ！」

トオルはそう言っただけで美純を冷やかす。

「うるさいッ！で、ですッ！……」

「ぶ。はははっ…………だから、もう勘弁してくれ」

美純はまた顔を赤くして怒った表情をする。けれどもう、トオルはもう遠慮しない。突きつけてきた彼女の顔を押し返しつつ、一頻り気の済むまで笑ってやった。そして笑いきると、

「いいから食べるって！それとも生魚、ダメだったか？」

トオルは訊く。

美純はじつとトオルを睨みつけていた。ツンとした表情は頬をぶくぶく膨らまして抗議していた。けれど、促されるままにフォークをひとさし、そして口に運ぶ…………。

「…………あつ」

「うん？」

美純はさっきまでより瞳を大きく開いて答える。

「おいしー、……です」

べしっ！

「痛あつ！」

トオルは美純の頭を上からチョップみたいに軽く叩いた。

「やめろって！『おいしー』とか『うまい！』とか、さ。普通にしてくれ。そうして欲しいんだよ」

トオルは上からちよつと見下ろすような顔にして、美純に釘を刺した。実際、笑いを誘って嫌だったのと、それにこの『あるんだかないんだかわからない微妙な境界線』みたいな距離感がもつと嫌だった。

美純は頭をさすった。

頭を叩かれたことも驚きだったが、それよりも目の前の男と、彼が作ったひと皿の方にもつと驚いた。

だから彼女の口から出てきた言葉は、叩かれたことへの不満ではなく……

「……美味しい」

「ん、そうか？」

「うん。………美味しいッ！」

そう言つて、また次の一口を運んだ。

トオルはしばらくその様子を見ていたが、再び動き出した。今度は火口にアルミ製のフライパンをかけ、ニンニクを炒め出す。

ニンニクを焦がす特徴的な香りが室内に広がる。

「美純ッ！お前、キライなの、何かあるか？」

トオルは顔だけ彼女の方へ向けて、言った。

美純は急に声をかけられたから、食べてる途中のちよつと間抜けな顔を上げて考えた。……けれど、思いつかなかった。それは、表情

からトオルにもすぐに伝わった。

「じゃあ、好きなのッ！何かあるか？」

「カニッ！！エビッ！！」

こっちは早かった。美純は期待を込めたキラキラした目で言ってきた。その顔を見たトオルは、さつきみたいに「O・K」と小さく答えたのだが、内心『こいつ、ほんとに面白いなあ……』とほくそ笑んでいた。

ようやくとれた『あるんだかないんだかわからない微妙な境界線』。その向こうにいたのは、17歳の素直な少女だった。

トオルはその娘を少しづつ受け入れられるようになっていた。最初に会ったときは自転車に飛び込んでくるは、夜中に泣きじゃくるは、また現れて今度は黙りこくくつてるは、そうかと思えば急に怒って飛びかかってきて、それでまた泣きじゃくつて……本当に訳のわからないヤツだと思っていたけれど、こうしてみると案外、可愛らしいヤツだなと思えた。

確かに10代なんて、こんな感じだったような気もするし。そう思ったら、案外、——可愛らしいヤツだなと思えた。

そうして出来上がった『カニとエビのトマトクリームソースのパスタ』を彼女の目の前に置いたときにみせた彼女の表情。わあ、っと胸をおどらせるような微笑みが……

可愛いいな、——と思えた。

「美味しそうッ！」

「くくくつ。美味しいよ、自信作だからね。どうぞ……」

「うんっ！いただきます！！」

T h e r a i n c a m e d o w n . S h e c a m e u p t o m

前話の誤UPの件、再度お詫び申し上げます。

『T h e r a i n c a m e 』 9 『 改訂版もUPしておりますので、

合わせて読んでいただければ幸いです。

The rain came down. She came up to me.

「なあ、美純」

デザートに出されたガナツシユとジェラートを堪能する美純に、トオルは話しかけた。

「何？」

カウンターの向こうから自分を見下ろすトオルを仰ぎ見る美純。

言おうか、言うまいか、トオルは悩む。言えば、きつとまた美純は悩む……。

けれど――

「^{あんなもの}進路希望調査書は、たぶん適当に書いていいんだと思う。少なくとも思いつめて書くものじゃないだろう？」

「……」

言われて、美純の手が止まった。

「気を悪くしたなら、ごめん。お前がどんなふうを考えてそうしてるのか、俺は知ってて言ってる訳じゃないし。……でも、^あ進路希望調査書はお前を助けるものじゃなきゃいけない。お前の未来に助けにならなきゃいけない。なのに、お前の今を苦しめるものになるのはおかしくないか？」

美純は黙った。皿上のジェラートに目を落とした。じつとそれを見つめて、動かなくなる。

トオルはそんな彼女の様子を見て、重苦しい気持ちになる。

けれど、――言葉続ける。

「お前を追い詰めてるのがあんな『紙一枚』が原因だとは思わないし、かといってその原因を取り除いてやろうなんてお節介を焼くつもりもない。でも、もっと気楽に考えていいんじゃないかと思う……」

美純は視線を落とし、口をつぐんだままだ。上から見下ろすトオルには、彼女の表情が見えない。

トオルは一旦美純に背を向ける。話しながらミルクポットを火にかけた。弱火で、ゆっくりとミルクを暖め始める。再び振り返り、彼女の顔を見下ろす。

たった、……会ってたった二日、だ。正直、踏み込みすぎなのはわかっていた。けれども、トオルにはどうしても放っておけなかった。美純を、放っておけなくなった。

自分の言葉が彼女の胸に届くかはわからない。届かせるには、——その関係を作るには二日は短い。二人はまだお互いのことをほとんど知らない。だから、トオルは慎重に言葉を選んだ。言えば彼女を思い悩ませるに違いないのだ。それでもトオルは言おうとした。

……伝えようという意思がそこになれば、それはただのエゴだと思った。気になったことをただ口にする、彼の自己満足にしかならない。トオルは一言一言、思いをつめ込んで言葉を紡いだ。そうしなければ、会ってたった二日のこの娘に何かを語る権利はないんじゃないかと、……そう思えたからだ。

「美純……」

そう思っただ話したトオルは、しかし自分も沈痛な思いに駆られていた。

表情は、暗く影を落とす。

このまま、『じゃあ』って済ませれば、こんな気持ちにはならなか

つたのに――。

「……私は」

俯きかけるトオルに、――囁くような小さな声が聞こえた。

「私は……このままじゃいられないから。自分の居場所は自分でつくらないといけないから……」

「居場所……」

トオルは彼女の言葉を繰り返した。

美純は再び口をつぐんでしまった。それっきり彼女は口を開こうとはしなかった。

彼女の手元のジェラートは、どんどん形を失っていった。皿の上は二人の心情を表すかのように、チョコとバニラとベリーのソースが入り交じった、複雑な色になっていった。

トオルは小さくため息をついた。

「……」

美純は無言のまま俯いていた。

トオルはちよつと考えて、それからもう一回、今度は深いため息を吐いた。

これ以上、何も語るべきではないのだろうか？

所詮、10代の少女と30代の男にできる会話は限られているのだろうか？

言葉は、伝わらないのだろうか？

――わからない。

わからない。……けれど、だから放り出すのか？ 交わらないのか？

手を――差し伸べないのか？

自分は『理解できない』と決めつけた。でも、それは『理解できない』のではなく『理解しようとしないう』だけなんじゃないか？

『10代女子なんて未知の生物』みたいに思っ
て、触れないように
しているだけなんじゃないか？

そういう目で、そういう括りで美純を
みて、本当の彼女をわかって
とほしてないんじゃないか？

もつと、——美純に近付いて考
えてやる必要があるんじゃないか？

トオルは考えた。

ふと、思いついて考えた。

自分は——どうだったんだろう？

10代の、あの頃高校生の自分は——どう
だったんだろう？

どんなふうに悩んでいたんだ？
どんなふうに苦しんでいたんだ？

あの頃の自分は……………

そして彼は過去の記憶を思い出しながら、
ゆっくりと、ゆっくりと、
しゃべり始める——。

「昔、……そいつの進路希望調査書を全力で書くヤツがいて、さ。
そいつの夢はサッカー選手だったんだ。
だから、そいつは『卒業アルバム』
とか、『タイムカプセルの中の手紙』
とか、全部そんなことを書いて
たんだ……」

トオルは火にかけていたミルクポットを、
一旦火から外した。

「子供の頃から人よりちよつとデカかったから、小学校の低学年の頃からポジションはキーパーだった。デカくて、勘がよかったからすぐに町内じゃ一番の『名キーパー』みたいに言われてさ。そのうちそいつは、いつの間にか『県内一の名キーパー』になってた。県の代表チームで海外の同世代のチームと試合をするようになった。……その頃はすごかったんだ。今の『東南アジアの国家代表』に入ってる選手なんかと対戦してたし、そいつらのシュートをバンバン止めてた」

言いながら、トオルはちよつと誇らしそうにした。

「……」

美純は聞いているのか、聞いていないのかはわからなかった。じつと身動きもせずカウンターに座ったまま。

トオルは構わず続けた。

「中学までは順風満帆。チームこそインターハイには行けないものの、本人は世代別の代表候補にも入ったりと、人に誇れるくらいにはあった。……高校は当然、県内のサッカー名門校に進んだ。さらなるレベルアップを目指して、……そして将来はプロのサッカー選手になるっ！、てね。そいつは本気で『進路希望調査書』だつてそう書いたさ。過去の実績もあったから、担任の教師も別に何も言わなかった。友達も『お前なら、なれるんじゃないか？！』って言うってくれた……」

トオルはちよつと背伸びをして、カウンターの上の棚から何かを取り出す。

重厚な造りの筒型をした《物体》。シルバーカラーの筒型のそれには幾つかボタンが付いていて、上蓋にあたる部分が投入口、正面下部に割と大きな透明のカセットがあるデザイン。

トオルは筒から伸びるコンセントを差すと、スイッチを入れ、上蓋

を開けてコーヒー豆を入れる。『ガリガリガリ』つと豆を挽く音が店内に響く。しばらくしてモーターの回転音だけになると、トオルはスイッチを切る。

「……けれどそいつは高校で壁にぶつかった。努力しても、努力しても、試合に使ってもらえなかった。自分とは別のヤツがいつも選手に選ばれた。自分より、上手いヤツがいたんだ。……キーパーってポジションは、一人しか試合に出れない。おかげで3年間、そいつは二番手のまま過ごした。そこにそいつの『居場所』はなかった

」

トオルはコーヒーミルから挽いた豆を取り出すと、カセット部分に残ったコーヒーカスや油分をよく拭き取り、また元の場所にしまい込んだ。それからカウンターの裏に設置してあるエスプレッソ・マシンのところまで移動すると、フィルターフォルダーを外し、先ほど挽いた豆を詰めてタンピング（詰めた豆を器具で押し込む）する。マシンにフィルターフォルダーを取り付け、ノズルの下に二種類のサイズのカップをセットしてスイッチを押す。圧力がかかり、コーヒーが抽出される『ウィーン』という音が室内に妙にくっきりと響き渡った。抽出が終わると機械は自動で止まった。

トオルは片一方の普通サイズのコーヒーカップを取ると、さきほど温めたミルクを流し込みカフェラテを作る。それを美純の手元に置く。

そしてもう一方の小さいデミタスカップのほうは、そのまま自分ですする。

フィルターフォルダーを外し、中に残った使用済のコーヒー豆をゴミ箱にかき出すようにして捨てる。

苦味のきいた、けれど旨みの詰まった液体を口に入れると、レギュラーコーヒーの何杯も密度の濃い複雑な香りが鼻から抜けていく……。

マシンでおとすエスプレッソは凝縮した液体が魅力の飲み物だ。苦味も、旨みも、香ばしい香りも、ほのかな酸味も。たった40ccくらいのの中に目一杯に詰まっている。

まるで……自分の過去みたいに。

思い返せば一瞬の出来事みたいな気がして、でもその中に嬉しかったことも、悲しかったことも、傷付き、立ち直ったことも、全部全部、一杯に詰まっていた。そして、最後はほろ苦い。

一息付くと、——トオルは再び話し始めた。

「そいつは自分が伸び悩んだ理由を、環境のせいにした。もっとも
つと厳しい場所で自身を磨けば、結果は絶対に違うはずだ、そう思
った。だからそいつは高校卒業後、海外にサッカー留学をすること
にした。サッカーの本場で揉まれれば、絶対に上手くなる！ そう
思ったからだ。親に頭を下げて費用を出してもらい、ヨーロッパに
——スペインに。一流の選手になるまで絶対に帰らないぞ、と固く
決意して日本を出た」

飲みかけのデミタスカップをカウンターの上に置くと静まり返った
店内に『カッソ』と硬質な音が響き渡った。

起きているのか、寝ているのか、判断つかないくらいに指一つ動か
さなくなった美純を見た。彼女は今、一体どんな気持ちで自分の話
を聞いているのだろうか？ と、トオルは思った。こんな話、聞いて
何になるんだ、と思っっているんだろうか？ そうだとしたらわざわざ
さずけるのも馬鹿馬鹿しい。ただ、彼女はそんなふうに考える娘では
ない気が、トオルにはしていた。会ってたった二日の少女のことを
わかっていくみたいと思うのも彼にしては妙な感じだが、それでも
何となくそんな気がした。

じつと。じつと、美純を見つめた。

彼の視線を感じても表情を変えない美純に、トオルはさらに言葉を
投げかけた。

「けど、そこにもそいつの『居場所』はなかった。言葉の壁は想像
以上に厚く、世界の共通語だと思っていた英語は、高校卒業程度の

知識しかないから上手く通じないのでなく、そもそも空港内までしか役に立たなかった。扉を一步出て、タクシーに取り込んだ時点で、そいつにはコミュニケーションのツールは一つもなくなった。……まったく。何一つ言葉が通じなかったんだ。世話になるホームステイ先の住所の書かれた書類を運転手に見せ、何とか走り出したタクシーは、20分後になんだかわからない交差点の脇で止まって、一にも二にも『降りろ!』と手振りで車内から追い出された。結局一時間以上、のべ20人以上の人の協力を得て(ほとんどの人は話しかけても首を横に振るだけだったが)何とか住み家にたどり着くも、そんな調子では生活も、それに本来の目的であったサッカーも、まったく思い通りに行くはずがなかった」

「……」

「本当に、道端の石ころみたいな扱いだった。自分から話しかけてこない人間には、周りはまったく話しかけてはこなかった。一流の選手になるまで絶対に帰らないぞ、とした固い決意は、ものの見事に打ち砕かれた。たった数日で、そいつは自分の考えが甘かったことを痛感させられた」

「……………で？」

小さく、呟いたみたいな声が聞こえた。一瞬、幻聴かと思ってトオルは美純を見た。

彼女の表情は変わってなかった。さっきまでと同じように、手元の皿に視線を注ぎ込むままの姿だった。

トオルは彼女のことを見つめた。

美純はぴくりとしなかったが、トオルには確信があった。彼女は自分の言葉に耳を傾けている、と確信があった。

トオルはまた話し始めた。

「そいつは結局、夢敗れて今はサッカー以外のことで飯を食ってる。

でも、そいつの今の人生は道端の石ころなんかじゃなく、もうちょっとマシな人生さ。大好きなことを自分の生き方にはできなかったけれど、自分の生きる場所は作れた。自分の『居場所』は自分の手で作り出せた」

「……」

「まあ『居場所』なんて、本当は自分の力で作るもんでもなく、人と人のコミュニケーションが勝手に作り出す物なんだろうけどな…

…」

「……ふん」

美純が鼻を鳴らす音が聞こえた。

トオルは『ガバツ』とカウンターから顔を乗り出すと、美純の前にグツと突き出した。

美純はキヤツ、と小さな声を出して仰け反った。

慌てた表情の彼女に向かっていたずらっぽい笑顔を作ってみせると、トオルは言った。

そんなもの

「だから進路希望調査書に、お前が苦しめられるのはおかしいんだ。だってそこに何を書いたって、お前はこの先の人生で一杯、一杯、苦しむんだ。挫折して、思い直して、決断して、また前に進むんだぜ。だったらそんな紙っぺら一枚に、今、辛い思いをさせられちゃダメだ。適当に……そうだ『宇宙飛行士』とか、書いておけっ！」

「なっ、う……宇宙う？………プッ！ふ、はははははっ」

ずつと目の前の皿とにらめっこしていた美純が、とうとう破顔した。手元に置かれたカフエオレのカップに向かって、溢れるばかりに笑顔と笑い声を投げ込んだ。そうしてしばらく赴くままに笑い続けると、そのあと美純はトオルに視線をぶん投げて大声で言った。

「あなた、馬鹿じゃないの？　なれるわけじゃないじゃない、宇宙飛行士なんて！」

整った鼻筋を突き上げて侮蔑したような顔で言うものだから、トオルはなんだかちよつとカンに触った。心配して、昔話まで引つ張り出して励ましてやったのにこの態度。これだからガキは嫌いだ。さつきほんの気の迷いで『かわいいな』なんて思ってしまった自分がちよつと悔しく思えた。

だからトオルはムツとさせられた気分を、仕返しとばかりに大人げなく美純に投げ返す。

「はっはくん。と、いうことは現時点では俺の勝ちだな！」

「えっ？」

「俺だつたら迷わず書いて提出するからね。どっちにしたってなれないなら、書くだけ書いた俺の勝ち、さ」

「はあゝ？　あなた、何、言ってるの？」

美純は眉間にシワを寄せて、トオルを睨みつける。

「そんなこと書いたら、先生に何て……」

「おっと、敗者の弁は聞きたくありません！！　まったく、最近の高校生はそのくらいの気合もないのかよ？　俺の高校時代なんてな

……」

「？………何よ？」

「………いや、それらしい記憶が思い出せない」

「ぶっ！　あ、あははははは……」

「なあっ！ 何、笑ってんだよ?!」

「だって『思い出せない』なんて言って、くくくッ……、まるで、ずっと昔みたい」

「う、うるせえなッ！ どうせ10何年も前の話だよ!」

「やゝん、オ・ジ・サン!」

「こいつッ!」

拳を振り上げて脅かすトオル。「きゃっ!」と頭を手で庇ってみせる美純。

しばらくじつと身を潜めるみたいになっていた美純は、上から落ちてこないゲンコツの様子を伺うべく、庇った手の隙間かそーっと様子を見る。…………と

「ああっ! ……もう、その顔!」

ほんのすぐ側でニヤニヤ笑うトオルの顔に出くわして、カウンターを叩いて『ムッ!』っとほっぺたを膨らますふりをした。

「……ふふふふふッ」

「……はははははッ」

二人は、気が付くと腹の底から目一杯笑っていた。

ともかく、おかしかった。

おかしい気がした。

どうだろう? 本当におかしかったのかはわからないけれど、それまでのモヤモヤした気分を一掃するにはちょうど良かった。

トオルと美純は、どちらかが止めるまで続けるみたいに笑っていたから、結局随分長いこと笑い続けていた。

おかげで胸につまった何かがいつの間にか取れて出ていったような、
すっきりとした気持ちになった。

「ねえ、さっきの話って、あなたのコト？」

美純が訊ねてきた。けれどトオルは、質問の答えとは違う返事で返す。

「……ト・オ・ル。やめてくれ、『あなた』なんて呼ばれ方、こそ
ばゆくてされたくない」

「えー。でも、じゃあ『トオルさん？』『トオルさま？』うん…

…」

「『トオル』でいいからっ！ 周りの人間は、みんなそう呼ぶ」

「年上、なのによいの？」

その『年上』のイントネーションをワザと強くいった美純。いたず
らっぽく笑った顔にまたゲンコツを握って見せると、「キャッ」と
笑って顔を引っ込める。

「トオル、で！ 呼ばれなれてるから、そっちの方がいい」

トオルが言つと、美純は『うんっ』と素直に返事をした。

「それで……トオル。さっきの話は、トオルの昔の話なの？」

美純はリクエストに応えて、彼に話しかけた。けれど、トオルは伏
し目がちに彼女を見て、「さあ？」と答える。

「知らん。友達の話？ 聞いた話？ まあ、そんなところだ」

「えー、何それ！」

美純は両手のひらを『パッ』として、不満そうな声を上げた。

「何でもいいだろ。さあ、食べ終わたら帰ったほうがいいんじゃない

いか？ もうだいぶいい時間だぞ」

「ずるい、そうやって話をそらすの！」

「ずるくてもいいの。大人の特権」

「もう、教えてくれてもいいじゃない？！ スペイン、行ったの？ どんなどころ？ みんな情熱的な？ 女の人キレイ？」

「だぁぁー！ 質問ばっか、すんなー！ ほら、おしまいおしまい、店仕舞い。用が済んだら出てけよ」

「えゝ、もうちょっと。……じゃあ、トオルの昔話とか、聞きたいな」

「NO！ そうやって誘導尋問みたいにするのはお断りです」

「えゝ！ つまんない。参考になるかな、って思ったのに」

「そういう誘導尋問にも載りません」

「……うゝ、もうっ！ じゃあ、おかわり！！」

「はぁ？！ 何をだよ？」

美純は口をツーンと尖らせて、ぼそつと言う。

「デザート。だって、ジェラート、溶けてみんな混ざっちゃったから」

トオルはポカンと空いた口がしばらく閉まらなかったが、そのうち腹のその方から笑いが大量に溢れてくるのがわかって抑えきれなくなった。

「ぶははははははッ！！ 美純、お前、最高なッ！！ お前と一緒にいたら、俺はきつと一日中笑いまくることになりそうだ。いいよ、

……すごくイイっ！！」

「なっ？！」

またも豪快に笑われたことにほっぺを膨らまして怒り出す、美純。

「もうっ、笑うなゝゝッ！！」

両手がばしーん、とカウンターを叩く。

『ガチャッ——』

「あつ——雨、やんでる」

「ホントだ。よかったじゃないか、帰りは濡れずにすむ」

「うん。そうだね……」

美純は、『カーサ・エム』の扉を出ると、180°ターンしてトオルの方を向く。

足元の水たまりが、彼女の動きにあわせて水しぶきを散らす。

きちんと『気を付け』の姿勢になり、そしてぺこりと頭を下げる、彼女。

「——ありがとうございました。……あ、痛っ」

下げた頭に、優しいチョップが見舞われる。

「いやなんだ、堅苦しいのは。普通でいいよ」

「……うんっ！じゃあ、ありがとう。ゴメンね、色々迷惑かけたり……泣いたりして」

トオルは軽く首を横に振る。

「でも、なんかスッキリした！ たぶん、今日ここに来て、私、正解。明日からまた笑顔でがんばろー、って気になれた」

「そうか。じゃあ、よかった」

美純はニッコリと笑って、『うんっ』と頷いた。

とてもいい笑顔だ。透き通って、ピカピカ輝いているみたいな笑顔だった。そういうば、彼女のこんな表情は初めて見た。思いつめたり、泣いてたり、そんなのばかりだったから気付かなかったけれど……

「……美純って、笑うとすごく可愛いな。そっちのほうが絶対、お

前らしいよ。泣いたり、悩んだりした顔は、お前には向かない」

トオルは微笑んで言った。なんだかとても自然に口から出た言葉だった。

一瞬、美純は言葉を失った。けれど、すぐにプイッとそっぽを向くと、「……急に、何、言ってるの?!」と呟いた。

トオルはまた『くくくつ』と笑いをこらえた。

「じゃあ、行くね」

「ああ、元気で。がんばれよ」

「うん、ありがとう」

そう言って手を振って行く美純の背中を、トオルはしばらく見送った。彼女は一つ先の交差点を渡って、駅の方へ向かって姿を消す。辺りは、もうすっかり夜だった。さっきまでの雨はどこへやら。雲の切れ間から、所々、星空が顔を出していた。

トオルは、入口周りの看板類を店内に引き込む。

今夜の営業は終わりだ。ディナータイムのお客は、美純ただ一人。売上はゼロ。でもまあ、こんな日もある。

店外の照明類を消して、『CLOSE』の看板を出して——ふと思った。

なんだかきつと、また会っ気がする——と。

彼女に。

美純に、また会う気がする。そんな予感がした。

30代のうだつの上がないオヤジと17歳の女子高生。

つながるところは何にもないけれど、共通の話題や趣味も見つからなかったけれど、トオルは彼女のことがちよつと気に入っていた。

そして、彼女とはまた会えるような気がしていた。ちつとも根拠のない予感だけれど、この予感には自信があつた。

キッチンに戻り、洗い物をし、帰り仕度を始める。

ふと、気になって入口辺りに目が行った。そして、さっきの予感が確信に変わった。

「——あいつ」

銀色の柄。白の縁どりが付いた真つ赤なデザインの傘。

傘立てには美純の傘が残されていた。

「くくく」

トオルはまたちよつと笑った。

彼女は来る。きっと、また来る。

あの笑いを持って、またやって来る。

燦然ときらめく宝石たちはダイヤにエメラルド、トパーズ。ほかにも赤や蒼や、色鮮やかなたくさんの輝きが並ぶ。

手の込んだ装飾付きの指輪、上品なデザインのピアスやペンダント……。

『カーサ・エム』に運び込まれるこれらを見やり、トオルは鼻を鳴らした。

これほどに素晴らしいものが目の前に揃っているにも関わらず、正直なところ彼の目を奪っているのは、その美しさではなくて——
——<ゼロ>の羅列だらけの値札だったりする。

トオルにとって、ほとんど（いや、全く……）価値を理解できないこれらが、しかし本日の大事なビジネスパートナーなのだ。
今回で5回目を迎える『ジュエリー・yoshika』主催のコラボイベントが、ここ『カーサ・エム』にて、もうあと一時間ほどで始まるうとしていた。

トオルは、いつもと随分雰囲気の変わった『カーサ・エム』の店内を見回した。

店内の三分の二のスペースを使って行われる貴金属の販売会。

『ジュエリー・yoshika』、御贖のなかでもとりわけ『重要な三組』がディーラー側よって選ばれ、特別に招待されるこの会は、普段は絶対に紹介しないような限定品だったり、この日のために仕入れた貴重な品だったり、『買わ………れることを目的に』参加する資産家や有名人達に、まるで何でもないもののように（値札なんてたいして見もせず）取り引きされていく——。

そしてトオルが関わるのは招待客への『お礼』を目的とした、のちの食事会の演出の方だ。有意義かつ羽振りのいい買い物之余韻を

満喫していただくため、彼がひと組ひと組、『そのお客様だけの特別メニュー』を用意して接待する――。

16:00から始まって、一組約2時間程度の時間を使って行われるこの会は、最初の1時間が『メイン』の販売会、あとの1時間が食事の席。

最初のゲストが到着するまで、あと30分ほどだろうか。次第に行き交うスタッフの慌ただしさから、店内の空気の密度が濃くなってくるような気がした。

トオルはタタタツと軽快に刻んだハーブを、使いやすいうように小さなケースに移す。使った包丁をさつと洗い、仕舞う。

会場となる『カーサ・エム』はそれほど広い間取りではないが、専門の業者に委託して不要なテーブルやイスを排出し、代わりにいくつもショーケースを置いた『簡易宝石店』のような造りに様変わりしていた。けれども調度品や額の写真は『カーサ・エム』にもともと置いてあったものを使っていたので、よく見るとラグジュアリーな雰囲気と気取らない装飾とが一体となった、どうもちぐはぐな空間が出来上がっている……。

慌ただしく設置作業の最終チェックをするスタッフと、運び込んだ貴金属を仰々しく飾るスタッフが入り乱れ作業する中、カウンタ―を挟んだ内側ではさっきの包丁仕事で粗方下準備を整えてしまったトオルが、宝石店の販売スタッフの行動を何となく目で追って楽しんでいた。

壁際の指輪ばかり並べたショーケースの前に立つ男性スタッフは、さつきからずっと『ブツブツ、ブツブツ』ケースに話しかけている。若い女性のスタッフは、手に持ったバインダーに挟まれた資料と現物を一つ一つ見比べて、何度も納得するみたいに頷いていた。40代くらいの長身の女性販売員は、落ち着きなく店内を行ったり来たり、行ったり来たり。

きつと彼らスタッフには、それぞれ『ノルマ』みたいなものがある。それが達成されるかされないかで、今後の自分のポジション

みたいなものに色々影響を与えたりするのだろう。

緊張やプレッシャーからなのか、皆、同様に眉間に深いシワを寄せ『キリキリ、カリカリ』と張り詰めた空気を発していた。『カーサ・エム』の中はさながら、翌朝の出兵を控えた軍隊みたいな殺伐とした雰囲気になっていた。こういう『追い詰められた人間』の観察は、普段見えない本性のようなものが覗いて割りと楽しいものだ。悪いとは思いつながら、トオルはクスクスと笑っていた。

実際のところ、トオルにしたってまったく緊張していない、というわけではないのだ。

今回、彼に任せられているのはただ『美味しいものを作って、提供する』ことだけではない。というのもひとつのテーブルに一時間毎に新しいお客を案内する今回のイベントの性質上、ひと組目の客は次の客の買い物が終わるまでに食事を済ませていなければならないのだ。

そのためにはある程度、アップテンポで食事を提供し続ける必要がある。料理をテンポ良く出しきって最初のお客にお帰りいただくなければ、一時間後に次のお客をテーブルに案内するはずが結局、待たせてしまうことになる。

かといってあまりに早過ぎれば、それも問題だ。

食事は慌ただしいものになって、折角贅沢な買い物をして上機嫌な客の気分を台無しにしかねない。要するに、『主催者』にも『お客』にも都合のいいタイミングを見つけ出して、提供することが要求されるのだ。ベスト・タイミングを見極めるのも、またベスト・^{それ}タイミングで実行するのもなかなか高度な技術や判断力が必要とされる。

一発勝負。

けれど、そんな失敗できない緊張感がむしろトオルは心地良い。ストレスの少ない中での作業は、ミスこそ少ないが同様に高い結果も生まれないものだ。緊張感に吞まれるのではなく、吞み込む。ト

オルは今、自分の中の『気持ちの核』みたいなところが、だんだんと集中の密度を増しているのを感じていた。

時刻は16:00まであと15分をきった。

トオルは冷蔵庫から出したあるものをショット・グラスに注ぐ。それをグラスの半分くらい、一気に口の中へ放り込んだ。舌の奥の方、喉の近くを液体が刺激し、飲み込むと果実の熟成した香りと木の焦がしたような香りが鼻腔に抜けていく。

急に――視界の解像度が上がるというか。映るものが鮮明になったような気がする。

何度が香りの余韻を楽しむと、――気持ちの方もだんだんと盛り上がってきた。

『さあ、今日もがんばろうか』ひとりごちにトオルが頷いたときだ。

「……あら？　ねえ、私にもそれ、ちょっといただけないかしら？」
不意に背後で声が聞こえた。

振り返ると、黒いスーツを着たおかつぱみtainなショートカットが特徴の50歳くらいの女性がトオルの顔を覗き込んできた。紫がかった青のアイシャドーの両端に年齢を感じさせるシワが刻まれた、パツと見、貫禄のある顔だった。

「……？」

急に声をかけられたトオルは、最初、彼女が一体何を言っているのかよくわからなかった。だから言葉の意図を探ろうとして、じつとその表情を見つめ返した。すると、彼女の方も伝わっていないことを察したらしく、もう一度、今度はトオルの手にあるグラスを指さして言う。

「私にも一杯、下さる？　もちろん、お代は支払うから」

「あつ、これ……ですか？」と、トオルはショットグラスをかざして確認する。「でも、これ『酒』ですよ？」

「そんなの、わかってるわよ」

「えっ？ ……いいんですか、仕事前なのに？」

「ちよつとなら。第一、仕事前なのはお互い様よ」

「まあ、そうなんですけど」

トオルはその言葉に苦笑する。

「ちよつとした『気付け』っていうか。少し強いですよ」

「いいの。そのほうが頭がクリアになるじゃない？」

確かにそうだ。トオルがそうしたのも、まさにそういう理由だった。

少量の『アルコール』は感覚を鋭敏にすることがある。それが作業の進行や結果に良い影響を与えることさえある。カフェインでも似た効果は得られるが、威力は断然アルコールの方が上だ。

あくまで、——たくさん口にしなければ。

「好きなんですか、お酒」トオルはグラスに注いだやや黄金色がかった液体を、彼女に差し出した。

「当たり前でしょ。女を一人で50年もやっていくには、色々道具が必要なのよ」

ニンマリとしてみせると、彼女はためらわずにそれを一息であおった。

空になったグラスが、しばらく空中で止まっていた。それから、まるで止まっていたことに気が付いたみたいに彼女は『コトリッ』とカウンターの上にグラスを置いた。

「……これ、何かしら？ 美味しいわね」

同じ側の眉と頬をキュツと上げて、彼女は言った。記憶の中から同じものを探し出そうとしているのだろうか？ しかしどうやら答えは見つからないようで、彼女は残念そうに表情を曇らせた。

「シェリー酒、ってスペインのお酒です」

トオルは答える。

「アンダルシア。ポルトガルに近い辺りのお酒ですよ」

「へえ。何だか『シェリー』ってサラッとしていて、飲みやすい印象だったんだけど、これは割に味が……」

「濃い、でしょう？　日本でシェリーと言えば一つポピュラーな銘柄があつて、それが『スッキリ＆ドライ』な味が売りの銘柄なんですけど、その味が僕にはどうも物足りなくて。それでこの銘柄を使つてゐるんです」

「ふーん」鼻を鳴らして彼女は言った。「あなたこそ、好きなのね。『お酒』」

「僕のは、——仕事ですから」

そう言つてトオルはエプロンの左胸に付けたソレをつついてみせた。それを見て「ああ……」と彼女は納得したように頷いた。

ちょうどその時、『カーサ・エム』の前に一台の車が止まった。中から降りてきたのは60代くらいの男女。おそらくはご夫妻だろう。トオルは予約の名前と来客数を資料を見てチェックする。【黒木夫妻・2名様】。

そして、『カーサ・エム』の中で待機していたスタッフ達が背筋を伸ばし、手を前に組んでゲストを迎える体勢を整え出した。

「到着、のようですね」

「ええ。そうみたい」

二人は視線を重ねた。互いにほんの一瞬見せる、真剣な表情。そしてそれはすぐにゲストを迎える笑顔へと代わる。

「ごちそうさま。お幾らかしら？」

「いいえ、……結構ですよ」

「ううん、遠慮しないで。これは『ビジネス』でしょ」片方の眉を上げて彼女は言う。「私が必要なものを、あなたは提供した。そこには費用が発生するものよ」

しかしトオルは首を振る。

「そう言うなら、あなたは僕の『ビジネス・パートナー』だ。『パートナー』からはお金は取れない」

「『パートナー』？」

彼女はちよつと思議そうな顔で聞き返す。

「あなたの仕事がよければ、その後に仕事をする僕はきつと有利に

なる。僕の仕事がよければ、あなたは次回の顧客を捕まえやすくなる。僕らが互いにベストを尽くせば、どちらにとってもポジティブだ。なら、あなたの気付けのために一杯奢るのは『ビジネス』みたいなものじゃないですか？」

頬が、緩んだ。口元を持ち上げて彼女は言った。「あなた、面白いわね……」、と。

「私、今岡倫子よ」彼女が名乗ったので、「僕は廣瀬トオルです。どうぞよろしくお願いします」トオルも名乗りを上げる。失礼のないようへりくだったのは、彼の勘がそうさせていた。多分、彼女はデキる女だ。敬意を払って、悪いことはない。

「それじゃ、ベストを尽くしてくるわ」

倫子はそう言って、『お客様』をお迎えするため歩きだした。

トオルが二組目のお客のパスタを茹で始め、タイマーを掛け、そしてソースの鍋を火にかけた頃に、本日最後のお客達を乗せた車が予定より10分ほど遅れて店の前に着いた。到着を待っている間、仲間同士で雑談などを交わしていた宝石店のスタッフは、小走りに自分の持ち場へと戻り出す。

『カーサ・エム』の入口の扉が開くと、「いらっしやませ」とスタッフ達が仰々しく頭を下げてゲストを迎え入れる。

人数は、3人。

確か、一人は『生魚が苦手』だったはず……。トオルは、カウンター裏の頭上の棚にマグネットを使って貼り付けておいた顧客の資料を再確認する。ゲストは女性3人。母と娘二人。記憶の通り長女が生魚NG。次女は未成年のためソフトドリンク用意。販売会は今回が初参加。（四方夫人、ご息女！くれぐれも粗相のないように！！）

「……………」

手書きの注意事項がデカデカと書き込まれている。クレグレモソウノナイヨウニ。こんなふうに書かれると、別にひねくれている訳じゃないが、逆にちよつと嫌な気分になる。いつだって、どんなゲストにだって、そんなことがないようにしているさ、と思ってしまう。

鍋の中のパスタを箸でほぐしながら、トオルはちよつと舌打ちした。

そこまで言うなら一体どんな相手なのか見てやろうじゃないか、と彼は入口の人ばかりを見やる。

販売スタッフにいち早く取り囲まれる一番手前の女性。あれがきつと『四方夫人』だろう。その後ろに、肩くらいまでのセミロングの女性。身長は170cmちよつとあるだろうか？取り巻く男性

販売スタッフと比べても割と背が高くすらつとした20代前半の女性と、さらにその後ろにもう一人いるのだらうけれども、残念ながら最後の一人は人ばかりで顔を覗くことは出来かった。

くれぐれも夫人。年の頃は50数歳だろうが、遠目にしてなかなか美しい容姿だとわかる。娘よりは低いものの、あの歳の女性にしては長身だし、出るところは出て、引つ込むところは引つ込んだ、きちんと管理・維持された体型をしている。そして、びっくりするほど小さな顔。なるほど、これはお美しい。

そしてくれぐれもな娘たち。長身の娘の方が長女だろう。鼻筋の通った綺麗な顔立ちだ。全体的にスレンダーな印象。それと透き通るような白い肌と艶やかな黒髪は、丁寧にケアされているのだらう。パツと見て一部のスキも見つからない。形の良い眉と切れ長の瞳がちよっと冷たい印象を与えるものの、どこに出しても恥ずかしくない立派な娘であることは疑いようもない。

そして、次女の方は。人波の間から長い髪を結び上げてクリップで留めた可愛らしい横顔が見えた。小ぶりの形のいい耳としゅっとした顎のライン……

その横顔は——美しかった。

目元のメイクは控えめでまだあどけなさを残すが、母や姉を見ればわかる。きっと将来、この娘も目を見張るような美人になるんだらう……。

と。その顔がふいにこちらを向いたのだ。そして、トオルを見付けて

——
微笑んだ。

——
まさか、美純？

『ピピピピッ！』

彼が驚いて目を見張るのとアラームが鳴り響くのはほぼ同時だった。トオルの意識はその瞬間、急速に手元に引き戻される。ハツとなって、慌てて鍋から茹で上がった麺を取り出すと、ソースと麺を絡めながら、（しまったっ、ちよっとソースが詰まってしまった！）

とゆで汁を少しだけ足して調節する。

オリーブオイルをかけながら煽り、香りをたたせる。皿に盛りつけ、チーズを削りかけ、バジルを飾る。大成功！……の、ちょっと手前くらいの完成。とりあえず、胸をなで下ろす。

トオルは皿をゲストのテーブルに差し出し、今日のパスタのメニューの説明をした。

——しながら、頭の中はもう全然違うことを考えていた。

ちらつと視線を横に流す。その視線に気付いた向こうが、わざと覗き込むように顔を傾けたのがわかった。ニヤニヤ光線がトオルの頬をチクチク刺してくる。トオルはそれが腹立たしいのと、悔しいのと、おまけにちよつと恥ずかしいので、思わず唇を強く噛んだ。

……あんなガキンチョの横顔に、ほんの……ほんの一瞬だけでも見とれたとはッ！

しかもその瞬間の顔を、

あろうことが、あいつに見られた……。
最悪だ。

トオルにとって、本日最後のゲスト——四方親子——がテーブルに着いた。

四方夫人はまだ何人かのスタッフに声をかけられては、にこやかに返事を返したり、書類にサインをしたりしている。どうやら商談の方はすこぶる順調だったようで、販売スタッフの表情はホクホクとしていた。

しかしてトオルの方はちよつと不機嫌そうな顔。というのもこの男、なんと大人げないのだが、どうにかして美純にさっきの借りを返してやろうとばかり考えていたようなのだ。まったくの逆恨みなのに。

どんな小さな弱みでもいいから見付けるまでは目を合わせまい、と頑なに視線を避けてきたが、さすがに目の前のテーブルに座られた上、これから挨拶をしようという時になればそうもいつてはいられない。

一体どんな顔をしてるのやら、と思うと、どうしても悔しさが蘇る。たった一回、あの瞬間を出来ることなら切り取ってどこかに捨ててしまいたい！ と考えてみたりする……。

しかし無意味な考えはいい加減、横にやらないと。息を一つ付いて切り替えると、トオルは『仕事用』の笑顔を作って話し始めた。

「こんばんわ、四名様。ご来店、ありがとうございます」

「こちらこそ」穏やかな笑顔をたたえて、四方夫人は言った。「今日はお招きいただき光栄ですわ」

「そう言っていたら、自分も光栄です」

トオルはゆっくりと頭を下げて礼をする。

夫人の言葉は一音、一音がはつきりとして非常に聴きやすく、けれども穏やかでそよ風に似た柔らかなイントネーションだった。耳

障りの良いそのリズムが、たった一言交わただけでトオルの頭の中にしっかりと張り付いた。彼が知っているどんな声とも違った、とても特徴的で、一度聞いたら忘れないような響きだった。

不思議な感覚だった。やさしい音に、夫人の声聞き入ってしまったのかもしれない。だからか、

「――何しろ、あなたのお料理、とっても美味しいと評判でしたから。今日は本当に楽しみにして来たんですよ」

「えっ……?!」

その音が予想もしていなかった一言を紡いだので、自分でもびっくりするくらい驚いてしまった。

な、なんでそんなことをこの人が知っているんだろう？ まさか、

――美純がそんなふうに母親に言ったのだろうか？
けれども。

「――以前、この会に参加された奥様が何度もおっしゃっていたのを聞かされて。機会があればぜひ、と思っていたのですけれど、なかなかその機会に恵まれなくて残念に思っておりましたの。そこへ今回のお誘いでしょ。私、本当に楽しみにしてましたの」

ちよつと恍惚な笑みをみせて、四方夫人は言った。

「ああ、……そうでしたか。なら、ご期待に添えるよう、今日は精一杯頑張らせていただきます」

トオルは応える。

その言葉、決して悪い気はしなかった。

それにしても。彼女の言葉はどれも本当に真っ直ぐだった。

お世辞や社交辞令を使いこなしたり、会話の駆け引きや裏をとったり化かしたり。トオルの知る社会的地位の高い人々は、そういった言葉の冷戦を日々繰り広げる方々ばかりで、場合によっては夫婦間でも探り合いの耐えないような輩もいた。

しかしこの四方夫人は違うように思えた。実際のところ、トオルの考える通り多分そんなものは彼女にはないのだろう。確証はない

が、トオルはそんな気がした。

目を見ると何となくわかるのだ。きっとこの人は、感じたそのままを純粹に口にするタイプだ。

そのくせすごいのは、発する言葉がどれも人を心地よくさせてしまふことだろう。

他人への嫌味も中傷も、その口からは出ないんじゃないだろうか？

トオルはちよつと反省した。四方夫人、どうやらかなり人好きのする人間らしい。考えてみれば、彼女は全然悪くないのだ。悪いのは、むしろあの書類の一言で変な先入観を持って色眼鏡をかけたトオル自身である。

トオルはなんだか気恥しくなってしまった。

これは、——くれぐれも粗相のないようにしなければ。

「さあ、今日は何をご馳走していただけるのかしら？ 私、楽しみだわ」

トオルの心情の変化など知るはずもなく、四方夫人はすこぶる上機嫌に言った。

その様子は、大好きな番組が始まるのを今か今かとテレビの前で待ちわびる子供のよう。

トオルは、まず乾杯のシャンパンを二杯とノン・アルコールのスパークリング・グレープジュースを一杯、グラスに注いで3人のゲストに。

「どうぞ」

「まあ、シャンパン。嬉しい」

顎をコシヨコシヨされた猫みたいに幸せそうな顔をして、夫人は言った。ゴロゴロと、音まで聞こえそう。

「じゃあ、あなた達。乾杯しよう」

そう言って四方夫人は手にとったグラスを娘達に傾ける。

「ちんっ……っ」

その音を後ろに聞きながら、トオルは最初の料理を準備するためにカウンターの中に戻っていった。

トオルが今日の一品目を選んだメニューはホタテのサラダ仕立てだった。

ホタテは半口サイズに小さく切りそろえ、フレッシュのハーブをちぎって合わせる。味付けはシンプルに塩・コショウのみ。鮮度の良いものが手に入ったときはこれだけで十分だ。好みもあるのでヴィネガーはあえて使わず、レモンを添える。仕上げは南イタリア・シチリア産のエキストラバージン・オリーブオイル。

本来であれば生の魚介料理は避けたかった。長女は生魚が食べれない。ならば生の貝好きであるケースは考えにくいからだ。それでもこのメニューをトオルが選んだのには理由があった。

『魚介料理のメニューを多めに。夫人、魚介類がお好きです』

顧客インフォメーションの、四方夫人の部分にはこう書かれていた。

こういうことは複数人のテーブルではよくあることなのだが、一方が希望するメニューでも他方にとっては苦手な食材が入っていることはままある。実に残念なことなのだが、その場合は大概く食べたい側が折れてく食べれない側ホストとゲストに合わせるのが常だ。

けれどもそこにグループ内の人間関係や力関係が関わってくると話がややこしくなる。譲ったり、我慢したり、無理したり……。それがヒトとヒトとの関わり合いだ、といえはその通りなのだが、こうやってしまえば『日本人特有の』と言葉が付く。海を渡るところといった感性は途端に意味を薄める。文化や習慣というのは本当に面白い。

今回の四方家の3人の関係に関しては『家族』であるからそういった気遣いは無用なのだろうが、トオルが考えたのはホスト側である『ジュエリー・yoshika』のことだった。彼らにとって最も重要なゲストは四方夫人だ。当然、夫人の嗜好には応えたいはず

だ。日本人の『魚介類好き』の99%は刺身好きと言っても外れないくらい、日本人の魚介好きは『生』のモノに目がない。ここは寿司大国・日本である。ならば、応えられる範囲内で鮮度の良い『生魚介類』をお出しする必要がある、とトオルは考えた。あえて『生魚・NG』とだけ書いてあるということは、『それ以外の生魚介類はNOではない』ということだろう。長女もおそらくは食べられないことはないはずだ、とトオルは判断した。

しかし、違った――。

「ごめんなさい。私、これ食べれない」

長女は片手で自分の皿を数cmだけ前に押しやった。

「えっ……」

トオルは口籠る。

「私、生の魚が食べれないんですけど、体調によっては魚介類全般の生モノが食べれないんです。と、いうか食べたくない時がある、というか。折角出していただいたのにすいません」

長女はトオルの目を見て謝罪すると、丁寧に頭を下げた。

しまった、とその時トオルは思った。こういう可能性が頭に浮かばなかったわけではなかった。

彼はやりすぎたのだ。余計な気を回しすぎた。それで結局は全員を満足させる結果でなくなってしまった。彼のミスだった。

「美空、食べないの？」

四方夫人が声を掛けると、長女――美空は頷いた。

「今日はちよつと無理みたい。ごめんなさいね。お母さんと美純は気にしないで食べてちょうだい」

「そう、……」

夫人は残念そうに顔を曇らせた。美純も一度握ったナイフとフォークを置く。

余り良い雰囲気ではなくなってしまった。食事の始めとしては最悪に近い雰囲気だ。トオルは唇を噛んだ。何とか、挽回しないと……

……。

すごい速度で頭の中のパズルのようなものが組み替えられていく。言葉、食材、メニュー。この沈んでしまった空気を盛り返して、尚且つ長女にとつて満足のいくお皿――。まるで探偵が推理する時みたいに情報が駆け巡る。

言葉が、口を付いた。頭の中に完成に近づきつつあるパズルの、最後のピースを手に入れるために。「火の入った貝類は、お召し上がりになれますか？」

美空の顔が上向いた。トオルの目を見る。

「……………ええ、本来は食べれない訳ではないので。でも、本当に大丈夫ですから気を遣わないでください」

「そう言われて気を遣わないコックは、コック失格ですよ」無礼にならない程度に口角を上げて、トオルは微笑んでみせた。

「お皿、一度失礼します。ほんの数分だけお時間下さい」

言うトオルは美空の前菜の皿を引いた。そして素早くカウンタ―内に戻ると、フライパンを火に掛け、オリーブオイルを流し、ニンニクを一欠片投げ込んだ。

長く時間を掛けては意味がない。この間も、夫人と美純の手は止まっているのだ。二人と一人がお互いに気を遣い合う時間は出来るだけ短くしなければ。

まな板の上にしめじと、予め下ゆでしておいたジャガイモを広げる。手早く半口サイズに切りそろえて、軽く塩を振る。フライパンの様子を見た。ニンニクの香りが立ってきて頃合だ。トオルは今切ったジャガイモとしめじを素早く放り込むと、それらを炒め始める。しめじの香りが立つ。ニンニクの香りと合わさり、絡み合う。ジャガイモの表面に色が付いてきた。そろそろか、とトオルは次の工程に移る。

さきほど美空に出したホタテを、フライパンの中に滑らせる！するとキノコとニンニクの香りにホタテの香りが重なって、なんとも言えない複雑な香りが立ち上った。フライパンを振り、全体の

加熱を均一にするよう務める。激しく振るとジャガイモが崩れ、食感がモゴモゴとした舌触りに変わるので、あくまでソフトに。

そうしてホタテにほどよく火が入ったのを見ると、トオルはカウンターの後ろからあるものを取り出した。

それは、――さっき彼が気付けで口にした、『シェリー酒』だった。

ピツ、とフライパンに注ぎ込まれるシェリー酒。途端に青白い炎がフライパンを包む。芳醇な香りとその派手な様子に「おおっ」と店内のどこかで声が上がった。すぐにアルコール分は気化してしまうので、実際に火が付いている時間は数秒だ。そしてフライパンを火から下ろす。

きゅうりを縦にスライスして、両端に互い違いの切り込みを入れる。片側の切り込みに、反対側の切り込みを噛ませるようにはめて筒状のケースを作るとその中にフライパンの中身を入れる。上にはハーファクトのミニトマトとセルフィーク（飾りハーブ）。皿にバジルを使ったソースを落とし、仕上げる。

トオルはカウンターを出た。時間にしたら５分はかかっていない。そして手に持ったお皿を美空の前に差し出す。

「お待たせしました。ホタテとキノコのソテー、シェリー風味です」
出来立てのその皿から上がる香りは、彼女の表情を柔らかくした。

「ありがとう。私、これなら食べられるわ」

「そうですか。よかったです」

トオルはホッと胸を撫で下ろす。何とか事なきを得たようだ。万が一、この作り直しを彼女が食べられなければ、その時は素直に頭を下げるつもりだった。

「あら、そっちのお皿もとっても美味しそう。何だか交換してほしくくらいだけれど……」

四方夫人が向かいに座る娘に呟く。

「もう、お母さんっ。そうしたら、私が食べられなくなっちゃう」
「ふふふ。そうよね」

コロコロと笑う四方夫人に、トオルはぎよつとする。折角、執り成した場をお願いだからかき回さないで欲しいものだ。

「……………」

その横で大人しく座っているように見えた次女は、ちらりとトオルを覗き見た。何か言いたそうな顔でもって、ちらっちらっと。トオルはそれには『とても冷たい目』で応えておく。

（お前は何も言うんじゃない。ひとつ言も喋らなくていい。……いいな？）

トオルの無言のプレッシャーに、たじたじとする美純であった。

その後の食事は滞りなく進む。二皿目のパスタは、誰かさんの好みを十二分に反映した『手長エビのトマトソース』。目をキラキラさせて食べる様子を眺めるのはちよつと気分が良かったし、三皿目に出した『本マグロのカツレツ、マスタードソース』に夫人は何度もため息を漏らしていた。メインディッシュは『牛フィレ肉とフォアグラのソテー、マンゴーとバルサミコのソース』を用意した。夫人と長女のグラスに赤ワインを注ぐ。ワインと料理とを交互に口に運び、顔をほころばせる四方夫人は言った。

「素敵……。なんて美味しいワインかしら」

うつとりとした瞳で傾けたグラスをのぞき込みながら、そう言った。

「でも、……実はそんなに凄い銘柄ではないんですよ」

「まあ、こんなに料理と合うお味なの？」

四方夫人は目をまんまるくして驚いた顔をした。そうするとまるで大発見をした時の小さな子供のように見えてとても可愛らしい。また夫人の雰囲気にはそういったちよつと幼い、それでいて純粋な空気がピッタリと合った。不思議な空気感のある人だ、とトオルは思った。

「つつい、『良いものには良いものを』と考えがちですけど、良いもの同士は互いの個性を相殺し合ってしまうことのほうが多いですから」そう言うと、トオルは少しずつ片付けを始めている宝石類のショーケースの方を指差した。

「今日の僕は、あくまで引き立て役ですから。メインディッシュの付け合せの葉っぱと同じ係りです。ですからほどの銘柄をご用意してみました」

小さな笑みを浮かべ、夫人を見た。夫人はふくん、と微妙な反応をしていたのだが、ふとトオルの左胸に付いていた葡萄のバッチを見付けて『ああっ』と納得した。

「シェフはソムリエさんなのね。失礼しました。すごく素敵なワインのチョイスだわ」

「いえ。そう言っただけだと光栄です」

軽い笑顔で答えた。

その隣で、『えっ?』と小さく反応していた美純には、本日のところは無反応で済ましておく。トオルは四方夫人が訊ねてきた料理やワインのちよつとした疑問に二、三答えたあと、再びカウンターの中に戻った。デザート準備を始める。

デザートのメニューは『カーサ・エム』の定番の一品。

『スイート・カプレーゼ』と名付けたその一品は、トマトを使っ

たちよつと酸味のあるゼラートとバジルの薫りが華やかなシャーベット、それにリコッタチーズを使ったセミ・フレッドを合わせた冷たいデザートだ。赤・緑・白の三色がイタリアンカラー鮮やかにひとつの皿の上に盛り込まれる。仕上げにベリーのソースをデコレーションして準備OKである。

「まあ」と「わあ」と「ふわわああ」とほんのちよつとずつ違った、けれども三人共の思わずこぼした感嘆の声にトオルは満足そうにした。デコレーションを華やかにしたお皿は、この驚きや感動も美味しさの一部みたいなものだからだ。

女性三人はそれから口々にその見た目や味わいを形容し合つて、美味しさを共有していた。

その間、トオルはカウンターのこつち側でコーヒーを入れる。引き立てのコーヒー豆をネル・ドリップでゆっくりと抽出する。

そうしている間、トオルはぼんやりと四方家の家族のやりとりを眺めていた。『女三人よれば姦しい』なんて言うけれども、この家族が見せる姦しさはずいぶんと穏やかだ。その大きな一因は、母である四方夫人の独特の雰囲気であることは間違いない気がした。彼女の発する『オーラ』とでもいうか、空気感は本当に不思議な物があったからだ。凜としていてスキがないのに柔らかで、芯があるように掴みどころがない。『天然』というより『自然』に近い。ただ、ともかくあの形をした女性はそうであるのが当然、みたいなピタリとハマる雰囲気。『四方夫人はああであるべき』みたいな、不思議な説得力があった。

それと同時に、ちよつとした違和感も感じていた。そちらの方も上手く言葉にはできなかったが、あの三人を見ていて何故だか少し腑に落ちないところがある。かといって、不自然というほどでもない。だからトオルはそれ以上は深く考えずに、煎れたてのコーヒーをカップに注ぐとテーブルに向かった。

本日最後のゲストのお帰りだ。

「シェフ。どうもありがとう。御馳走様でした。本当に美味しかったですわ」

「ありがとうございました」

初めてサービスした四方夫人が一体普段はどのくらいお酒を飲まれる方なのかは知らないが、今夜はほんのりと頬が赤くなるまでワインを楽しまれて上機嫌であつた。

「今度はぜひ、夫も連れてきたいのだけれど。……構わないかしら？」

「もちろんです。お待ち申し上げております」

「ありがとう」

そう言い残すとスルッと車上の人になる。そういった姿まで様になるのがこの人の凄さなんだろうか？ とトオルはちよつと思う。

「シェフ。気を遣っていたいてありがとうございました。また伺います」

丁寧な頭を下げてお礼を言う、美空。確か大学生ということだったから二十一、二くらいの歳のはずだが、幼い頃からの躰からなのかびつくりするくらい立ち居振る舞いが板についている。まさに令嬢という感じだ。やや冷たい雰囲気はあるものの、それも含めて彼女の魅力的だと思えば納得できる。フロアリングの床にヒールを響かせて出口のドアをくぐっていった。

最後に続く美純は、先の二人に見付からないように、胸元で小さな『バイバイ』をしてみた。これはこれで彼女らしい。トオルはやれやれと口元をほころばせ、ウインクして応える。

が――。

「美純ッ！ ちゃんとご挨拶もできないの。失礼な娘！」

突然、鋭い叱責の声が響いてトオルは啞然とした。前を歩く美空

の表情が険しくこちらを振り返る。その視線は、美純一点に刺すように注がれていた。美純は『ハッ』となって青白い顔をしてトオルの方に振り返った。

「あ、ありあと……がざいましッ！」

水飲み鳥みたいなぎこちない会釈をすると、美純はそのままの硬い表情で店を後にする。

外から冷たく言い放つ声が聞こえる。「全く、どうしようもない子。恥ずかしいわ……」その言葉を最後に残して車は走り出した。

トオルはちよつとだけ理解した。

あの三人を見ていて感じた違和感が何か……………。

週末の営業が終わり、定休日を挟んだ火曜日の夜だった。
営業時間の中頃を過ぎた頃、彼女が店を訪れた。

カチャ――

「いらつしゃいませ。あつ……」

入ってきたお客はタオルに向かい目顔で小さく挨拶をして、それからカウンターの空いているひと席に座った。

――四方 美空だった。

「こんばんわ。先日はどうもありがとうございました」タオルは小さな会釈で挨拶をする。

「いいえ、こちらこそ」

美空はそう言うのと口元だけの笑顔を作ってみせた。その表情がとても板についたものだったから、タオルはちょっと驚いた。笑ってみせる必要がある、そういう生活をもう何年もしてきた人間のする年季の入った『魅せる笑顔』のようだった。

彼女はまだ、20代前半なのに。

「先日はごちそうさまでした。お料理、とても美味しかったです。それに母がすごく気に入っていて、帰りの車の中でも何度も『また行きましょう』って」

「そう言っていただけと何よりです。よろしくお伝えください」
「はい」

そう遣り取りしたあと、タオルは彼女にメニューを差し出した。それに美空が目を落とす前に、先に一言声を掛ける。

「……先に、何かお飲み物をおすすめ致しましょうか？」

美空はしばらく無言でいたが、「そんなにお酒は強くないんです

けれど、軽めのものなら……」

「口当たりの甘いモノの方がいいですか？ カクテルも材料があるものだったらできますが」

美空は首を横に振った。

「ごめんなさい。甘いのはちょっと苦手です。それに私、割ったり、混ぜたりする類いのお酒が苦手なんです」

「なるほど。……でしたら、ちょっとお待ちください」

冷蔵庫を開けて中から一本の瓶を取り出す。

それは先日イベントで見事彼の窮地を救った一本だった。そんな縁もあつたからだろう、トオルはそれを美空に紹介することにした。

「なら、シェリーにしませんか？ スペイン産のポピュラーな食前酒。ワインより3〜4度、アルコール度数が高いだけですし、伺った感じだとこういうほうがいいのかなんて思います」

再び美空と顔を合わせると、トオルはそう勧めてみた。

「そう。……ええ、そうします」

答えると、美空はまた口元だけの笑みを彼に送る。

トオルはカウンターの上の棚からグラスを一脚、選んだ。シュツとしたフォルムのシャンパングラスを一回り小さくしたようなものだ。それによく冷えたシェリー酒を注ぐ。

「お待たせしました」

美空の前に出したグラスは、ガラスに葡萄の房の装飾を削り込んだ一脚だ。中に冷たい液体を注ぐとガラスの表面が曇って葡萄の絵が浮き出して見える、手の込んだ造りの物だった。

「ありがとう」

美空はグラスを傾けた。

確か、まだ大学生だったはずだ。けれどその身のこなしは随分と様になってるように見えた。『飲み慣れている』というよりは『よく訓練されてる』といった風か。だが、同世代とグラスを合わせるときは浮いた存在なのではないだろうか。ちよつと気になった。

美空がメニューに目を落としている間、トオルは別のお客の料理を仕上げて提供した。

ときどき彼女の様子を覗きながら素早くメインディッシュを盛り付ける。ニューヨーク産の仔羊のローストをバジル風味のバターソースで、肉の表面が淡い口ゼ色の、ちよつと満足の出来上がりである。

今日の美空はやや落ち着いた装いだった。ライトグレーのジャケットにサックスブルーのブラウス、白のロングスカート。足元がサングルくらいならちよつと気も許しやすいが、今夜の彼女は皮のパンツス。まあ、それが美空らしさなのだろう。テリトリーのある女性、といった空気を感じさせる。

こういう雰囲気的女性にはトオルは深入りしないようにしていた。自分のリズムを乱されるのは好きではないだろう。適度な距離を保って、美空のタイミングが整うのを待つ……。

彼女の目がメニューから離れたのを合図に、トオルは声を掛けた。流れるようなリズムで淀みなく注文をする彼女は、ここでも『慣れている』というより『よく訓練されて』いた。余り悩むこともなく前菜と手打ちパスタをオーダーした。「少し軽い食事になりますよ」とトオルが補足すると、「そこまでお腹が空いている訳ではないので」と答える。そしてトオルが前菜の準備に取り掛かると、美空も何かの書類を取り出して料理が出来上がるまでの間の時間を無駄なく使った。

あのちよつと『ばあばあ』な美純と比較してしまうからか、やはり冷たい印象があった。

一杯目が終わると「白ワインを……」とそれだけ言葉にして、あとは引き続き手元の紙に目を落とすばかり。こういう雰囲気的女性はたくさん見掛けるが、こういう雰囲気的女子大生はちよつと見たことがない。不思議な、というより不可思議な空気感の女性だった。出した料理を淡々と食べる様子もまた機械的で、冷たい印象を覚え

た。

「料理はお口に合いましたか？」

「ええ……。前回同様、すごく美味しいです。ごちそうさまです」

そう答える美空の顔は、小さく微笑んだ。今日、訪れてから三回目の笑顔は、他の二回と全くおんなじ造りの笑顔だった。その表情から満足の度合いを得ることは出来ない、見事な役者ぶりだ。

「もしよかったら、ドルチェやコーヒーをお薦めしましょうか？」

「ううん。そう、……したらコーヒーだけ頂けますか」

「もちろん。ちよつとだけお待ちください」

そう言つてトオルはポットを火にかけ、湯を沸かし始める。

せつせとトオルがコーヒーを入れる準備をしている間に、美空を除く最後のお客が席をたつていった。そうして店内にはトオルと美空と低めの音のBGMだけが残った。さっきまで店に流れている曲なんて耳に入らなかったのに、急にそれがピアノとバイオリンのインストウルメンタルだと気付く。それくらい、店内は静かになった。湯が湧くシュウシュウという蒸気音が折角のBGMを邪魔した。

ひきたての豆をドリッパーに重ねたネルに落とす。湯を注ぐと、コポコポツと豆とネルを通つてコーヒーがドリップされていく音がカウンターに響く。さっきまで書類を眺めてばかりだった美空は、今はトオルの手元をじつと見ていた。二人分の視線を浴びながら、いつもと同じペースで黒褐色の液体はガラス製のサーバーに落ちていく。辺りには香ばしい薫りが漂い始めた。

ふと、美空が口を開いた。

「美純……以前にもここに来たことがあるんですね」

「えっ？」

ほんのちよつとだけトオルの手元に力が入って、湯を注ぐペースを乱した。

「……どうして、そう思われるんですか？」

「傘が」

そう言つて美空は入口の方にチラツと目をやった。そこには確かにあの子の赤い傘が立てかけてあつた。

あの雨の夜に忘れていった、美純の傘――。

トオルは訊ねた。

「あれが妹さんの物だと、どうして？」

美空はトオルの方を向き直つて答える。

「あの傘、フランスの小さなメーカーが造つた物なんです。職人が一本一本手で造っているから生産本数なんて年間100本くらいの本当に小さなメーカー。だけど母はその傘が大のお気に入りで、フランスに行つてはいつも直接出向いて購入してくるんです。自分の分と、私の分。それに美純にも」

「……………」

「日本には、まず入ってこない物です。ましてやこんな小さな街では今迄見かけたこともない。色だって彼女の物と同じ赤。多分、間違いない……」

カップに注いだコーヒーを美空に差し出した。彼女はまた笑顔で「ありがと」と言つた。今日、四回目――。相変わらず静かな微笑みだつた。

トオルはどう答えるべきか迷つた。

まあ、事實は美空の言う通りだし、彼にしてみればそのまま二つ返事で返せばよいことだつた。けれど、何故かトオルは言い淀んだ。引つ掛かつていた。あの日の帰り際、垣間見た美空と美純の関係……。

そして彼はほんの小さな嘘を付いた。

三分の一だけ嘘。三分の一は本当のこと。あとの三分の一は彼の

優しさをまぜた、ちよつとだけ違う事実を捏造する。

「……実は、前に僕が近くのスーパーで買い物をしてきた帰り、道に落とし物をしちゃったことがあったんです。アンチヨビの缶詰めだったかな、それを後ろを歩いてた妹さんが拾って届けてくれたんですよ。確か、一、二週間くらい前のことです……」

えっ、と美空は言つて、コーヒーのカップを持った手を空で止める。

「そう、……なんですか？」

「昼過ぎから土砂降りの日でした。ちよつと切らした物を買ひ足すだけだからと傘も差さずに出かけたら、すごい雨。慌てて走って帰つてもんだから、どうも途中で落としたみたいで。それを親切に届けてくれたんで、僕は彼女にコーヒーを一杯。雨の中、わざわざそうしてくれた彼女をそのまま帰すなんて僕には出来なかつた」

そう言つてから、トオルは笑顔を作つてみせた。それは美空がやるのよりも、何倍も上手に出来た『プロ』の作り笑顔。それで美空はカップを皿にした。彼女のまわりの空気が少しだけ緩んだ気がした。

「良くないことだつたら、すいません。でも、無理に引き止めたのは僕なんです。けれど、引き止めたせいで今度は彼女、傘を忘れていつてしまった。帰る頃には雨は止んでいて、それで……。悪いことをしちやつたな、と思つていたんです」

「もう、あの子つたらだらしないわ」

美空はため息をついて言つた。その様子を見てトオルは、あともう一つだけ嘘を付くことにした。

「帰りがけに『また、おいで』なんて僕が言つたのがいけなかつたんですよ。彼女、ブンブン顔を振つて『私、まだ高校生ですから、こんな所……』って。それで慌てて走つて帰っちゃつたんですよ。最近の高校生はそういうところ頓着ないのかなつて思つて言つたんですけれど、彼女はちよつと違つたみたいだ……」

トオルはまた笑顔をみせた。それでとうとう美空は観念したようだった。

彼女は胸に溜めていた息をゆっくりと吐き出した。

「そうですか。あの子がそう、言いましたか……」

そう言ってから彼女は少し冷めてしまったコーヒーのカップを口に近づけた。

トオルも美空も、それ以上その話題には触れなかった。彼女からは他に会話はでてこなかったし、トオルの方も色々喋るのは得策ではないなと判断したせいで、また店内はBGMばかりが響く空間に変わってしまった。今はアコースティックギターのミディウムスロ―な曲が流れていた。出来ることならもうちょっとアップテンポな曲の方がトオルは救われたのだが、今更曲を変えるのもそれはそれでおかしい感じなのでトオルは諦めた。

結局、それ以上の会話がないまま、美空はその日『カーサ・エム』をあとにすることになる。

店を出ていく背中を送り出す際、トオルは気になっていた事を一つだけ美空に訊いた。

「あの、みあ……、じゃなくて」

「？」

「いや、妹さんのことなんですけれど、ちょっと気になった事が……」

「えっ？ 美純が何か？」

「あ。いえいえ、そう大したことではないんですが」大袈裟にならないよう、トオルは手を振ってみせる。

「……ん？」

「ただ、ちょっと気になったんです。彼女、慌てたり緊張したりすると、吃ったり上手く喋れなくなったりすることがないですか？」

美空の目の色が変わったように見えた。そのトオルの問いに、彼女はしばらく答えなかった。

少しだけ振り返った顔がじっとトオルを眺めていた。その表情はちよつとトオルを不快に感じているようにも見てとれた。口元がキツツと力を帯びていた。

そりやそうだ、とトオルは思い直した。美空とは出会って二度目、しかも『初対面ではない』程度の面識しかない。その割に彼はだいぶプライバシーに踏み込んだ質問をしてしまった。これはちよつとやりすぎたな、とトオルは反省する。

「……すいません。余計なことでした、忘れてください」

出来るだけそつと話題を引っ込めようとした。けれど美空はそうさせてはくれなかった。

「ねえ……あなた、どうしてそれを？」

「えっ？」

「どうして美純の癖を、あなたが？ 何故、そんなことを知っているの……？」

美空はゆっくりとトオルに向き直った。そしてじっと彼の目を覗き込んでくる。

探るような、一種冷たさを感じる視線だった。美空の表情はさっきまでとは違っていた。トオルは自分の迂闊な発言を嘆くとともに、そんなふうには他人を見る美空という女性をちょっと異質にも感じていた。距離をとった人間関係をするタイプなのだろうか。会って間もない彼女がどんな性質なのかはわからないが、少なくともトオルが壁を感じるくらいだから友好的な性格ではないのだろう。

その感じたままが表情に出ないよう、トオルは務めて変わらぬ様子で答える。

「あの日の帰り、お出かけの準備の整った四方夫人とあなたからちよつと遅れて妹さんがこの店を後にしようとしたときに、そうだったんです。慌てたのか、上手く言葉が出なかったみたいでした」

出来るだけ表情を崩さないように保ったポーカーフェイスが果たして実ったかはわからなかったが、トオルの答えを聞いた美空が、それまで発していた警戒的な空気を幾分和らげたように見えた。

「そう……」

視線がトオルから放れていった。

「あなた、すごいね。あの短い間のことなのによく見ているわ。びつくりする」

そう言っ て目を細めた美空。トオルは小さく一息ついて続ける。

「そういう商売ですから。他人の変化や異常に敏感に反応してしまう。……自然と、そうなっちゃうんですよ」

「ふうん、そう……ですか」

本当はそれだけではない。美純と初めてあったあの夜だって、彼女はそうだった。けれどもそれは言わないでおいたほうがいいのだからと、トオルは何かを飲み込んだ。

「あんまり、言いたくはないんですけれど……」

そう言いながら美空は言葉を切らなかつた。視線だけは遠くの方に向けたまま。

「あの子、小さい頃はそうでもなかつたんです。昔は明るくって、よくしゃべる子でした。まわりのみんなもあの子のことを良く思っていて、だからあの子の周りはいつも明るく賑やかでした。だけど、小学生になった頃くらいから、それはちょっと変わってしまった」

美空の視線はずっと足元に墜ちる。アスファルトの一点だけを見つめて、そこに書いてあるものを読み上げるような感情の少ない口調で淡々と言葉を走らせる。彼女の記憶の中の美純がとうとうと語られる。

「四方の家に生まれた以上、子供の頃から人との付き合いは避けては通れませんか。四方は大きな家です。父の仕事の関係で、いつも家には多くの人が出入りしていました。けれど父や母は多忙でなかなか家にいることがなく、代わって私達がご挨拶やご接待をする機会も少なくはなかつたのです。接待といっても招待されて食事を一緒にする程度ですが、そういった席に招かれると美純は幼いこともあつてなかなか上手く振る舞えなかつたのです」

トオルは美空の横顔をじつと見ていた。彼女は話している間じゅう、表情をほとんど変えなかつた。口調と同じく淡々とした表情をしていた。

「上手に物を食べれない。上手に物をしゃべれない。挨拶もほどほどに食事に手を付けてしまふ、一息に食べて会話するところか満足すると眠ってしまったりもする。接待の趣旨を理解しようとはしませんでした。勝手気ままに振舞って、結果、父の顔に泥を塗った。そして、なかには父と仕事のお付き合いを解消する方もいました」

トオルの見ていた横顔が、ふっとトオルの方を向いた。その目には何か深い感情があつたが、その全部は表情に表れることはなかつた。多分、何分の一に小さくちぎったその感情の欠片が、ほんの小さな一部だけ美空の中から吐き出されてただけだ。内に溜め、表に

出さない。彼女はそういうタイプのようだ。

「私は父の負担になることは絶対に許してはならないと思い、美純を叱り、しつけました。少しずつですが彼女の行動も変わっていった……。だけどマナーや振る舞いをキチンとさせても、問題が残りました。あの子は行動と思考が上手く一緒に作動しなくって、緊張するといつも吃つてしまうようになったんです」

「そうなんですか……」トオルは答えながら、何気なく美空を観察していた。

美空はトオルの視線を感じることなく呟く。

「欠陥品だったんです、美純は。あの子は四方の家には向かなかった……」

そういう美空を、トオルはなおもじつと見据えていた。家族間のことに対して自分が何かを言うべきではないのかもしれない。けれど、その言葉は全く彼の胸には落ちていかなかった。

「欠陥品……」

全くと言っていいほど、彼はその言葉を受け入れることができなかった。

今もまだトオルの目の前には美純の傘が残っている。

銀色の柄。白の縁どりがアクセントの澄んだ赤い傘。

トオルはそれを、てっきり美空が持つて帰えるのだとばかり思っていた。だが彼女はそうしなかった。

『ちゃんと預かっていただいたお礼を言わせないといけませんから。美純には自分で取りに伺うように言っておきます』

そう言つて昨日の彼女は帰つていった。おかげでトオルには、もう一度美純と会わなければならない理由ができてしまった。

だが正直、今は気乗りがしない。彼女の顔を見た時、一体自分はどんな表情をしてしまふか見当もつかない。

自信がないのだ。いつも通りの顔で彼女を向かえ入れることができるか、不安なのだ。

確かに職業柄、感情を表情に出さないよう気を配ることはそれなりにできるつもりだ。ただ、今回ののはいつもと事情が違う。

『欠陥品だったんです——』

そんなふうに分の妹を言つてしまふ人間に、トオルは今まで出会った事がなかった。そして、そんなふうに分族のだれかに扱われる人間にも出会った事はなかった。

あの真つ直ぐ前しか見れないような性格も、どうしようもなく傷つきやすい心も、彼女が純粹だからこそなのだ。不器用だけど、どうしてか憎めない。四方美純という存在はトオルからすればかなり好感が持てる部類の人間なのだ。けれど彼女の姉からすれば、そんなあの子は家族として不適格な部類の人間らしい。

美純は『家族』という愛されるべき対象の一人から愛情を受けることが出来ずに育った。その事実を知らなければこそできた自然な対応も無難な距離感も、多くを知ってしまった今、トオルには前と同じようになんて出来るとは思えなかった。言葉や行動の端々に同情や憐れみが滲んでしまう気がする。だが、それを美純が望んでいる筈はないのだ。なら、どうすればその感懷を押し留められるか？ そんなことトオルには到底見い出せやしなかった……。

彼は思った。

うまくやれるだろうか？ 彼女の目を見て、ちゃんと顔を会わせられるだろうか？

考えて、深いため息が出た。

—— 多分、無理だ。もう、こんなにも心がざわめいている。

穏やかな午後の街を店の窓から眺め、その胸のざわつきが閑かにならないかと願う。けれど今日の長閑な街の景色とは裏腹に、心の中は今もずっとざらついていた。

もう、すでに表情は暗く沈んでいた。鏡なんて見なくてもわかるくらいに。

作り笑いなんて、もともとできる方ではないのだ。そんな彼がいとも接客で心がけているのは、自身の感情を鈍化させることだった。普段よりも感情の起伏を押さえる事で、それが表情に出るのを押さえるようにする。けれどその方法はポーカーフフェイスが苦手な者のする防衛策みたいなものだ。対照的な二つの感情をうまく飲み下して泰然自若としていられる人間なら、もっとうまくこなせる筈なのだ。けれど生憎とトオルはそういうタイプではなかった。

一度落ちてしまった感情の濁流からは、もがいてもどうにも抜け出せそうにない。美純を傷付けたくない。だけど、美純を傷付けてしまつに違いない。

できることなら、今日だけは美純の顔を見たくないと思った。……けれど予感があった。彼女は今日、やってくる。おそらくここにやってくる。その確信に近い予感がトオルの胸中をなお一層重苦しくさせていた。

『カーサ・エム』はいつもと変わらない。そして、ここからトオルだけいなくなることはできないのだ。

17:30のディナーオープンちよつと前に、彼女はやってきた。入口のドアに掛かったまだ<Close>のままの看板を気にするでもなく、スルスル何くわぬ顔で店内に入り、タオルのそばまでやってくる。

そして彼女は手に持った荷物をカウンターの上に置き、一度丁寧に頭を下げてからタオルに話しかけた。

「この前は本っ当にありがとう。おかげで助かったわ」

今岡倫子はそう言つてにこやかに笑顔をみせた。

今日の彼女は丈の長めの紺のカーディガンに白のパンツ、パイソン柄のサンダルといった装い。仕事を外れてもあまりラフになりすぎないのが彼女のスタイルなのだろうか。落ち着いた色がベースのコーディネートが倫子にはよく似合っている。

「あの時は一体どうなることかと思つたけれど……あなたの咄嗟の機転！ 私、びっくりしたわ」

「そんな、大したことはしてませんよ」タオルは小さく首を振つて苦笑いをみせる。

「大したことよっ!!」

しかし倫子は目をまん丸くして反論した。

「四方の家つていうのは私達にとつたら本っ当に重要なお客様なのよ。それを満足して帰すのと不満を残して帰すのじゃ、大違い。例え向こうの方々が気にしてなくても、こっちの上の方が黙っちゃいないわ!」

倫子は顔の表情を何度もくるくる変えながら喋つた。その顔が口と同じくらいに雄弁なのにタオルはちよつと驚いていた。このあいだ会つたときもそうだったが、彼女はどうやらこういう喋り方をする女性のようだ。

「あれは……正直、反省してるんです。ちょっと攻めすぎたな、って」

「えっ？」

「いや、僕は長女が生魚が食べれない可能性は予想できていたのに、夫人の嗜好の方を優先したんです。犯すべきじゃないリスクを犯した。あれは僕のミスなんです」

トオルは顎を指でかきながら、申し訳なさそうに小さく笑った。

「たまたま、上手く解決出来た。……でも、たまたまだ。プロならあんな事態に陥らないよう、もっと慎重にやるべきだった」

「そんなの！ こっちが事前にちゃんと確認してないのがいけないんだから」

「いいや、あれは僕のミスだ。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

「あなた……」

倫子は言つて一息吐いた。「もう、」と小さくこぼすと表情は呆れたみたいになる。「そんなつもりで来たんじゃないわよ。まったく、おばさんにお礼くらい言わせなさいな」

「お礼なんて、そんな……」

肩をすくめて首を振った。トオルはカウンターの脇を一度出ると、入口の扉に向かう。扉を少し開けると、表側に掛かっていた小さな看板をひっくり返して＜Open＞に変える。

そして戻ってくるとカウンターのひと席を引いた。そこに倫子を促した。

「でも、あなたは気付いてないかもしれないけれど、あの時うちの主任なんて動揺してあたふたするばかりで。おまけに「あわわ」なんてみつともなく言うもんだから、大変な事態なのはわかっていただけれど、正直私おかしくて陰でほくそ笑んでたのよ。まったく、ちよつとはあなたを見習って欲しいわよね」

倫子はトオルに促されるまま席に着いた。彼女を座らせると、トオルはまたカウンターへと戻っていく。

「そう、今日はその主任の使いでもあるのよ。大変感謝しておりますと、伝えてくれて言われてきたわ。それと……」

倫子はさっきからカウンターの上に置いていた荷物から何か取り出した。それはタオルにとっては見慣れたサイズのビンだった。

「これは私からのお礼。あなたにはあなたの事情があるかもしれないけれど、私にだって事情があるのよ。だから、ちゃんと受け取って頂戴」

そう言って倫子はタオルにそのビンを差し出した。

それは、シェリー酒だった。

「『アモンテリヤード』！　へえ、すごい。よく手に入りましたね。僕はこの界限で売っているのを見たことがないですよ」

受け取ったそのラベルをじっと見つめながら、タオルは言う。

シェリー酒のなかでも熟成したタイプのその銘柄は、飲み口の良さよりも飲みごたえの方を重視した一本だ。値段だってそこそこするはずだし、何よりこんな嗜好性の高いものがこの『都会じゃない街』で手に入るとは思えない。

「どうしたんですか、これ？」

「ちよつと、あなた！　おばさんはインターネットで買い物もできないと思ってるんじゃないの？」　急にいたずらっぽい表情をして倫子が言った。

「いや、別に。そういうつもりで言ったわけではまったくないんですけれど……」

なんだか立場の悪くなったタオルは、慌てて別の話題を探した。

「……ああそう、一つ聞きたかったことがあるんです」

今、咄嗟に思いついたそれを、さも前から気になっていたように言った。倫子には果たして見抜かれただろうか？

「四方家って、もしかして資産家の家なんでしょうか？　かなり立派な豪邸に住んでるようですし、一体、どんな事業をしている方なのかご存知ですか？」

タオルの問いに、倫子は口を大きく開けた。またも目を丸くして

驚いている。

「ちよつと、あなた……。この界限で飲食業をやっていてあんな大きな会社の事も知らないなんて、営業努力が足りてないんじゃない？」

「そんなことは……すいません」

「もう。別に謝って欲しくて言っただんじゃないわよ」

倫子は苦笑した。

「聞いたことない、『株式会社四方トレ』って会社？」

「いいえ」

「そう。この街じゃ一番の大会社も、あなたに掛かつちゃ形無しのね」

「そんなふうに言わないで下さいよ」

トオルは苦い顔をした。

「馬鹿。皮肉を言ってるんだから傷ついてもらわないと困るのよ」

「またも倫子は苦笑した。今度はさっきよりも大きく。」

それから彼女はちよつと考えた顔をして、次いで何か思いついた表情になると、何故か脈略なくこんなことをトオルに訊いたのだ。

「……ねえ、スーパーで一番売れてるモノって、なんだと思う？」

「あんまりにも突然で「はあ？」とトオルが怪訝な顔をして、倫子は気にも止めなかった。彼女はトオルがその問いの答えを出してくるまで、ニコニコしながら待っていた。」

「ええ」と、うん……一番、ですよね？ 生鮮食品のような気がするけれど、野菜……ですかね？」

「ぶー」

「あゝ。じゃあ、惣菜かな？」

「ぶー」

倫子は下唇を突き出して意地悪っぽく言う。

「もう、ヒントもないんじゃないや正解なんてわかりませんよ。……いや、ヒントをもらっても多分わからないです。答え、教えてくださいよ」

トオルは音を上げた。元々、彼はこういった類いのことが得意で

はない。頭だけで解決することは出来るだけ避けて、体を使う方法で乗り越えてきた部類だ。

「何よ、だらしのないわね。もうちょっと遊べるかと思ったのに」

「遊べるって……意地悪な人ですね」

「ふふん。そりゃそうよ」

倫子はニンマリ笑いをちらつかせた。

「じゃあ、正解。……多分、これに気付く人はあんまりいないと思うけれど、答えは『食品トレー』よ」

「食品トレー？」

「そう、あの発泡スチロール製のアレよ。ちよつと、ビックリでしょ」

「いや、でも倫子さん。あなたさつき、一番売れてるモノっておっしゃいませんでした？ あんなモノ、誰も金を払って買ったりなんか……」

トオルはちよつと不満そうな顔をした。しかし倫子の方はちよつと真剣な面持ちに変わる。

「あなた、あれがノー・コストだとはまさか思っていないわよね？」

実際、一つ一つは微々たる値段だと思っわ。けれど、確かに食品売り場の中で毎日一番買われていつているのはあの『食品トレー』なのよ。生鮮食品にはほぼ全部、それ以外にもプラスチック製の食品パックやなんかも含めたらかなりの商品がアレを使って包装されてる。しかも毎日変わらず何百個と使われるわ。これが単位を日本中に換算したとき、一体一日で何個の食品トレーが消費されているのかしら？」

「あつ……」

「スゴイでしょ？ 私には想像つかない。けれど、想像した人がいたのよ。ここに商業が成り立つと考えて、食品トレー・プラスチック製パック・ビニール袋・業務用ラップ・その他を、たった一代で今じゃ日本全国のシェア8割を牛耳るような大会社に押し上げた人間がいるの。それが、四方宗太郎。『株式会社四方トレー』の創業

者であり、現代表取締役よ」

「……………」

トオルは言葉を失った。確かにそうだ、と思った。毎日、日本中で数え切れない数の食品トレーが消費されている。しかし、それで商売を興そうと考えるのはトオルにはきつと無理だ。同様に、多くの人間がそう考えるだろう。まさについさつきトオルが言った言葉通りの事を考えるはずだ。『あんなモノ、誰も金を払って買ったりなんか……』と。

「一度だけ、ご本人にお会いしたことがあるわ。すごくしっかりした信念を持っている人、っていう印象。それとかなりのリアリスト」
「ふーん、どうしてそう思われたんですか？」

何気なく訊いたトオルに、倫子はまたもくるくると表情を変えて答える。

「お会いしたのはパーティーの席だったんだけど、給仕の女性が彼のすぐそばで手に持ったお皿のうちの数枚を落としたの。その瞬間、給仕の子は慌てて拾おうと手を伸ばしたんだけど、それを四方氏は止めたのよ」

力の入った物言いだ倫子は語った。ときどき身振りまで入るのがちよつと滑稽で、トオルは内心ちよつと笑ってしまう。

「その時の彼、何て言ったと思う？ 『君がそれを拾おうと慌てる』と、落ちた皿より多くの皿を割ることになる」って、言ったのよ。四方氏は給仕の子がまだ手に持っていた皿の数と落とした皿の数を見て、たったの一瞬でどうしたら最良か判断したってワケ。私、それを見たとき『ああ、納得』って思ったわ。こういう人がトップだから、こういう会社が出来上がるんだ、ってね」

倫子とトオルがそんなことを話していると、大きな音を立てて入口の扉が開いた。

走ってきたらしく、美純は大きく肩で息をしていた。

開け放ったままの扉に直立不動で立っている姿はどこぞの寺院の表門のようなのだが、何しろ美純なもんだから迫力なんてこれっぽっちもない。

「傘……」

切れぎれの息の間に吐き出した一言は、要件を伝えるには短すぎて、おまけに声も小さかった。かろうじて事情を知っているトオルには伝わるが、そばにいた倫子は何だか不思議そうな顔をしていた。

「美純。中においで」

「ダメ。……傘、ありがと。……貰ったら帰る……から」

「美純」

トオルがもう一度優しく声をかけると、美純は大きくブンブンと首を振った。

「ダメ！ 受け取ったら帰らないと。ここでいいから。傘。ありがと」

固く拒絶するような表情は見方によれば怒っているようにも見える。その上、息を整えるのにゆっくり大きく肩を揺らす様は、まずまず彼女を憤然としているように見せた。とても人に礼を言いにきたとは思えない姿だ。これが全く知らない子だったなら、トオルは世の女子高生全員にあらぬレッテルを貼ってしまったかもしれない。『最近の女子高生ときたらガサツで女らしさに欠けている』みたいなやつだ。彼女の性格を少しなりとも知っていたおかげで、その被害は美純にだけで留まった。

「お前なあ……。人に礼を言いに来たのに『ダメ』とか『ここでいい』とか、失礼な奴だな」

「えっ?!」

「そんなことより、まず最初に言うことがあるんじゃないか。なあ

？」

「あ、あつ」

途端に美純は蒼くなって唇をわなわなさせた。トオルの言葉で我に帰った彼女は、行動が自身の意図とは随分違ってしまっていたのに気づいたようだ。しなればと考えていたことと、してはいけなさと考えていたこと、全部を一边に言葉が吐き出してしまったらしい。急に目の色がくすんでいくのがわかった。一所懸命な空回りが彼女らしいな、と昨日までのトオルなら笑って済ませたはずだ。

けれども今のトオルは胸がズキズキして切なかった。彼女の顔を見る目を思わず背けてしまった。

「大丈夫だ。先にお姉さんには約束してある。『来たらコーヒーを一杯ごちそうさせていただきます』って。だから入ってきな」

多分、美空は傘を取りに行くと言っただけではないはずだ。他にも指示や注意事項がたくさん美純に詰め込まれているはず。本人の口から事実を聞くまでもなく、彼女のヒリヒリしそうな一挙手一投足がそうだとトオルに訴えかける。

「う、ぐ」美純は次の言葉に詰まってしまった。トオルはカウンタ―を出ると彼女のそばに歩み寄った。そして背中 hands を回して店の中に誘い入れる。美純も、そこまでいくともうためらわなかった。「座つて。今、コーヒーを入れるから」

そう言つてトオルは倫子のひとつ開けた隣に美純を座らせる。

キッチンスペースに戻ったトオルはいつものようにポットでお湯を沸かすのではなく、更に奥のバックスペースからサイフォンを一基取り出してきた。フラスコ状のガラス製のそれとアルコールランプ。丁寧に布でくるんで保管されていたのを開く。

「普段はちよつと手間だから使つてないんだ。でも、今日は特別」

……

そう言つてトオルは美純の顔を覗き込んだ。美純がドキツとして肩をすくめてしまう。けれどトオルは敢えて気付かないふりをしてそのまま続ける。

「お詫びだから。とびきり美味しいの、いれないとな」

「……………」？「美純の目が、何故だかわからないといていた。」

トオルは手際よくフラスコに水を張ると、ランプに火を点け加熱する。その横で豆をガリガリとひきながら口を動かした。

「普通は気付かなくちゃいけないんだよ、忘れ物なんてな。折角楽しみに来たのに帰ってからがっかりさせてしまうなんて最低だろ。ましてや取りに来させるって、どんだけ上から目線だっと思わないか？」

「……………」美純は黙ったままだった。

「お前がどう思っただろうと、俺は自分の失敗を反省してるんだ。だから詫びの一杯くらいごちそうさせるよ」シュワシュワと音を立ててフラスコ内の水が湧き出した。

ひき立てのコーヒー豆の香りがカウンターを支配する。漏斗にそのひいた豆を入れて、フラスコにセットすると『スー』と蒸気圧を利用して下から上へと湯が移動していく。そして水分が全部上へと移動したあと、トオルは漏斗の中をヘラで数回くるくるとかき混ぜた。そしてすぐにランプをフラスコから外すと、

「あ……………ああっ」

美純は声を上げて上から下へと下りていくコーヒーを見送る。水分が全部フラスコの方へ落ち切ると、その合図がわりにブクブクと漏斗から空気が少しだけ液中に流れ込む音がした。

「はい。出来上がり」

漏斗部分を外すとフラスコに溜まったコーヒーをカップに注ぐ。

ふんわりと立ち込める香りは香ばしく、ややシャープな印象。

「美純はミルク入りが好きだろうけど、今日はストレートな。そんなに濃くはいれてないから大丈夫だろ」

「え……………なんでミルク、だめなの？」

「今日は特別にコナコーヒー100%なんです！いつもはブレンドしてるけど、大盤振る舞い。上品な酸味が特徴だからストレートでどうぞっ！」

トオルは人差し指を美純に突き出し、教師のような顔をして解説してみせた。ふふんと鼻を鳴らしたその様子があんまりにもわざとらしくて、思わず美純は口元をほころばした。

「熱いから、ゆっくり飲んでけよ。ゆっくり、な……」

「ん。」

そんな会話を交わしてから、トオルは美純の前を離れた。そして「ちよつと……」と仏頂面した倫子の前へ。倫子は片方の眉を釣り上げて、カウンターの上を指でコンコンと小突く。

「若い子が来ると、男ってすぐこれよね。おばさんには一杯も出ないなんて、あんまりじゃない？」

「あ……」

すっかり忘れていたことに気付くトオル。「まあ、いいけどね」と拗ねた顔の倫子は呟いて肩肘つく。

「ね、なにか一杯頂戴」

「はい」

トオルはカウンターに並べた酒瓶を眺めた。今の彼女にあう一杯を思案する。そして……

「そうだ。折角いただいたから、アモンティリヤードにしましょうか？」

そう言うロングカクテル用のタンブラーを取り出した。そして氷をいっぱい詰めるとアモンティリヤードを注ぐ。そしてその上からソーダを。

「同じ職種の仲間からはよく馬鹿にされるんですが、いいシェリーや旨いブランデーをソーダ割りにするのが好きで。『もったいない、酒に対する冒とくだ』なんて言われるんですが、むしろ僕は贅沢な飲み方だと思ってるんですよ」

そう言ってグラスを倫子の前に差し出した。

「あら、美味しそう。やっぱり仕事明けの最初の一杯はシュワワ、つとしたのが飲みたいわよね」

「ですよ。それ、わかります」

トオルと倫子は互いに目を細めあつた。

倫子の方が先に目をそらした。最初の一口を美味しそうにあおると、視線の戻す先に美純を捉えたのがわかる。「あの子……」あつあつのコーヒートゥー格闘する少女を見詰め、倫子の口が動いた。「四方の次女の方でしょ。あなた、知り合いなの？」ちらりと視線がトオルに戻ってくる。

「知り合い、っていうか……まあ、知り合いですかね。会ったのは三回目ですけど」

「ハア」

倫子はため息をついた。

「四方の家の娘さんとは知り合いで、四方の家の事業は知らなかったと……」ただだけ大物なのよ、あなたって」

「はあ。似たような意味で『ニブイ』って馬鹿にされることがよくあります」

主に哲平からであるが。

「あなた……。悪いけど、おんなじ意味よ」

「はあ。スイマセン」

くすくすと倫子は笑ってみせた。

トオルはさつきからスイッチを入れていた電気フライヤーの様子を覗き込む。油の対流するのが見えた。冷蔵庫から豆アジとイワシを取り出すと塩を当たり粉をまぶし、それを油に落とす。シャーンと軽い音が響くと何となく食欲がわく気がする。素揚げしただけの一品にレモンを添えて倫子の前に差し出す。

「頂きもののお礼です。どうぞ召し上がって下さい」

「まあ、気が利くじゃない！」

ははは、とトオルは顔をほころばせた。

「シェリー酒の産地ではイワシのフライが定番の料理なんです。まあ、海の近いところなんで当たり前っちゃ、当たり前なんですけどね」

「へえ」

揚げたてを頬張る倫子は、目をキラキラさせた。

「……昨日、あの子の姉が食事に来たんです」

訊かれたわけでもなく、ただ何となくトオルは喋り出していた。彼にしては珍しいことだった。お客の事を滅多に話題にすることは無い。ただ、倫子には聞いてもらったほうがいいような……というより、トオルは彼女にこの話を聞いて欲しかったのだろう。それと出来れば彼女の目線の意見を聞きたい、とも思っていた。

実をいうと、トオルは倫子に感謝していた。

もしも彼女が早くから訪れていなければ、トオルは誰より先に美純と顔を合わせていたに違いない。あの沈んだ気持ちのまま、多分、今みたいに自然な感じでは美純を受け入れられなかっただろう。でも、先に倫子と会話をしていたことで仕事用の自分に返ることができた。離陸の準備さえ整えられれば飛び立つのは訳なかった。

ただ、意図的ではないにしろ彼の沈んだ気分を浮上させてくれた倫子の話術と人柄に、トオルは一目をおいていた。今岡倫子という女性に魅力を感じていたのだ。だから、相談というよりもうちよつとだけ遠慮した感じで喋り出していた。

「なんていうか、変わった子でした。まだ大学生だっていうのに、周りと自分を切り離れたような。浮き世離れしてる、っていうのは違うな……本質はそうじゃないのに、あとから形成した自分が勝つちゃっているっていうか。ともかく自然じゃないなって思いました」

「……資産家の家の長女ですものね。一癖あつたって不思議じゃないわよね」

「ええ」

グラスをちびりとし、倫子はトオルの目を覗き込む。たつたそれだけでトオルはずっと深くまで覗き込まれたような気がした。何とつか、胃力メラみたいな異物が体内に入り込んで、すぐまた出ていったみたいな感じだった。

「……で？」

「えっ？」

トオルはちよつと驚いて倫子の目を見た。

「だから、その話とあの子のことと、どう関係があるの？」

倫子は視線で美純を指して、そう呟く。

困惑、に近い感じだった。端折ったというより、二・三步飛び越された気がした。もう幾つか別の話をしてからしようとしていた話題に、倫子は先にたどり着いていた。置いてきぼりをくった気分が出遅れを取り戻すみたいないな進度でトオルは話を始めた。

「……長女にとって、あの子は四方家にそぐわない人間だと考えられています。彼女は長女からかなり厳しく叱責され、躰られた様子が窺えます。その上で、こうも言われていました」

「……………」

トオルはその一言を口にするために一度唾を呑み込んだ。そして、
「欠陥品だ、と」

倫子の眉が小さく動いた。口元を一本に引き結んだみたいにして、肩で一息吐き出した。

「そう。……大変ね、ちゃんと生きるのって。私なんていい加減に生きてきたせいか、そういう苦労はしたことないわ。おかげであつという間に歳を喰っちゃったけれど」

倫子は笑ってみせた。けれど、彼女の目は笑っていない。

覗き込むような視線が美純にじつと向けられていた。美純のほうはそれにはまったく気づいてはいない。ようやく飲み頃の温度に落ち着いたコーヒーに、満足そうな顔をしている。

「可愛い子よね。悪い子じゃなさそうだし」

「そう、思います。僕も」

自然に言葉が出ていた。

「あらっ？」

ちらりと倫子の目がトオルを見返したのと、入口の扉が開いたのは、ほぼ同時だった。

「いらっしやいま……せ」

軽い会釈でそれに応える、四方美空がいた。

「お、お姉ちゃんっ?!」

ガタツ、と音がした。ガシャン、とも音がした。

「キャッ! あ、ああっ……!」

美純は自分が慌てて立ち上がったせいで落としてしまったコーヒークップを拾おうと屈み込んだ。

「美純、いい。触るなッ」

「——っ!」

美純が一瞬、身を固くしたのがわかった。案の定、破片で指を切ったらしい。トオルはカウンターを飛び出して、彼女のそばに駆け寄った。しゃがみこんだ美純は、まだじつと割れたコーヒークップを見詰めている。その体が小さく震えているのに、トオルは間近に寄ってみて気が付いた。

「言わんこっちゃない。だから触るなって……」

彼女の震える肩に手を掛ける。そしてトオルは美純の顔を覗き込んだ。

気が付いた。

彼女は割れたカップを見詰めているのではなかった。顔を上げられずにいるのだった。

「美純——」無機質な声が妹の名を呼ぶ。

ビクツと大きく体を反応させた。彼女はおずおずと振り返る。顔を向け、でも目を背け、そしてすぐにまた俯く。

そんな美純に向けてさらに何かを言おうとする美空より先に、トオルが口を開いた。

「約束が違う! あなたはいいと言ったじゃないか?」

「……………」

「別に他人の家庭のことまで口出すつもりはないが、美純は今、僕の店にとってのゲストだ」

「その子はまだ高校生よ。こういう場所に一人で来るなんて、まだ早いと思いませんか？」

美空の言葉に反論しそうになる自分を抑えて、トオルは彼女を見据えた。美空はちよつと驚いたような表情をしたが、すぐに穏やかな笑顔に戻っていく。視線はトオルから離れ、再び美純のことを見た。

「美純。カップを割ったこと、謝罪なさい。それと今日はこちらで食事をしていきましょう。いいわね？」

「なっ?!」

「えっ?」

トオルと美純、二人が絶句した。けれども美空は平然として店内に歩みいると、奥のテーブルについた。「美純、座りなさい」と妹を促す。

「君は……一体、どういつつもりでやってるんだ？」

トオルは美空の行動が理解できなかったし、それにどういう意図があるのかも想像がつかなかった。わざわざ他人の嫌がる事をするような陰険な人間だとも思えなかったし、けどなんの考えもなく行動するタイプとも思えない。

「何か問題でも? 私はもともと、美純と二人で夕食をいただくと思って来ただけよ。こうなってしまうては疑われてもしょうがないけれど、本当にただそれだけの理由よ」

正直、言い草にイラッとした。表情一つ変えることなく言い放つ彼女が癪に障った。

「そう、ですか……失礼しました」けれどこうなってしまうえばトオルには何も言う権利はない。トオルは一度カウンター内に戻った。救急箱を出すと、そこから絆創膏を一枚取り出した。

美純のそばに戻ると手に持った絆創膏を彼女に差し出す。

「はい」

「あ、ありがとう」

トオルは笑ってみせようとして失敗した。気持ちが引っ掛かって

うまくできなかった。不機嫌な顔になってしまった。

「カップ、ゴメンね……」

その表情を見たからなのか、それとも美空の指示だからなのか、美純は足元のカップに目を落として言う。口元をきゅっとさせた申し訳なさそうな顔をした。

「別に。気にしてないよ、大丈夫」

答えてから美純の両肩を手で軽く押した。それを推進力に美純がゆっくりとテーブルに向かって歩きたす。トオルは、この後に及ぶまで心のどこかで捨てきれない思いがあった。『実は自分の考えすぎで、本当は姉妹の仲はそこまで悪いわけではないんじゃないか？』という思い。けれど、それはやっぱり違うんだと感じられた。美純の肩を押すときにあった彼女の小さな抵抗が、それをトオルに強く実感させた。

トオルは美純のあとを付いて歩いた。彼女と美空のオーダーを訊くためだ。いつものオーダーテイクより、ちょっと時間がかかるかもしれないと思った。気になって倫子に目を送ったが、彼女は手のひらをヒラヒラとさせてトオルを見送った。トオルはその倫子の気遣いに小さく笑顔で答えた。

「お食事はいかがなさいますか？」

トオルは出来るだけいつも通りのつもりで、美空に話しかける。

「私はシェフにお任せします。美純っ、あなたは？」

そうやり取りするのに慣れた姉と、

「へっ？ え、わ……わたし、は」

そういうことに不慣れ、というより向かない妹とのチグハグとした食卓。

四角い箱に丸いものを収めたような、違和感。トオルは料理をするためにキッチンに戻ってからもずっとそれを感じていた。

そのテーブルから会話は聞こえてこなかったからだ。

四方姉妹が食事を始めてから1時間くらいたっただろうか。

二人は今、メインディッシュを食べている。地鶏のロースト、ローズマリー風味。姉がスマートに口に運ぶものを、妹は格闘するみたいに『切って・刺して・口に入れる』していた。

あれから更にテーブル席に二人、カウンター席に一人のお客が来て、『カーサ・エム』の夜はそこそ賑わった。それでも各席の料理は出し切ってしまつて、あとはドルチェのみ。今は一段落ついたところだ。

トオルはカウンターの内側に置いていたマグカップを傾けた。中のコーヒーはもう冷たくなつてしまつていたが、火の前で仕事したあとの火照つた体には丁度いい。そうして一息ついていると、カウンターの向こうの倫子がなんとなく呟いて言った。

「あの子達、食事の間じゅうほとんど会話してないのね。きっといつもそうなんでしょうけど」

「いつも……どうしてそう思います？」トオルは訊いてみた。

「慣れちゃつてるわよね、会話しないでいることに。普通、ギクシヤクしたりするものでしょ。でも、あの子達はむしろ自然にそうしてる」

「もう、何年もそういう生活をしてる……」

「だと、思うわ」

倫子は二杯目の酒を赤ワインにかえていた。南イタリアの果実味のあるフルボデー。ちびりと飲みながら、視線をトオルの戻す。

「……聞いてもいい？」

不意に出た言葉に、トオルはうまく答えられず「何をです？」と聞き返した。

「あの子達と、あなたの関係」

「はあ、」とトオルは気のないリアクションで言った。「それ、僕

もよくわからないですよね」

「どうして？ あんなイトコのお嬢さん達が気を許してるなんて、ちよつとないでしょ」

「許して……るんですかね、この状況って？」

トオルの苦笑いに、倫子は答えなかった。ただ口を結んで首を傾けただけ。その様子からは倫子がどういう意味でそうしたのかはわからなかった。トオルは倫子から外した視線を美空達に戻した。二人はようやく会話らしいものを始めていて、姉が幾つか言葉を走らせたのに、妹は時々首を縦か横に振るだけで答えていた。一見、会話と言うよりは家庭教師の授業風景をみているようなその一方通行のコミュニケーション、二人は一体どんな内容をやり取りしているのだろうか。

トオルは、彼女達の会話がこれ以上美純を辛くさせるものであつてほしくないと思つていた。そう、願つた。彼も、姉妹の間に割つて入つてまで口を出すべきだとは思わない。けれど、美純は姉の言葉や行動一つ一つにとても敏感に反応して、その上呆気なく傷付いた顔をする。できることならもう、あの顔はみたくないと思つていた。わがままかもしれないが、今だけはたわいもない会話で、ちよつとでも幸せな時間であつてほしい、と思つていた。

それなのに突然、美純は泣きながら店を飛び出していった。人の波を押し分けて、冷たい街に呑み込まれていった。それを見たとき、トオルは自分でもよくわからない感情の波に打たれてしまって、頭の中が急に白くなっていく気がしていた。

鼻腔の奥の方がじーんと熱くなって、こめかみ辺りがずんと重たくなった。頭の中は何かを考えているのだが、それが心にまで落ちていかない。思考と感情の間に一枚隔たりができたみたいに、二つが連動して動かなくなっている。だから目に映ったもので何かを察したり推測するなんて、今のトオルには出来なかった。

——美純が、泣いていた。何故かはわからない。

ただ、残像みたいにその事実だけが彼の眼に残っている。

トオルは美空を見た。眉間に疼痛が走り、そこにぐつと皺が寄った。

彼の中のどの機関が指令を送ったのかはわからないが、彼の体はもう、何かの意図を持ってカウンターを出ようと歩きだしていた。

「もし——」

その声がかもし倫子のものでなかったら、多分トオルは振り返らなかったはずだ。

「……………」

「もし私が男を平手打ちして店を出ていったら、あなた、私の連れを慰めてあげてね？」

そう言っただけで倫子は微笑した。苦笑だった。

だがトオルの方は笑わなかった。というよりもその顔にはもつと別の感情が張り付いていた。見付けた倫子はちよつと不思議そうな顔をした。そしてもう一度、微笑して言った。

「あらっ、誰にでも優しいわけじゃないんだ」

「…………えっ？」

トオルは無意識で聞き返していた。倫子はやれやれという顔をしていた。

「そんな思いつめた顔してるから、てつきり『何かあったら、絶対ほっとけないタイプ』なのかと思ったわ」

言葉にしようと思ったのに、何も浮かばなかった。

二・三步後ろに置いてきた思考が、今頃になってようやくトオルの元にたどり着いた。

その間、トオルは呆然してと倫子の顔を見た。

「ほーらっ、何やってんのよー！！ あちらのお客様、お会計よ」倫子がそれまでより強い口調で言う。

「あっ……。す、すみません……」

「もう。あゝと、私にはもう一杯っ」

「はあ……。すみません」

無抵抗に二回、頭を下げるトオルの間の抜けた顔に、倫子と帰り仕度を済ませたお客が一緒になって吹き出す。

「ちよつとあなた、熱にでも浮かされたんじゃない？ しつかりしなさいよ」

「……………」

倫子にとってはおそらく冗談のつもりだったのだろう、その言葉けれどトオルはそれを流して聞くことができなかった。

預かった五千円札をレジに仕舞い、釣りを渡そうとする間も頭の中に引っかかったその言葉が気になって仕方ない。渡し間違いのないよう何度か数え直したが、数え直すたびに釣りがいくらだったか忘れて、レジの液晶画面を何度も見直した。

一体、自分は何をしようとしたのだろう？ 少なくとも考えての行動ではなかったはず。

何か一つ、『熱』に近い意思というか、感情というか、そういうものが乗り移って勝手にトオルを動かそうとしていたのだろうか。

（俺は、美空に何をしようとした？ 何を言おうとした？）

そう。確かに倫子があそこで話しかけて、結果的ではあるが止めに入ってくれなければ、自分が何をしていたか自分でもわからない。まるで——そうだ、彼女がいうように熱にでも浮かされたみたいだ

った。ただそれは微熱のような穏やかなものではない。あかあかと焼けた石のような『熱』だった。

「何だか、あなたらしくないわね。どうかしたの？」

「いえ、……すいません。本当ですよ、僕らしくない。スイマセン、なんか……」

トオルは無理に笑ってみせた。

倫子はまだちょっと気にしているようだったが、それでも黙って出された二杯目の赤ワインに口を付けた。そのうちにテーブル席のカップルが時間を気にして店を出ていった。そして店内にはトオルと、倫子と、美空とが残った。一人ずつが、全部で三人。別にこういうことはよくある光景だったが、今日のはいつもと違う奇妙な空気がだった。

トオルは美空をなんとなく見ていた。倫子はトオルの様子を伺っていた。そして美空は……

「すいません、私、コーヒーをそちらのカウンターで頂いてもいいですか？」

「えっ？ あっ、ああ、どうぞ。かまいませんよ」

急に話しかけられて、トオルは初めて言葉を交わす相手みたいにちよつと他人行儀な口調になってしまった。けれど、おかげで美空のことを変に意識せずに自然と答えを返すことはできた。さっきまでのと今のと、自分でも收拾のつかない大きな感情のうねりがあつたせいで、胸の中はまだ整理できずにいる『思いの小波』でざわめいたままだったから。

「そう、よかった」

美空はちよつとホツとした顔をして立ち上がった。

「妹に同席を辞退されてしまったから。でも一人でなんて、それかなんとか気が引けるもの」

置き場を見付けた木彫りの人形みたいに思えた。彼女は多分、無意識に探していたのだ。美純と同席していたときも、もしかしたらそつだったのかもしれない。そしてそれをトオル達のいるカウンタ

ーに見い出したのだろうか――？

『Jewel』

――四方美空――

美空が自分のハンドバックを片手にカウンターに移動してくる。
その様子をじっと見ている自分の胸の奥がぞわぞわと落ち着かない。
トオルはうまく言い表せない自分の内面にちよっとだけ苛立ち
と抵抗を覚えていた。

「……妹さん、どうかしたの？ 泣いていたみたいけど」

本当に、なんの前触れも無く倫子が切り出した。あまりの鋭い出足はトオルが思わず息を呑むくらいだった。てっきり倫子はそのいうことに首を突っ込まないタイプかと思っていただけに、驚いた。

「……………」

もちろん美空は答えなかった。

というより、多分トオルと同じで驚いていたのだ。出会い頭の事故にあった時のように、自分の置かれた状況を確かめるのがその時の彼女の急務だった。

「別に、話しづらいことならいいのよ？」

「あつ、い、いえ。そういうわけでは……………」

「んー、そう」

美空に向けていた視線を、倫子は一度逸らせた。

「ごめんなさいね、ちよつと気になっちゃって」

目の先を手元のワイングラスに向けていた。グラスをくるくると回して、ガーネット色の赤い液体にそつと微笑みかけた。たった今、美空の鼻先まで迫ったハズが、彼女は素早く自分の居場所まで戻ってしまっていた。

「あの子、美純ちゃんだったかしら？ 可愛い子ね。高校……………」

「えっ？ ……ああ、二年生です。仲泉女学院の」

「あら、名門校じゃない。すごいわあ」

「いえ、そんな事ないです。成績は悪い方ではないですけど、優等生ともいえなくらいですから」

「だとしても、よ。私なんかがどんなに努力したって入れるところじゃないもの」

「確かに、人一倍努力はする子です。それは私も認めています」
言った美空の口元がふんわりと緩む。

そこでやつと倫子は美空を見返した。倫子もふわつとした表情を向けた。美空はそれでようやく自分のペースを取り戻せたと思ったのか、少し座り直していた。

トオルはカウンターのこちら側で美空のためのコーヒーをいれながら、内心、かなり驚いていた。

美空とは、決して長い付き合いというほどではない。それでも倫子と比べればちょっとは見知った相手。だが彼女と自分の距離はこれほど近くはない。トオルの側からすれば、むしろ壁のようなものすら感じている。

それが倫子は、ほぼ初対面の美空から幾つも言葉を引き出していた。倫子は多く訊ねなかった。それでも訊いた分より多くの答えを得た。美空が自然と答えていた。

始めた会ったときもそう感じたが、トオルは今、あらためて今岡倫子という人間に驚嘆していた。

倫子という女性の人間的魅力からなのか、彼女の言動にはある種の強制力のようなものが含まれていた。

頼まれたら断れない。訊ねられたら黙って聞き流せない。

客観的にみると自己中心的な言動も、彼女から出たものであると嫌味がない。人徳というのとはちよつと違う気がした。もつと体質的な、オーラとかフェロモンとかの無形なモノのような気がした。そして何よりトオルが一目おくのは、彼女が自分のその特質を正確に理解していて、その上での確に利用していることだった。

今、トオルの前、カウンター席では倫子と美空が間にひと席開けて座っている。

けれど実際の距離はそうであっても、心理的な距離は随分違うのだ。美空と倫子の距離はひと席分であっても、倫子と美空の距離は決してそうではない。

もつと近い。——隣同士か、さらにもうちよつと。

懐深く入り込まれた美空は、まだその事実には気付いていない。

「やっぱりちゃんとした家の子はデキが違うのかしらねー」

不意に倫子が会話の立ち位置を変えた。

「ねえ、私はあの子、好きよ。一所懸命で手を抜かない感じが、とっても。……お姉さんは違うの？」

「わ、私はっ——自分の妹を好きとか嫌いとか、そういうのはよくわからないんです」

「そう。でも妹さんのほうはお姉ちゃん、大好きみたいだけど？」

「そう、なんででしょうか……」

美空が表情を暗くした。

「私は美純に厳しくします。怒りもします。ですから、あまり好かれていたとは思えません」

「あら、そうなの。じゃあ……私の勘違いかしら」

倫子はちよつと残念そうな顔をして言った。そしてそのまま黙ってしまふ。

容赦なく話し始めたのに見込みが外れると随分呆気ない。姉妹の關係に踏み込んだ内容だっただけに、だいぶ思慮に欠ける幕切れだ。美空もなんだか肩を落としてみえた。

トオルはいれたてのコーヒーを美空の前に差し出した。「ありがとう」と、小さく言った美空は、けれどすぐに下を向いてしまふ。さすがにこれは可哀想だろ、とトオルは倫子の顔を睨まえる。

「妹さんと同じように、あなたも良家の長女なんだからさぞや凄い経歴の持ち主なんでしょう？」

トオルの視線など、気にも止めない。

倫子は再び鋭く踏み込む。わきまのないような話題を遠慮もなく話す彼女は、トオルから見ても行き過ぎた態度に思えた。

「別に、人に誇るためにやってきたことではないので。必要だからそうした、それだけです」

しかし、今度は美空も立ち向かった。妹のことはともかく、自分のことを詮索されるのは御法度のようだ。

「四方は父が一代で大きくした家です。『良家』とは違う。でもこ

の先、そうであるために私は日々の努力を怠ったりはしません」美空の目が鋭くなって倫子を見つめた。「この名を汚さないよう、私はいつだって胸を張っていられるような生き方を心がけています」
「そう、すごいわね」

倫子はおどけたような顔をして肩をすくめた。「なのにそんな自信たっぷりの自分を、あなた自身は嫌ってる。そう感じるのは私だけ？」

「なっ?!」

トオルは驚いて目を白黒させた。思わず倫子を覗き込んだ。けれど倫子は顔を上げない。トオルの視線を感じているはずなのに。彼女が今どんな表情をしているのかはトオルからは見えない。見えるのは美空からだけだ。その美空の顔から急速に表情が抜け落ちていくのがわかった。

「どういう、意味ですか……」

「どうって言われても、言葉のままだけど。あなた自分のこと嫌いでしょ、ってだけよ。ああ、気分を悪くしたなら謝るわ。ごめんなさいね」

倫子は一息で言い切る。言葉に何の感情も込めていないのはカウンターを挟んだこちら側からも明白だった。

「今岡さん、あなたその言い方はあんまりだ。彼女に対して失礼ですよ」

トオルは間に入るように言った。けれど倫子はトオルの言葉には応えない。美空もトオルの言葉など耳に入っていない。

カウンターの向こうの空気は一触即発だった。美空のまわりの空気だけがどんどん温度を下げていくのを感じた。ピリピリと張り詰めていくのを感じた。

「何故……」

低く唸るような声が響く。

「何故、私はあなたからそんなことを言われなければならないのですか？ 初対面のあなたから――」

「失礼」

倫子が素早く言葉を遮った。

「お会いするのは二回目です。一度目は先日の宝石の販売会。ここでお会いしていますよ」

「あなた、……自分の立場をわきまえていないの？　こんなことをして、私が黙っていると思っているの？！」

とうとう美空が声を荒らげる。顔色が変わる。明らかな敵意というか、紅い色をした何かが美空の肩から吹き出しているように見える。

トオルは頭を悩ませた。

これは間違いなく倫子が悪い。だけれど、理由もなくそんなことをするような人間とは思えない。だからといって彼女を庇うにはトオルにしたって納得が言っていないことが多すぎたのだ。

「美空さん」

倫子はさらに自分から切り出した。トオルはもう気が気ではなかった。

「あなた、恋をしたこと、ある？　自分を誰かに好きになってもらおうとしたことって、ないんじゃない？」

トオルは、絶句した。

例え意図があつたにせよ、やりすぎだ。彼は目を覆った――

「人を……なんだと……思っつてッ！　誰かを好きになることもない……冷たい、女だとしても……」

低く震える声は言う。美空の顔は怒りに震え、赤を通り越して青白くなっていた。

倫子は気にも止めない様子で答えた。

「そうは言ってないけれど、でも……誰のことも好きにならないように『拒んでる』みたいには感じるわ」

そうして不意に、――倫子は美空に近づいた。

それこそ顔と顔が重なるくらいに。

「美空さん、あなた、誰も好きにならないように……それこそ自分の事も好きにならないように心に決めてるんじゃない？ 誤解だつたら申し訳ないけれど、私にはそう感じるの。なんだか自分を檻の中に幽閉して、だれとも深い接触をしないよう避けてるみたいに見える仕方がないのよ。そうじゃなきゃ、そんなに冷たい空気を発するはずないじゃない？ あなた、本当はもっと優しい人の筈だもの……」

「……………っ！」

美空は返すはずの言葉を失ってしまった。

その表情から急速に怒りが消えていく。そしてあとには何も残らない。

トオルも、同じだった。彼も言葉を失っていた。

彼は目の前の女性に目をやった。彼女の表情は、それまでみせていたどれもがまるで演技だったかのように、たおやかな顔をしていた。包容力に溢れていた。

倫子は美空の心の中ずっと奥の方に、いつの間にか踏み込んでいたのだ。

誰にも気付かれないうちに……。そつと、入り込んでいた。

静かに大きく息を吸い込んだ美空が言葉の代わりにこぼしたのは、一筋の涙だった。

「何で、そんな事……。どうして、……そんなふうに」
美空は震える声で言う。

けれどその声は、ちよつと前までとは違う色をした情動の息づかい。

例えるなら紅と蒼。晴天から雨へとうつり変わった天気のように、彼女を包む空気はさつきとは違った空模様だった。

「私……、私は……。う、ううう……」

冷たい印象すら覚える彼女は、もうその場所にはいない。

ここにいるのは本当は誰にも見せないつもりだった自分を覗かれてしまった、か弱いだけの女。さつきまで凜としていた肩は気が付けば小さく、いつだって前を見ているようだったその顔は俯いていた。

ああ、本当のこの子は自分が思っていたよりもずっと弱かったんだ、とトオルは思った。

少なくとも今、自分のすぐ前でさめざめと泣く彼女は、か弱い存在にだった。これが四方美空の本質なのだ、とトオルはとても自然なことのように理解した。

トオルは自分用にもいれていたコーヒーには手を付けなかった。

代わりに倫子に軽く会釈をして、彼女の持ってきたアモンティリヤードの瓶に手をかけた。ほろ苦い液体は、飲みたくはなかったから。

しばらく、二人の女と一人の男はそれぞれがそれぞれの時間を使った。

互いが自分勝手に過ごしているようで、ちゃんと相手の事を気遣った優しい時間が流れた。やがて美空もいつもに似た空気を取り戻し始めた。トオルはもう一度入れ直したコーヒーを美空に差し出し

た。ゆつくりと時間を掛けてドリップした、雑味のないまるやかなモカ・ブレンドが彼女に少しでもやさしいな、と思った。

二人が何も訊かなかったから、話し出したのは美空からだった。彼女はゆつくりと、これまで自分の胸から一度も出すことのなかった感情を吐き出し始めた。

「……少し前まで、私、恋をしていました。同じ大学に通う、ひとつ上の先輩でした」

手に持つカップをソーサーに置き、美空はゆつくりと言葉を続ける。

「その恋の始まりは二人ともほぼ同じくらいの頃からで、私はユニフォーム姿でグラウンドを駆ける彼になんとなく憧れ、彼は育ちのせいで学内でもちよつと浮いた存在だった私に興味を持ってくれました。きつかけは本当にちつちやなもので、珍しく出席したコンパでお互いに場の空気に馴染めなくて、抜け出して、……そんな感じでした。その後、「二人で会おうか」って誘ってくれたのは先輩の方で、それから私達は一年くらいの時間を掛けてゆつくりとお互いの距離を縮めていきました」

手元のカップを両方の手のひらで包むようにして中の液体の温かさを確かめるみたいに、美空はしていた。その温度を頼りにひとつひとつ言葉を紡ぐ彼女。トオルと倫子は黙ってその様子を見詰めた。「結婚を、決意しました。彼が卒業間近の頃、プロポーズしてくれただから……。『幸せにする。だから僕に付いてきてくれ』って、言ってくれたんです。私も結婚するならきつと彼しかいないだろうなと思っていたから、ちゃんと返事しました。すごく……すごく、幸せでした。あの時のこと、私は一生忘れないと思います。それくらい……私は、幸せでした」

そう言う美空の表情は、パステルカラーの穏やかな日々を感じさせる暖かな眼差し。それがそのまま手元に注がれている。カップの中の水面は波一つたたず、同じように穏やかに映る。

トオルはじつとその顔を見詰めていた。『驚いた』と言ったら悪いだろうけれど、まさか美空からこんな柔らかな表情があふれるとは思ってなかったからだ。でも、その表情は長く続かなかった。

美純は次の一言を口にするのに、それまでよりも一回多く呼吸した。言葉は思いの重いぶん、より多くの酸素を消費して彼女の口からやつとのこと、溢れ出た。

「彼の卒業が近付いて、私はとうとう父にそのことを伝えました。彼に会って欲しいと頼みました。……あまり乗り気でなかったのは、きつと娘を取られる父親の自然な反応なんだと思っていました。……でも、本当はそうじゃなかった」

美空は眉を伏せた。再び開く瞳には深く沈むプライマリーな色を落とした輝きが籠っていた。

「父は彼に会うなり、こう言ったんです。『そんな仕事をしている人間にうちの娘はやれない』と。『真つ当な仕事につかないなら、今後娘に近づくことも許さない』と」

それまでただ、じつと見詰めていただけの倫子が口を開いた。

「その……彼つて、どんなお仕事をされてるの？」

美空の横顔に訊ねた。

「片岡啓介。去年の新人王をとった……」

「嘘?! まさか、ドラフト一位の?」倫子は絶句した。

トオルはグラスを傾ける。なかの琥珀色の液体が口内に流れ込む。木樽の香りのした熟成感のある酒が喉の奥を刺激する。トオルはしばらく考えるのをやめていた。ただ聞くことだけに自分を委ねていた。そのほうが今はいいような気がしていた。

美空はそんなトオルからの視線には気づかないまま、言葉が続けた。

「啓介にとって、野球はこれまでの彼の人生と同じといってもいいくらい大切なものです。どちらか、なんて秤にかけられるものじゃないんです。それと、私とを比べることなんてできっこない。なの

に父は、……。あんなの、酷い。あんまりよ……」

また、美空は肩を震わせた。トオルはその震えが収まるのを、ただじっと待つことにした。

「……結局、それっきり私達は会うことはありませんでした。二人の関係は自然に終わっていきました。再び心を通い合わせようとするには、彼は忙し過ぎた。私も彼とは会いつらかったし。たとえば父が言った言葉でも、私が彼の心を傷付けたような気がしました。もう、彼とは会わない方がいい。……そう、思いました」

やがて落ち着きを取り戻した美空がまたポツリポツリと話し始めたのを、トオルはまたじっと聞いていた。

「お父さんは、本気でそう思ってたのかしら……？ 私には、そうは考えられないけれど」

倫子が呟く。

「一度、父には訊ねました」

「そう。それで……」

「『野球選手であることを否定するつもりはない。だが、四方の娘は彼が考えているより多くの物を抱えている。それを理解し、受け止めるには、時には自分の夢を捨てなければいけないこともあるのだ。それを彼は知らなければいけない……』父は、そう言っていました」

美空の目は、どこか遠くを見ているようだった。倫子はその視線の先を追いかけるみたいに、彼女とおんなじほうを見ていた。

「それであな、納得している？」

「父の言っていること、半分は私にも理解できます。でも、半分は無理。だってそれで彼は傷ついたもの……」

「お父さんの事、——許せない？」

倫子の問いに、美空は首を横に振った。少し深く息を吸ってから、彼女は答えた。

「でも、半分は理解できるんです。だから、私……父を否定すること出来なくて……」

「そう……。辛いわね」

倫子の答えに、美空は力なく頷いた。それっきりまた、彼女は黙ってしまった。

「啓介のことから立ち直って、私は心に決めたことがあるんです」
美空は手に持ったカップを何度か傾け、気持ちを整理したのか、また話し始めた。

今度は彼女はトオルの顔を見た。トオルは向けられた視線に応えるように、軽く口角を上げた。

少し微笑んだ気がした。美空がそうして呟いた言葉はなんだか表情の正反対で、切なかった。

「自分の恋は四方のためにある。自分の愛は四方を守り続けるためにある。それが私の運命だから受け止めよう、って」

それには直ぐ様、倫子が口を挟んだ。

「そんなっ！ 何も、そんなふうに思いつめなくったっていいじゃない！！」

「でも、私には守らなきゃいけないモノもあるから……」

「そんなの！ 自分の事、捨てるみたいにしてまでなんて、おかしいわよ？！」

「うん……。でも、大切なモノだから」

そう言ってから、ふうっと美空は息をついた。

——言葉にすると楽になることは、よくある。言葉にすると上手くいくこともある。

多分、美空は今までその思いを口にしたことはなかったはずだ。だからその『思い』が『決意』になって、そしていつからか『使命』に変わってしまったのに気付かなかったんじゃないだろうか？
せっかく生まれた優しい思いが、うまく消化されず胸のどこかで固くこびりついてしまったのに、誰より美空が気付かなかった。だから、彼女の『使命』がその本来の目的を達する上で一番の障害になっってしまったのにも、美空は気がつくことができなかったん

じゃないだろうか？

彼女の言葉を聞いてあとからトオルがたどり着いた結論みたいなものは、確かそんなことだったと思う。

美空が言った一言に、トオルは驚きよりも実感のほうが強かった。

「——私がそれを受け止めれば、きっと美純を守ってあげられると思うから。だから、私は四方の家のために——」

彼女と美純の関係を見ていて感じた違和感が、その一言で上手くすんなりと流れるみたいに、自然に感じられた。理解できた。

「でも……」

倫子の言葉は、美空の次の言葉でそつと遮られてしまう。

「だってあの子は私ほど強くない。美純は四方の家には向いていないから。時には自分を抑えてでも行動したり決断したりしなければならぬことがあるとしても……でも、あの子はもともと自由でいたほうがいい子。そうでなければあの子はきっと輝かないから……」

倫子は深くため息をついた。自分が何を言っても美空の思いは変わらない。第一、何を言ったらいいかなんてわからない。

「ばか。優しさって、そんなに犠牲が必要なものじゃないでしょ？」

その倫子の言葉に、美空はそれまで見せたことのない一番の穏やかな表情で応えた。

「美空」

トオルは口を開いた。

「美純は……そんなに弱くないよ」

「えっ」美空は顔を上げる。

彼女はトオルの顔をまじまじと見た。その表情から何かを見付け出そうとするくらい。じつと。

「君は、どういう理由があつたか知らないけれど美純には厳しく当たってきたよね。——違う？」

一瞬の沈黙と戸惑いがある。

ほんの少しだけ彼女の瞳が俯いた。けれど、すぐに美空の目はトオルを見詰め返した。

「……はい。あの子が子供の頃は、四方の家に相応しい人間になってくれるようにと、私が仕付けるつもりで接していました。私はその頃、そうすることが正しいと思っていましたから」

「でも、君だつてその頃は子供だろう？」

「父と母は忙しい人でしたし、家には彼女を教育する係のものも居りましたが、あくまで使用人です。なかなか美純の自由奔放を止めることができませんでした。だから私が……。でも、周りには『四方家長女』の振る舞いに異論を唱えることのできる人間は居りませんでしたので、ときには行き過ぎた事もあつたかと今では自覚しています……」

トオルは小さく頷いた。さっきからずっとそうしていた腕組みを解いた。気を抜いたときに癖でしてしまう、ガス台の角にもたれた背を起こした。一度まばたいてから、左の眉だけ上げた。その仕草が美空を見定めるようだった。

「けれど、そのせいで美純は君を恐れている。君に怒られるのを怖がつて、それで萎縮してうまくしゃべれなくなることがある。吃つ

たり、つまったりするのは、君が彼女の発言や言葉遣いに厳しく目を光らせていたからだとは思わないかい？」

トオルは美空を真つ直ぐに見た。彼女のなかの小さな悔恨でも気付くよう、トオルはじつと美空の瞳の奥を覗き込んだ。

「……はい。確かにそうだと思います」

美空は素直に非を認めると彼の視線を嫌ってか、すつと視線をそらした。

「じゃあ彼女の事を『欠陥品』だと思うのは、どんなところ？」

そう言われて「うっ、」と美空は低く声を漏らした。

「君…… 本当はそんなこと、思ってたんじゃないんだろう？ でも、わざと彼女に辛く当たるようにしたのは、彼女がだんだん社交の場を避けるようになったからじゃないのか？」

「……………」

「『四方の家には向かない』なんて言って、それで彼女がそういう場に出ないのが当然のような空気を作った……………」

トオルの言葉に、美空は答えない。俯き、黙ったままだ。

「でもね、美純はそれで自分の居場所を失ったんだ。彼女は『自分が四方の家に居てはならない存在』だと思い込んでいる。だから少しでも早く家を出ていこうと、次の居場所を見付けようと必死になつてるよ。けれどそれが見付からなくて、そのせいでもつと君やご家族に迷惑を掛けているんじゃないかと悩んで…… どんな方法でも構わないから、自分をどこかに追いやってしまおうとまで思っているんだよ」

「——どう、いう事です……、それ？」

「たとえ、自分を傷付けてしまおうとしても。それで君に今より迷惑を掛けずにすむようになるのなら、それでもいいと思っている」

トオルは止めない。

「ねえ、そ、それって？ …… 美純は、一体何をしようって？」

美空はトオルの言葉を遮って言う。彼女は咄嗟にカウンターに手をつけて立ち上がったしまった。けれど、トオルはそれでも話すの

を止めなかった。答えることもしなかった。

「馬鹿だよ。でも、だからなのかな？ 美純はすごく強い。真っ直ぐ純粹で、思いやりがあつて優しくて、自分のことより家族のことを……君をすごく大事にしてる。だからとっても強いんだ。どんなふうに言われても、どんなに辛くあたられても、やっぱり君のことが好きだから。だから彼女は折れない。たとえ自分が辛くつても傷ついても、乗り越えようと努力する。あの子は本当はすごく強くて、しなやかなんだ。知らなかったろ？」

美空はトオルの言葉を途中からうまく呑み込めないでいるようだった。トオルは彼女のその様子をみてわかったが、気に止めずに喋り続けた。

「美空、君は間違っているよ」

「えっ……」

「君がそんなふう生きなくても、美純はちゃんと自由に生きていく。あの子は大丈夫。多分、君なんかよりずっと——」

カウンターをさまよう目が、ピタリと留まる。

「……？」

トオルにはなんとなくわかっていた。

美空の言葉に嘘はない。美純を思う心にも、妹のために自分が何かしてやりたいと思う気持ちにも。

彼女は純粹に美純のためを思つて、ただ一人全身全霊で四方の家のために尽くそうと考えているはずだ。それは間違いないとトオルにもわかる。ただ、もしあるのだとしたらそれは『嘘』ではなく、本当の何から『目を背けている』ということなんじゃないだろうか。彼女が、自分の本当の思いから目を背けている。彼女の言葉は嘘ではない。だた、彼女の真実でもない。

トオルの疑念は、美空の様子で確信に変わった。

「君はね。美純のため犠牲になるようなふりをして、本当は傷ついた自分を庇っただけだ。もうこれ以上傷付かないでいられるように、誰かの……美純の背中に隠れただけだ」

「……………！」

「ちよ、ちよつと、あなた！ それこそ言い過ぎなんじゃッ」

トオルの言葉に反論できなくなる美空を見て、ついに倫子が割って入ってきた。初めて彼女が美空の側に付いてトオルに噛み付いてくる。だが、この他人の心の哀歓を巧妙に掴む女史を敵にまわしたとしても、トオルは退いてはならない気がした。

四方の二人の女のために――。

「美空。君が本当に求めているのはなんだい？ 望むのは、誰よりも高潔な犠牲かい？ それは世界最高の人柱つてこと？ でも、そんなのはおかしい。美純はそんなもの求めていない。むしろ、君がそうすることで傷つくのは君じゃなくて、美純の方だ」

「だ、だけどつ……」

「今の君は後ろにゼロばかりつく値札をぶら下げた宝石と変わらないよ。そんなの誰にも価値のない、誰からも理解されない、誰のためでもない。ただ独りよがりが高価な輝きをチラつかせたって、その光りは君のことしか照らさない。美純のことなんて、絶対に照らさない」

「だけどつ！！」

顔を上げた美空は、齒を食いしばって必死の表情だった。

トオルによつて引つ張り出された彼女の本当の胸のう치가、悲鳴をあげながらトオルに向かって叫ぶ！

「私がここで全部を受け入れなかったら、たくさんの人が苦しむことになるかもしれない！ 美純だって、父だって、……それに四方に関わる多くの人々だってそうよ。私は四方の長女だもの。この家の貴重な『資産』なんだもの。自分の夢や幸せを捨てても守る覚悟をしなくちゃならないんですよ！！ そうやって生きていけなくちゃいけないんですよ?!」

「――バカ。そんな事、誰も言っていないだろ。お前、見た目の割には随分とガキなのな？」

そして美空の無防備だった鼻を指の先で小突いてやる。その痛みが、彼女の胸までちゃんと落ちていくのを、そうつと瞳の中の色で確認してやる。美空はトオルの言葉に、まるで痛いところを突かれたかのようにキュツと唇を歪めた。

「あのさ。……確かに君は他のみんなと大きく違う場所に生まれてしまった。みんなと同じような自由はないかもしれないし、みんなと同じようには選択もできないかもしれない……」

トオルはゆつくりと諭すように、美空の手に収まるペースでちょっとずつ言葉を続けていく。

「でも、よく周りを見てみるとさ……本当はみんなだって誰一人同じじゃないんだ。隣の誰かと同じ選択は自分には絶対できないでしょ？ でもその代わり、君には君だけにできる選択がたくさんある……。それはみんながみんな、必ずそうなんだ。だって、全部がおんなじ人間なんて一人もいないんだもの、自由の形だって誰一人、一緒じゃないよ」

美空はその言葉に苛立ちの色をみせる。

「そんなの、……ただ言葉を変えただけ。私の痛みも苦しみも、ほかの誰にだって理解できないわ！」

けれどトオルは揺らがない。顔には笑みさえ浮かべて、返す。

「そうだよ。だから美空、君は自分で見つけなくちゃ。君のための自由を。君のためだけの夢を。それは『四方美空』だからこそ歩むことができる、世界でたった一つの『君の専用の未来』だ。でも、それが必要としているのも、それを見付けられるのも、多分君だけなんじゃないのかな？」

「うつつ」と美空は言葉を詰まらせる。

「全部、君次第！　ってね。……それに——恋も」
「えっ？」

美空は急にトオルの口から出てきた言葉に驚いて、俯き加減だっ

た顔を持ち上げた。トオルは小さく微笑んでから、言葉を続ける。

「君の恋は、たまたま他の人より障害が多くできてるだけさ……だから諦めなくていい、絶対に捨てちゃダメだ。だって、そんなに君は安い女じゃないだろう？」

彼女の目に映るトオルがいつぱいの笑顔になって、言う。

「美空、君は最高の恋をしなくちゃいけない！！　そう、四方の家のためにも、誰よりすごい恋を経験しなくちゃいけないな」

「……？」

美空はトオルの言葉の意味がわからず、不思議そうな顔をしている。トオルはちよつといたずらっぽい顔をして美空に近づいて、小声で呟いた。

「……だってさ、頭の固いお父さんが観念して君を嫁にやるくらいの凄いい奴が、必要だろ？　10年の眠りをぶっ飛ばしてくれるような、とびっきりの相手がさ！」

「なっ、……ぶっ、くくく……」

目を細め、歯をみせて言うトオルの顔につられて、とうとう美空は吹き出してしまった。口元を押さえ、懸命に笑いを抑えようとするが、そうすると今度はポロポロと涙が溢れ出てきた。彼女はどろしよもなくなった感情のさざ波を、もう上手く抑えられずにいた。トオルは乗り出していた体をカウンターの後ろに戻すと、倫子を見た。彼女もまた優しい笑みを浮かべて美空の横顔をじっと眺めていた。グラスのワインを時々満足そうに舐めている。

そのうちにトオルの視線に気づいたのか、彼女は顔を上げるとニヤリと笑って呟いた。

「……『10年の眠りをぶっ飛ばす』って、言ってるで恥ずかしくないの？」

目顔で失笑する彼女。トオルはちよつと気まずい顔をして、

「そっこのは黙ってるのがマナーなんですよ」

とちつちな抵抗をするのだった。

「さあて。何、飲みます？」

トオルの呼びかけに、ややぐったりとした面持ちの倫子は答える。腰を深々と椅子に沈め、深々と嘆息する彼女を見て、トオルはちよつと眉を上げてみせる。

「あなたねえ。まあ……いいわ、バーボン頂戴！ ストレートで！！」

そこまで酔っ払っているわけでもないのに、わざとらしく腕を振り回して叫ぶ倫子。その様子にくすぐすと笑いを漏らすトオルは、ますます意地の悪い顔をして言う。

「OK。じゃあ、シェリーにしましょう」

「あなたねえ。何だかちよつと嫌いになつてきたわ」

「ははは、そう言わず」

美空が店を出てからのどのくらい経っただろうか？ 『カーサ・エム』にはトオルと倫子の二人が残る。時刻はとくにラスト・オーダーを周り、トオルはこの目の前の倫子をノックアウトすれば今日の営業は終了である。

しかし、敵もさるもの。そう簡単には倒れない。

ボトル一本は空けていようと思うが、見た目ではそこまで酔った印象はない。立たせてみれば違いかもしれないが、ここまで椅子との相性がいいとそれも最後まで叶わないだろう。

トオルはロックグラスに丸く削った氷を入れると、そこに酒を注いだ。なんだが茶色がかったその液体は、氷でいっぱいグラスに注がれてやつと透明度をみせるくらいに深い褐色の酒だった。ウィスキーよりもつと焦げたような色をしていた。

「また、強そうなお酒ね。私を殺そうとしてる？」

「まさか。あなたを殺すには、きつとお酒じゃ役不足だ」

「全く。私はもつと幸せな死に方をする予定だから」

くすくすとトオルが笑いを漏らすと、「なによ」と倫子はその様子を不機嫌な顔をして眺めていた。

マドラーが静かに氷を転がす。からからと乾いた音でグラスが鳴く。

そしてグラスが倫子の前に置かれた。トオルの手元にも丸氷を作る際に削り落とした氷を入れたオン・ザ・ロックが用意されている。「乾杯、します？」

トオルが差し出すグラスを見て、倫子はニツコリと微笑むと自分のグラスをそれに重ねた。

チンツ――

「あなたが入れると何でも美味しいってのが、だんだん憎らしくなってきたわ」

「はは。ありがとうございます」

トオルはちよつと砕けた会釈で返すと、グラスを傾けた。

たつぷりと時間を掛けて熟成させた、葡萄を原料にする酒――シェリー・オロロッソ。二人が今、口にするその液体にはワインとは違った一つの秘密がある。

「倫子さん、知ってます？ シェリーって、アルコールのカテゴリに分類すると『酒精強化ワイン』。ワインなんですよね。だけど、このワインは毎年毎年、同じ味の液体が瓶詰めされてリリースされるんです。生産年毎によつての味の違いがない……厳密に言うとも味を変えないように努力された物がで上がる。そんな、他とはちよつと違ったスタンスのワインなんです」

倫子はグラス越しに目をキョロつとさせて応える。その表情が、ちよつと可愛い。

「『ソレラ』って呼ばれる熟成の方式で、何段かに積み重ねた樽の、

一番下の段の樽から瓶詰めするんです。で、減った分をひとつ上の樽から、二段目の減った分をその上から補充する。そして一番上の樽にはその年の新しい酒を補充するんです。そうやって何十年も均一な味を保つ努力をしているんですよ」

「へえ。そうなの」

そう言つて倫子はグラスの中身をジロジロと覗き込んだ。カララつと氷が鳴いた。恥ずかしそうな音色をした。

「……でも、それは決して『変わらない』んじゃないで、『変わる』ことを受け入れた」上での選択なんです。ワインつてお酒は発酵や熟成を自然に委ねて作られるものである以上、常に同じ味つてことは絶対に有り得ない。だからこそ現実をしつかりと見詰め、誰よりもゆつくりと穏やかで小さな変化にあることを選択した。伝統や格式を守るということは頑なに変わらないということじゃなく、しつかりと地に足を付け確かな一歩を歩み続けることなんだ、と。何十年も先の幸せを冷静に見据えて、大成功と大失敗を繰り返して成長していくのではなく、小さくても着実な歩みを積み重ねていくのだ、という決意の仕方。それもまた、人の生き方……ですね」

トオルは、最後の方はまるで自分に言い含めるかのようにゆつくりと呟いた。そして彼は自分のグラスにそつと視線を落とす。

「四方宗太郎が、そうだと……？」

倫子が小さく応えた。

「いや、……こればかりは本当のことはわからないですけどね」ちらりと見やった目が、そつと細くなった。

「でも、そうであつたらいいな、と。ただ、みんなが自分以外の誰かの幸せを願っただけ。それが上手く回らなくなっちゃっただけなら、そんなには悲しくはないから」

倫子は黙つてトオルの言葉を聞いていた。何か特別なものを見るように静かに、じつと。

「美空は自分の家と美純のために、自分の本当の心を隠そうとした。それこそ、自身の眼から。だけどそれは簡単なことじゃなくって、

結局、幸せを願った人々を逆に傷つける事になってしまった。でも、これだけだったら、まだ取り戻せると思いませんか？ まだ、きっと大丈夫……。だってみんなが誰かを幸せにしようと願っただけだから」

「そう、かもね……」

倫子の答えは肯定でも否定でもないような、ちょっと曖昧な言葉だった。

それは正しい。トオルもそう思う。

でも、彼女達が『変わることを決意できたなら、もしかしたら今よりもっと素敵な未来に出来るかもしれない。そう、トオルは願うのだ。

「それにしても……」

トオルは纏っていた空気の色を変えたみたいに、急に口調を化えた。

「随分と驚かされました。あんな無茶をする人だとは思わなかった。美空、……っていうより四方家を敵に回したら、倫子さん、大変なんじゃないんですか?!」

けれども倫子の表情はあっけらかんとして、口にする言葉も気の無い響きで。

「言っただしょ。女を一人で50年もやるには色々と必要なのよ。

——勘も度胸も」

「うわあ、それだけで片付けちゃうんだ……」

「そう……あとね、男」

「はあ？ 女一人って、言っませんでした？」

素っ頓狂なトオルの言葉に、目を一本線にしてのら猫みたいな顔をする倫子。そして彼女はくしっと笑いながらトオルに指差した。
「……あなたがいたから。もし最悪の事態になっても、きっとあの日のオードブルみたいにあなたが解決してくれるって、私、確信してたのよ？」

トオルは額に手を当てて、困ったふうにみせた。実際、呆れていた。

「買いかぶりすぎですって」

「そう？ でも私、人を見る目には自信があるのよ」

まだくししつと笑う倫子は、氣だるくなつた身をさらに深く椅子に預け、目を閉じた。

「まあ、……あなたに言われるなら、悪い気はしないですよ」

トオルは柔らかく微笑んで、またグラスを傾けた。彼もまたいつものガス台の角に腰を落着けていた。

「でも、これで『借り』は返したわよ。それに『あの子』がちやんと恋愛するためにも、お姉さんとの関係はうまくいってないからね」

カララつと鳴らす氷。グラスを自分の頭上のライトにかざし、光の加減で変わる褐色の宝石を見るように目を細める倫子の声は、なんだかはずんでいるようにも聞こえた。

「あー、なんです、それ？」

「ええっ?! あつきた、あなた……」

彼女にとっては的外れだったトオルの答えに、倫子は今日一番の驚きをみせて大声を上げた。

けれどもトオルはほんわりと回り出した酔いもあって、いまいち彼女の言葉を聞いただす氣にもならなかった。この場は適当な笑みで乗り切ってしまうことにしする。倫子もそれ以上は特に何も言いはしなかった。

「まあ、いいわ。私も、そっちまでは手は出さないわよ。女を一人で50年もやるとちょっつと意地悪にもなるしね」

あと一杯だけ付き合ったら、今夜は閉めよう。トオルはそう考えていた。

|

J
e
w
e
l

70年代のメロディーが流れる。——憧れと理想だった『おと』。自分が生まれた年の頃に流行ったこれらの曲を、リアルタイムで聴いていたことなんて当然ないに決まってる。

その曲が歌われた頃の時代背景や歌った人の想い、願いなどを知識として持っているわけでもなく、自分の親くらいの人間が歌っていた曲だ、『等身大』なんて言葉が当てはまるはずもない。

中学生くらいだろうか。部活動での先輩後輩の関係で年の差を意識するようになると、一つ二つ上の先輩達のそばには、なんとなくその曲があった。一步でも速く大人になりたい彼らの精一杯の背伸びだったのだろうが、まだ子供だった自分には輝いて見えた。大人達のように、それらの曲を身にまとった彼らを羨ましく思い、憧れた。今ほど演奏技術も機械技術も発達していたわけじゃない時代、ギターやベースで創るシンプルでストレートなメロディーにのせてボーカルのハスキーな声が何かを叫んでいた。俺はこうだ、と。お前らは間違ってる、と。もっと世界は平和であれ、と。多分、10代の頃の認識はそんなものだろう。カメラのフラッシュにあてられたみたいに、頭のどこかにそんな響きが焼き付いた。

時代が過ぎ、大人になってもそれらの曲は未だそばにあった。社会に出たての自分達は、右も左もわからずに悩み、苦しみ、そして酒を飲み、そこに再び曲があった。あの頃と比べ、歌詞も、想いも、いくばくか理解できるようになった自分にあらためて訴えかけてくるのだ。自分はこんなもんじゃないだろう、と。明日はきっと変わる、と。夢はもっと大きく持っていいた、と。弱った心に手を差し伸べ、支えてくれた。前へ進む活力と希望を与えてくれた。

今、それでもまだその曲は隣にいる。

共にこれまでを戦った同士として。苦楽を共にした伴侶として。まだ捨てきれない未来や夢を語る友として、そこにいる。歌詞とは

別に曲が持つ固有の空気や、歌い手の生き様みたいなものを通して何かを語りかけてくる。あの瞬間に流れていた、思い出深い大切な一曲……。激しく生き、そして若くして逝ってしまった稀代のシンガー……。曲も自分達と同様に歳を重ね、長い時間を生きてきたのだ。そして色々なことを経験して、変わり、成長した。昔とは違う、新たな説得力みたいなモノを身に付けてきたのだ。

多分、そういうことなのだと思う。あの時代の曲が色あせていかないのは。今も、耳にするのは。自分達より下の世代にもまだ受け入れられているのは。

それは等身大の自分を唱う曲にはない魅力。時代と共に姿を変える人間の叫びなのか、想いなのか。そんなものが根幹にあるからなのかもしれない。

時代は変わった。心に残る曲は希少になった。思わず口ずさむメロディーは、数えるほどもない。等身大の自分は明日にでも心変わるのだ。等身大の曲たちはそれにまた新しいメロディーと歌詞で応える。音楽は今や消耗品。心に残る曲が生まれるための土壌は、もう何年も手を入れていない硬い土だ。種を撒いても根は張らず、水を撒いても芽は出ない。

今日の『カーサ・エム』のカウンターには70年代のあの曲のインストウルメンタルが流れる。

そしてカウンターには、それを口ずさむ声が静かに響く。

鼻歌で、気持ちよさそうに唱う声。きっと彼女はその曲を知らないはずだ。ところどころ音をずらしながら、それでもその曲は続く。時代が変わっても、メロディーは生き続けるのだと証明するみたい

に。
美純のその鼻歌は軽やかに心地よい音色のまま、ずっと続いていく。

美純はカウンターで料理が出来上がるのを待つ間、携帯電話でメールを打っていた。

時間が早いこともあり、『カーサ・エム』にはまだほかの客はいない。彼女は最近の自分の定位置である、カウンターの一番右端の席に座っていた。鼻歌はともご機嫌のあかしらしく、それが出るときはいつも決まってニコニコとしていた。歌っていることを指摘すると「えっ、また歌ってた?!」と驚くことすらあるのはもう『美純らしさ』を構成する特徴のひとつだと認識することになっていた。この子は相変わらず、ちょっとほわわ〜んとしたところがある。これは多分、気を付けたところで治らない部類の性質だろう。

美純は、よく笑うようになった。

自然と笑顔が綻ぶ。振り向くとまず笑う。話していると目を細める。口角が自然と上を向いている。

——これこそが本来の彼女の性質だったのだろう——というのは、容易に推測できた。今までは心理的な規制や束縛がそこに働いていたのだろう、まるで笑顔は求められたときに作って出すもののようにぎこちなく後付されていたのが、今では彼女の代名詞であるかのように溢れていた。

そうだったのは、美純にとっての『天敵』であつた姉が今はこの国内には居ないということも、確かに理由のひとつに違いない。が、それよりももっと大きな笑顔の要因は、大好きな姉と手探りながらもゆっくりと心を通わせ合えるようになったことのほうだろう、とトオルは思う。

美空は今、カナダにいる。

トオルが彼女とここで話してから、まだほんの数週間しか経っていない。けれど彼女はそう『宣言』してから、たったの2週間

弱でこの国を離れていつてしまった。

『私、留学しようと思うんです』

彼女のようなしつかりとした女性にしたって、その手際によさだけでは説明つかないほどの速さで準備を整え、そして美空はあつという間に飛んでいつてしまった。今となって考えれば、きつと何かの下地は彼女の中でじんわりと準備されていたのだろうと思う。表面化していなかっただけで、頭の中では希望や欲求が溢れていたんじゃないだろうか。

厳格でリアリストだと音に聞く父、四方宗太郎を説得し、美空は新しい自分を見出そうと変化を始めたようだ。

「父は、すぐに理解してくれました。……ううん、むしろ快諾してくれて、援助は惜しまないとも言ってくれたんです。私、父のことを誤解していたかもしれない。もっと反対されることを覚悟していたのに、『そうか。頑張つてきなさい』って、たったの一言で済まされて……なんだか拍子抜けしちゃった」

あの日、そのことをトオルに報告に来た美空は、随分と明るい表情でこう言っていた。その姿を半歩後ろから見詰めていた美純の顔も、同じくらいに明るく輝いていたのを覚えている。

彼女達はその日、初めて二人揃ってこの店を訪れた。いつもは姉の視界から少しでも逃れるようにちよつと離れて歩く美純は、しかしこの日は違っていた。姉が彼女のために開けた扉をくぐって、そして美空が自分の隣に来るまで入口のこつち側で待つてから、二人して店内に入ってきた。

それはく当たり前前の家族の姿であり、く当たり前前の姉妹の風景。だとトオルは思う。ただそれが、どの家庭でも同じように簡単に手に入るのかは別として。

「——私は自分に与えられた環境を大事にしたい。四方の家は国内外問わず、多くのお客様が訪れます。今以上にもっと多くの方とコ

コミュニケーションが取れたら……それは私にとってとても重要な事だと思っんです。学ぶ機会があるのなら、今はそれを最大限に活かしたい。もっともっと多くの人と会って、言葉を交わしていきたい。だから、私はこの国を出て自分のために時間を費やそうと思っんです」

カナダへの留学の理由をトオルが訊ねると、美空はそう答えたのだった。そして、そう言った美空の姿は凜としてとても美しかった。これまでも何度もそう思った事はあつたのだが、今回はちよつと質の違つた意味でそう感じた。まるで羽を広げた鳥のように、その美しさの全貌を表したかのようだった。

「今日は、お礼とお願ひに来ました。……色々とお世話になり、ありがとうございます」

「そんな。別にお礼を言われるような事は何にもしてないよ。実際、おっさんの小言につき合せただけだし」

トオルがそう言うときは和み、トオルも美空も美純も笑つた。三人とも自然な笑顔で笑い合えた。

「美純に対しての『考え方』は今も変わりません。でも、美純との距離感を変えたい……。私は、彼女の姉です。でも、それを私は忘れてしまつていたんだと思います。自分のことで一杯いっぱいになつて、家のことに縛られて……。その負荷のうまく処理しきれなかつた部分を、最後はいつも彼女にぶつけていたんだと思います。私達は姉妹なんだから、苦しかつたらお互いに音を上げればよかつたのに。愚痴を言い合つて、いっぱい話し合つて、それで笑い合えばよかつたのにな、って思つたんです。——今更、なんですけれどね」

美空が今ではなくここではない何処かをじつと見つめながら、丁寧に言葉を紡ぐ。

「そう。……でも、今更つてことはないよ」

呟くように小さく答えた。トオルは美空が紡いだ言葉を、彼の言葉で正しく変換しなおす。『四方家の二人の少女のため用』の柔らかな言葉に置き換えると、穏やかな口調でもつて言う。

「みんな、何が正しいのか模索しながら生きてるんだし。正しいと思つて選択した道が、実はかなり間違つてたりすることもあるし。実際のところ何が正しいのかわかる人間は、きっと世の中を探しても一人もいないんだ。でも、正しくない人間つてのがどんなのかは、多くの人がわかつてるんだよね」

「えっ……？」

「間違つてると気づいたときに、反省して、正しいことを模索できない人間。間違つたことを認められない人間。こういう人間はもう、救いようがないからね。だから『今更』って言葉は、多分、今の君達に使う言葉じゃないんだ。……きつと」

トオルが作る料理をカウンターで横並びに座つて食べる二人の姿は、紛れもなく姉妹だった。

彼女達は二人の会話を楽しみ、時折交ざるトオルとの会話を楽しみ、カウンターで過ごす時間を楽しんだ。日が暮れ、二人が店を出ようという頃には、美空はちよつとほろ酔いだった。余程気分がよかつたらしく、上機嫌でカラカラと笑つていた。そんな普段とは違う姉の姿を初めて見たのだろう、美純はちよつとだけ不安そうにして姉の手を握り、体を支えていた。

空気が――あたたかだった。

美空は最後に一つ、トオルに頼みを訊いて欲しいと言つた。

「美純には、一人で食事をさせたくないんです。うちには私が居なくなればほとんどはあの子しか居なくなつてしまふ。父と母は普段家で食事をとることの少ない人達です。あそこには食事を作る人間もおりますし、後片付けをする人間もいます。けれど、同じ席で食事を楽しむ人間はいない。そんな冷たい食事はかりさせたくはないんです。……だから、毎晩とはいいません、でも週に3、4日はここであの子に食事をさせて上げたいのです。どうか、お願いできな

いでしょうか？」

アルコールのせい、か、しつとりとした表情で申し出る美空の目は、ほんの少しだけ潤いを帯びているように見えた。ああ、とトオルは思う。この子はたったのこれだけで世の男性の多くを攻略してしまうタイプだ、と。プライドの上に固く張った緊張感で近寄り難かった前と違い、求めたり甘えたりできるようになってしまえば彼女は強い。多くの人が努力で培う『魅力』を、彼女はもとも人より多く与えられて生まれてきた部類だ。

「構わないですよ。うちはこれで常連を一人、つかまえたことになるし。カウンターのひと席は毎晩彼女のために取っておきます」

美空は弾けるような笑顔をみせた。

「ありがとう。わがままなお願いで、ごめんなさいね」

「いいえ、ご心配なく」

その隣でようやく会話の意味が理解できたらしい少女がかぶりを振った。

「ちょ、お姉ちゃん！　そ、そんなことしなくてもいいよ。私、一人だつて大丈夫だからあ」

「別にいいじゃない？　来たくない日は、こなればいいんだし」
「でも……」

美純がちらつとトオルの顔を覗いてきたので、彼は反射的に口角を上げて笑顔を用意した。すると、それにちよつとびっくりした美純が慌てて顔を伏せてしまう。

「私は別にいいけれど……ねえ、美純——」

美空がそんな美純に顔を近づけて、何か耳打ちする。途端に美純が振り返つて「嫌ッ！」と声を上げた。

「そう、残念……。あなたがそうじゃないのならって、思ったのになあ。私、こんなに気を許せる人つて、あんまりいないの」

「だ、ダメッ！　お姉ちゃん、ずるいよあー！！」

「ふふふ。冗談よ」

「もう、……嫌い」

やり取りの内容まではよくわからなかったが、どうやら美純がここに食事に来るのは決定らしい。気づけばいつの間にかお抱えの栄養士扱いだ。まあ、別に自分は困るわけでもないし、売上にだって貢献してくれるのだから、店にとってはむしろありがたい話だ。それからしばらくトオルと言葉を交わし、その後二人は店を出ていった。

美空と会うのはこれっきりしばらくないのだろうなと思い、彼は入口から出てしばらく姉妹を見送る。

店にいる間はあるなりに仲が良さそうだったのに、帰りの二人は何か仲が悪くなっていた。むくれる妹をなだめる、優しい姉の姿がゆっくりと遠ざかっていった――。

美純はだいぶ長いメールを打っていた。

「なんだ、随分と長く打ち続けてるけど、誰にメールしてるんだ？」
トオルは何気なく彼女に訊いてみる。

「えー、別に？」美純は気のない返事だ。

彼女のためのサラダを盛り付けながら、トオルはちょっとだけ意地悪な言葉をかけた。

「……そうか、彼氏だろう？ 悪いヤツだなー、美空に言いつけてやるぞ」

「ち、違うもんッ！」

ギョツとした顔をして、美純が慌てて立ち上がった。

「そんなんじゃない、お姉ちゃんだもん！ 変なこと言わないでよ、バ、バカッ」

「くくくつ、バカとは酷いな。でも……逆にそんなふうにならないうちに大袈裟に否定するのって、怪しくないか？」

トオルは一度手を止めて、そして彼女を覗き込む顔をわざと疑うような表情にする。

「なあ、美純。ほんつとうのところは、彼氏なんだろう？ いいぜ、

美空には黙ってやるから正直に言ってみるよ？」

すると美純は突然真っ赤な顔になって、何故かびっくりするくらい張り上げた声がトオルにやり返した。

「彼氏なんて、いないもんっ！ バカッー！！」

ドスンッ、と激しく音をさせて椅子に座り込む美純。そしてまた携帯の画面に向かってにらめっこを始める。何故か不貞腐れたような顔をして、再び携帯の画面を指で触り、そしてたまに荒っぽく叩く。

そこまで怒らせるつもりはなかったんだがな……とトオルは嘆息した。急に不機嫌になった美純に、彼は自分のちよつと過ぎた意地悪を反省するのだった。

美純が青虫みたいにもしゃりもしゃりと、口だけ動かしてサラダを食べている。その顔は、さつきからむくれたままだ。ほっぺたにたくさん詰まつてるわけでもないのに、咀嚼のあいだも飲み込んで、ぷうとしている。きつと何を言っても藪蛇だろうな、と思ったトオルはしばらく彼女をほっておくことにした。

食事のあいだにも何度か着信のある彼女の携帯電話。そのたびに美純は画面を覗き込むと、短い文の返信を送り返した。そして何件目かの返信を見たときに、急に美純がほくそ笑んだ。ちらりと横目でトオルを見ると、もう一回、ほくそ笑んだ。続けて届いた新しいメールが、とうとう彼女の胸の薄曇りを全部払ってくれたらしく、美純はニンマリと微笑む。トオルは背を向け作業をしていたから、それまでの様子には気付いていなかった。彼からしてみたら振り返ると表裏をひっくり返したみたいに美純の機嫌がよくなっていたわけだ。なんだかその様子に妙な気がして、トオルは眉間にしわを寄せた。

その後また、美純は終始ニコニコと始めた。お得意の鼻歌が復活し、今は店内に流れるイギリスのロック歌手のインストウルメンタルが、彼女なりのアレンジを加えたカヴァー曲になる。『イギリス第二の国家』には不屈きにもとぎれとぎれの日本語の歌詞が付け加えられる。それも「気づきもしないで」とか「鈍感なくせに」とか、ちよつと耳を傾けるとずいぶんな歌詞だ。

「あのさ、それ、洋楽のインストだぞ。何でまた日本語のおかしな歌詞なんて付けるんだよ？」

トオルは次の料理に手を動かしながら訊ねる。

「えー、だって原曲なんて知らないもん。別にいいでしょ、そう聞こえるんだから」

「いや、それはそうだけだな……」

威厳を取り戻すための戦いは、呆気なく終わる。17歳の少女の前には名曲も形無しだった。

急にボタンツと入口のドアが開いた。

「やあ、トオル。元気いー！」

やたらと明るい声が先に店内に入ってきて、それからガコガコと音をさせながら本人が入ってきた。割としつかりとした木製の底のサンダルが、フローリングの床と当たって大きな音をたてる。マキシ丈の赤い花柄のワンピースがバサバサと音を立てて店内を縦に横切った。腕にかけていた明るい色のレースのボレロを邪魔くさそうにカウターの椅子に放り投げ、手に持ったコンビニの袋をガサツとカウターの上に置き捨てる。

「これ、お土産」

そう言われたコンビニ袋の中身は、外見からはなんだかわからない。ただ細長い棒のようなものが幾つも入っているようだ。不規則な向きに突き立ったアンテナみたいに、その棒がところどころから袋を押し上げている。チラツとみた美純からはウニのような形のモノを想像させた。

「おい、またソレかよ」

しかしトオルはうんざりしたような声で答えた。彼には見なくても中身がわかったからだ。

「いいじゃないよう、あたしとあなたにとっちゃ感慨深い品でしょう？」

「だからって、そんないっぱいあってもなあ。実際、この前にお前が持ってきたのだって、まだそこに残ってるんだ」

「さっさと食べなさいよ！ まったく、贈り物のしがない奴よね」

「なんだよ、それ……」

呆れた、と声を上げたその来客に、逆に呆れて二の句の継げないトオル。「まあ、いいわ」とさっさと椅子に座るその女——泉瑠璃

は、座つてすぐに横を振り向いた。視線の先の、そこにいた美純はドキッとして口ずさんでいた鼻歌を止めた。

「ご、ゴメンナサイ……」

アイラインがきつちりと縁どられた瑠璃の大きな瞳がじつと見詰めてくるので、自分の鼻歌が気に障ったんだろぅ、と美純は反射的に誤ってしまう。そして瑠璃の視線を避けるように俯いた。しかし、
「ちよつと……澄んだ音。いい声ね、キミ」

「えっ？」

びつくりして思わず美純は声を上げた。想像していたのと全く違う瑠璃の反応に、驚いた。

「素敵。ねえ、なんでやめちゃったの？」

あっけらかんと瑠璃は言う。美純は顔を上げ、瑠璃の表情を覗いた。その目には初対面の相手への挨拶変わりの世辞や社交辞令のよな色はなく、むしろ歌が急に止んでしまった事への純粋な不満みたいなのが映っていた。それで美純はますます困惑してしまった。
「おい、瑠璃。うちの客に馴れ馴れしく話しかけるなよな。お前ら初対面だろ？」

「あなたは馴れ馴れしくないの？ 『うちの客』とか『お前ら』とか」

言葉じりを掴まれてトオルは苛立った。おまけに茹でていたパスタの出来上がりを示すタイマーが鳴って、益々苛立つ。

「ああ、くそっ」

そうこぼしながら、トオルは茹で上がったパスタをフライパンに移した。舌打ちしながら鍋をあおった。

そんなトオルのことには我関せず。

瑠璃はズイッと美純の方に体を寄せて言った。

「キミ、ホントいい声だよ。うんうん、羨ましいー。カラオケとかじゃ、採点、すっこいんでしょ」

「えっ……いい、いえ、そんなんじゃない……。それに鼻歌なんて褒められたら……私、恥ずかしい」

美純は思わず顔を赤くして、肩を小さくしてしまった。

「ひゃーっ。かわいいね、女子高生！ あたしのときってどんなだったかな？ うーん……」

ちよつと昔を思い出すみたいなお顔をするが、瑠璃はそれをすぐに止めてしてしまう。そして目をカウンターに向こうのトオルにやると不躰に訊ねる。

「ねえ、なんでこんな可愛い子がここにいるの？ バイト？」

「お前なあ！ だからその子はうちの客だって言ってるだろう？」

トオルは荒っぽく答えた。ついてないことに、今日のメニューは仕上げにかなり気を遣うメニューを選んでしまったのだ。美純のためのパスタは、生ウニのペペロンチーノだった。ちよつとでも気を抜くと火が入りすぎてダマになったり、固まったりしてしまうから手が止められない。

「あんた、偉そうな店員ね。見たことないわ、そんな奴」

「ぐう……。うるっさいなあ、お前が来るといつも調子が狂う……」

「へえー、尚も上から。ちよつと、責任者、出なさいよ！」

「ああ、うるさい！」

ニマニマする瑠璃にお手上げのトオルは、それでもなんとかパスタを完成させ、盛り付けた。皿の上に山吹色の淡い色合いのソースが絡んだシンプルな一品がで上がる。仕上げに飾りのウニを小さじ一杯とハーブを一枚添える。そして小さくなったままの美純の前に差し出した。

「ああ、美味しそ。それって、あたしにはないの？」

さっきまでの難癖はもうどこかに置いたらしい。瑠璃はさつさと新しい興味に乗り換えて喋る。

「あるわけないだろう。欲しかったらご注文をどうぞ、お客様」

「うつわあー、言っちゃったよ。友達がいない奴だねー、あんたって」

瑠璃はその魅力的な造りの大きな瞳を見開いて言うと、慥然と頬を膨らませた。

何かぶつくさ言いながら、瑠璃は自分が土産に持ってきたコンビ二袋をひっくり返す。中からはバラバラと棒付きの飴がカウターに落ちた。その数、10コ以上。それは昔からよく目にする、派手なデザインのビニールでまんまるの飴をくるんだ棒付きのお菓子だ。瑠璃は包装に書いてある文字を幾つか眺めては置き、眺めては置き、今の気分にあう味の一つを見付けると、ビリビリと包装をはがして口に入れた。土産と言いながら贈った主に気兼ねもなく食べてしまう辺り、彼女のサバサバとした性格がわかる。

瑠璃はチュパチュパと飴を舐めながらも、すぐ横の Pasta の皿をじーっと眺めていた。

「……やっぱり、美味しそう。あたしもそれ、食べたいなあ」

「うう、じつと見られると食べづらいよ……」

とうとう美純が音を上げた。見かねたトオルが助け舟を出すことにする。

「おい、瑠璃。いい加減にしるよ」

ちよつと威圧感を込めた声でトオルが言う。すると瑠璃はトオルを見上げて答えた。

「よし、決めた。あたしにもコレ、頂戴。金はもちろん払うからさ」

「ふう。……当たり前だ、誰がお前になんか恵んでやったりするか」
トオルはげんなりとして、彼女のためにフライパンを手を取った。

泉瑠璃。彼女はいつもトオルのペースを乱す『天敵』みたいな女だった。

くるくると変わる彼女の会話に、いつも彼は手を焼くのだ。

瑠璃は一年の半分を日本、もう半分を西ヨーロッパで生活する行動派な女だ。日本にいる間は都内にある彼女の実家に、海外にいる間は各地で小さなホテルやホームステイ先を見付けて生活している。語学に堪能で、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語を使いこなす。そのどれもが知識ゼロのまま行った現地での実践のみで覚えた『現地語』だった。おかげで『日本人的』な語学に長けた人間に聞かせると、かなりドキツとする単語や文法が雑じる乱暴な会話らしい。

が、彼女にとってそんなことはどうでもいいことで、瑠璃はどの言語にしたって一番重要なことが何かをよく知っていた。それらはどれもただのコミュニケーションのツールの一つに過ぎないのだ。自分の言いたいことを伝え、相手の意図をくみ取ることができるのなら、彼女にとって話す言葉が何語であつても構わない。もっと言えば、それは言葉でなくてもいいのだ。

そのため彼女は言葉と同じ高さで、自分の考えを伝えようとする溢れるほどの情熱と、足りない分を補うための表情を使いこなす。それら全てが融合されて始めて彼女にとっての『外国語』が出来る。だから『マルチリンガル』なんて呼ばれるのを彼女はことさから嫌った。自分はコミュニケーションを取るために必要だからやっているだけだ、と強く主張する。

そんな彼女の生業は、ヨーロッパの雑貨や小物、それに家具を日本に輸入、販売するインターネット・ショップの経営だ。最近のデザインのお洒落な雑貨や小物から、現地でも珍しい19世紀頃の装飾が施された価値ある家具などの優れた品々を、彼女自身の足で歩き回り探し出してはネットで紹介し、買い手があれば輸入するのだ。日本国内と海外に数人ずつの従業員を抱える程度の小さな会社だが、年収一千万は下らないやり手の若手経営者として、彼女は日本のテ

レビや雑誌に取り上げられたこともあった。

本人はそう思っていないなくても、世間的には泉瑠璃という女は成功者だ。

しかしその彼女がどうしてか、この都会ではない街の小さなイタリアンにやってくる。

しかも、さすがにスーツケースを送り付けてきたりまではしないものの、日本に戻ると必ずと言っていいほど、両親のいる実家に帰るよりも先にトオルのところへやってくる。まるでここがホームベースかのように真っ直ぐに目掛けてやってくるのだ。もう何年も、ずっと変わらず。

彼女が自分のことを親友だと思ってくれているのを、トオルはよく知っていた。若い頃共に色々な経験をし、苦勞も一緒に乗り越えた仲だからこそ今もこうして慕ってくれているのを、彼はよくわかっていた。

だが、トオルは瑠璃が苦手だった。

——いや『瑠璃が』というより、彼女がいることで頭をよぎってしまう『過去の記憶』の方が苦手なのだ。忘れようと心に決めた記憶が、苦樂を共にした頃の思い出と一緒に蘇ってしまうのが、辛いのだ。

そこには互いに夢を語り、挫折し、それでも励まし合った、トオルと瑠璃と彼女の姿があるから——。

心の奥底に仕舞い込んだ、彼のもう一人の親友の面影。

それが、辛いのだ。

瑠璃はよくしゃべった。

パスタなんて普通のコックが作れば10分程度でできるものだ。そして彼女はその10分のうちに、ゆうに10日分くらいの出来事をしゃべり尽くした。出来上がったウニのパスタは話題を遮る邪魔

者みたいな扱いを受けて、ものの一、二分で彼女に飲み込まれてしまう。トオルはその会話の量と、出来た料理の扱いにげんなりしてしまうのだ。が、彼のそんな様子には気も留めず、瑠璃の話題は尽きない。

そのうちに『カーサ・エム』にもパラパラと夜の来客が入り出す。慌ただしくなるトオルを引き止めるのは諦めた瑠璃が、次の話し相手に捕まえたのは美純だった。

カウンターの一つ空けて座っていた席を隣に移し、それで完全に追い詰められた美純を相手に再開する会話。最初こそ迷惑そうに眉をしかめていた美純だが、驚くことに次第に二人は意気投合し始めた。そしていつの間にか美純は瑠璃の話に夢中になっていた。瑠璃の話すヨーロッパの国々の話。そこでの生活、日本との文化や習慣の違い。歴史や宗教によって変わる建築や装飾のデザイン。それらを瑠璃は実体験もまじえ、淀みなく流れるように話していく。美純はそんな瑠璃にどんどん惹かれていった。目の前の女性に憧れのような視線を送る彼女の手元で、忘れ去られたメインディッシュの牛フィレがどんどん温度を失っていった。いつになく熱心な聞き手を得た瑠璃の話題は、一層熱を帯びていった。

そのうちに、なんのキツカケから出てきたのか話題はトオルとの出会いや昔話になっていた。

共通の友人でもない限り、普段、そんな内容の話はすることがないものだから、瑠璃の話題は更に弾む。彼との出会いがスペインのバルセロナであったこと、瑠璃自身はその時絵画や彫刻を学ぶために留学していたこと、なかなか言葉の壁を破ることができなかったトオルを、毎日のように連れ回し言葉の実地訓練を繰り返したことなど、瑠璃は当時を懐かしむように話す。話題にトオルが出てくるものだから、益々美純の興味は惹きつけられ、彼女は次第にあれこれと問いかけるようになった。それに答える瑠璃にも熱が移り、会話はもう止まることがなかった。

「あいつはもう、ほんつとうにガキでさ。いつつも夢ばかりみてるかんじなの。『お前は今も寝てるのか?!』って思うくらいでさ。現実がスッポリなくなっちゃってるみたいな男だったんだよねー」

「へーっ……」

「サッカー、サッカー、サッカー、サッカー、でさ。あたしに『ナントカ』って選手のすごいところを並べ立てたりするわけよ。でも、知らねーっの。聞いているのも面倒で、へーへー流してたら今度は急に文句を言い出してさ。『お前、バルセロナに住んでるのに、サッカー興味ないのか?』って。……お前基準で世界を造るなー、ってさっすがにその時はキレちゃった」

「へーっ。なんか、今からは全然想像つかない」

「多分、あいつがオヤジになったのよ。男はきつと女より速く歳をとるんだわ。だから寿命も短いし」

「あー」

「ちよつと、今の半分は冗談よ……」

「うーん……」

「……笑わないの?」

瑠璃はそのままトオルの過去を話し続けた。彼が必死になってサッカーに打ち込んでいたことや、結局夢やぶれて苦悩した時期のことを語ると、美純はちよつと鼻を鳴らしながら聞き入った。そうしてたっぷりと一時間以上は話していただろうか。瑠璃はようやく満足そうにトオルのいれたエスプレッソを口にしていた。

とうに日は暮れ、窓の外には夜の帷が下りていた。いつの間にか『カーサ・エム』の中も落ち着きを取り戻し、穏やかな食後の空気で満たされていた。

トオルは美純から掛けられたいくつかの質問で、瑠璃が自分の過去のことを話したことに気付く。別に彼女に対して口止めたことではないが、あまり話されて気持ちのいいものでもなかったので、トオルはちよつと不機嫌な顔をした。しかしこの古くからの友人がそ

んなことで悪びれるはずもなく、案の定トオルの様子に気付いても別段気にする素振りもしなかったので、トオルはため息をついた。

瑠璃が急に立ち上がったので「帰るのか？」と訊くと、「トイレよ。女性に対して失礼じゃない？」と口を尖らせて返してくる。やっと厄介者を追い払えると思ったトオルが再び溜息したので、その表情を見付けた瑠璃は、もう少し長居してやろうと意地悪な決心をした。

だいぶ時間が過ぎていた。普段だったら美純はとくに家に帰っている時間だった。だが刺激を受けて活発になった少女の興味が、彼女を『あと少しだけ』と椅子に縛り付けているのは明らかだった。トオルは頭をかいいた。一体、どうやってこの二人を追い払おう、と。その時、ガチャリと入口のドアが開く音がした。

「いらっしや……ああ、こんばんわ」

と、トオルが馴染みの客にする挨拶をし、

「こんばんわ。ご無沙汰して……えっ、ちょっとあなた、四方さんじゃない？」

と、入ってきた女性がちょっと驚いた声を上げ、

「えっ？ ……え、ええー、留利子センサー？！ なんでこんなところ？」

と、さらに驚いた美純が大声を上げた。

Opposites attract. ———— 大庭留利子 ————

彼女は『カーサ・エム』のすぐそばのマンションの住人だった。そしてトオルは知らなかったのだが、四方美純の高校の教師でもあり、彼女の担任でもあった。

留利子は美純の姿を見付け最初驚いていたが、すぐに教師らしい顔つきになる。

「四方さん、あなたこんな時間にこんなところで何をしているの？」

「う、うええ。センサーこそ、なんでこんなところに来てるのよ」

「そ、それは……そんな事、私の勝手よ！」

「うう……。じゃあ、私も勝手に……」

ぶしぶしと小声で言う美純を、留利子は一喝する。

「そうはいきません！ 未成年がこんな遅い時間にお酒を飲むような場所にいるなんて、だめよ。間違ってるわ」

さすがに見かねたトオルが助け舟を出した。

「まあまあ、大庭さん。その子のことは僕に免じて許していただけないでしょうか？」

「えっ？」

美純の方に向けられていた視線がトオルの方に変わる。そうすると、キツとしていた眉がやや柔和に変わる。美純は追い詰められたネズミみたいだった表情をホッとした顔に変えた。トオルは穏やかな笑顔を作って留利子を説得にかかる。

「四方さんはうちの大事なお客様なんですよ。彼女のお母さん、それからお姉さんにもよくしていただいてるんです」

「でも、だからって未成年がこんな時間に出歩いているのを容認するわけにはいかないでしょう？」

留利子の意見はもつともだった。けれど、トオルの笑顔は濃度を増す。彼女の言葉を理解しつつも、同調はしないという『暗の否定』の空気を発する。

「留学していったその子のお姉さんからの頼みで、僕が美純さんの面倒をみるよう言われてるんですよ。まあ、そうはいつでも主に食

事の面だけなんですけどね」

「はあ……」

「今日はちよつと店の方も慌ただしかったから、それで彼女の夕食を後回しにさせてもらっただけです。美純さんも『授業の復習をするから構わない』って言うてくれたから、甘えちゃって。結局、バタバタしてたらこんな時間になってしまいました。すいません、今後は気を付けます」

トオルは軽く頭を下げる。そうするとカウンターの向こうから小さなため息が聞こえてきた。留利子の妥協の音だった。

「……もう。わかりました、そう言われるなら今日は目をつぶりますけれど、シェフもあんまり遅い時間まで彼女をここに居させないで下さい。なんと言われても、この子はまだ高校生なんですから」そう言つと、ずっと立ち尽くしていた自分にようやく気づいたように留利子はカウンターに座った。瑠璃の一つ開けた隣の席に腰を下ろした。

トオルは留利子の言葉に素直に頷き、もう一度笑顔を作つて『暗の肯定』を発する。場の雰囲気は平静を取り戻したようにみえた。

「でも、四方さん。あなた、私の知らないところでは結構優等生のね。先生、ちよつとびつくりしたわ」

「……………」

が、やや脚色が過ぎたらしい。美純はさっきまでとは別の理由で、また追いつめられてしまう。瑠璃を挟んだ隣で身を小さくし、少しでも被害を抑えようとする彼女の、たつぷりと怨念のこもった視線がトオル目掛けて飛んできた。トオルはそれを気付きつつも何気なくかわし、留利子の注文を取りに向かうのだった。

と、いつても彼女のオーダーは大概いつも一緒なのだが。

「大庭さん、いかがいたしますか？」

「じゃあ、いつものをお願いします」

「はい、かしこまりました」

そしてそれは今夜も変わらない。彼女の前に用意されるのはチー

ズと生ハム、バーニヤカウダ（北イタリア風の野菜スティック）が少しずつ盛られたひと皿と、ハーフトルのシャンパーニュ……。

『カーサ・エム』のワインリストには、普段シャンパーニュのメニューは載せていない。だからこの一本はトオルが留利子のために用意している特別な一本だった。留利子は隔週金曜の夜に、ほぼ必ず『カーサ・エム』を訪れては、今日までの自分へのご褒美を欠かさないのだ。そのサイクルを変えることなく、常に一定のリズムで生活することで、ヴァイタリティーを保つタイプの女性らしい。

カウンター越しのトオルによって注がれた液体から昇るシュワワときめの細かい泡が、グラスの中を下から上へとたゆたう。その一粒一粒を留利子はぼんやりと眺める。日頃の疲れやストレスが頭の先のほうから蒸発してゆく。出ていったのを補填するように幸せのエキスが埋める。留利子の癒しのサイクルが今日までの彼女を労い、明日からの自分に活力を与えてくれる。そしてゆつくりとグラスを傾ける。

留利子は女性にしては珍しく食事のあいだに言葉をあまり挟まない。かといって黙々と食べるわけでもなく、まるで一口一口を慈しむように食べるのだ。咀嚼の回数も驚くほど多い。トオルは決して客を注意深く観察するようなことはしないのだが、それでも他の客と大きく異なる行動を取る人間というのは目を引くものだ。初めて気付いたときは随分と違和感を感じた。

あるときトオルは、思い切って訊いてみたことがあった。「留利子さんって、本当に大事そうに食べますよね」と。すると留利子は『食べる』という行為に対しての彼女の強い思いを語ってくれた。それは彼女の信念と呼べるくらいのしつかりとしたポリシー。よく噛むこともそうだし、慈愛に似た表情で物を食べるのは『出処の知れた安心で安全な食物を食べることが出来る満足感』から無意識ににじみ出た彼女の心情なのかもしれない。

彼女は、幼い頃にアレルギーに苦しんだ時期があったという。それを取り越えることができたのは、無農薬の作物や安全性の確認さ

れた食材だけを選んで摂取するよう心掛けたかららしい。

「ちゃんとしたものを食べることから健康な体が始まるんだと、私は信じています。実際、私がそうだったから。だから安全な食材を美味しく食べることができるのは、とても幸せな事だと思うんです」と、留利子は言う。『カーサ・エム』で扱う食材は厳密にすべての材料がそうかといえはそこまではないのだが、今、留利子が食べているものに関しては生産者の顔のわかるものばかりだ。また、良い食材を選ぼうとすれば自ずと出処にこだわるようになり、それが結果的には安全で安心な食材を仕入れることにもなっていた。

「今日のお野菜、とっても美味しい。これはどこで採れたものなんですか？」

「人参と蕪は京都のものです。トマトが北海道。あとのものは地元の直売所で買いました」

「新鮮だからかしら？ 野菜がとっても甘い」

「そんなふうに言ってもらえると、農家さんもきつと本望だと思いますよ」

しばらくして美純が逃げ出すように帰っていった。それから一時間くらいか、シャンプーニュと食事を楽しんだ留利子も満足そうに帰っていく。そうして店内には瑠璃とタオルが残った。

「……相変わらず、固めの性格な女は苦手か？」

「別に。そんなんじゃないわよ」

「そうか？ お前、あの人が来たら一言も口をきかなくなっただじゃないか」

「うるっさいわね。……ただ、話すのが面倒なだけよ。他に理由なんてないわ」

トオルの言葉に、不機嫌な顔で答える瑠璃。

「もう、いいからさっさと店閉めちゃいなさいよ！ そつちとこちじゃ落ち着いて話も出来ないわ」

「おい。営業妨害もいいところだな」

「十分稼いだでしょ。今夜はもう、終わりよ」

「相変わらず、勝手な奴だな」

あれだけたつぷりと喋り倒しておいて、『落ち着いて話せない』
と言えてしまうところがまた瑠璃らしさだ。トオルは小さなため息
を付くと、入口の明かりを消し、看板をCloseにした。瑠璃は
まだまだ話す気らしい。夜は、長い。トオルはエプロンをカウンタ
ーの端に放り投げると、冷蔵庫から小瓶のビールを二本取り出し、
蓋を開けた。瑠璃の隣の席にどすつと腰掛けると、持っていた一本
を瑠璃の顔先にズイッと突き出す。

「サンキュ」

瑠璃は受け取った瓶でトオルの持つ瓶を小突いて乾杯した。コチ、
と低いガラスの音が鳴る。そして二人はビールをあおる。

「戻ってきたの、三ヶ月ぶりか？　今回はどのくらい居るつもりな
んだ？」

「決めてないけど、でも、もうすぐじゃない？」

「何が？」

怪訝な顔でトオルが訊ねた。

「忘れたの、真由子の命日……。それまではいるつもりよ」
表情が、少し曇る。

「そうか。もう、四年も経つのか……。早いな」

「そうね。時間が過ぎるのは早いわよね」

それから、しばらくの沈黙があった。再び言葉を発したのは瑠璃
の方で、そのあとはまた相変わらぬ内容がトオルを振り回した。
夜は、長い。けれどもトオルは、ゆっくりと過ぎる今この瞬間の時
間とは別に、あっという間に過ぎていく時の流れを感じていた。

そして、もう一つ。

その過ぎ行く時の流れの中に、少しずつ置き忘れていくように薄
れていく記憶についても考えていた。

自分は少しずつ忘れて始めているのだ。

真由子の事を――。

つまり人は『忘れる生き物』らしい。

過去の記憶は時間と共に薄れ、やがてゆっくりと消えていく。人はそうやって過去のことを少しずつ忘れて生きていくのだ。

そう……であってほしいと、どこかで思っている。けれどそれは幻想でしかない。ただの願望でしかない。それは多分、『忘れた』という事実の罪悪感を希薄にするための詭弁でしかない。そうであれば美しく、そうであれば止む負えないような認識が人のどこにあるだけだ。けれど現実はそのほど美しくはない。記憶をしまう場所はどこも出来の悪い重たい扉の向こう側なのだ。その扉は時間と共に錆びて風化し、ある日突然開かなくなってしまふ。『忘れる』という現象は本来そういうものだ。まるでパスワードを無くしたフォルダのように扉が開かなくなる。実際、記憶が脳のどこかに存在している実感はあっても、データそのものを取り出すことができない。そんなふうに急になくなるのが、人の記憶だ。

つまり人は『忘れることのできない生き物』らしい。

その記憶の扉が一向に開かなくなつて、所謂『忘れた』状態になつても、記憶を構成する事実の存在までは消去することができない。あの時の出会いや、その後の別れの記憶をしまったフォルダは開かなくなつても、その存在と履歴はきちんと残っているのだ。そしてその記憶を『忘れた』自分を苛み、苦しめる。だから人は、記憶が時間と共に薄れ、やがてゆっくりと消えていくモノだと定義する。どんな記憶もいつかはそうなるのだと、自分に言い聞かせる。そうやって『忘れた』自分を擁護する。だが、それは決して悪ではない。

記憶は人を縛り付けるものではない。人を成長させる種だ。

だからたくさんの出会いや別れの記憶も、いつか種となってそれが芽吹き、木になり、林になり、森へと育っていくのだ。人間はそうやって大きくなっていく。開かなくなったフォルダの数だけ、人間は成長することができるのだ。その開かないフォルダの中身が存在するからこそ使えるソフトも、解凍できるデータもあるからだ。

つまり人は『決して忘れない生き物』なのかもしれない。

次第に上書きされていくデータの山。記憶のフォルダ自体がどこに埋もれたかわからなくなった頃、開かなくなったフォルダは突然、第三者によって開かれることになる。何気なく打ち込まれた単語は、なくしたはずのパスワードだ。突然開く記憶の扉。あふれ出てくる膨大なデータ。そうやって時々掘り起こされる『過去』と『今』とを混ぜ合わせ、常に更新と最適化を繰り返し造り上げられていく、配合も分量も造った本人すらわからないその瞬間だけ入れることのできるのオリジナル・ブレンド。

——それが『自分』という存在。

大事な『記憶』というエッセンスを、最高のものから目を瞑りたくなるものまで、全部忘れずフォルダにしまつてハードディスクを一杯にしていたからこそ出来上がる、現時点で最高の味が今の『自分』。

人は精神のある生き物だから、それを構成するキーワードである記憶を忘れる訳にはいかないのだろう。自分というものを造り出すため、人は決して記憶を、過去を、忘れない。

だけど人は『忘れるべき生き物』であるのかもしれない。

この生き物は脆弱で、記憶に囚われ、過去に殉じようとする。辛い現実や悲しい出来事を、簡単には払拭できない。ともすればそのために自分の一部を犠牲にしたり、精神を傷付け壊してしまうこ

ともある。人間は肉体より先に心が死んでしまう、数少ない生き物だ。でもそれは多分、生き物の自然な死に方ではない。

記憶は人を殺してはいけな
い。記憶は人の未来を妨げてはいけな
い。

『カーサ・エム』の定休日を使つて、トオルは出かけていた。都内に向かう電車に揺られ、目指す場所まで一時間ほどの小旅行。窓の外は透き通り、よく晴れた青空だ。

この外出の理由は確かに自分にもあつた。けれど、この外出のきっかけは自分ではなかつた。別にそのことに対して不満はないのだが、一抹、腑に落ちないところはある。半ば押し切られるかたちでこうなつた気がするが、本当に嫌ならば断固拒否したはずだ。そうしなかつたのは多分、彼女といることにトオル自身がストレスをあまり感じなくなってきたからもあるだろう。この油断すれば親子にすら間違われる年の差の少女といることに、彼は最近、案外慣れてきていた。

それでも、やはり腑には落ちない。

トオルは今日、何故か美純と二人で出かける羽目になっていた。彼の目指す場所は銀座だつた。目的は古くの仕事仲間の店に顔を出しに行くことだつた。そして美純の方にも目的があつた。それは、80年代の洋楽のCDを買いに行くということだつた。そして、どうしてもそこにトオルも同行してほしい、と頼まれたのが今回二人で出かけることになつたきつかけのなのだが……。

確か、初めは『女子高生』。『得体の知れないもの』みたいな認識だつた筈だ。そのうち認識は『ちよつと面白い奴』くらいに変化した。先日、関係が済し崩しの『お抱えコック』みたいな立場に

なった。

まあ、それはいい。

しかし何故だ？ どうしてかこの少女の学校帰りに待ち合わせ、隣り合わせの席に座り、同じ場所に二人で出かける羽目になったのか、その辺についての経緯は今更ながらちよつと聞いてみたいと思う。だが、さっきから隣に座り込んだ少女は終始同じ格好で正面を直視してるし、話しかけても「エッ」とか「エッ？」とかしか言わない。

夏に近づいたせいか、日は長くなり始めていた。まるで時間の過ぎる速度がゆっくりに変わったみたいだった。トオルは溜息をつく。別に同行させられることになった理由をどうしても問い質したかったわけではない。相変わらず窓の一点を見つめ続ける、美純。考えるのも億劫になって、自分もゆっくり進む時の流れにたゆたうようにした。次第に微睡みがどこからか押し寄せてくる。

鼻腔をかすめる香りがする。甘い香り。記憶の中にはあつて、でも深く印象には残っていない朧気な覚え。思い出せないでいる――

『……と、トオルは今度のお休みの日、予定つてあるの？』

『いや、別に。多分、ゴロゴロしてるかな』

『そ、それじゃあ！ あ、あの、……い、一緒に行ってほしいところがあるんだけど……ダメ？』

『はあ？ なんでお前と俺が出かけるんだ。友達と一緒に行けばいいじゃないか』

『だ、ダメなの！！ だ、だってほら、私……む、昔の洋楽のCDが欲しくて。そういうの、トオルは詳しそうだから。そ、そんなの同じ歳の友達じゃ、何が良いのかわからないものっ』

『なんか遠まわしにジジイ扱いされてるみたいで、痛いんだが……』

『ち、違うもん、バカッ！ そんなんじゃ、ないもん！！』

『くくく……いいよ、わかったよ。じゃあ、ついでに俺の用事にも付き合ってくれ。そうしたら、メシくらいは奢ってやるからさ』

『エッ?! い、一緒にごはん、食べるの?』

『嫌か?』

『い、嫌じゃない! 嫌じゃないっ!!--!』

『ははは、わかったよ。別にそんなに興奮しなくなつて……』

記憶がうつすらと蘇る。

そうだ、きつかけは彼女でも、半分は自分が原因みたいなものだ。今更理由なんて思い出せないが、トオルの方から食事の誘いはした。何故だ? もう溺れかけの微睡みの中、答えは見付からなかった。ただ、もう一つだけ思い出したのだ。

この甘い香りは彼女のものだ。そう、どおりで心地よいはずだった……。

二十代の頃、一時期この辺りで働いていたこともあって、よく行くCDショップが何件があった。大きな店舗は買いたいものがすぐに決まっている時に行く程度で、むしろ小さなフロアーの一角にあるようなショップのほうが、スタッフの好みや品揃えにも偏って反映されていて興味をそそられた。その顧客を選ぶような潔さが、トオルは案外好きだった。

店の休憩時間にぶらつくにはもってこいの場所だった。ほかじゃ決して聴けないようなタイトルが視聴に入っていたし、ショップのスタッフはたまに食事に来てくれたりもしたから、彼はお礼の意味も兼ねて足繁く通った。そうしている間に、いつのまにか『友人』とまではいかなかったも『仲間』意識は芽生えていたのかもしれない。趣味が似ているおかげで、話しかけるとやたらとうんちくで返してくるショップのスタッフが退社するときには、全然他人にもかかわらず何故か送別会に呼ばれて、朝まで飲んで語った記憶もある。

そうして今、そんなトオルの馴染みのショップはもうどこにも残っていない。残ったのは自分の中で一番重要度の低かった、楽器の販売やスクールも開催する大店舗だけだった。時代はたったの十年くらいで変わる。今や音楽はネットで購入するものだ。店舗を構えてする商売ではなくなってしまった。

トオルはこの辺りに唯一残る店舗で、美純のために何枚かのCDを選んでやった。彼女は「あの日のこのくらいの時間に流れていたヤツ」とか「雨の日によくかかっているアレ」とか、かなり漠然と搜索対象の特徴を上げるのだが、その都度二人は四苦八苦して問題の曲を探り当てることになった。検証を重ねても美純が探す曲が本格的にわからないとき、トオルは思い切って彼女に歌うように指示した。美純は顔を真っ赤にして拒否するのだが、結局はトオルの説得に負けて二回ほど彼の耳元で小声で歌った。メロディーだけを口ず

さむように歌うその曲を、美純は多くても数回耳にしたことがあるくらいのはずなのに、彼女は見事なまでに一音も外さず漏らさず記憶していた。トオルはそのことに随分驚いた。

彼女の声は確かにあの日の瑠璃が指摘した通り、よく澄んでいて聴き心地がいい。正確なコピーでスムーズに響くメロディー。おかげでこの方法はいとも簡単に目的の曲にたどり着くことが出来る有効な手段だった。しかし、美純がどうしても恥ずかしがってそれ以上続けなくなったのと、他の客からの視線がなんとなく気になり始めたことでこの搜索方法はあえなく中止となった。考えてみれば、公衆の面前で急に10代の少女が一回りは歳上の男の顔に唇を寄せているのだから、その観点から見みるとこの方法には重大な欠陥があったわけだ。おかげでその場に留まりづらくなった二人は、最低限必要な用事だけ済ますとそそくさと店をあとにした。

店を出てからしばらくすると、どちらともなく笑いだした。顔を見合わせると笑いは止まらなくなっていた。自分達のことを伺い見ている買い物客の表情が幾つも思い浮かんだ。どの顔も見えてはいけないものを見たかのように目を見開き、そして目を伏せていた。トオルと美純はゆつくりと朱に染まり出す空の下、普段は決して揉まれることのない人ごみに揉まれ、巨大な交差点を何度も渡った。街の気配はビジネスとショッピングの行き交う風から、帰宅と交遊がすれ違う空気へと変わっていくように感じた。気が付くと街灯が煌々と点いていた。そんなものがなくとも街を照らす光りなんて、道路を挟んで左右に建ち並ぶビルの窓からの明かりと、頭上に光る二色のライトで十分なのに、だ。

トオルはふと、思った。彼らを見下ろす頭上のライトが、二つの色を駆使して人の心を支配している。街のあちこちにはびこるこの憲兵たちは、交差点の四隅で目をひからせ、人間の魂のスイッチを握っているようだ。赤く光れば人々は歩むのを止め、青の許しが出るまで一步も動くことなく立ち尽くす。たくさんの人々が行き交うこの街。同じだけ人々の感情や思惑が絡み合っているはずなのに、

誰の表情からもその本質を見付けられない。この街は無機質。行き交う人は魂を奪われた抜け殻みたいに同じ顔をしている。

トオルは、昔からこの街が嫌いだ。ここは人が留まるには冷たい。彼にとってここは、ただ立ち寄るだけの場所だ。

二人は人通りの多い場所から離れていった。ビルとビルの谷間にとどころ背の低い建物が見え始める。トオルはその中の一つを目指した。路面に落ちる暖かな光が見えた。街を照らす硬質の光とは異なる、人の体温を感じるような明かり。トオル達はそこに向かって歩んだ。ここには今や大企業やチェーン店が主力となった外食産業に、勝ち目のない戦いに身を投じる仲間がいる。自分と同じ数少なくなったレジスタンスの一人が、無機質な街から逃げ遅れた人々を匿うようにひっそりと居を構えている。この場所に店を構えて三年。12席ほどの小さなビストロのオーナーソムリエは、トオルがこの業界に入った頃からの友人である古沼平太という男だ。二人は時々こうして互いの店を訪れては生存を確認し合う、いうなれば戦友のような間柄だった。

「お。久しぶり」

「ああ」

来店してきた古くからの友人を見付け、平太は接客中だったテーブルから一端振り向いて声を掛けてきた。トオルは手短な挨拶で済まし、通り過ぎる。平太の顔はまたテーブルの客の方に戻り、トオル達は案内してくれる女性スタッフに従って彼の横を素通りする。

「あの人、知り合い？」

「ああ、結構昔からの。確か同い年だったかな？ 一時期、同じ店で働いてた」

「ふん……」

美純は不思議そうにしていた。

「もつとちゃんと挨拶とか、しなくていいの？」

トオルは案内された店の隅の席に腰掛ける。そして目線で向かい

の席に座るよう、美純を促す。彼女はそれに気付いて席に付いた。二名分の小さなテーブル席だったから、割に二人の距離は近い。

「別に。どうせ、そのうち向こうが来る。それにさっきはあいつが接客中だったからな」

「そうなの？　なんだか、物足りない再会だな」

「お客さんがいる場所では、そんなもんなんだよ。俺達の業界のマナーみたいなもんさ」

トオルはそう言っただけ。美純はそれでもまだ釈然としない様子だったが、トオルはあまり気にしないことにした。

二人の会話が一端途切れると、頃合を見計らったようにスタッフの一人が飲み物のメニューを持って現れた。トオルはグラスでシャンパーニユを、美純はフレッシュのオレンジジュースを注文した。待っている間、なんとなく二人の間はぎこちなかった。トオルは、普段『カーサ・エム』で彼女と会うのとは違う、ちよつとした違和感に戸惑っていた。話題を探しても大したもの浮かばない。

「あ、……あのさ」

美純が何かを言おうとした。しかしそこに、注文の飲み物を持って現れた平太が割って入ってきた。

「お待たせ。元気そうだな」

「まあな。そっちはどうなんだ？」

「こっちも問題なし、かな。店も三年経って少し起動に乗ったし、自分のにもやつとりズムを掴んだ、ってところか」

平太は目を細め、口元をニツとをやってみせた。そして持つてきたグラスをそれぞれトオルと美純の前に差し出す。が、その時になつてようやく彼は、トオルが連れている相手が自分の想定外存在だということに気が付いたようだ。

「お？　高校生？！」

「……………」

思わずこぼした平太の確認とも質問とも取れる言葉。自分の事を言われて、しかし美純は答えなかった。平太も美純にはそれ以上言

葉を掛けない。

「なんだあ、トオル。お前、家庭教師のバイトでも始めたか？」
代わりに向き直ると、トオルの方に首だけ傾けて言った。

「あのなあ、俺がそんなこと出来るタイプだと思うか？」

「おい、となるともうこれは……」

ちよつと考えるみたいに顎に手を当ててみせる、平太。そして今度は体を少しテーブルに寄せ、小声でぼそつと言う。

「犯罪……って事かあ？　なあ、トオル、知ってるか？　都内だと18歳以下に手を出すとだな……」

「馬鹿。この子はそんなんじゃない。それにその条例は都内だけじゃない」

トオルは虫でも追い払うように手のひらをはたはたと振り、平太の視線を遮った。

「ははは、知ってる」

「ちつ」

二人はそうやってしばらく『店員と客』の立場でさり気なく再会を楽しんだ。

「……とはいえ、俺の不信は拭えないぞ。ちゃんと彼女、紹介してくれよ」

平太は腕を組み、トオルを見据えた。観念したみたいな顔でトオルは答える。

「店の常連の子だ。この子のご家族にもよくしてもらってる。彼女のお姉さんの頼みで、今は食事の面倒を見るように言われてるんだ」
「……よく、わからん」

「説明すると長いんだ。だからもう、気にするな」

トオルは首を振って、手は『お手上げ』のポーズをしてみせた。

「俺はやっぱり、……お前には自首を勧めるべきかな？」

「だから、違うって言うてるだろう」

そんな二人のくだらないやり取りに水を差したのは、さつきからちよつと緊張気味に座っていた美純のくすくすと笑う声だった。

「ん。やっと笑ってくれたな」

「えっ？」

平太の言葉に、美純はちよつと不思議そうな顔をした。

「だって、女の子はやっぱり笑ってくれないとね」

「そ、そんなに固い顔してました、私？」

美純は今度はドギマギとして平太を見た。そしてすぐに視線をトオルに移すと、目顔で確認する。それにトオルは、わざと両方の人差し指で目尻を引っ張ってみせる。

「……こんなだった」

「う、うそっ?!」

美純は顔を赤くしてあたふたとした。平太がその様子をみて吹き出した。

「ははは、お前、悪い奴だなー」

そう言つて彼は遠慮なくトオルの背中を平手で叩いた。トオルは「うつ」と息を詰まらせる。実際、結構な力で叩かれたのだ。

「ね。大丈夫だよ、そんな顔はしてないから」

「ほ、本当ですか? ……うつうつ」

安心したのと同時に悔しいのが出てきたらしく、美純は恨めしそうな目でトオルを睨みつけた。トオルはニンマリとして彼女の視線を楽しむ。ところが突然、彼の視界の中から美純の姿が不自然な動きで飛び出していった。——というより、トオルの世界が大きく揺れて回り始めたのだ。見ると平太がトオルの頭をわしつと掴んで、ぐるぐると振り回していた。トオルは慌てて掴む腕を振り払おうとするが、彼はそれを物ともしない。そして平然と平太は美純との会話を続けた。

「いいかい、こんな奴の言うことを鵜呑みにしちゃダメだよ。こいつの性格は捻じ曲がつてんだ。たまたま、360°ピツタリで一回

転したから人の顔をして生きていられるだけで、中身はただの悪党さ」

「おい……あ、」

トオルが一言返そうとすると、平太の腕に力が入った。振り回されるトオルの頭が、回転数を上げた。世界がますます加速していく。「ところで、君、名前は？」

「あ……、美純です。四方美純といいます」

「そう。俺は古沼平太、よろしくね」

「は、はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

美純は平太の紡ぎ出す会話と魅せる表情に、自分でも知らぬ間に緊張を解いていた。彼女の表情はいつのまにかほぐれ、次第にいつものような自然な笑顔もこぼれ出していた。

「ああ、そうだ」

急に思い出した素振りで、平太は動きを止めた。そしてぱつと掴んでいた手を放す。おかげで振り回されていたトオルの頭はようやく開放され、彼はともかく項垂れた。

「……お前、な」

今度はトオルが恨めしそうにした。が、平太は悪びれた様子もない。おまけに彼はちよつと意地悪そうな顔になると、トオルに向かって平然と尋ねた。

「ご注文はお決まりですか、お客様？」

「……決まるか。もういいよ、お前に任せる」

「ははは、了解」

面倒臭そうに答えるトオルに、平太はあっけらかんと笑う。そうして今度は視線だけを美純に移すと、彼女にも訊ねる。

「美純ちゃん、嫌いなモノはある？」

美純はそれに首を横に振って答えた。平太は口角を上げて了解のサインを出すと、「ゆっくりしてってくれよ」と一言残し、二人のテーブルから離れて行った。

美純の目はしばらく平太の後ろ姿を追っていた。横顔にさっきま

での笑顔の面影が残っている。トオルはそれをぼんやりと眺めていた。そして思った。そういえば、こんなふうに同じ目線の高さで彼女と過ごすのは、あの日以来かもしれない。

美純と出会った、あの日の夜以来――。

これまで、自分と美純の関係はカウンターを挟んだ上で始めて成立するものだと思っていた。彼がよく通うハンバーガーショップの店員と同じ、店の外で出会えば逆にギクシャクしてしまうような関係。けれど、実際はそうでもなかった。確かに歳は離れているし、ちよつと違和感はあるが、かといって別に不自然というほどではない。奇妙な感じがした。うまく言葉にはできないが、彼女のことを許容するある種の感情がトオルの中にあるようなのだ。だが、その感情が何なのかは、彼自身もよくわからないでいた。

「ねえ！」

急に声を掛けられた。それでトオルはたとして声のする方に視線を向ける。すぐ目の前で美純が自分の顔をのぞき込んでいた。彼女は何度か呼んでいたらしく、トオルがなかなか気付かないことにちよつと腹を立てていた。頬をふくらませてむくれていた。

「乾杯、……しないの？」

美純は自分のジュースのグラスをトオルの前に突き出してくる。トオルはそれを見て、我に返った。息を吐くとそれは思いのほか深かった。一緒に肩の力が自然と抜けていった。どうも体に力が入っていたらしい。

トオルはゆつくりと自分のグラスを上げた。

「乾杯！」

「乾杯……」

美純はさっきまでとは打って変わった満足そうな笑顔をみせた。グラスを傾けるとジュースを一口飲んで、またさらに笑顔をこぼした。

「どうかしたのか？」

トオルが問いかけると、美純は小さく首を振って「なんでもない

……」と呟いた。その顔は随分と嬉しそうに見えた。

窓の外はもうほとんど夕闇の中に落ちていた。外の世界はライトの明かりに照らされた部分だけが、ポツカリと浮かび上がって見える。時折、その光の輪の中を横切る人がある程度で、辺りは随分と静かだ。人口過多の交差点はここからわずか数百メートルくらいしか離れていない。ちよつと思議な感じがした。

「ねえ、トオル」

急に美純がトオルを呼んだ。彼女は俯いたまま、問いかけてきた。「うん？」

「私達つて、……どう見えるのかな？」

「あん？ どうつて何が、だ？」

聞き返すが、しばらく美純は答えない。続く微妙な空気と沈黙。トオルはちびりとシャンパーニユを飲みながら、美純が再び口を開くまでの時間を待った。

「……………」

「おい、美純？」

とうとうトオルは呼びかけた。それで美純は顔を上げ、ためらいがちに言う。

「その……私達つて、さ。はたから見たら、お、親子みたいに見えるのかな？」

「はあ?!」

美純の言葉はトオルをちよつと驚かせ、だいぶ落胆させた。思わず出てしまった大きな嘆息のあと、トオルはやや不機嫌に言う。

「あのな、確かに歳は離れているが……お前にとって、俺は親父扱い。さすがにそこまで老けてないだろう？」

「ち、違つよつ！ そういう意味じゃなくて!!」

美純は両手をぶんぶん振って、トオルの言葉を全面的に否定する。それでもトオルの表情はむすつとしたままだ。美純はちよつと困った顔になってしまう。

「私、そんなこと、思っ てないのに」

その声はこころなしか悲しそうな音で響く。美純はポツリと眩き、顔を塞ぎ込んでしまった。それでトオルは大人気ない自分を反省する。

「美純、今のは俺が悪かった。ごめんな」

「うっん……」

美純は顔を上げ、首を振った。笑顔を作ろうとしたようだが、その表情は沈んだままだ。トオルはさっきよりも深く反省した。自分は何をそんなに不満に思っ たのだろうか？ 相手はひと回り以上も歳下の少女で、言葉に悪意はないのだ。トオルはもう一度、「ごめんと謝った。それで美純はようやく気を取り直したようだ。今度は口元をそつと微笑ませて、トオルの謝罪に答えた。

が、それからしばらくちよつと気まずい空気が続いた。自分の配慮のなさがそうさせたのだが、それをどうやって解消すればよいかとトオルは頭を悩ませてしまった。美純は一度笑ってみせたあとはずつと視線をテーブルの上に落としたままだった。じつと一点を見つめたまま。トオルはそんな彼女にかける言葉が見付からないでいる。居心地の悪い沈黙が続いた。トオルのグラスは、もうほとんど空になっていた。

ふと、美純の表情が固くなるのを感じた。肩に力が入るのが見てとれる。トオルの方からは見えなくても、その動く様子でなんとなくわかった。彼女が膝の上で拳を握り締めていた。美純は何かを言おうとしていた。唇が何度か開いては、躊躇して閉じるを繰り返した。そして随分とそうしたのちに、とうとう決意が言葉になって彼女の口をついて出た。

「ねえ、……トオル」

「ん、なんだ？」

「……………」

「なんだよ、一体？」

トオルはもう一度躊躇した美純の背中を押すように促す。それで

彼女は顔を上げ、言葉が続けた。

「あのさ、……平太さんって、昔からの知り合いってことは、トオルのことをよく知ってるんでしょ？」

「まあ、10年ちよつとは交流があるしな」

「そう……」

「どうした？」

美純は大きく一つ、深呼吸をした。表情は一層固くなって、瞳は真剣そのものだった。実際、身を乗り出しているわけではないが、まるでそうされているような錯覚さえ覚える、一種独特な緊張感を彼女から感じた。つられてトオルも息を呑んだ。落ち着かなくなつて、椅子の上の腰を少しずらした。

短い沈黙が、いつまでもずっと続くように感じた。トオルは膝を組み替える。視線を一度革靴のつま先に落とし、それからもう一度正面の少女に向けた。美純の視線はそのあいだ中ずっと、自分に向いていた。二人の視線が絡んだのを合図に、ようやく美純が口を割った。

「そんな、ね……トオルをよく知ってる人から見て、一体、私達ってどう見えてるのかなって思っ。て。そういう人が見ても家庭教師とか、身内とか、……私達二人ってそんなふうにはしか見えないのかなー、って」

「あのな、美純。違うぞ。家庭教師ってのは、あいつのくだらない冗だ……」

トオルの返す言葉を、ちよつと早口な美純の言葉が押し留める。

「……多分、」

彼女の目がトオルをじつと見つめてくる。ずっと深くを見つめてくる。

思わずトオルは唾を呑んだ。

そして――

「きつと私達……『恋人同士』とかには、間違つても見えないんだ

ろうなー、って……」

言っと、すぐに美純は俯いてしまった。

「……………は？」

思わず言葉を失ったのは、驚きよりも毒気を抜かれたからかもしれない。トオルの思考は、行き場を失って一旦停止した。

しかし、だ。トオルが彼女の口から出た言葉に啞然としていると向かいに座る少女の肩がくつくつと揺れた。最初それは小さく控えめだったが、次第に小刻みな震えに変わる。俯いていた彼女の横顔がいたずらっぽい笑みをこぼした。そしてとうとう全部が我慢できなくなっただのか、満面の笑みを浮かべてトオルの方を振り向いた。

「ねえ、私達って、ゼーっつったい、援交だと思われてるわよね？！ 大丈夫よう、私はちゃんとなんと否定してあげるから、ね」

「なっ……………?!」

トオルは再び絶句した。停止したままの思考が、彼女の言葉をうまく飲み込めずにあたふたとしている。美純はそんなトオルの表情に満足そうにニンマリとすると、もう一言。

「安心していいわよ、……………パッパッ」

「……………お前、いい度胸だな」

トオルは悦に入った顔の美純を斜めに見返した。テーブルに肘を付き、顔は仏頂面になる。次第にふつつと腹立たしいのが湧いてきた。こんな小娘に、自分は一杯食わされたわけだ。傾けたグラスが空なのが、ますますもって悔しい。

帰りの電車は帰宅ラッシュの少し後になった。座ることこそ出来なかったが乗るのもやつとというわけでもなく、トオルと美純はドアのそばに向かい合って立った。窓の外の景色は工場地帯に入っらしく、月明かりの下をシルエットの建物が流れ、過ぎていく。その様子を美純は横目でぼんやりと眺めていた。

トオルはちらりと腕の時計を見る。針は既に八時を回っていた。さすがにちよつと食べてすぐ帰るといふわけにもいかないとは思っていたが、ここまで遅くなるつもりはなかった。トオルは、なかなか帰そうとしない平太のスペシャルデザート攻勢に見事に釣られた美純を、ほんのちよつとだけ憎らしく思ったりもする。サーブスで出された何種類ものケーキが盛られた皿に、少女は満面の笑みで舌鼓を打っていた。あれで足止めされた。

けれど多かれ少なかれ、自分だって悪いのだ。実際、帰るつもりだったらいくらだって早く済ますことはできたはずなのだ。そこそ美純を理由にしたっていい。だが、そうしなかったのは自分だ。本当はまだ、話したいことはたくさんあった。それを思い切って店を出た。実際、自分にだって帰る気があったかどうか、あやしい。美純はそれを察していたのだろうか？ 自分から出ようとは言わなかった。

トオルは窓ガラスに映る彼女の横顔を盗み見る。美純は瞳を柔らかくして、闇に落ちた夜の風景に自分も沈んでいくみたいな表情をしている。

もし、彼女が自分に気を遣ってくれていたのだとしたら——それはちよつと嬉しかった。

「ん？」

ガラス越しの視線に気付いた美純がトオルの方に顔を向けてくる。

トオルはすぐに言葉が出てこなかったから、代わりに笑顔で返した。美純も同じように笑顔で応えた。それからしばらく二人の間には会話らしい会話は出てこなかったが、トオルは別に気にならなかった。沈黙の間に流れる空気が、思いがけず釣り合った天秤のバランスみたいにピタリとして自然だったからだ。むしろ口を開くほうが違和感がある気がした。

『まもなく、……駅』

車内にアナウンスが響いて、次の駅が近づいたのを知らせる。しばらくすると電車は速度を落とし始め、やがて駅のホームへと滑り込んで行った。今度は別のアナウンスが、二人のいる側のドアが開くのを告げた。スーツ姿の男性が立ち上がって、ドアに向かって歩いてくる。トオルは乗降客の邪魔にならないよう気を遣って、ほんの数歩だけ美純の側に寄った。

「あつ……」と美純が呟いたその一言で、途端に二人の間のバランスが崩れた気がした。

「どうかしたか？」

「う、ううん。なんでもない」

「そうか……」

それっきり美純は何も言わなくなってしまった。さっきまでの空気がまるで嘘みたいにギクシャクとした。彼女の視線が何かを探すようにあちこちを向いて落ち着かなくなった。その様子につられてトオルも何だか黙りこくってしまう。

扉が締まるのを待って体を離そうと、トオルは一步後退った。その時急に誰かに声を掛けられた。

「あら、こんばんわ！　こんなところでお会いするのは、初めてですね」

それほど大きくはないが、なのによく通る声。それに覚えのある声だ。振り返るとそこには、留利子が立っていた。彼女はグレーのスーツにラベンダーカラーのブラウス姿だった。

「えっ、……あ、ああ。こんばんわ、今、帰りですか？」

「トオルが咄嗟の返事で訊ねると「ええ、そんなところですよ」と、彼女はちよつと濁すように答えた。」

もう一言二言、言葉を交わすつもりでトオルは留利子の方に体を向けた。そのせいでさっきまでは彼の影に隠れ、留利子からは見えていなかった美純の顔が覗いてしまった。

「あつ」

「エツ？ あ、ああつ?!」

美純と留利子、二人が同時に驚きの声を上げた。それでトオルは『しまった』と思った。時刻は夜の九時近く。つい先日、同じような理由で留利子に釘を刺されたばかりだった。おまけに今日はうまく言い訳も思い付かなかった。これは正直に詫びるしかないな、とトオルは小さく嘆息した。

くつ、とシャツの袖を引つ張られて、彼は視線を落とす。そこには美純の顔が困ったような諦めたような不思議な表情をしてトオルを見ていた。その様子を見て『そうだ』、とトオルは思い直す。たとえ自分がこの場をうまく解決したとして自分はそれでいいかもしれない、けれど美純はその後で学校で留利子と顔を合わせなければならぬのだ。少しでも居心地の悪い思いを残さないようにするのが、彼女を連れ出した者としての責任のような気がした。トオルは美純に「大丈夫だ」と声をかける代わりに、ちよつと口元を上げてみせた。この場をやり過ぎすだけでなく、この場で解決する。留利子にはきちんと納得してもらわないと、とトオルは留利子の正面に立つように体を向けた。

が――逆に留利子はトオルと向き合おうとはしなかった。顔は笑顔だが、その奥には戸惑いのような色が覗いた。「それじゃあ、……」とはぐらかすように彼女は立ち去ろうとする。トオルは不思議な感じがした。いつもの彼女とは様子が違った……それはよく見ると身に付けるモノにしてもそうだった。主張のはっきりとしたピアスやネックレス、それに指輪の数も『カーサ・エム』を訪れる時よりも多い気がする。

その疑問を解決する声が、留利子の後ろから聞こえた。

「おいっ、座るぞ」

「あ。う、うん」

留利子の後ろに立った男が彼女に声をかけた。それにちよつと固い表情で笑顔を作つて答えた留利子は、その表情のまま振り返りトオル達に軽く手を振つて離れていった。そして三人掛けのシートに男と二人で腰掛ける。大股で体をやや投げ出し気味の男が1・5、そして留利子が0・7。二人掛けにはちよつと収まらない微妙なサイズだ。まあ、確かに周りにはトオル達以外、チラホラとしか立っている乗客はいないのだが。

留利子は時折男と会話を交わす以外、顔を上げない。じつと手元を見て、ちらりと男をほうを向く、を何度か繰り返しただけ。意識してトオル達の方には顔を向けないようにするぎこちなさを感じた。トオルは軽く美純の肩を押して言った。

「行こう……」

「えっ？ ま、まだ、着かないよ」

「いや、そうじゃない」

トオルは彼女の背中を押し、隣の車両の端に移動していった。美純は最初は怪訝な顔をしていたが、すぐに素直に従った。一つ見付けた空席に彼女を座らせると、トオルは吊革に掴まって黙り込む。美純がしばらく顔を覗いてきているのがわかつていたが、何も言わなかった。

代わりに美純が口を割った。

「噂で訊いたことがあつたんだけど、センサー、彼氏がバンドやつてる人なんだって。ドラムの人。インディーズらしいんだけど、この辺ではちよつと売れてるらしくってメジャーの声が掛かったこともあるとか、ないとか」

「ふーん、そうなんだ」

「でも……」

美純が急にムツとした顔をした。トオルは目顔でその理由を訊ね

た。

「〇〇ってバンド。私は知らない、聞いたこともない」

ぶうとした顔で隣の車両に目を向ける美純に、トオルは思わず吹き出してしまった。

「この辺じゃ、有名なんだろ？ 知らなきゃダメじゃないか」

「だ、だって……きよ、興味ないもん……、ロックとか」

「お前らの歳でそんな事言ったら、友達と話しが合わないんじゃないのか？ 『美純ちゃん、ちょっと変わってるよね……』なんて、クラスで噂になってたりな」

「そ、そんな事ッ！！ あっ……」

車内にいることを忘れて一瞬大声で反論してしまった美純は、反応して顔を上げたすぐ隣りや正面の乗客の視線を浴びて、しゅんとなつてと小さくなつてしまった。しばらくモジモジとしていた彼女だったが、周りがしんとなつてほとぼりが冷めた頃、恨めしそうな目を向けてトオルにもう一度不服を申し立ててきた。

「……そんな事、ないもん。……トオルのバカ」

さっきの二十分の一くらいの小声が精一杯抵抗をしてきた様子に、トオルはあまりに可愛らしく思えて、ついクスクスと笑ってしまうのだった。もちろん目の前ではさらに不服そうな顔になる少女が、鼻の頭に皺を寄せて異論を唱えるのだが。

それからしばらくは今日の事について話した。CDショップのこと、平太の店で出た料理のこと。けれどさすがに一時近く同じ空間にいとだんだんと話題も尽きてくる。そのうちひとつ会話が終わると、次の話題が浮かぶまでなんとなく二人とも無言になるようになった。その間も電車はどんどんと走る。やがて美純の降りる駅が近付いてくる。

「本当にいいのか？」と訊くトオルに、美純は何度も首を振った。それでもトオルは簡単には納得できなかったから「やっぱり、降りるよ。俺にだって遅くなつた責任はあるんだし」ともう一度説得を試みるのだが、変わらぬ。美純はまた首を振る。

「大丈夫。駅からだってそんなに遠くないんだし。心配しないで」
「そう、なのかもしれないが……」

立ち上がった美純がトオルの脇をくぐり抜け、そして彼の背中に回り込む。伸ばした両手でスツとその背中を押してきた。それは決して強い力ではないのだが、間違いなく彼女の口から出た言葉よりは固い拒絶だったので、トオルは押されるままに力なく膝を折られてしまうと、さっきまで美純のいたシートへと座らされてしまうのだった。腑に落ちない顔をしてみせるが、その表情をまじまじと見る美純に、最後の最後は笑顔の力で説き伏せられてしまう。

「ありがと、トオル」

音をたてて開くドアの方に後ろ足を一步踏み出して、美純は言った。その顔に少しでも未練のようなモノを覗かせてくれたなら、多分トオルも立ち上がることが出来た。けれど美純の顔は曇りない。

「気を付けてな」

「もう、センサーみたいに言わないで。まだ九時だし、降りる人だつてこんなにいるんだから」

「わかったよ。もう、言わない」

さすがにトオルもこれ以上の抵抗は出来なかった。顔の前で手のひらを振り、降参のサインのようにみせたと、それを見て美純は頷き、踵を返してドアに向かって歩き出した。

最後に一度振り返り、トオルに声をかける。

「今日は、嬉しかった。バイバイ」

そして美純は手を振って電車を降りていった。それっきり一度も振り返らない彼女を、トオルは扉が締まるまで見送った。

彼女の背中を追い越して電車がホームを抜けていく。それまで気にも止めなかった走行音がやけに耳に付いて、落ち着かない気持ちになる。トオルはずりつと腰をずらし、やや固い材質のシートに深く背中を沈めてみるが、彼の気が紛れるほどはシートは受け入れてはくれなかった。自身が降りる駅は美純が降りた駅とはたったのひとつしか違わないのに、何だか随分遠くに連れて去られて行く気がした。

不意にトオルは留利子の事を思い出して、もぞもぞと座り直した。そういえばすっかり彼女の存在を忘れていた。大事な常連さんなのにその扱いはあんまりな気がして、彼は苦笑いする。ちらつと横目で見ると隣の車両はだいぶ閑散としていて、その中で留利子と男が特に会話もない様子で座っていた。二人のそばには他の乗客は残っていないようだったから、その車両はまるで二人の貸切車両のようにも見えた。

他人のプライベートに兎や角口をはさむつもりはまったくないし、誰が誰と恋愛をしようとするのも自由だと思う。だけど何故かトオルには、今の彼女がそこにポツリと置き去りにされているように思えて胸が痛んだ。

視線を外して窓の外に目をやると、進行方向に少しずつ明かりの数が増えてきた。もうじき駅にたどり着くのが車窓に映る見慣れた景色でわかる。きつと、あの二人もこの駅で降りるはずだ。トオルは立ち上がると連結部分を渡ってもう一車両分彼らから離れる。扉が開いてからは足元に目を落としたまま改札を出た。他に用事もな

く飲み直す気分にもならなかったもので、それっきり彼は一度も振り返ることなく、早々に家路につくことにした。

よくよく考えてみれば、今や音楽はインターネットで買う時代だ。あらためて気付くまでもなく、当然のことだ。例えばCDを買ってみても、実際にそれを聞くときは一度パソコンに取り込んでからさらにポータブル・ツールに転送したりするわけで、そうするとひと手間増える事も含めて『物体』の価値は随分と低いはずだ。

ようするにトオルが考えたのは『アレは本当に必要だったのだろうか?』ということだった。帰りの道すがら聴く音楽を選曲している美純、それはネットからのダウンロードでも済んでしまうことだったんじゃないだろうか、と思うわけだ。わざわざ遠くまで出かけていく理由はあったのか、などとはまあ、今更言うことでもないだろうが。

二人で出掛けたあの日から数日が経っていた。美純が耳にする音楽に『カーサ・エム』で普段よく流れる曲が幾つか加わったほかは、これといって何も変わらない日々が続いていた。

「ごちそうさまでした。今日も、……ありがとう」

「ああ、気を付けてな」

「うん。また明日」

そう言つて『カーサ・エム』をあとにする美純の背中を横目で見送りながら、トオルは手元の皿を仕上げる。皮目をパリッと焼き上げたクロダイに、夏の清涼感のあるハーブのサラダを付け合わせたひと皿は、アボガドオイルのさっぱりとしたソースを垂らして出来上がりだ。

変わらない日々。

トオルのその毎日の一部に、気が付けばいつの間にか美純が入り込んでいた。彼女が『カーサ・エム』に出来ない日はもう家族と過ごす日曜の夜と定休日くらいだ。驚くほどに自然に溶け込んで、それがトオルにとっても違和感なく感じられるようになるまで、そんなに時間は掛からなかった。自分の半分しか生きていない少女を得体のしれない生き物と考えていたちよつと前では、彼女のような年齢の娘と言葉を交わすことなど想像もつかない『偉業』のように感じていたが、実際そこにたどり着いてみるとそれはただの『昨日と変わらない今日』のように当たり前のものとなっていた。そして多分、明日も変わらないのだと思う。

カラカラと扉につけたベルが鳴って、いつもと同じように来客を迎える。

「いらつしやいませっ」

「……こんばんわ」

その扉をくぐって入ってきたのは留利子だった。彼女もまた、変わらないリズムを自分のスタイルにする女性だ。ハイモローも作らず、平均点を少し越えた自分を維持することで社会に溶け込むタイプ。ただ、——今日に関してはちよつと事情が違つような気がした。何故なら、二週に一回のペースを守る自分へのご褒美に彼女が訪れた前回の来店は、確かつい先週のはずだったからだ。

「あれ、今回はあいだ、短かったですね」

「あ、……ああ。そうですね、前回来たのつて先週でしたよね？」

表情と反応、留利子が見せるちよつとしたぎこちなさや違和感に、トオルは直感的に何かを感じ取って敢えて首を傾げるような素振りをみせた。肯定も否定もしない曖昧な返事で返す。カウンターを出て、彼女の持つ手荷物を預かろうと手を伸ばすと、渡されるのは紙袋ばかりが幾つかあって、普段であれば身軽に訪れる彼女にしてはそれもまた不自然だった。トオルは彼女にカウンターの席を促し、留利子は黙ってそれに従った。

「シャンパーニュで、よかったですか？」

「あつ……」

顔を上げた留利子は一瞬考えるような素振りをみせたのだが、すぐに「はい、お願いします」と答えを返してきた。トオルはワインセラーの上段の棚にしまつてある留利子専用のハーフボトルを取り出して、栓を開けた。一旦そのままグラスに注ごうとして、ふと躊躇する。

「最初の一杯だけ、カクテルにしましょうか？」

「えっ？ …… あ、はい。何でも」

掴みどころのない微妙な返事をした留利子から顔をそらして、トオルは冷蔵庫の中から黒ビールを取り出した。そしてグラスの半分まで注いだシャンパーニュに、もう半分、ゆっくりと注ぐ黒ビールで充たしていく。

「どうぞ。ブラック・ベルベットって名前のカクテルです」

注ぎきる様子をなんとなく見ていた留利子がポツリとこぼす。

「シャンパンとビールのカクテルなんですね。嬉しい。泡のお酒好きの私には、もってこいのチョイスかも」

「そう言っていたければ幸いです」

呟く言葉とは裏腹に、ちっともすつきりとしなない表情の留利子をトオルは黙って見詰めながら、瓶に残った方の黒ビールを新しく出したタンブラーに注いでいく。

「あの…… そちらのビールって、どうなるんですか？」

トオルの手元に目を取られながら何気なく訊ねてくる留利子に、注ぎきったトオルが答える。

「これは、僕のです。ちょっと留利子さんと乾杯しようと思って、そう言つてトオルはグラスを彼女の前に差し出した。

「お疲れ様でした」

「あつ……………。ありがとうございます」

留利子はおずおずとグラスを差し出し、そしてトオルのグラスに重ね合わせた。しばらく眺めたグラスをゆっくりと傾け、最初の一

口をじつくりと楽しむと、一息付いてから呟いた。

「すいません、私、変でした？　なんだか気を遣わせちゃいましたよね」

トオルは肩をすくめて「いいえ」と軽く答えてみせる。ごくごく喉を鳴らし、彼はたったのふた口でグラスの中身を飲み切ってしまった。そして満足そうな笑顔をすると、その顔のまま留利子に向いて訊ねた。

「お腹、空いてますよね？　何か食べますか？」

「あ……。ええ、美味しいもの、食べたい」

留利子はそう答え、そしてようやく笑顔のようなモノを顔に受かべることができた。トオルは腕をまくるような素振りをしてひとつ頷くと、目を細めて言う。

「それ、ぼくの得意料理です。よく言われるんですよ、『あなたの作るもの、何でも美味しいのね』って」

「ふふふ。いいんですか、期待しちゃいますよ？」

そう言って彼女は、今度はやっと笑って答えられた。

ジャガイモと玉ねぎ、アンチヨビを使って温製のサラダを作る。

さっぱりとワインヴィネガーにオリーブオイルで味付け、上にはルッコラ（ゴマの香りのハーブ）と留利子の好きな生ハムを飾る。ルッコラは近くの農家さんから朝採りを分けていただいた物だ。新鮮で、その分香りが鮮烈。だから美味しいのだと教えると、噛み締めた留利子は目をキラキラとさせて頷いた。

まるでこっちが教師になったみたいな気分だ、とトオルは内心ほくそ笑む。

彼女から『リゾットが食べたい』とリクエストがあつたので、次のひと皿は小海老とズッキーニのリゾットにした。弱火にかけた米を、焦げ付かないよう絶えずかき混ぜ続ける。仕上げには緑がかった香りが特徴のトスカーナ産のエキストラバージン・オリーブオイルとミントで香りづけした。

「ミント……ですか？　なんだかガムみたい」

留利子は出された料理を、なんとなしに疑惑の目でもって見た。

「でも、結構美味しいんですよ。騙されたと思って、まずは一口どうぞ」

「はあ……」

半信半疑なまま口に運んだ料理を二・三度噛むと、留利子の表情が一転して、そして何度もコクコクと頷いた。感想を言うために飲み込もうと一生懸命咀嚼してる間も満面笑みな彼女からは、言葉で聞くよりも先に言いたいことが全部伝わってきてしまった。

「美味しいー。『なんでミントが』って思ってたんですけど、この香りがとっても料理と合うんですね」

「ナスとかズッキーニと、ミントの相性はすごくいいんです。イタリアではよくやる組み合わせらしいですよ」

「へー。目から鱗、です」

メインディッシュはお酒のつまみになるように、一口サイズの小さなカジキのグリルを用意した。トオルは実際のところ留利子がどのくらいの量を食えば満足するかはわからない。だからポリウームはあくまでほどほどに留めておく。

食べ終わった留利子はまるで胸にいつぱいになった満足を吐き出して、代わりに新しい空気を取り込むような大きな深呼吸を一回した。それからグラスに口を付け、しばらく余韻を楽しんでいるようだった。カウンター越しに見える彼女の瞳がウェットな光を溜め込んでいる。

やがて顔を上げた留利子が一言、「美味しかった……です」と呟いた。

けれど、それは何故か言葉の内容とは裏腹な、さっきまでの笑顔に比べると随分ぎこちない笑みと一緒に出た言葉だった。

もし彼女の口から出たその言葉が、ただの甘言ならばトオルも多分気にはならなかったはずだ。だがその表情は不自然で固く、作り笑いにしてはあまりに粗雑な出来だった。留利子の少なくなったグラスにシャンパーニユを注ぎ足し、食べ終わった皿を下げながら、トオルはほんのちよつとだけ視線を向けて彼女の眼を見た。

「もしかして今週……ちよつと嫌な目にあっちゃいました？」

「えっ?!」

「すいません、勘ぐるみたいな言い方で。でも、気になっちゃって」
「……………」

留利子はさっきまで両手で大事そうに持っていたグラスを『ことり……』とカウンターに置いた。今夜、何度もトオルを見上げていた視線は、一度落ちたきり一向に上がらなくなってしまった。そうになると、出ていった言葉を元に戻せるわけもなく、かといってもう一言をかけられる雰囲気でもなかったので、トオルも同じ様に黙り込むしかない。

一つ、二つ、洗い上がりのワイングラスをふき上げる。照明の光の下に掲げ、曇りがないか確認する。その作業のあいだあいだで、

時折ちらつと視線を留利子に投げた。が、表情は変わらない。ああ、これは触れてはいけない話題に触れたんだな、とタオルは自省の念にかられて視線を床に落とした。

そんな様子のタオルに気が付いたのか、留利子はちよつと慌てて首を振った。

「違うんです、ごめんなさい。……でも、私が黙っちゃったら気にしますよね。だけど本当に、なんでも……な」

そこまで一息に言つて、また彼女は黙ってしまった。一度見上げた顔は、何年も使い込んだ古い扇風機の首みたいにな、再び力なく項垂れてしまう。二人の間にはもとの沈黙の空気が流れた。

「あの……大庭さん。悩みの種はもしかして『アイツ』ですか？」

「えっ?!」

ふと思いついて言つたタオルの言葉に、俯いたままの留利子の肩がピクツと揺れた。

「アイツ……って、誰の……」

「いや、美純がまた何か仕出かしたのかな、と思つたんですけれど、違いました?」

洗い上がりの食器をすべてふき上げ、今度はそれを元の場所にしましながら、タオルは答える。そのうちにテーブル席のカップルが会計のために立ち上がったので、タオルは一度カウンターを出て二言、三言の会話で見送る。そして留利子を除くと最後のお客だった、彼らの使つたテーブルの後片付けを始めた。デザート皿とコーヒーカップ、それにグラスをカウンターまで運んでいく。

ちらつと壁の時計を見ると、もうじき閉店の時刻。タオルはテーブルの上をささつとふき上げ、けれどセッティングは見送つてカウンターに戻る。

「すいません、話の途中で」

留利子に向かい、軽く頭を下げてみせる。彼女の方は「いいえ……」と小さく首を振つて返してきた。

彼女のグラスの中身は、さつきから一向に減つていない。ボトル

の中身もまだ半分くらい残っている。口では否定するが、やはりいつもと様子が違った。トオルはもう一度カウンターを出ると、入口の扉に掛けた看板を『Close』に掛け替え、再びカウンターに戻ってきた。そして今度は奥に入ろうとはせず、棚から空のグラスを一脚取り出すと、セラーからは口の開いたワインのボトルを出し、用意したグラスにドボドボと無造作に注ぎ出した。そして留利子のそばでぐいっと一杯飲み干す。

「……あの、どうしたんですか？」

普段、余程親しい友人と二人きりでもない限り、トオルはカウンターの手前側で酒を飲む機会はない。それは彼の中での『スタッフとゲスト』の線引きみたいなものだった。だから留利子はトオルが自分の横で酒を飲む姿をみたことがない。何事かと、不思議そうな顔でトオルを見上げる。

「もう、お客さんもいらつしやらないし。じゃあ、大庭さんの話をちよこつと聞こうかな、と思つて」

「えっ？」

トオルは留利子の隣の椅子の背もたれに手をかけ、そして体を曲げて彼女の顔に自分の顔を寄せた。

「何か、ありましたよね？」

「あつ……」

「別に無理に言えとはいいませんけれど、その気がなければここには来てないんじゃないかな？ 僕は『相談にのります』なんておこがましいことを言うつもりはないですし、口は割と硬い方だと思います」

「……………」

留利子の目がじつとトオルの事を見つめている。トオルはしばらくその視線を受け止めたまま黙っていた。向かい合う彼女の瞳に迷いがあるのがわかったが、トオルはもうこれ以上説得するつもりはなかった。彼女にとって、今、大切なのは『吐き出すこと』だ。それには彼女自身が思い切る必要がある。トオルに促されて出る言葉

では、多分留利子の中のモヤモヤはしつこく胸に残るはずだ。

やがて『ふっ』と留利子の肩に入った力が抜けたような気がした。トオルは彼女の表情の中に小さな変化を見付けると、手をかけていた目の前の椅子を引き、そこにゆっくりと腰を下ろした。空になった自分のグラスにワインを注ぎ、今度はそつと傾ける。

——あとは待った。

彼女が口を開く……それをただ、じつと待つことにした。

「この間の、電車に乗り合わせた時のこと、覚えてますか？」

留利子の目が一度ちらつとトオルを向いた。彼が視線に気づいたのを見付けると、すぐにその視線をカウンター奥の方に逃がしてしまう。トオルはその視線の先を追いかけながら「ええ、覚えてます」と答えた。彼女はゆらゆらとあちこちに視線を投げたあと、さつきからずつとそのままだった自分のグラスにようやく目を止め、そして手に取って口を付けた。おそらく中の液体はぬるくなってしまったはずだが、彼女は気にした様子もなく二回、三回とグラスを傾け、そしてとうとう空にしてしまう。トオルは少し体を乗り出して、彼女のグラスをまた充たした。

「ありがとう」

ようやく笑顔らしいものをみせる留利子。トオルは軽く口角を上げて彼女の言葉に答える。

留利子の手元、15cmほどの高さのグラスの中を15cmの儚い徒花がたゆたい昇っていく。トオルはじつとその様子を眺めながら留利子の言葉に耳を傾けた。留利子は舌を湿らせたおかげで、次第に言葉数を増やしていった。彼女が話し始めたのは、あの時隣にいた男のことだった。

「私の彼は音楽の仕事をしている人間です。……決して有名ではないんですけど」

「美純に聞きました。プロのドラマーだ、って」

「うーん、メジャーデビューのお話を頂けるくらいではありませんが、

それってまだ『プロ』ではないですよ。でも、真剣に音楽に取り組んでいる人ではありません」

トオルは頷いた。初対面の、言葉一つ交わしたこともない相手だが、独特の雰囲気がある男だった。

「でも、ちよつと意外な組み合わせですよ。大庭さんと彼って。なんだか共通点を見つけられないっていうか……」

トオルの言葉に、ほんのちよつとだけ口を尖らせる留利子。

「あ。ごめんなさい、そういうつもりじゃあ……」

慌てて弁解するトオルの顔に、留利子は一転表情を変えた。片手で口元を押さえて吹き出すと、反対の手はヒラヒラと振って感心薄いのを露わにした。おそらく、ことあるごとに同様の意見に晒されているのだろう。なら、むしろ変な気遣いはしない方がいいのかもしれない。トオルは一旦呑み込もうとした言葉を、もう一度素直に口にすることにした。

「やつぱり……ごめんなさい。正直言うと、そういうつもりでした。だって大庭さんとは全然そりが合わないそうだし」

「あー、ひどいんだ」

「いや、『見た目』はですよ。彼とは話したこともないから、性格とかは知らないですし」

「ふふふ。じゃあやつぱり、見た目は全然合わないってことでしょう？」

留利子がちよつと身を乗り出してくる。

「い、いやあ……。言い出しといてなんですけれど、そういうのやめませんか？」

トオルは自分の掘った墓穴を埋めようと慌てて弁解した。その狼狽ぶりをまじまじと見ていた留利子は、さっきにも増して肩を激しく揺らした。

「私、シエフのそんな顔って初めて見るかも。私って、こう見えてちよつと意地悪なんですよ？」

「ははは、次から警戒するようにします……」

「くすくすっ」

留利子は小さな子供のよつに目を細めた。

やがて留利子の体を取り巻く温度がスツと二・三度低くなった気がした。笑っていた目元は静かになって、口は一本線みたいに結ばれた。顎の先のところにキュツと力が入って、彼女の口からもう出かかっている言葉を唇がせき止めている。

トオルのほうからは何も言わなかった。言わない代わりにグラスを何度も傾けた。ただ、その酒は酔うための物ではなかったので、喉に落ちていく量はほんの少しだ。グラスに残る赤いワインの輪郭は、何度傾けてもほとんど同じ高さで変わらない。

一息吐く。すると、開いた上と下の唇の間から言葉がゆっくりと押し出され、留利子が喋り出した。

「シェフの言う通り……私達、合わないかもって思い出してるんです」

「……お二人は、お付き合いされて何年くらいなんですか？」

「3年目、でしょうか」

「ああ、その頃って、ちょうど冷静になって相手を見ちゃう時期ですよ」

えっ？ とはてなマークの目でトオルを見る留利子に、彼はちょっと自信のないメロディーで歌ってみせた。その曲は昔の歌謡曲で、男と女が互いに浮気の弁解をするみたいな曲だ。留利子は笑った。それが歌った内容に対してなのか、歌い手であるトオルに対してなのかは、彼女の笑顔からはうかがい知れない。

「確かに時期的なこともあると思うんです。一緒に住み出してからは2年、だんだん相手の悪いところも目に付くようになってきました」
そう答えて、留利子は顎の周辺だけで微笑んだ。だが、目元に表情はない。

「でも……そういうのって、どんな相手とでも必ずあることですよ？」

「ええ。そうですね」

「『合わない』って思うのは仕方がないことなのかもしれないですけど、『合わせる努力』をしないといけない時期なのかもしれないと……すいません、僕、随分と偉そうなコトを言ってますよね？」

「いいえ。シエフの言うこと、正しいと思いますよ」

留利子は今度は振り向いて一度目を細めた。ただ、瞼の奥は笑ってはいない。天井からの照明、グラスに跳ね返った光、それらを全部吸い込んでも彼女の瞳は鈍い光しか放っていない。

「でも、それが合わせる努力なんかでは解決できない……根本的に正反对で、お互いがまったく歩み寄ることのできない『違い』だったとしたら……シエフならどうします？」

「たとえば？」

留利子は視線をカウンターの奥のキッチンの方に向け、何かを探すようにしながら「うーん……」と呟いた。ゆらゆらとさまよった視線は、冷蔵庫の扉の辺りに何かを発見してか、一度大きく瞬きする。

「食事は空腹を充たすためか、それ以上の満足を得るためか。二つの考え方の間にいくつも妥協点があれば歩み寄ることもできると思います。でも、そもそも二つがまったく別の——『善と悪』のような二者択一の関係だったら——歩み寄るとか、合わせる努力とかは可能でしょうか？」

「……あいだは、ないと？」

「これがただの事実と事実なら、きっとあると思います。でも人の価値観や思想、生き方になると……急にあいだはなくなっちゃうんだと思います。……私は、そうです」

そこまで言い切って、ふうつと留利子は息をついた。トオルはその横顔をのぞき込み、彼女の胸の奥にまだこびりついた苦衷の数々が一体どんなものか探り出そうとする。ただ如何せん留利子は口が硬い。月に一回は来店する彼女のプライベートを、その口から聞いたことはない。それは表情もかわりなく、ポーカーフェイスとはま

た違った真意を探りづらい顔をする。

「失礼を承知で思い切って訊きます」

トオルは体勢を捻って座り直すと、留利子に向かって膝を揃えた。
「……どんなところが、相手の方と合わないと？」

「えー、……ううんと、」

最初の『えー』は気のない返事で、あとの『ううんと』に続けて留利子は両腕を頭の上で伸ばして、胸の内と肩の上に溜まった支えを追し出す素振りで、トオルの問いに答えた。

「ほとんどお、かな。彼の言う言葉、生活の習慣、価値観……一緒にいると目に付く全部が合わない」

「は、はあ……はい」

出てきた答えに返すべきフォローが見付からず、トオルは思わず口籠ってしまう。

「深刻、っていうより絶望的でしょ。私、振り返ってみると感じたんです。『私達、よくこんなで今まで一緒にやってこれたな』って」

「それって、彼からの歩み寄りがないから……と？」

「彼、だけじゃないんです。私もそう。二人共、自分のスタンスを大事にするタイプだから、あんまり譲るとか受け入れるってことがないんです。例えば、さっきも言った食べ物のこと」

カウンターに向いていた横顔が、体ごとトオルのほうに向き直ってきた。両膝のところに行儀良く両手を添えたその姿が、なんとなく自分の学生時代に習った音楽の教師によく似ているとトオルは思った。ピアノを引いた後に向き直り、『〇〇君、ここを一人で歌ってみて』なんて言っているときとそっくりだと。もしくは教師という職業の方々は、みな同じような空気を醸し出すのかもしれないが、「空腹を充たすためか、満足を得るためか。うーん、でも、そんなにすれ違うほどになっちゃいますか？」

トオルが訊ねると、留利子は「それは例えで、そのまんまではないんですよ」と一言はさむ。

「以前、私がアレルギーの影響で食べる物に気を使っている、と申し上げましたよね？ 私は『口に入れる素材は安心な物を選ぶこと』が人間の体にとってとても大事なことだと思っています。自分にとってだけでなく、みんなにとって重要な事だと。だけど、彼は違うんです。『体が健康になると、感性の鈍化が始まる』なんて言います。食べるものはファーストフード中心。それって、でも私には絶対に理解ができないんです。……ホント、意味、わっかんない。だから二人で出掛けると、どこで食べるかで大抵ケンカになるんですよ」

「ははは」と、トオルがなんと返答したらよいか苦い顔で困っていると、留利子はその『間』を自分の会話のターンがまだ続いているのだと勘違いしたらしく、捲し立てる勢いでまた更に喋り出した。「この間の電車でお会いした時もそう。あの日はケンカして、結局何も食わずに帰る途中でした。機嫌の悪い彼に『教え子の前だから恥ずかしい態度はとらないで』ってお願いしたんですけれど、『上っ面だけ取り繕うような生き方を教えるのがお前にとっての教育なのか』って、逆に言い返されて。ああ、もうっ、色々思い出したら愚痴ばかり出てくる！ シェフ、もうこうなったら、とことん付き合ってもらいますよお」

留利子の口は一度動き出せばあとは坂を転がる玉のように喋り続け、トオルの立場は今や完全に聞き手側にまわっていた。彼女の言葉の間隙を縫うことは困難だったが、そもそもそんなことをする必要もなく、訊きたいことは全部、そうでないこともどっさり、留利子の口からはまるで分別されていない大量のゴミみたいに山ほどの言葉が溢れ出してきた。彼女はそれから延々30分近く、自分と彼の相違点を並べ立てた。最初のうちは打っていた相槌も、終わり頃にはどうでもよくなっていて、トオルが自分のグラスに注いだワインは、もうとつくに空になっていた。

頷けるところはたくさんあったが、首を傾げる事も少なくはない。何より感じるのは、互いの主張を曲げようとしない二人の頑固な面

それを価値観と言えば聞こえはいいが、実際のところはわがままでしかないような気もする。

「いい歳して……」と、何度喉元まで上がってきたか。

トオルはグラスにワインを注ぎ足し、留利子のグラスにも減った分のシャンパーニュを注いでからちよつと考える。正直なところ、このままお引き取りいただけるならそのほうがありがたいのだが、今の留利子の様子ではきつとそうもいかないだろう。頭を捻る。

「あの、ですね」

トオルがそう言つて切り出したのは、シャンパーニュの話だった。それはこの液体のちよつと変わったブレンドについて……。シャンパーニュというワインの多くが、普通はあまりやらない『赤い葡萄と白い葡萄のブレンド』で造るのだということ。それに『今年の液体と去年の液体』のように、異なる収穫年のワインを混ぜ合わせることも当たり前だということ。ようするに全然違う物同士が混ざり合つて、あの優れたワインが出来上がっているのだということを。

「ただ同じような物同士を混ぜるだけなら、その二つは自然に溶け合つていくのかもしれませんが。けれど、まったく違うもの同士が上手く混ざつたときにしかできない至福は、きつとある。それに……」

最後の一言と笑顔だけを残して、トオルは立ち上がった。キッチンにはまだやりつ放しの道具やら、今夜中に仕上げておくべき仕事が多々あった。彼がそれらに明け暮れるうちに、留利子だつてきつと帰るはずだ。彼女には帰る家も、待つ人もいるのだ。

「……どうして、人間つて自分に無いものを持つている人に惹かれるんでしょうね。でも、実はそれが生き物の本来の姿なのかな？

自分に足りないなにかで満たしてくれる、誰もがきつとそんな相手を自然と求めるのかもしれない。——正反対のもの同士は引き合う——これつてむしろ当たり前なことなのかもしれないですよ。主義とか価値観とかは、人が人を好きであることとは別の『自己』を形成する基準なのかなつて思います」

留利子はトオルのその言葉に何かを感じたのか、急にそわそわと

しだして、グラスの中の残りをススツと飲み込んだ。

帰りがけに彼女が口にした言葉。

「彼を好きになった時、私はまるで落とし穴に落ちたみたい感覚だったんです」

「落ちた……？」

「あんなタイプの人を好きになったこともないし、絶対好きになんかならないと思ってました。でも、好きになっちゃった。……足元が突然陥没して、真っ逆さまに落ちていくみたいに」

片手で垂直に落ちる仕草をしてみせた留利子が、そしてとうとう小さな笑顔をみせた。目の奥がちよっとだけ潤んでいるみたいな、そんな思いが覗く笑顔だった。

「恋は、落ちるモノなんです。だって私のこの恋はそうだった。そして気が付けば穴の底。もがいても、もがいても、私はきつとずーっと穴の底から出ることはできないのかもしれないね」

そう言う留利子に、トオルは小首を傾げる素振り言葉で返した。「多分……彼もそうなんだと思いますよ。お二人って、実は案外似ているのかもしれないね」

トオルの言葉に留利子は首を縦にも横にも振らず、ただクスクスと笑っていた。

その日は、いつもと同じような天気だった。

晴れてはいるが、時折日差しを雲が遮っていく。店の外は春の残りや夏の出来損ないが入り交じったような空気。朝のニュースは取り分けて大きな事件もない代わりに、この国の景気が先行き不安だと嘆く。デジタル放送に進化してからやたらと目立つようになった

女子アナの小皺とコメンテーターの多汗が、日本じゅうの人々と
つては目下一番気になるテーマで、『カーサ・エム』のランチタイ
ムは暇とも言えず、かといって忙しかったとも誇れるほどでもなく
ディナータイムの用意はとくに準備万端、なのに今夜の予約は一
件もナシ、だ。

そんな、今日。

いつもとたった一つだけ見付けた『違い』といったら、ディナー
タイムのオープン前に美純が店を訪れたことくらいか。普段なら
オープンの17:30を少し回ったくらいに来る彼女は、他の予定
がなかったのか今日はいつもより随分と来店が早かった。

「珍しいな。どうした？」

トオルの問いになんだか答えにならないような微妙な返事を返し
て、美純は今や自分の専用になったカウンターの席の前に立つ。

「なんだ、突っ立ってないで座ればいいのに。もうちょっと待つて
くれば、メシの準備だって出来るからさ」

「……………」

美純は答えなかった。それに座りもしなかった。トオルは最初は
食事の準備のために冷蔵庫やらオープンやらを弄っていたのだが、
そのうち彼女の様子にいつもと違う空気を感じて声をかける。

「美純？」

彼女の目はじっとトオルを見ていた。多分、後ろを向いたり屈ん
だりしたときも、美純はじっと自分の事を見ていたんだろうと感じ
させるくらいに、彼女の視線はトオルのところに固定されていた。
それがなんだか妙な緊張感があって、トオルは背筋をもぞもぞと
する。

「……………」

トオルは作業をしていた手を止めて自分も美純の目を見るように
した。彼女の視線には、なんだかとても硬い『芯』のような部分が
あって、それがカラダのあちこちに刺さるみたいでどうにも気にな
る。だからといって、やめるとも見るなとも言えない。正直、居心

地が悪い。

「おい、美純さん。どうした、また学校でなんかあったのか？」

トオルは何時になく窮屈になった空気を追い払おうと、茶化すつもりで美純に訪ねてみた。それに彼女は答えずに、ただ一度深呼吸をした。

「それとも腹減ったのか？ なんなら、今日は特別にリクエスト……」

……

「——トオル、あのね」

その日はいつもと大して変わらない、普通の日だった筈だ。

朝の占いも、天気予報も、彼にはなんの警告も送らなかった。Facebookの友達だって、大して『いいね』な内容は書いていなかったはずだ。100点満点の55点、いうなればそんな一日——

「私、トオルのことが……。いっぱい悩んで、こんなの絶対に辛いだけだって自分に言い聞かせようとして……。諦めようとして……。歳だってすごく離れてるのに、こんな気持ちになんて絶対ならないって自分の中では思ってたつもりだったのに……。でも、ダメなの。もう自分でもごまかせないくらいに、気持ちが大きくなってるの」

美純が再びしたその深呼吸は、吸い込んだ空気を全身に駆け巡らせ、そして彼女の身体のなかにある想いの欠片を一つ残らず集めてきたに違いない。でなければ17歳の少女の言葉にそれほどの重さがあるはずはないのだ。

——34歳の男が一言も返すことができずに、ただその想いに圧倒されるだけのはずは。

困惑も動揺も、それはずっとあとから押し寄せる津波のように、今の彼には縁遠い。この瞬間がまるで時間だけ止まったまま、空気や湿度や部屋に内包されている物質が全部、彼に想いの圧力をかけて身動きできなくしているみたいだ。

「私、……好きなの……どうしてもトオルが好き。ねえ、どうしたらいい？」

目に見えない落とし穴に落ちた少女が一人。
それ以外はいつもと大して変わらない——そんな一日。

—
O
p
p
o
s
i
t
e
s

a
t
t
r
a
c
t
.

『カーサ・エム』にはその日、珍しいお客が訪れていた。

一人はあの古沼平太だった。自分の店の休みを利用して、彼はこの『カーサ・エム』へ食事に訪れていたのだ。彼の住まいは日比谷線の入谷駅周辺で、この『都会じゃない街』まで足を運ぶには電車を乗り継ぎ2時間弱は掛かるはずだ。仮に車を使えばもう少し短縮できるのだろうが、彼はそうしない。平太はアルコールのない食事は一切摂取しないと公言するほどの酒の好きな男だ。過去に自身の運転で食事に出かけた話など聞いたことがない。

そしてもう一人は徳倉梨香という女性。彼女は隣に座る平太の恋人で、二人は幼い頃からの知り合い——要するに幼馴染がそのまま恋愛に発展した関係をもう十数年続けている。梨香もまたトオル達と同じ業界の人間だったから、トオルは平太と知り合ったのとはほぼ同じ頃から梨香とも面識があった。以前から平太と一緒に暮らしていると聞かされていたから、二人とも随分と長旅をしてわざわざトオルに会いに来たわけだ。それだけの労力がまさかただの『先日の礼』だけだとは思えない。それに平太達が纏う空気もまた、普段通りとはいえない妙なぎこちなさを感じさせた。

二人の恋人関係がちょっと特殊な事情の上でのつながりだということとは、トオルも随分昔から知っていた。男女が十数年も一緒にいて一度もその話題に触れたことがなければ、どちらかが同性愛者か妻子持ちだと疑うべきだ。まあ、当然、平太達にも過去に決断の時期はあったらしく、そしてその時に知った一つの事実と、その時にお互いがした二つの決心が、彼ら二人の今をしっかりとつなぎ止めている。

平太は家庭を築きたかった。親になりたかった。

そして梨香の方は非常に子供の出来づらい体質だった。

梨香の体のことを知った平太は、自分の理想を胸に仕舞い込もうとしたそうだが、妻になるはずの女にはそんな彼の決意などお見通しだった。なにしろ二人は子供の頃から一緒に育ってきたわけだ。誰よりも長く隣にいて、気付かないはずはない。そして梨香は自分がした一つの決意。

「子供ができれば、その時はあたしと結婚して欲しい……」

彼女は不妊治療を受けながら、敢えて未婚の母になる事を選んだ。平太はそんな梨香の決意を二つ返事で受け止めたと言っていた。彼もまた、誰よりも長く彼女の隣にいたのだ。

「一度決めたら絶対首を横には振らない頑固さ、一度決めたら絶対に成し遂げてしまう強さ。梨香って女はそういうすごい奴なんだ」

トオルはそんな事を随分前に平太から聞かされたことがあった。

あれから多分、5年は経っただろうか――

「なあ、二人でこうして来るなんて……」

トオルは自分のなかにある確信に近い答えを訊くために、平太達に訊ねる。その答えはやはり、思い描いた通りのものだった。

「ああ、出来たんだ。やっと、子供が。絶対にお前には二人で報告にしようと思ってさ」

「トオル、ありがとうね。それにいっぱい気を遣わせちゃって、ゴメン」

二人は、笑顔も涙も一緒にしたような表情でトオルに喜びを報告した。

トオルは胸にくるものがあつた。彼は当事者でこそないが、一番深く当事者達と関わっていたうちの一人だった。大変だったこれまでの過去も知っている。理解のない人間からの無神経な言葉に苦しんでいたのも。トオルの胸を鈍くて熱い痛みのようなものが襲う。喉の奥からこみ上げてくる思いが溢れて落ちないように、トオルは

一度天井を見上げる。

その喜びの輪に、横から別の人間が加わってきた。美純だった。
「ええっ、平太さん、赤ちゃんが出来たの？　すごい、おめでとう
っ！　あれ、でも結婚してるなんてあの時言っただけだったような…」

「美純ッ！」

事情を知らない美純をとにかく窘めようと、トオルはちょっと強い口調で言い放った。それを平太が割って入った。

「美純ちゃん、俺達結婚するんだよ。順番は逆だけどすごく幸せなんだ。だから、ありがとう」

平太は何事もないかのように言って、頭を下げた。美純は一瞬驚いたような顔をしたが、平太のみせる真っ直ぐな表情にすぐにいつもの笑顔を取り戻し、「いつ頃生まれるんですか？」とか「男の子と女の子、どっちがいいですか？」と、子供のできた夫婦に訊くお決まりの質問を始めた。平太と梨香も上機嫌でそれに答え、いつのまにか三人はまだ見ぬ赤ん坊の話で随分と盛り上がっていた。

ふと気付くと、こちらに向けた平太の視線がトオルを見付けて満足そうに微笑んでいた。その顔を見てトオルは思うのだ。彼はもう、何を言われても大丈夫なのかもしれない、と。父は誰より強いから。

トオルはそのまましばらく、幸せそうな二人とそれを羨む一人の様子を眺めた。三人の心からあふれ出た笑顔と笑顔が弾け合う。友人達のこんな満たされた笑顔は随分久しく見ていなかったから、トオルも嬉しかった。油断すると笑顔の合間から涙をこぼす梨香と、幸せと感謝の合わさったクリーム色で彼女を包む平太。戸籍上はそうでなかったって、二人はずっと昔から夫婦みたいなものだ。そんなこと頭では分かっていたくせに、トオルは胸がくしゅつとした。

——そしてもう一人の笑顔に目がいく。

たった今見せるにこやかな表情を、彼女はあの日以来トオルの前では一度も浮かべてはいない。本人は普段通りを装っているつもりなのだろうが、１７歳の少女に出来るのは精々いつのも自分を真似

るくらいだ。顔を合わせても、笑顔そのものを忘れてしまったかのようにぎこちない表情。そんなのはトオルだってどうしたらいいのかわからない。

彼は未だ美純の告白に答えを出してはいない。

トオルは考えたのだ。

歳上の異性への憧れなんて誰にだって一度は経験するものだ。けれど大概、想いは一過性のものでしかない。なぜならそれは『恋』ではなく、ただの『熱』みたいなものだからだ。流行りの病のように突然かかって、そしていつの間にか完治している……つまりは、恋よりずっと冷めやすいものだ。

美純の心の熱が冷めるまで、トオルは答えを先延ばしにするつもりだ。彼女が今一度考え直せば、きっと答えは変わる、そう思っていた。美純もあの日以降、直接その話題に触れることはない。だから彼女には悪いとは思うが、この件は時間と共にうやむやにしまうつもりだった。恋愛最盛期の彼女に対しては不満の残る結末だろうが、大人には大人なりの決着方法もあるのだから。

「そんなの、ダメだよ。絶対にダメ!!」

急に大きな声が耳に飛び込んできたのに驚いて、トオルは見ているように焦点の合っていないかった目を再び三人に向けた。瞼の両端にピリピリッと突っ張るような刺激が走り、大急ぎでピントが合う。視線の先にはさっきまで和気あいあいだった三人が、いつの間にか二人と一人に別れて立っていた。

「おい、美純。なにやってんだ?！」

声を掛けたトオルに対して、何かを言い返そうとした口元が一度引きつって躊躇し、次に尖る。振り返る前は平太に不満色の表情だったのが、トオルと目が合ってから恨めしそうにする。

「……………別に」

「別につて、お前、そんなに声を荒げといて、それはないんじゃないか……」

「トオル、ちょっと待ってくれ」

トオルの美純、二人のやり合いに進展しそうだったところに、すつと平太が割り込んだ。

「美純ちゃん、君が梨香の事を思ってそう言ってくれるの、俺は嬉しいよ。だけど、どうしたって上手くいかないこともあるって、君にだってわかるだろう？」

平太は諭すように静かに言うのだが、美純は何度も首を横に振った。

「『やつても無理だろうから、諦める』そんな理由で納得できない！ 私だったら諦めらんないよ、絶対。だって、自分のためだけじゃないもん。……梨香さんのため、みんなのためでもあるんだよ、平太さん」

「確かに、そうだが……」

「二人にとって大事なことだと、私、思うよ。諦めないでやってほしい……」

事態を飲み込めず茫然としているトオルを横目に、美純は一回りも上の人間に向かって説教でもするかのような勢いだ。平太と梨香が目パチパチと瞬かせ、１７歳の少女の顔を見た。そこには自分の発言に一寸の疑いも持たない少女がいる。——やがて梨香が先に表情を緩めた。

「平太、ゴメン。——やつぱりやりたくないな、あたし。だって、美純ちゃんに背中押されて勇氣出ちゃったよ。ねえ、お義父さんと、ちゃんと話そう」

「梨香……」

平太は彼女の言葉に最初は神妙な顔をしていたのだが、それでもじっと見つめる眼の奥の決意の光に最後は観念するのだった。

「わかったよ。……確かに、俺も美純ちゃんの言うとおриだとは思

うしな
「

そう言って平太は、美純の顔をじっと見つめた。

珍しいことは案外続くものだ。

今夜はほかの来客がなかった。おかげで食べたり飲んだりするのが好きな三人チームは、祝いの建て前で好き勝手飲み食いした。別にトオルだってそれを止めるつもりはないが、度が過ぎるのは腹立たしい。仕舞いに平太は自分でボトルを抜栓して飲み、美純は普段の自分に出される食事との差に不満を言い始め、梨香にいたっては味付けの講釈をつけられた。三時間近くそんな感じで辟易し、とうとうトオルはラストオーダー前に店を閉めてしまった。

「いいのかよ、閉めちまって」

平太が悪びれもせず言う。

「あのな。こんなに騒々しい客ばかりだったら、誰だって窓から覗いて帰るだろ」

「ちよつと、トオル。あたし達のこと貧乏神みたいにいつてー」

「自覚はないのか、不良妊婦は。酒を飲むな」

「あらー、最近はそういう考えばかりじゃないのよ。歳食って、頭固くなつたんじゃない？」

「ちつ……」

トオルは手際よくというよりざっくりと片付けを済ませると、早々に明かりを消し、面倒な客と共に『カーサ・エム』を出ることにした。

梨香と美純の二人は店を出たその足で帰路についた。残った平太とトオルが駅前の居酒屋で顔を突き合わせる。時刻は21:00過ぎ。店内は20代前半の客ばかりではば満席になっていた。

「お疲れさん、乾杯っ」

「ああ、おかげでクタクタだ」

「くくく、そう言っなよ……」

苦笑いしながら傾けたジョッキがたったの一口で半分以上減った。時代の流れはエコロジーだというのにつくづく大量消費な奴だなと、トオルは嘆息する。自分だってそんなに弱い方ではないが、相手は既にワインをボトル2本開けているのに、だ。もう少しハンを付けてから店を閉めるべきだったか、とほんのちよつとだけ後悔する。「いいのか？ カミさん、身重だろ。一緒に帰ったほうがよかっただろうに」

「バカ、あいつは世界一根性の座った妊婦だぞ。俺なんかより余程しつかりしているよ」

「ははは。まあ、そうかもな」

トオルは思わず笑ってしまった。平太の梨香に対しての認識は、大方、彼女が平太にもつ認識と変わらないのだろう。お互いがしつかりと自立していて、だから互いが「あいつなら一人でもやっていける」と思っているようだ。二人はともかくよく似ていた。

「それに、さ。あいつの方がお前と飲んで来いつて言っただぞ」

「ああ、そう。理解のある嫁さんだな」

目元の赤い顔で真剣にのぞき込まれても、真剣味に欠けるといふものだ。一体どこまでが冗談でどこからが本気なのか、酔っぱらいと素面の会話は境界線が曖昧で飲んでない方はやりづらい。しかし今のはどうやら本気の方だったらしく、平太は不満そうに鼻を鳴らした。

「バカだなー、お前。そんなんじゃないよ」

「ん……？」

「とぼけんな。お前さ、美純ちゃんと何かあったのか？」

平太の口から出た言葉。急に振られた展開にトオルはほんのちよつとだけ無言になってしまいが、不自然にならないくらいの間でなんとか言葉を返す。

「なんでだ？ 別に何も無い」

しかし平太の顔は疑ったままだった。

「あのな、俺達みたいな職業で鈍感っていうのは、飛ばない飛行機みたいに致命的だろうが。……それにお前は自分が思っているほど、ポーカークフェイスが得意じゃないんだよ」

テーブルに肘を置いてやや見上げるような角度から覗いてくる平太に、見下ろすような角度で及び腰のトオルはすぐに降参させられてしまう。付き合いが長いというのは、こういう時には圧倒的に不利な要素だ。トオルは抵抗するのも面倒くさくなって、くたりと頂垂れた。

深々と椅子に腰を落とす。気が付いたら思いつめたみたいな深い息をついていた。

「なあ、別に相談にのってやるなんて大層な事は言っていないから安心しろよ？」

「なんだよ、のっちゃくれないのか」

「お節介はタダでも、親切は別売りなんだよ」

「クツクツ……人の良さそうな顔してるくせに、えげつない奴だな」
「知らなかったのか？」

トオルはヒラヒラと手を振った。平太は歯をみせて笑っている。くだらない会話で話題の切り替えを狙ったトオルの意図は、しかしすぐに真剣な顔に戻る平太によって思い通りにはいかない。

「それはそうと、のらなきやならないような相談があるって口振りじゃないか」

「蒸し返すなあ。ないって、そんなもの」

面倒臭そうに答えるトオルを、平太の言葉が黙らせる。相変わらず、この旧友は腹立たしいくらいに鋭い。

「そうか？　俺はてつきり美純ちゃんに告白でもされたと思ってたんだが……」

「……………」

先程の失敗は活かされない。さっきよりも少し長めにできた沈黙を隠すように、トオルはワザと吹き出してみせる。

「ははは、お前なあ。一体、俺とあいつと幾つ違うと思ってるんだよ？」

「けど、……否定もしないんだな」

自分よりも上手な相手にトオルは舌を打つのだ。合わせていた目から何かを盗まれそうで、彼は慌てて俯いた。

「なあ、俺達みたいな職業で鈍感っていうのは、本当に致命傷なんだって。それにお前は自分が考えている以上に嘘や隠し事が下手だ」

「……………」

「言えよ。別に俺とお前、この業界で長く他人の酸いも甘いも噛み分けてきたら、今更自分のことで隠すようなこともないだろう？世の中には俺達よりもよっぽど不真つ当な悩みを肴に、5ケタの酒を空けるような輩がウジャウジャいる」

平太が上手い具合に口元をほころばせる。その表情は安心感に近いような甘さがある。こいつにだったら腹を割ってもいいと、初対面の相手にですら思わせる——この男にはそういう風格みたいなものがあるのだ。

「ちつ……………」

トオルはそれでも言葉を濁した。実際、こんなことをわざわざ平太に話す必要もないと感じたからだ。そんなトオルの様子に平太は、椅子の背もたれに掛けた片腕に顎をのせて、ゆらりと表情を動かすのだ。

「まあ、それはいいさ。でも、お前みたいな性格してると、はつきりYESともNOとも答えてないんじゃないか？」

憎たらしいくらいそのとおりの推測に、もう返事もできない。自分、自分が首を振ろうが振るまいが、平太は確信を持って会話を進めるはずだ。さすがのトオルも氣力が失せる。言い逃れのために軽く舌を湿らせるビールをあおると、差し替えるように次の一杯が運ばれてきた。酒を切らせば会話も切れる。そうさせないための平太の配慮に、彼はジョッキの底の5cmを飲み干さなければならなかった。おかげさまでほどよく舌は潤った。

「……ああ、確かに答えてないよ」

「んー、美純ちゃん、かわいそうにな。きつと精一杯の勇気でもって告白したんだぜ。まったく、モテる男くんは女の扱いが優しくないんだよ」

「こんなのは恋って言わないだろ。ただの憧れか勘違いの延長だ。大体、あいつと俺と幾つ違うと思ってるんだ」

「ははは、お前らしい意見だが……そんなのはお前の意見だ。あの子は違うってことだろう？」

「いいや、違わない」

トオルは首を振った。

「美純はまだ、ちゃんとした初恋だって経験してないんだと思う。こんなふうなのはダメだ。傷付くだけだ」

「なんで、そう思うんだ？」

「なんで、って……上手くいきつこないじゃないか、あいつと俺じゃ」

「なんで、上手いじゃないんだ？」

平太がニヤリと笑ったのがわかった。トオルは齒噛みする。たぶん今、自分は彼の思い通りに喋っているのだ。だが、動き出した口が止まらない。舌打ちする代わりにまた次の言葉が出てしまう。

「そりゃ……色々合わないところがあるだろう。歳だって違う」

「歳、歳、って年齢ばかり気にして、ジジイかお前は？ 第一、そんなになんでもかんでも合ってる相手は、逆に上手くはいかないもんだ」

「なんでもかんでも似通ってる家の旦那に言われたくないよ」

「ウチは特別だ……なんならあやかってみるか？」

平太がぐびつとビールを飲みきって言った。空になったジョッキを店員に見せて『もう一杯』のサインを送る。それから視線でトオルにも追加の有無を確認した。

「ノーサンキューだ。これっぽっちも羨ましくない」

トオルに言われて、平太はわざとらしく口角を下げてみせる。

それからしばらくの間、二人は無言で飲んだ。言葉数が減ると喉に落ちる酒の量も急に減った。傾けても傾けても、一向にジョッキは空かないのだ。それでもしゃべる気にはならないから、代わりに空っぽの口内へ酒を詰め込む。こうなってくると断ち切ったはずの悪癖が顔を出す。煙草がほしい。

平太を見ると、彼はぼんやりと入口の自動ドアの外を眺めていた。時計の針は進み、次第に入ってくるよりも出ていくほうが多くなっていた。店内は二人が飲み始めた頃よりも随分静かだ。トイレの後ろの席の客も立ち上がり、残っているのは奥の座敷に座る送別会らしきサラリーマンの団体とカウンターのカップル、テーブル席にひと組みだけになる。

開いた自動ドアが会計の終わった客を吐き出すと、そっけなく閉まる。

見送った平太がポツリと一言、呟いた。

「なあ……。お前、まだ真由子さんのコト、気にしてるのか」

「……………」

彼の口から唐突に出たその名前に、トイレは今日何度目かの無言になる。だが、今度は平太も無言だ。続く言葉がないから、また二人してビールを口にすることにした。ジョッキの底に溜まった最後の数滴を、砂漠で見付けた最後の水みたいに飲んだ。

やがて口を開いたのはまた平太の方だった。静かにゆっくりとした口調で彼は話し出した。

「俺はさ、美純ちゃんがどうか、本当はどうでもいいと思ってるんだ。でも、やっぱりお前の方は気になる」

「うん……………」

「人間はさ、体より先に心が死ぬ唯一の生き物なんだよ。でも体が死なない限り誰も弔っちゃくれない」

言ってから、平太は深く息を吐いた。

トイレは普段だったら鼻で笑ってやるようなセリフを言う友人をじっと見詰めていた。ただ今は何も言う気にはならない。それに多

分平太が言いたいのとは別のことだ。おかしなセリフも、遠まわしな言い草も、直接傷に触れないようにする彼の優しさなのを、トオルは知っている。

「生きている奴が幸せになろうとするのは罪じゃないと、俺は思うよ。でもその逆はダメだろう？　幸せになろうとしないのは罪だ」
そう言ってくれた平太に、トオルは頷けずにいた。

気が付くとそばには店員が来ていて、間もなくラストオーダーの時間であることを告げていった。それ以上会話も酒も続くことはなく、トオルは平太と店の前で別れて帰ることにした。手を振って駅に向かう友人の背中を見送りながら、彼はほんのちよつとだけ昔を思い出してみる。

けれど、上手く記憶が掘り起こされない。

自分の人生を大きく変えた人物のことも、一緒に過ごした時間の記憶も、時と共に少しずつ頭のどこかに埋もれていつてしまう。忘れようとして忘れられることではないから、絶対に埋没しているだけなのだ。

それでも——もし忘れてしまったのだとしたら……

それこそが罪だとトオルは思った。

この『傷』を『傷』だと認識し続けること。それが自分にとっての正義だなどと言ったら、平太にはきつと笑われるだろうなと思う。だが、トオルは未だそうすることでしか自分を生き続けさせることが出来なかったのだ。もしもその傷が癒えてしまふなら、トオルはきつとその場所をえぐるだろう。彼は、この先もずっと、彼自身を許すつもりはないのだから。

モカ色のドルマンスリーブに黒のブーツが、カウンターの向こう側でよく似合っていた。

瑠璃はスタイルがいい。そのせいかなんでも普通に着こなしてしまふのだが、とくにシックな色やデザインの服を着ると、こちらも思わず息を吞んでしまうくらいだった。まるで30代の大人の女の見本のような雰囲気。彼女自身もそれをよくわかつているらしく、ひと目に自分を晒すときに着ている服はどちらかというと落ち着いたデザインの物が多い。

「大体ね？　なんであたしがこんな目にあわなきゃならないのよ？」

「まあ、とりあえずは機嫌をなおしたらどうだ。そんな座った目で怒鳴り散らすと、どっかの柄の悪いオッサンみたい見えるぞ」

「ああん？　なんか言ったかしらっ」

「いいや、……別に」

落ち着いた雰囲気とは対照的に、荒っぽく捲し立てる彼女。憤慨の理由はどうやらここまで来るのに使ったタクシーの運転手の視線のようだ。

「言っとくけどね、あたしだって別に見るなって言ってんじゃないよの！　むしろ見られてもいいようにいつだって着るものには気を使ってるわけだし。容姿全般、自信だったらあるのよ」

「言っねえ」

瑠璃は舌打ちの代わりとばかりに、「あつたりまえよ」と言い放った。

「だけど見られ方ってあるじゃない？　チラチラ、チラチラ、バツ

クミラーからこっち見てきて……本ッ當うざったいのよ。おまけにこっちは折角決まりかけた契約が振り出しに戻って最ッ高に最ッ悪な気分だったのによ？ 『素敵なお洋服ですね。これからデートですか？』とか訊いてきてさあ、もう意味わかんないのよつ。『オヤジー、頼むから空気読め』って」

「運がないな」

「……運がないなあ？！ それで済ますのっ？ 冗談でしょ？ あたしのこのムカツキをアンタがどうにかしなかったら、これ、永久に残ったままになるじゃない？」

「どうせ明日の朝にはケロツと忘れてるんじゃないのか」

「馬鹿言ってんじゃないわよ！ カエルじゃないんだから、そんな簡単にどっか行ったりしないわよ」

瑠璃は奇立ちを真っ直ぐにモノにぶつけた。左手がバンバンと荒っぽくカウンターの上を叩いた。

トオルはたしなめる意味も含めて、瑠璃に見えている左側の顔だけ苦笑いしてみせる。

「……昔のお前に聞かせてやりたいよ、その言葉。馬鹿みたいに飲んじゃ、いつも翌朝にはスッキリした顔してたぞ」

「ちよつとお、アンタ、喧嘩売ってんの？ そんな昔の事はいいから、あたしに酒を売んなさいよあ。ほらグラス、もうすぐ空くわよ」

「空けてから言えよ」

「じゃあ、アンタ、空けなさいよ。あたし、それ、好きじゃないの。もう、いらないわ」

別に瑠璃は酔っ払って絡んできているわけではなかった。彼女は根っからの絡み症だ。たとえ飲んでいるものが水でも酒でも、同じテンションで喋り続ける。飲み会で『一人だけウーロン茶、なのにみんなと同じテンション』そんな奴が大概グループに一人はいるが、彼女がまさにそれだ。しかも、すこぶるタチが悪い。

「一体、何を飲むんだ？ ワインか、バーボン……軽い酒ってかん

じでもないよな」

トオルがカウンター裏の酒瓶を並べた棚をぐるりと見渡す。今の瑠璃の口を無駄に動かすための安くて強い燃料を選んでやろうとする。

「ああっ、そうだ！」

その時、瑠璃が急に大声を出した。店内にはカウンターのもう一人を除いて他に誰も居なかったから、音量に比べて驚いた人数は少ない。だが、トオルは振り向いて強い口調でもって言った。

「急にでかい声を出すなっ。他の客に迷惑だらう？」

トオルはジロリと睨みつける。しかし瑠璃は悪びれない。

「……『他の客』って、美純ちゃんじゃないじゃないのよ。そういうの、もっと繁盛してから言ってよね。逆に迷惑だわ」

瑠璃が目顔で美純に同意を求めていた。横に座った美純は、答え辛そうな顔をして笑っていた。

「ちよつともう、話を逸らさないでよー。言おうとしてるコト、忘れたらどうすんのよー？」

「うるせえなあ、だったら何処かに書いておけばいいだろ」

「ぶうー、そんなの面倒臭い」

「じゃあ、忘れる前に早く言えよ……」

トオルは瑠璃とのやり取りがだんだんと面倒臭くなってきて、返答が雑になる。ただ、相手はそんなことを気にするタイプでも、そんなことでめげるタイプでもなかったから、会話は彼女のマイペースなまま続いた。

「ねえ、トオル。あなた同じ接客業なんだから、代わりにあたしに謝る気、ない？」

「お前なあ、何、言ってんだ」

なんとなく予想通りだった内容に、トオルは頂垂れる。

「ねえ、早く、謝りなさいよ」

「瑠璃……。謝ってもいいが、今日は大人しく帰ってくれるか？」

「ハア？　なんで？　ここがあたしん家よ？」

「違うよな」

「うそお。……だって、あたしが主人であなたが管理人。日本にいない間はよろしくって、そういう話でしょ？」

瑠璃が両手を広げて不思議そうな表情をした。トオルはカウンタ―を乗り出して、その手をはたく振りをする。

「真っ赤な嘘を、それっぽく脚色するのはやめろ」

瑠璃は俯くと、小さく口元だけでほくそ笑んだ。「ちえっ」と小さな呟きが聞こえた。

「あ・とっ！ 自分ばかり嫌な目にあつたみたいに言うのもよせよ。どうせ相手の運転手に仕返し紛いの事をしているんだろう？」

「なんで、そう思うのよ」

トオルは胸の前で腕を組んで言う。

「お前のその口が黙ってやり過ぎすなんてこと、するはずがない」
確信を持って答えた。瑠璃はこういうケースで簡単に引き下がるタイプではない。まあ、そんなタイプだからトラブルにも事欠かないのだが。

「別におかしな事なんてしてないわよ。『トークの代金は払います』から、黙って運転してもらえます？』って、ちゃんとお断りしましたっ」

瑠璃の横で美純が抑えきれずに笑い出した。その様子を見た瑠璃はえらく誇らしげだ。

「なあ……一体、お前は何をしに来んだ」

「相変わらず、人を客と思わない失礼な奴ね、あなたって」

「そう、思いたいんだがなあ……」

「まあ、いいわ。あたしもただの冷かしだし。気にしないで」

美純の笑いが一向に止まる様子はない。

冷かしだというわりによく食い、絶え間なくしゃべるわりによく飲む瑠璃の、今夜の話し相手はトオルではなく美純だ。さつきから二人はカウンター席だからこそ許される醍醐味の一つを存分に楽しんでいる。隣り合った席で顔を近づけ合い、たまに小さくほくそ笑む。

時折チラチラとトオルの方を見るあたり、彼にだって自分が話題の種にはされてるのは薄々わかった。内緒話というやつは、している者同士には優越感を与えるが、傍ではされる者の胸をくさくささせるものである。

ただ、だからといってどうしたいというわけではない。というより、どうにかできる状況ではなかった。

なにしろ、こちらは伝票すら書いている暇もなかった。受けたオーダーは全部頭の中に記憶して、体の方はひたすらに慌ただしく動き回る。注文は前菜2品、パスタ2品に煮込み料理が1品の都合五皿。普通にやっていたら最後のひと皿が出来るのは30分以上あとになってしまう。だいぶ切迫した状況だ。

当たりハズレがあるから水商売というのだと頭では十分わかっているつもりなのだが、こういう場面にぶつかってやっと痛感してしまふあたり、この先きつと何年やってもその性質は変わらないのだろう。出来ることならば今日の忙しさを、先日の平太が来た夜と足して割ってやりたいが、水商売の神様はバランスという言葉の意味を大きな解釈しかなさらない。またいつかびっくりするほど暇な一日を作って、今夜の分を労ってくれるのだろうか。そう思うと、捻くれた気持ちでその日を楽しみにするほかない。

今はともかく切っては焼いて、切っては焼いてを繰り返し、目の前の料理を仕上げるばかり。トオルはカウンター向こうの二人の様子など気にする余裕もなく、全身くまなく使って作業に臨んでいた。

そうやって彼が一品一品を仕上げている間に、ほんのチラツとだけ見えてしまったのだ。

急に驚いた瑠璃の横顔が――

気にはなつた。けれど今はトオルのほうにも目の前のこと以外に意識を割く余裕はない。トオルは敢えて彼女のことは視界に入れないように作業を淡々と進める。

二種類のサラダを別々のボールを使い同時進行で仕上げていく。葉野菜だけのミックスサラダは出来るだけ野菜に刺激を与えないように優しく混ぜ、地ダコとアボガドで作るサラダのほうは逆にアボガドを崩すようにドレッシングと馴染ませ、盛り付けた。牛バラ肉の赤ワイン煮込みを付け合わせの準備が整うまでの間、オーブンの中に鍋ごと放り込んでおき、それとは別にソースの頃合が良かった順に形の異なる二種類のパスタをそれぞれ茹で始める。下準備が上手くいくと、仕上がりはあつという間だ。思い通りのタイミングで一品ずつが出来上がっていく。

アツアツのローズマリーの香りがきいたじゃがいもローストを添えて、煮込み料理を盛る。湯気と共に舞い上がるワインの香りが食欲をそそる。これが一連の最後になる皿だけに、飾り付けにも力が入ってしまった。自画自賛したくなるような会心のひと皿は、テーブルに運ぶ前から歓声が聞こえてきそうだ。

そしてようやく一段落だ。トオルは美純に出すコーヒーの準備を始めながら、自分は手元のグラスに入れてあつたワインをちびりと唇を湿らす程度に口にした。

フィルターの中、コーヒー豆の上に丁寧な湯を廻しかけ、余計な苦みを落とさないようコーヒーを抽出していく。慣れた手先にしたって、こればかりはいつもちよつと緊張する瞬間だ。『カーサ・エム』のオリジナルのブレンドは季節によって若干豆の種類を変えていた。夏に近づく今は苦みを抑えて酸味を加えるブレンド。味わいは素朴、香りは控えめ。立ち上るのはやや鋭角的なフレーバーだ。

いれたてのコーヒーを手にもった美純の前に立つと、彼女は何かを言い

たそうにして、しかしすぐにそれを呑み込んでしまった。

「……ありがとう」

次に出た言葉がそれだった。本当に言おうとしたのがそんな言葉ではないのは明白で、口元を尖らせ、息を吹きかけて冷ますコーヒーを見詰める彼女の表情は、なぜか悪戯の成功した子供のようなこそばゆい笑みをたたえている。

対して、隣の瑠璃の表情は驚きを精一杯に押し込めた笑顔だった。その顔は、トオルと目があう瞬間に笑みを完成させられるようにと、口角が身構えていたのが痛々しいほどにわかる。元来、思ったことが口にも顔にもすぐに出る女の作り笑いに、見ているトオルはせめて笑いを堪えることにする。

「なあ、もう一杯、飲むか？」

「え、ええつと……じゃあ、それがいい、かなっ」

そう言つて彼女が指さしたのはカウンターの奥の酒瓶の辺りで、漠然としたその言葉では一体彼女が何を選んだのかはわからない。トオルは体を瓶が並べられた棚のほうに向けて、瑠璃が指し示した瓶を探すフリをした。そうしてから、視線だけでちらりと彼女の様子を探ってみた。

瑠璃は、自分に向けられていたトオルの目がそれた瞬間、俯いていた。

肩だけが大きく一回上下する。

トオルは置いてあるバーボン・ウィスキーの中で一番メジャーな銘柄を取ると、ロックグラスに氷を詰め、注いだ。多分、酒の中身はなんでもいいのだ。

何かあったはずだ。美純との会話が原因だとは推測できるが、鼻っ柱の強さが自慢の瑠璃を憤慨も呻吟もなく消沈させる言葉というのは一体どんな内容なのだろうかと、トオルは考えをめぐらす。グラスの中のウィスキーをゆっくりとステアーし、氷とガラスがあたるカラカラと軽快な音を奏でて、同じように軽く答えがでるわけではなくて、トオルは結局それ以上推測するのを諦めた。

新しい酒をみたしたグラスを瑠璃の手元に差し出す。そのガラス底とカウンターの板とがあたる小さな一音に、まるでびっくりしたように顔を上げた瑠璃と偶然目があつた。

——あつてしまった。

その瞳の中にあるものをトオルがなんとなく察してしまったのに、勘のいい瑠璃がすぐに気付く。

急に眉間に皺を寄せた彼女は、おそらく本人が意識してそうしたわけではないだろう舌打ちを打っていた。そのまま唇を噛もうとして、その前にほんの一言だけ言葉が溢れ出た。

「こんな可愛い子に好かれて、自分はちゃっかり幸せに……」

それは明らかに無意識で呟いた一言だった。なにしろ口にした瑠璃自身がしばらくその言葉を自分の発したものだと思ひ出来ていなかったくらいだ。だが、そのことに気付いた瑠璃は慌ててトオルの顔を仰ぎ見る。

「……?!」

その瞬間、トオルの目から失われた物に、今度は瑠璃の方が気付いた。まるで重力によって真下に落ちてしまったかのようなトオルの無表情、その鼻と額の間にポツカリと二つの穴が空いていた。瑠璃のほうは自分のしてしまったことに動揺を隠せない。それが顔にびったりと貼り付いたまま、弱々しく首を横に振った。

「……ご、ごめん、トオル。違うのよ、そんなんじゃない……あれっ、あたし、何でこんな事言っちゃったんだろう？ 本当……ごめん」

美純が驚いて瑠璃の方を向いた。トオルと瑠璃、二人の間にそれまで会話なんてほとんどなかったから、美純からすれば突然瑠璃が謝罪したように思えたのだ。そのくらい瑠璃は体裁もなく必死に弁解してみた言葉を言った。どの言葉も、おおよそ彼女の口から出るには似つかわしくない言葉だった。

「……たとえ冗談だったとしても、お前からそんな事言われなくなかったよ」

「思っ てない……全然そんな事、考えてないの。ごめん、本当……違 うのよ……」

どこを見てるのかもわからないくらいに狼狽し、支離滅裂に喋る瑠璃と、まるで地面に転がる小石にでも話しかけるように冷たく言い放つトオル。横で見ている美純まで落ち着かなくなるくらい、二人の間には不穏な空気が流れていた。それは奥のテーブルから追加のオーダーの声 が掛からなければいつまで続いていたかわからないくらい、ジリジリと重く長い時間だった。

L e t b y g o n e s b e b y g o n e s . 昔のことは昔のこと

L e t b y g o n e s b e b y g o n e s . — 双城

真由子 —

トオルが生まれて始めて海外の地を踏んだのは18歳のことだった。

西ヨーロッパの大国スペイン。その中でもマドリッドに次ぐ主要都市のバルセロナ。

偉大な建築家達の造った歴史的にも芸術的にも重要な建造物が多いこの地は、ヨーロッパの中でも有数の観光地であり、毎日世界中から多くの人々を呑み込む、まさに人種の坩堝のような場所だ。空港に降り立つ人が多ければ、観光に留まらずその『人の数』の分だけ思いや事情があるのは当然だろう。しかし、多くの人々がこの地を踏み出すその第一歩は、まだ見ぬ世界への期待や興奮でいっぱいであるのは間違いない。

対してトオルにとってのバルセロナ第一歩は。

ここがまるで世界の果てだともいうかのような、追い詰められた思いでの一歩だった。

人生最後のチャンス——彼は自分の中で、そう決めていた。

日本からはフランス経由で約15時間。

これだけ離れれば生半可な気持ちでは逃げ帰ることもできない。

そうやって自分を追い詰めてこそ初めて、今まで出し切れなかった力が発揮されるような気がしていた。だから父親を必死に拝み倒して自分に大金を投じてもらった。言葉通りの意味で、トオルは背水の陣をひいてきたわけだ。

そんな決意での、第一歩。

彼はこの地にサッカーをしに来ていた。言葉にすると妙な感じだが、数百万円という大きな金額で開いた名門サッカーチームへの短期留学という扉をくぐることで、トオルは中学生の頃までの世代別日本代表に選抜されていた自分のような、『サッカーでの成功』をもう一度夢みていた。

もしも名門チームで日本人の選手が認められたとなれば、きっとマスコミや日本のプロチームだって自分をほっておけないはずだ。そのチャンスが自分には必ず訪れるはずだと、なぜか確信のようなものが彼にはあった。だから、この留学の話を耳にしたときに迷いはなかった。

高校の三年間は、正直いつて鳴かず飛ばずだった自分。公式戦で出場した試合は一試合もなく、だからといって正キーパーを務めていたヤツがぐうの音も出ないくらいうまくいったのかと問われれば、自分の目から見ればそれほど大差はなかったと思うのだ。でも、それがまた歯痒かった。『自分にも、チャンスさえあれば……』そんなふうに思ってしまうくらい、不完全燃焼のままに過ぎ去った三年間だった。

それまでのキャリアから、慢心もあつたのは確かに自分でも認める。だが、こんなハズではない。これで自分のサッカー選手としてのキャリアが終わるはずは絶対にない。

環境さえ……トオルの才能を見抜いてくれる優れた指導者さえいてくれれば、まだまだ自分は上にいけると疑いもしなかった。自分に才能は、あるのだ。絶対にもっと上手くなれる。

そう、思っていた。

まるで支払った対価の分だけ、何かが確約されているかのように。

しかしトオルの心は、練習中の衝突によって彼の右手首の骨と一緒にに本当に呆気なく折れてしまった。

いや、もしかすると心はケガよりも先にすでに折れてしまっていたのかもしれない。

言葉の壁は厚く高く、たった数ヶ月では乗り越えることは出来なかった。そのせいで練習中のチームメイトとのコミュニケーションはほとんど皆無。おまけに同世代の選手達はほとんどがトオルよりも体格にすぐれ、そして桁違いにうまかった。

それはそうなのだ。ヨーロッパでも有数のクラブ、たとえユースチームのレギュラーでなくとも所属する選手が冗談でも下手な訳がない。

『留学』なんて聞こえはいいが、実情はユースチームの隣の練習場を借りられるだけの散々な待遇だったのだ。けれどそれに文句を付ける気にもならないくらいに、どの選手をみても格上だ。トオルの技術では練習に参加したって足手纏にしかない。もしかしたらサブチームの別ポジションの選手がレクリエーションでする、『お遊びキーパー』くらいにだったら勝てるかもしれない。けれど自分の実力を思い知らされることはあっても、チャンスなんて転がってもこないのは誰の目にも明らかだった。

トオルはコーチから帰国して治療するよう勧められた。有り難いことに、そのやり取りを丁寧に通知してくれる係はいた。

グラウンドでもそうしてくれたなら、或いはこんなことにはならなかったかもしれない。トオルはそいつを恨みなくなる気持ちでいっぱいだったが、今更もうどうでもいい気もして趣旨無言でいた。

帰ると言わなかった。帰らないとも言わなかった。そうすることとでなんとか自分の居場所をつなぎ止めようとしていた。結果、宙

ぶらりんの自分が出来上がった。チームの練習には怪我で参加できない。かといって、行く宛もない。頼る相手もない。あるのは日本から持ってきた荷物と、ただ生活するためにあてがわれた寮の部屋……。

中身の空っぽになった彼に、この偉大な観光都市はとても冷たく、100万人以上にもなる、たくさん人間がこの地にはいるのに、思いを言葉にして伝えることのできないたったひとりの少年に、誰ひとり声をかけてはくれない。

医者が言ってることなど、トオルには一切わかるはずもなかった。なにしろ彼は生活に必要なものを買うにも不自由する程度の言葉しか喋れないのだ。『海外に行く医者と床屋で苦労する』と、誰かに言われた記憶が蘇る。目の前で行われている治療が、一体なんのためのどんな治療なのかも理解できないまま腕を突き出し、ただ言われた金額で会計する。

自分がそうすると決めたはずなのに今にも折れそうになるのは、こうなってしまった自分にたったの数日で心が耐えられなくなっている証拠だ。

クラブチームから紹介された病院で治療を終えたトオルが、くさくさした気持ちで寮へ向かって歩いている時だ。天気もいいのに道の端っこをトボトボと歩いている暗い少年に、いつもだったら話しかけるような人間はいないから、面倒を避けるつもりであえてそうしていたトオルが、なぜか突然声をかけられた。

「ねえ、ちよつとつ。あなた、日本人でしょ？」

普段、耳慣れない言葉を少しでも漏らさず聞こうとしているせいか、逆に理解できるものには頭がすぐに反応しない。呼び止められ

たのが自分だとも気付かず、ぼーっとしたままその場を通り過ぎようとしてしまう彼の右腕を、声の主が荒っぽく掴んで引き寄せる。

「何よ、シカトーお？ ……舐めてんの」

びっくりしてタオルが振り向くと、背中に届くくらいの長い髪が目を引く日本人の女性が、彼の腕をむんずと掴んで立っていた。タオルと目が合うと、彼女は腹立たしそうにフンツと鼻を鳴らした。

見ればはつきりとした化粧栄えのする顔立ち。体のラインの目立つタイトな黄色のタンクトップ。アピールしたくなるのもうなずける圧巻の胸。振り向いてすぐに目に入っただのは、その三つだった。

「ねえ、そうなの？ 違うの？ 私、別に暇じゃないのよ！」

異国の地にいるのに、突然母国語で捲し立てられるというのは、違和感のほうが強いの。彼女の言葉にタオルはちよつとびっくりして身を固くしてしまった。

そんな時だ。石畳にカコカコとサンダルの踵を鳴らして近寄ってくる人影があった。肩までの黒髪に柔らかな顔立ちの女性。みるからに華奢な体型と160cmそここの身長は、体格のよいスペイン人達とすれ違うたびに風に煽られたヨツトのようにフラフラとする。その女性は、タオルの向かいに立つ女性に体ごと『ドンツ』と追突すると、申し訳なさそうな笑い顔で何かを口にしようとして、しかしすぐに言葉を引っ込めた。どうやらタオルとのやり取りに割って入ってしまったのに気付いたようだ。

目の前で起こる事態に驚いた表情のタオル。こここのところの無気力な日常を過ごす身には、ちよつとした出会いも小さな事件のように思えてしまった。そんな無言で立ち尽くす彼の姿を、どうやら女性性は別の意味に勘違いしたらしい。

「ちよつと、瑠璃ー。また、いきなり日本語で話しかけたんでしょ」
彼女はそういつて相手の二の腕を小突き、口を突き出した顔でぶうとする。

どうやら、この二人は友人同士のようなのだ。

瑠璃と呼ばれた長い髪の女性が「えー」と迷惑そうな声で返事を

した。連れの女性の方がトオルの視線を一度気にしてから、瑠璃に向かつて小声でたしなめるように言う。

「この前みたいに、この子、チーノ（中国人）なんじゃないの？
多分言葉、通じてないよ……」

「ウソッ？！ あれえ、間違いないって思ったんだけどなあ」

瑠璃は振り返ったために額に落ちた長い前髪を右手でかき上げながら、先に驚いた顔になり、それから苦い顔をして目を細めた。連れの女性と目が合ってしまうとそこに自分への非難の色を見つけたらしく、なんとなくバツが悪そうに視線を逸らせる。既にトオルの存在には興味もなさそうで、連れの女性が真っ直ぐに向けてくる視線を受け流すのに忙しい。

連れの女性はしばらくじっと瑠璃のことを見据えていたのだが、そのうち首を横に振って「これ以上何を言っても仕方ない」と閉口してしまった。多分、普段から同じような失敗を繰り返しているのだろう。

晒されていた視線から開放されてホッとしたのか、おかげでようやく瑠璃の手から力が抜けて、トオルは開放されることになった。

なのに、だ。

そのまま黙ってやり過ごさなかったのが何故かは、実はトオルにもよくわからなかった。ただ、なんとなく口が動いてしまったのは、もしかしたら久しぶりに出会ったなんでもない日本語の会話に、心がホッとしてしまったからかもしれない。

「あ、あの……」

彼がそう言ったのに二人の女性が思わず飛び退いたのが、トオルは妙におかしかった。

そして「真由子お、あんたの方が勘違いしてるじゃない！ 日本人よ、この子」と見事に自分の事は棚に上げる瑠璃という女性を、ふざけたヤツだとも思えた。

なによりキョロキョロと言いつ探す目が、トオルの興味をひいた。顔のつくりはそれほど美人とはいえないが、茶色の大きな瞳が

くるくるとしているのが小さな子供の目のようで可愛らしかった。
「ええつと、ね……ははは、話の途中から入るものじゃないね。一つ、学びましたあ」

「なによ、それ」

「でも、ほらっ。目的は達成でしょ？」

「……まあ、そうだけど」

女性二人の間でのみ、会話がどんどん進行していく。トオルはよくわからないままに、そのやり取りを隣で傍観しているだけだった。しかし、友人同士の会話をまったくの他人が聞いているのもなんとなく悪い気がしてきたので、居心地の悪いその場をあとにしようかとした時、ふと彼の存在を思い出した女性に横顔でニッコリと笑いかけられてしまったのだ。

その屈託の無い表情に、トオルは思わずドキッとしてしまった。

「うるさくて、ゴメンね。それと、初めまして。私、双城^{ふたしろ}真由子。よろしくね」

そういつて真由子は齒をみせた。

「あ、ああっ……廣瀬トオルです。よろしく」

トオルがおずおずと答えると、真由子はそれだけで満足そうに破顔した。たかが名前を名乗っただけなのに、驚くほど目をキラキラさせてくるのだ。今まで、初対面の相手へそんな表情をみせる人間にトオルは会ったことがない。それにこの国へ来てからは親しい者など一人もいなかったから、笑顔というのはコミュニケーションを円滑に進めるためのツールくらいにしか考えられなくなっていた。

それなのに、である。

挨拶程度に違いない、それで会話は終わるのだろうと思っていたトオルに、真由子はもう一步近寄ってきた。

「廣瀬君は、日本から？ 出身は、どこ？」

「えっ、ええつと……」

その後しばらく続いた真由子の質問攻めには、ちよつと面食らった。ただ、不承不承トオルが答えれば、必ず彼女も同じ質問を自分

でも答えるようにしてくれたから、気が付くと彼女の出身地が九州だということも、年齢が自分より一つ上だということも、トオルは知ることになった。

ほんのちよつと話ただけで、トオルは真由子のことを随分と理解していた。そしてそれが、トオルがこの国に来て初めてした『本当の意味』での自己紹介らしい自己紹介だったのだ。

トオルが二人に声をかけられたのは、彼にしてみれば案外どうでもよい理由だった。彼女達は、日本でのイベントに置き換えれば合コンのメンバーを探していたようなものだった。ただ留学生の多い場所では、皆がたくさんの国の友人を増やすために、参加者それぞれが同郷の異性を誘い合ってくるのがノルマになっていることが多い。『女性は女性メンバーを揃えて』と決めてしまうと、他言語の友人が揃いづらくなってしまうからだ。若者なりの知恵である。

「それがね。瑠璃がいつも酔っ払って家に帰れなくなっちゃうから、結局毎回送ってもらう羽目になっちゃうでしょ？ そんなことが続くものだから、学校の男の子達にはみーんな断られちゃって」

「ねえ、瑠璃ー」と相槌を求めるような真由子の言葉に、瑠璃はそっぽをむいて鼻を鳴らす。トオルにしたら、そういうことは判断をする前に言つて欲しいと思うのだが、振り返った真由子の目が短く瞬いたのをみてすぐに理解した。この女性は、自分のしたたかさをちゃんと心得て使っているのだと。

「まあ、大丈夫だよ。これだけ失敗を重ねれば、いくら瑠璃だって同じ失敗は繰り返さないでしょう？」

「ねえ、瑠璃ー？」と今度は尋ねるように言うが、それには無言の一点張りだった。くすくすつと笑う真由子の目がもう一度短く瞬く。新しい表情には、ほんのちよつとの悪意がまじっているのに気付いた。

それでトオルは自分が新しい生贄として捕まったのだと自覚した。そしてこの生贄には逃げ出す勇気がないことを、真由子はきつと確信しているのだ。

トオルは二人に見付からないよう、小さく溜息をついた。自分は罠にはまった羊というわけか。

結局、その日は二人を送り届けることになり、トオルは見事に寮の門限を守れなかった。事情を説明したり詫びたりするのも面倒で、トオルは初めて一晩寮の門前で野宿をした。少し酒が入っていたこともあり、5月の夜は風さえよけられればなんてことはなかった。

ところが災厄はこれっきりでなかった。

その後もトオルは、たびたび二人に連れ回されるようになったのだ。

彼にしてもこの国に来て初めての同郷の仲間だったから、ちょっと嬉しくてアドレスを交換してしまったのが運の尽き。ほぼ毎日のように電話が掛かってきては、荷物持ちだのなんだのと呼び出される。骨折している右手のことを庇いながら両手いっぱい荷物を抱えさせられて、優しさの欠片も感じさせない彼女達に辟易させられたと思えば、通っていた病院を『ヤブだ』といってわざわざ別の病院を紹介し、最初の数回は付き添って通訳もこなしてくれたりする優しさをみせられたりもする。

不思議な感じだった。悩んだり、考えさせられたりするのが嫌で内に籠っていた自分の生活が、たった二人の女性の登場でめちゃくちゃに振り回されるようになった。それまでの人生、サッカーばかりでまったく女性に免疫がなかったからというのもあるだろうが、ともかく自分の思い通りにことが運ばない。一日だって自由に過ごせない。

それなのに、悪い気はしないのだ。流されるのがむしろ心地よかった。

考えてみれば、通じない言葉が怖くて何もせず、毎日立ち止まっていただけかもしれない。前にも、後ろにも動けずにいたのだ。けれど今は、慌ただしく振り回されることで無意識で動き回っている。トオルはなんだか今更になって、生活らしいことをしている気がした。

毎日、サッカーと寮の行き帰り。考えてみたら自分の生活は兵隊や囚人のようだった。自分はこの国にいただけで、この国で生活をしてはいなかった。それによろやく気が付いた。

「トオルは固いんだよ」

瑠璃は言う。

「この国じゃ、公務員だってそんなに固くないって。考え過ぎ。そんなんじゃ、息が詰まって死んじゃう」

「うるさいなあ、こういう性分なんだよ。それにお前は軽すぎる」
何度か振り回されるうちに、トオルは一歳年上の二人と敬語で話すのを禁止されてしまった。ただ、それに馴染むにはそれほど時間は掛からなかった。なにしろ、この二人が相手である。

「あー、始まった。事あるごとにそれ。なんか、真由子みたい」

「ちょっと、何、それ。私が悪いみたいじゃない」

カウンターの瑠璃を挟んだ向こう側から、真由子が首を伸ばして文句を言っている。

「私は瑠璃のことを思って言ってるんじゃない。そんなふうだと、いつか変な男に襲われちゃうわよ」

「そうされたいの！ でも、お呼びが掛からないの！ 一体どうして世の男共は、あたしの魅力に気付かないのよ？」

カウンターの上にだらしなく上半身を投げ出す瑠璃。ぶつかって倒しそうになる彼女のジュースのグラスを、トオルはひょいっと取り上げて救出する。一瞬遅れて、同じ動きをしようとした真由子の手が伸び、なにもなくなったカウンターの上の空を掴んだ。さっきまで瑠璃の体が遮っていた空間で、二人して苦笑する。

「瑠璃ー。多分、それよ」

真由子がたしなめるように言った。

「なに、それって」

目だけで真由子の顔を覗き込む瑠璃が、ぼそっと呟いた。口元を二の腕に寄せた、寝転んだ姿での声はくぐもって響く。

「わかってて言ってるでしょ？ それにわかってても絶対に直さないし」

「ううー、そんなことより早くスペイン人の男に抱かれない。それで出来ちゃった結婚して、この国に永住したいよお」

「邪悪なオーラが漂ってるんだよ。だから、男が寄り付かない」

トオルが言うと、今度はガバツと勢いよく体を起こした瑠璃が、遠慮なく睨んできた。

「あんたの働きが悪いのよ！ ちゃんとあたしにいい男を献上しなさいよ」

それにトオルは溜息まじりに答えてやった。

「無理だ。俺がいいと思えないものを、人には勧められない」

「あ、あつ、あんたねえー、ふっざけんじゃないわよっ！」

本気で掴みかかってくる瑠璃を押しつけながら、トオルと真由子は大笑いした。

二人のおかげで次第にトオルのスペイン語も上達していった。生活ではまず困ることはなくなった。わからない言葉があれば、その意味を自然に訊ねることができるようになり、おかげで自分から積極的にコミュニケーションを取りにいけるようになった。まったく参加しなくなったチームには立場上、顔も出せなくなってしまったが、代わりにこの国での生活は概ね順調だった。

そんなある日のことだ。いつものクラブでちよつと酒によった時、トオルの随分柔らかくなった心が、それまで押さえ込んでいた本音を真由子に、呟いてしまった。

「もう、サッカーは出来ないと思うんだ。……『諦めた』っていうのとはちよつと違うけど、囚われるのはもうやめようかと思う。頑張れば、プロになることは出来るかもしれないけれど、それも違うような気がしてきた」

「うん……」

相変わらずのハイペースで飲みきり、眠ってしまった瑠璃をソファーに寝かし付けて、トオルと真由子はカウンターで隣り合って話していた。

「あんなに好きだったんだけどなー。自分では全然気付いてなかったけれど、いつからか苦しくなっていたんだと思う。俺はプロでやっていけるほど、心がタフじゃない……」

そんな弱気なことをもしも瑠璃が言っていれば、真由子は決まっていたしなめた。しかし、その時の彼女は一つも苦言を言おうとしなかった。ゆつくりと優しく頷くだけだ。

「わかるよ……。好きって気持ちだけじゃ上手くいかないことって、いっぱいある」

そして真由子もこの時初めて、自分の胸の奥にしまっていた悩みをトオルだけに吐露した。

留学先の大学で出会った、同級生の瑠璃。彼女には誰がみても納得してしまうほどの芸術センスがあった。元来の勝気な性格もこの国ではうまく順応して、ここに来てからの短い間で芸術関係者にも自然に顔が売れている。自分もその世界を目指したくてこの地に来たのに、ここで得られたのは本当に実力のある者との違いをまざまざと自覚させられたことだけだ、と。

真由子は瑠璃に嫉妬していた。

「こんな事、瑠璃には言えない。別にあの子を恨むつもりはないけれど、恨むなっていわれたらイラっとするかな。だって、……私の方が、絶対、……真剣、なの、に……」

同じような悩みを持つ者同士が、異国の地で出会う。行き着く先は大体一緒だ。

トオルはこの日、真由子と関係を持った。

それが最初は互いを慰め合う行為でも、そこから生まれてくる恋もあるものだ。

——日曜日のスペイン人はとても怠け者なのだ。

これはトオルを含めた『日本人的な目線』だからこそ思うことかもしれない。

ただ、仮にヨーロッパ全体からみれば当たり前のことだとしても、今まで社会人や労働を経験したことのないトオルにすら怠惰だと思わせてしまうのは、彼が日曜はランチの場所を探すにも難儀するからなのだ。

日曜日のバルセロナはチェーン店のファーストフードと働き者の中国人、それと観光客目当ての値の張る店くらいしか食べ物を買っていないといっても、大袈裟ではない。

おまけに寮のコックも日曜は休みをとる始末。つまりは自分達で自炊するか、外で食べるかの二択を迫られるわけだ。

トオルだって、せいぜいカレーくらいなら作ることはできる。

ただ、この国で必要な材料を揃えようとしたら、多分そこそこの旨いランチが一回は食べれる。普通のやつなら二回行けるか行けないか、だろう。日本の食材は手には入るがやはり高い。そんな贅沢な食事は貧乏留学生にはまずノーだし、そうはいっても毎週毎週ナイフとフォークで安チャイニーズというのも味気なくて耐えられない。箸が置いてある店もあるが、そういう店は敷居が高いか値段が高いかなのだ。

新しい土地に数ヶ月も暮らすと、人間、自然とテリトリーのようなものが形成されるらしく、「そこから出るくらいなら馴染みのと

「ここで」と諦められる時期は、残念ながら一周してしまつたらしい。飽きつぱいのは日本人の気質のひとつなのだ。

「あー、腹は減つた……けど、食いに行ける場所のメシはどれも飽きたよ。空腹なのに何にも食べる気にならない……」

「あははは、お前の悩みは贅沢だな、トール」

斜め横に座る金髪のアランダ人の少年が、カラカラと笑つて言つた。トールはそれに天井へ向けていっぱいに広げた両手で答える。

起き抜けの体はあちこちの関節がパキパキと鳴つて、なんだか律儀に返事をしているようだ。

「おまけに眠気はたつぷり……。もう、このまま明日まで寝てやるうか」

「おいおい。明日の朝、お前が腹のへりすぎてベッドで死んでるかと思うと、折角の日曜が嫌に気分になるじゃないか」

「安心しろ。死ぬほど腹がへつたら、あくびでも食うから。ふ、わああ、と……」

寮のエントランス広間には中央にどかっと置かれた大きなテレビがあり、その周囲をぐるっとソファアが取り囲むように配置されている。ソファアは見るからに安物で、あちこち年季を感じるシミやら汚れやらが付いているが、案外座り心地は悪くない。たつた今のトールは、そのソファアに思い切り深く腰を沈めて、背もたれに丸呑みされた気分を味わいながら大あくびをしていた。

「確かに。腹の膨れそうなくびだ」

「だろ？」

カタコトの会話に少しづつ意思をのせることができるようになったから、一番最初にできた友人のフランクが笑つて言った。トールも同じように「にししっ」と笑つて歯をみせる。

こんなふうはこの国で気楽に過ごすことができるようになったのも、すべてはあの二人のおかげなのだ。

トールは二人に素直に感謝していた。

もうすでにチームの練習にはきっぱり出なくなっていたし、その意志はとくにチームの関係者にも自分の口から伝えていた。

向こうにとつたらトオルはお客の一人でしかない。料金は既に全額前払いだったから、払い戻しだなんだと揉めたり騒いだりしない彼は、さぞかし上品な客にでも映ったのだろう。おまけに面倒なヤツがひとり減ったぞ、と口ではさすがに言わないが、あの目の内はそんな感じだった。言語の違いはあっても、目が語る言葉のほうは万国共通なんだなと、その時は軽く思えるくらいにすでにサッカーから気持ちは離れていた。

寮の契約はあと二ヶ月弱残っていたから、親からの融資を食い潰せは期間いっぱいここにいられた。しかしそれはそれでやっぱり心が痛く、一度、帰国も考えた。けれど今のトオルには、深刻な悩みを抱えれば打ちあけることもできなし、共有して一緒に悩んでくれる人がいた。真由子は、そんなトオルに自分の希望もわがままも全部包み隠さずに、真っ直ぐ答えてくれる女性だった。

トオルにとって真由子はすべての意味で初めての女性だ。これまで彼は他の女性と心も体も重ねた経験はない。

だからすべてを許してくれて、すべてを与えてくれる彼女が、トオルのする決断のすべての基準になるのは必然だった。

「一緒に、いたいよ……私」

「ああ、わかってる」

そう言われれば、そうするためにどうすればいいかを考えるだけだ。そして自分にとっての最高より、二人にとっての最良を見つけ出そうとする。二人で思案して捻り出した方法があれば、それが唯一無二の選択肢に思えた。疑うことも、躊躇うこともなかった。

ほどなくトオルは、真由子が日頃からよく利用する食堂でアルバイトを始めることにした。

親の金を食い潰すのが嫌なら、自分で稼ごうと。

トオルの持っていたビザが学生用のビザだったことと、スペイン国内の失業率が高く外国人労働者の雇用に厳しい時勢を考えれば、仕事に有りつけたのは彼女の口添えがあったからこそだった。その小さな事実がまた二人の絆を深くしているようで、トオルはちょっと嬉しかった。洗い物に買出し、雑用と掃除。日々の仕事はきつかったが、それでも心が折れないのは彼女の紹介してくれた仕事だったからだろう。

あくまで口に出しては言わないが。いくら年下でもその辺のプライドはあるのだ。

月日は流れ、やがて滞在する寮との契約が切れる時期が迫っていた――

「トオルッ、ちょっと来なさい！」

ある日、トオルの働く食堂のマンマが指で彼を呼んだ。それに気付いたトオルは手元の作業を素早く済まし、足早にそばへ歩み寄る。

「はいっ。なにか？」

「実はあんたに相談があるんだけどさ……」

そう言った彼女の顔は片目をやや細めて、まるでトオルを値踏みするように見ていた。これまでそんな表情をすることのない人だったから、なんだか急にトオルは落ち着かなくなる。条件反射で一番最近の失敗はなんだったかと思わず振り返ってしまう。

「い、一体、なんでしよう？」

ちよっと怯えたのが顔と声に出てしまったらしく、それを見付けたマンマがかさず『びたーん』とトオルの左肩をはたいた。準備不足だったトオルの心臓が、激しく一回跳ねた。

「毎度毎度、ウサギみたいな顔をしないでくれ。捕って食おうなんて思っでないさ」

「は、ははは。すいません」

「まったく……こっちは、傷つくよ。私は肉食獣じゃないよ」

「……………」

トオルは思わず苦笑いを隠そうと俯いた。だつぷりとした腹とぬぼつと伸びた腕に、でれんと垂れてぴんとしたヒゲでも似合いそうな頬が特徴の、近所でも有名な『熊』みたいなおばちゃんのだ。おかげさまで今となつては見慣れたが、出会った当時にそんなセリフを聞いたら絶句していたに違いない。

そう油断していたら、脛をつま先で蹴飛ばされた。

「イテッ！」

「小僧は女心がわかつちやないね」

「いやっ、あの……スイマセン」

「馬鹿ね、そういうときは謝るんじゃないよ。いい男つてのは、時々黙るもんなのさ」

「はあ……………」

ニタツと貫禄のある笑みを浮かべたマンマは、トオルに近づくと無造作に彼の肩に腕を回してきた。さながらチームの監督が交代選手を送り出す際に指示を送るみたいに、肩組みのまま促されて二人は厨房の隅に移動した。二の腕がトオルの二倍くらい太い丸太のような腕だ。ずっしりと感じる重さに身動きもできない。そうだけでなくも蛇ならぬ『熊』に睨まれた力エルみたいな状況に、トオルは気がじゃなかった。脈が自然と早くなつてしまったのはそのせいで、背中当たっていたのがマンマの腹だと思つたら胸だったのに気付いてしまったからではないと思いたい。

「なあ、トオル。あんた、……今度コックをやってみる気はないかい？」

前置きもなく言われた言葉に、トオルは思わず「エッ？」と聞き返してしまふ。

振り返ったら目と鼻の先にセントバーナードみたいな顔があつてギョツとしたが、さすがにこの距離で顔色を変えるのはまずいと思い、心臓に力を込めてこらえる。あらゆる食材とたばこ口臭の混ざったような息が鼻先をかすめ通つていき、空気がないところより呼吸をするのがつらかった。

「コ、コックつて、……コックですよ？ えっ、いや、急にどうしたんですか」

「いやね、たまたまアルフォンソの奴が故郷に帰らなくちゃならなくなつてね。急遽、新しいコックを探さなきゃならなくなつたんだが、そうはいつてもきつとすぐには見付からないだろう？ だつたら、つて思つてさ」

「はあ」

大拔擢といえは大拔擢だ。

ただ、トオルは別に料理に興味があつてここで働いている訳ではなかつた。旨いものを食べることに全く興味がないかといえばそんなことはないが、作るとなればだいふ話は別だ。だからちよつと答えに戸惑つた。

「あんだ、この1ヶ月ちよつと、よく働いてくれたしね。みてると手先も器用だし、勘もいい。スジはあると思うよ」

そう言われると悪い気はしない。

確かに自分でも手先は器用だと思う。それに勘がいいのには自信があつた。曲り形にもつい最近まではゴールキーパーで一流を目指していたくらいだ。

自分の自信のあるところを評価されるというのは、ちよつと嬉しいものである。

まあ、新しいコックが見付かるまでのあいだくらいだったら、少しくらいはやつてみなくもないかなと、トオルの気持ちがふらつと傾きかけたときに、すかさずマンマがとびきりの条件を提示してきた。

「ただ、ね。コックやるならやるで、短い間じゃ困るんだ。そう、

最低でも1年くらいは居てくれないと困る。ビザはうまくことやるとして、……朝は早いし夜も遅いから、いつそのことココに住むつてのはどうだい？」

なんとなく軽い気持ちで話を聞いていた頭が、急に氷でも落としたみたいに冷静になった。トオルは今耳に入った言葉が、たとえ話や冗談ではないことを聞いたさずにはいらなかった。

「え？ えっ？ ココに……住んじゃっていいんですかっ？！」

「私と一つ屋根の下でちゃんと眠れる自信があるなら、一向に構わないよ」

「あります！ あります！ 大丈夫です！！」

思わず叫んでしまったら、またしてもマンマの平手で肩を叩かれてしまった。聞いたことのないくらい派手にびたんと音がしたが、別のことでいっぱいの頭には痛みの信号は届かなかったみたいだ。

「あんた、本当に失礼な奴だね。大丈夫って、どういう意味だい？」

「いや、いや、Si・Si・Si。やります、お願いします。ぜひ、やらせて下さい！」

「まったく……同居人としては最低の部類だね」

「いや、俺っ、頑張りますよ」

「迷惑だよ。頼むから仕事以外で気張らないでくれ」

「はい！」

マンマの表情がぶしゅうつとなった。

その時のトオルの頭の中を描くなら、多分、ダムで塞き止めていた水色の絵の具が風船のなかにいっぱいにした赤の絵の具を派手にぶちまけた時くらいに、シンプルで、爆発だった。くすぶっていた難問が世界じゅうの誰も知らない公式で、いとも簡単に解決されてしまったみたいな気分であった。

「やった！ ……いや、そうじゃないないっ。頑張ろう、頑張らなきゃ」

自分に言い聞かせる呪文を唱えるみたいに単語を口走り、そんな独り言すらスペイン語で喋るようになっていた自分にはまったく気

が付かない。隣でマンマがくつくつと笑っているのも目に入らず、
ともかく冷静になろうと努めるが、目下の大問題がなくなったこと
で感情の奔流が止まらない。

そんな彼を諷めるように、マンマの平手がぺしつとトオルの後ろ
頭を叩いたのだ。普段だったらありえないくらい、軽くて優しいお
しおきだった。

「しごくよ。覚悟しときなさい」

「は、はいっ。ガンバリマス！ ……いいやあつ、正直どうしよう
か悩んでたんですよ。どうやってこの国にとどまろうかなあ、っ
て。はあ、本当、ありがとうございます」

安堵した口から思わず本音が溢れる。

まだくつくつと笑うマンマがトオルの肩から腕を下ろした。これ
で話はおしまい、とその背中がいつているような気がした。トオル
はもう一回だけ喜びを噛み締めてから仕事に戻ろうと、顔の筋肉を
緩めたようにした。そこへ何故か、再びマンマから声をかけられた
ので飛び上がってしまった。

振り返ると、もう腹も立たないといった顔をした彼女がいて、ト
オルは申し訳ない気持ちになってしまう。そんな胸中が顔に出たの
か、今度はマンマは苦笑いになる。

「ねえ、トオル。あんた、ひとり合点するくらいがあるから、先に
言っとくんだけれどね」

「は、はいっ」

ふつと、そのマンマの顔から笑みが落ちた。真剣、というより冷
静に近い表情をしてトオルを見つめてくる。

「……真由子のことよ。別に、あの子の口からそういう言葉が出て
きたわけじゃないんだけど、あんたの滞在期間が残り少ないって
悩んでるの、悪いけど訊かなくなつてわかつちやうからね」

「……………、はい」

「だからちゃんと初めに言っておくよ」

そんなふうになり出されてしまつてトオルが神妙な顔をする、

マンマは逆に笑顔を作ってみせてきた。大事な話だけれど深刻にはならないでほしいという意思表示に思えて、トオルは心を柔らかくしようと努力して、彼女の次の言葉を待った。

「たまたま一人辞めた。たまたまあんたが私のお眼鏡にかなった。別に部屋はたくさんあったし、じゃあ、それであの子が幸せならって思っても、悪くはないだろう？　確かにそういう気持ちはあるけれど、だからって見込みのない奴を欲しいと思うほど、私は善人じゃないわ」

トオルは黙って頷いた。

その表情を確認したマンマは、それでももう一度念を押すように、ちよつと口調を強くして言うてくる。

「いい？　あの子の口からこうして欲しいなんて、絶対に言われてない。……信じてくれるかい」

「はい。……ありがとうございます」

「パーフェクト。いい返事だよ。やればできるじゃないか」

そう言うのと、今度こそおしまいとばかりに、マンマは高らかに笑い声をあげてのしのしと歩いていった。その後ろ姿はとても温かく、包容力を感じさせ、やっぱりでかかった。

これからもし毎朝、あの熊みたいな背中を起こしに行かなければいけないのだとしたら、結構な勇気があるなと思いつながら、トオルは概ね順調になったここでの生活を喜ばずにはいらなかった。

そしてこの喜びを、真由子と共有し合いたい。胸が高鳴った。

その日、トオルが事の次第を真由子に報告すると、彼女は満面の笑顔で歓声を上げた。もう丸一日たつぷりと、二人して蜜のように夢のように過ごし、抱き合った。

しかし……

トオルは真由子の笑顔をたくさん知っている。心からの笑顔だって何度も目にしているから、本当はわかってしまったのだ。

多分、彼女は知っていた。こうなることを。

それでもトオルが何も言わないのは、マンマのあの大きな背中への畏怖と二人への感謝の気持ちがあるからだった。

季節が一巡すると料理人は随分大きくなる。

3ヶ月もすると人との関係に慣れ始め、半年もすると店の事に慣れ始め、そして1年すると作ること事態に慣れ始める。それと扱う食材も季節が一周すれば大まかなものとは一通り手合わせしたことになるから、いっぱしとまではいかなくても半人前くらいの自信は持っているものだ。

「トオルー、あたしお腹すいたあー」

「そんなもん、勝手に食べばいいだろう？ メニューはどれにする」

「んぶうー、どれも気分じゃない……」

ランチメニューとにらめっこをする瑠璃に、トオルは渋い顔をする。

「そういう時は、食わなきゃいいんだよ」

「それは絶対無理なんだよねえ。実はもう、立ち上がれないくらいお腹……すいた」

「あのなら、一体どうしたいんだ、お前は」

急に瑠璃の目が、まるで獲物を見付けた猫のようにきらりと光った気がした。直感的にトオルは自分の一言を後悔する。瑠璃の顔が、思い通りにことが運んだ時に彼女がよくする、不敵な笑みを浮かべたように見えたからだ。

「それって、わがまま、訊いてくれるってこと？」

瑠璃はできるだけ丁寧に言葉を選んで言った。そういう時だけ彼女は、ことさら一言一言がゆっくりだった。そんな彼女の見つめてくる視線とたったの一言に、トオルはどうしてか背中に支えでも立てかけられたような気がした。

「うつ……まあ、出来る範囲くらいは、なんとか……」

「ホントッ？ やった！」

瑠璃は顔の前で手のひらをパンツと合わせると、小さい子のように明るく微笑んだ。しかしすぐに表情を変え、今度はそのままの手に頬を寄せ、小首を傾けると妙にしなっぽくして声を出した。

「実はあたし、今は絶対お肉の気分なんだけどー、鶏肉だけはダメなのよね。今日のランチって……なんとかはない？」

「あ、あのなっ……」

なんとか抵抗を試みようとするトオルに対し強く出てくるかと思いきや、瑠璃は呆気ないくらいに簡単に頭を下げた。

「ねっ、お願い！ マンマに訊くだけ訊いてみて。それでダメなら大人しく別のを頼むからさ」

「あ、くっ、なんで俺が……そんな事」

「一回だけっ！ 今日の一回だけだからさ！ トオルう、お願いよお」

甘えた声でせがまれる。そういう時の顔はいつも目一杯色っぽくするから、どうしても落ち着かなくなってしまうのだ。これをやられると、大抵トオルは反論できなくなってしまう。

「……………い、一回だけだからな。訊くだけだからな。ノーでも、文句言っなよ」

「サンキュ、トオル!!」

どうしてそんな笑顔を最後まで取っておいたんだ、というくらいの満面の笑顔で背中を押されたら、なんとかそのわがままを叶えてやりたくなってしまうのがトオルの悪い癖でもある。三回くらい深呼吸してから姿勢を正し、いざマンマに事情を説明しようとするのだが、話の半分くらいしか聞いてないうちにバンバン肩を叩かれてしまった。

「あんたに任せるから、食べたい物を作ってやりな」

そう言われて、なんでもなく済まされてしまった。

一年経つとまともに仕事している人間なら大概のものは見ているし、失敗も人よりすれば同じ分だけ立ち直ってもいた。イエスとノーの境界線だって、実地訓練みたいな中で臆気ながらに見えてきて

はいるから、本当に『たま』にだけれど自分の身の丈以上の仕事を任せてもらえるようになる。背伸びをすればやっと届くようなそれを、トオルはいつもの何倍も真剣になつて取り組むのだ。

「うーん、普通？ でも、まずくはないよ」

なのに、それをあつさりと切り捨てるあたりが瑠璃だった。

この国に来てから二回目の夏を迎えていた。

この一年が長かったとはトオルは思っていない。むしろチームにいた頃の数ヶ月の方が以上に長く感じていたくらいだ。苦痛に感じていたあの時間も、しかし今となつてはいい思い出だ。あれがあつたからトオルはこの国に来たわけだし、そのおかげで日本にいたら絶対にするここのないような色々な事も経験することが出来た。

サッカーを辞めたばかりの頃は、それが脱柵の象徴みたいに思えて二度と関わらないと固く決意したような気がするが、今はそのことにしてもずいぶん柔軟に考えられるようになっていた。もしまたなにかの巡り合わせで自分がサッカーをやることになったとしたら、多分精一杯努力するだろうとトオルは素直に思えた。ただ、今の仕事に追われる毎日に、その時間があるとは思えないが。

それでも不満はなかった。今のトオルは毎日が充実していた。息を吸って吐くことと同じくらいにここでの生活は当たり前で、それ以外は考えられなかった。

しかし、ここまで自分がやってきたことを考えると、或いはこの一年はとても凝縮した長い一年だったと言えるのかもしれない。トオルがこれまで過ごしてきた学生時代の毎日は、もつとずっとシンブルだった気がする。

だからだろうか。

それだけの密度の濃い時間が過ぎていれば、そんな些細なことは少なくとも自分の周りの人間には周知の事実だと、思い込んでしまっていたのかもしれない。

トオルは最初、なんでそんな話になっているのか理解もできなか

った。その話題の中心に自分がいることが、不思議でなかった。

その日はトオルが以前、真由子や瑠璃と出会うきっかけとなった留学生同士の集まりの日だった。真由子達が参加していた集まりは、少しずつメンバーを入れ替えつつも月に一、二回くらいのペースで不定期に開催を続けていた。

だがどうも真由子はトオルと付き合いだしてから、毎回その誘いを断っていたようなのだ。自身が働いている間の真由子の行動まで詮索することはなかったから、そのことをトオルが知ったのはつい最近のことだ。もちろんトオルがそんなふうに希望したわけではなかったけれど、だからこそ自分の意思でそうしてくれる真由子の想いがトオルはちょっと嬉しかった。

しかし、どうやら今回は断り切れなかったらしい。

真由子はそのことをトオルに告げるときにずいぶん申し訳なさそうな顔をして言っていた。

「ごめんね。今回だけはどうしてもって、押し切られちゃって」

決して謝られるようなことではないとトオルは思うのだが、そう言えばきつと真由子は否定するだろう。彼女のみせるその表情は、数センチのぶれなく真っ直ぐなトオルへの誠意を感じさせる。

だからトオルもあえて何かを言うのではなく、遅くなったとしても仕事が終わってから参加するから待っていてほしい、と真由子には伝えた。彼女の罪悪感全てを取り除くことはできなくとも、いくらかでも軽くしてあげられるならそうしたかった。トオルが短くとも場に参加し酒を飲むのなら、真由子も少しは気を遣わずに済むかもしれない。

特定の相手がいるからといって、他の異性と二人きりで飲んだり話したりすることに日本人は過敏すぎるのだと、この国にいると強く感じさせられる。そのことに関して、全世界とは言わないが少なくともヨーロッパ人はもつと大らかだ。

だが、その辺の文化の違いを真由子は上手く受け入れられなかったようだ。

トオルは思う。

そんな真由子がいいのだ、と。

仕事を終えて店を出たのが夜の11:00頃。向かった先はカタルーニヤ広場から海に向かってランブラス通りを少し歩き、有名な市場の二ブロック手前の小道を曲がってしばらく奥に行った場所にある、いつものクラブ。

店内に入ると入口近くに8席ほどのカウンター席、その奥にはテーブル席がいくつもある。普段はカウンターが近所のオヤジ共の溜まり場になっているのだが、今日は誰も利用していない。代わりに奥は肌の色、髪の色異なる若者がこつた返している。

いつもは労働意欲の薄いバーテンダーのサンチェスが寝起きみたいな薄っぺらい笑顔で迎えてくれるのだが、なぜか今夜の彼の視線は店の奥に釘付けで、トオルが来たことも気付かなかった。

客が居ようが居まいがいつだって下ばかり観ているサンチェスがそんな様子だということは、おそらく向こうにはよっぽど彼の好みの女の子でもいるのだろう。折角来た客そっちのけで女の子にこ執心なんて、これはちよつと許せないなど、トオルは片側の口の端を眉とを釣り上げて自分の考えに頷いた。

あくまで戒めのつもりだ。

サンチェスの背中に向けて、大きな声で「Holla!」と呼び掛けた。

「わっ、ぱっ、け……おおおうらあ……」

トオルの期待通りに派手にびっくりしたサンチェスは全身を大きく驚かせると、ともかく返事らしきものをして、次いでキョロキョロと周りを見回した。そしてそばにいたトオルがくつくつと笑う姿を見付けると、途端に彼は眉間に皺を寄せて慥然とした顔になった。トオルは当然、してやっつたりの満面の笑顔だ。

だが——そのサンチェスの顔が、なぜかすぐに表情を変えたのだ。

彼は急に困ったような苦い笑顔を作って挨拶をし直すと、すぐトオルから目をそらして横顔を隠すように俯いてしまった。ちらっと一度は何かを言おうとする素振りをみせたが、結局サンチェスの口から次の言葉は出てこなかった。

トオルはその様子を少し不思議に思ったが、だからといって彼を問い詰めてまで理由を聞き出すつもりにもならなかったので、軽く手を振ってサンチェスの前を通り過ぎる。

ふと、後ろからサンチェスに呼び止められた気もした。が、それを確かめようと振り返るより先に、店内の空気をビリビリと震わせるような低くて鋭い大音量がトオルを呼んだのだ。

「トオルッ!!」

地響きのような下からせり上がってくる声が聞こえ、トオルは慌てて声の方に目をやった。だが部屋に人が多いせいとかその声の主は見付からない。

「あんだ、ちよつとこつち来なさいよ。……早くっ!!」

再び声が響いて、ようやくそれが誰の声かわかった。

壁側の席のところに立つてる瑠璃が、こちらをじっと見ていたのだ。胸の前で両腕をがしつと組んだ彼女の表情は、なぜだか口調と同じくらいにとても険しい。もしトオルが近づいていかなければ、すぐに真っ赤になって向こうから迫ってきそうな気配だ。

「なんだよ、どうした?」

たった今来たばかりのトオルには瑠璃の不機嫌の理由なんてわかるはずもない。

ただ、どのくらい不機嫌なのかは簡単にわかる。瑠璃は頭の上から湯気でも出ているかのようにイライラのオーラを発し、眉はハの字を反対にしたみたいに鋭く釣り上げている。

「いいからッ、早く来なさいよ」

ピリピリと肌をかすめていく尖った空気、有無を言わせぬ圧力。

瑠璃はすぐ横にあった椅子を引くと荒っぽく腰を掛け、テーブルに片肘を突いてその上に顎から倒れ込んだ。一度「ふんっ」と大き

く鼻を鳴らす。

「ご機嫌をとるにしたって離れていちゃあ仕方がないわけで、ともかくトオルは瑠璃のもとに向かった。

店内を真っ直ぐ横切るように歩いていくと、なぜか周囲の学生達からただならぬ緊張感を感じた。ほとんどの視線が自分に集中しているのが肌でわかる。自分だけが理由を知らされていない奇妙な注目を浴びる不快感に身を振りたくなかったが、おそらくは瑠璃の癩癧の生贄になる哀れな男に向けられた同情の視線だろう。

そばに近付くと斜に構えた瑠璃の顔を覗き込んだ。瑠璃が目だけをじろりとこちらに向けてきて、その目がトオルの目と合うと彼女は顎の先で近くの椅子を指した。さも「座れば？」とでも言っているかのような仕草にさすがのトオルもちよつとムツとしたが、ここで声を荒らげたとしても事態は多分もつと面倒になるばかりだろう。小さな深呼吸一回で気持ちを静める。

「何をそんなに力り力りしてるんだよ？　ちよつとは落ち着けて」
「……………」

瑠璃の答えはない。

トオルは肩をすくめた。どうやら姫様のご機嫌取りはたやすくなさそうだ。大方、こうるさいイタリア人の男にでもしつこく言い寄られてご立腹なのだろう。なら一度その話題からは離れるのが吉だと、トオルは自分の目的のほうを口にすることにした。

「それよりさ。お前、真由子がどこにいるのか知らないか？」

「……………」

トオルはキョロキョロと辺りを見回しながら瑠璃に訊ねた。実はさつきから探してはいるのだが、なぜかここに居るはずの真由子の姿が見当たらなかったのだ。

「昨日、待っててくれて言っただけだな。ああ、もしかしてトイレか？」

言ってからトオルはトイレのある店の奥の方を見た。それにも瑠璃は答えなかった。

トオルの口から溜息がひとつ。姫様の口は閉じたまま。諦めてトオルが彼女の方に振り返ろうとしたときだ。

——ようやく彼も周りの空気の不自然さに気が付いたのだ。

店内がまるで津波の直前の海のような不穏な静けさだった。酒の席だというのにだれも喋らない。笑い声どころか雑談だってなく、静まり返っている。

「ねえ、アンタさ」

「えっ？」

けれどトオルはその時まったく気が付かなかった。目の前の彼女が噴火直前の火山のような危うさを胸に押し込めていたことなんて、ほんのちよつとだつて気付いていなかった。

「いつから……そうだったの？」

体に収まり切らなくなった感情が呻きのように彼女の口から押し出され、かすれた小さな声になる。

「えっ、なんだつて？」

トオルに悪意はこれっぽっちもない。ただ……ただ、聞き返しただけだ。

しかしそれが相手にとってみたら、まるでとぼけているように聞こえる場合は、確かにある。

激情の溶岩は火口を突き破る。

「どうして……どうしてあたしには一言もつ……なんで、黙つて……」

「瑠璃、どうした？ 何があつた？ お前……」

トオルが不審に思つて顔を近付けた瞬間、噴火は始まつた。

「あたしは！！ あたし……あ、うううッ」

「おい、瑠璃？」

「やめてよっ、触らないで……」

トオルの伸ばした手が何かに当たつて強く弾かれた。一瞬何が起

こったかわからなかったが、じわじわとそこから伝わる冷たい物と熱い物を一辺に押し当てたみたいな刺激で頭が我に返る。

トオルの手は、瑠璃の振るった腕にはたかれたのだ。

彼女は急に立ち上がり激しく腕を振るったせいで、勢いよく体をテーブルにぶつけた。丸テーブルが上に乗っていたグラスごと勢いよく横倒しになる。大理石の床とグラスと木の角が当たって、ガラスだけが甲高い音を立てた。

誰かが息を呑み、誰かが上擦った声を出した。

トオルは——ただ、その床の上の惨状よりも目の前の瑠璃の表情に息を呑んでしまっていた。

彼女は一粒の涙もこぼさないまま、泣いていたのだ。

「る、瑠璃……」

「……………どうして？」

「えっ」

「ねえ、どうして二人共、あたしには隠してたの？」

彼女の言葉の意味がわからない。

だが、訊ねることもできない。

トオルの目に映る瑠璃の姿は今にも力なく座り込んでしまいそうで、とても声をかけられるような様子ではなかったからだ。彼女が吹き上げていた感情の熱い溶岩は、急速に激情の『赤』から悲愴な『灰色』へと色を変えていった。

涙は瞳から流れ出る代わりに、思いを押し込めた心の中に静かな雨を降らせたのかもしれない。雨は彼女の情動を洗い流し、その目に宿っていた激しいものを文字通り色を失うように鎮火させていった。

「いつから、なの？ ……ううん、そんなんじゃない、………なんで、真由子なの？」

彼女の目に最後に残ったものは、一体なんだったのだろうか。

「ねえ、なんで……」

それがなにかなんて、トオルはもう考えてはいなかった。

トオルは直感していた。

今、何をしなければいけないのかを。

さっきからそばで立ち尽くしている顔の中で見覚えのあるフランス人の男を見付けると、近づいたのか掴みかかったのかもわからないくらい、ともかく必死になって訊ねた。彼がトオルの形相に怯え、かすれた声で答えるのを半分も聞かないうちに、トオルの体はもう店を飛び出していた。

「真由子っ！」

携帯電話は継らない。

どこへ向かったのかもわからない。

それでもトオルは走った。辺りを見回し、彼女の背中を探し、自分の直感を頼りに駆ける。

立ち止まっていたって彼女が見付かるわけではないのだ。

それに止まることなど出来なかった。

そんなことをすれば、途端に膨れ上がった不安が彼の胸を押しつぶしてしまう。

「真由子……どこに」

不安や焦りや悲観的な思考はそう簡単には消し去ることなどできないから、一度芽を出したそれから顔を背けるにはどうしたって走るほかない気がした。

トオルは荒くなった呼吸の合間に歯を食いしばる。すると早くなった脈動の間に先ほどの記憶が入り込んでくる。

トオルの頭の中に瑠璃とのやり取りが蘇る。

——ねえ、どうして二人共、あたしには隠してたの？——

——いつから、なの？……ううん、そんなじゃない、………
で、真由子なの？——

瑠璃と真由子の間に『何か』があった。

そうでなければ瑠璃があんな顔をするはずなんてない。それに真由子も……

トオルは街を走り続けた。

人通りの少ない夜のランブラス通りを何度見回しても、やはり真由子の姿を見つけることは出来ない。深夜営業をしているカフェや

バーのスタッフに彼女を見掛けたか訊ねてみても、皆一様に首を横に振るだけだ。

焦りばかりが募る。喉奥にある鈍い熱が肺をじりじりと焼く。思考の緩慢になった頭の中はだんだんと白に塗られ、胸は早鐘を打ったように高鳴り、額や前髪の前からはひと足ごとに大粒の汗がこぼれ落ちた。街灯もない暗い路地の奥を覗き込み、人のこった返す飲食店の中に目を走らせ、それでも彼女の姿を見付けることはできない。

石畳の上を駆け抜けた。昼間は大道芸で賑わうペラヨ通りとの交差点までたどり着き、そこで一旦赤信号に足を止められた。

夏の夜なのに少し肌寒く、肩からは熱気が立ち昇っている気がする。何度も大きく息を吸い吐きすると、こめかみ辺りから伝って落ちた汗が顎の先から雫になってこぼれていく。

呼吸が落ち着いていくにつれて次第に体は疲労を自覚し始めたように、膝に手を付きそうになる情けない自分を振り払おうと、トオルは背筋に力を入れて強引に視線を持ち上げた。

その時だ。

不意に見覚えのあるシルエットが目飛び込んできたのだ。

「真由子っ！」

トオルは思わず声を出していた。視線の先のカタルーニヤ広場、街灯の明かりからちよつと離れた芝生のそばに一人佇む真由子を見付けた。

その瞬間、靴底は石畳を強く蹴っていた。

深夜、交通量が少なくなったとはいえ、世界有数の観光都市で脇目も振らずに車道に飛び出した。ダイムラーベントのエンブレムが付いたゴミの収集車がヒステリックにクラクションを鳴らして彼を責め立てるが、トオルはそんなことはお構いなしで一直線に前を横切った。

「真由子っ……！」

俯いていた真由子はその声で顔を上げ、辺りをキョロキョロと見

回した。そしてすぐにトオルの姿を見付けると、驚きと困惑が混ざった苦い表情をみせた。反射的に逃げ出そうとするが、しかしなぜか彼女はそれを呆気なく諦めてしまふ。その場で二、三步踏み出しただけで立ち止まり、また足元に目を落とした。

そこに180cm近いトオルの大きな体がぶつかる勢いで真由子の細い体を抱きとめたものだから、腕の中からは小さく「うっ」と声が漏れた。けれどトオルの口から出たのは謝罪でも優しい気遣いの言葉でもない。

「バカか、お前はっ!! こんな時間に一人で……襲われでもしたら、どうするつもりだった?！」

「心配しすぎよ。普段だって、結構一人で歩いてるもの」

そう言う真由子はしかし、トオルの目を見ようとはしない。彼の着るダンガリーのシャツの縦縞でも数えているのか、トオルの胸辺りをじっと見つめるばかりだ。

鼻の奥がつんと痛むような不快感を感じた。普段の真由子だったらトオルの言葉を頭から否定するようなことは滅多に言わなかったし、わざとはぐらかすような言い方もしない。

トオルは首筋を虫が這いずるみたいにぞわぞわと頭に血が上っていくのを感じた。

「いい加減にしろ。こんな浮浪者の多い場所に女一人、ぼーっと突っ立ってるのがどんな結果を招くか、お前にわからないはずないだろうっ」

言葉にした途端、怒りに右の瞼が引きつった。

「別に……気が付いたらここに居たってだけでしょ」

「いい加減にしろ!」

真由子の肩を掴んで引きはがし、無理矢理に視線を上げさせると、トオルは激しく怒鳴りつけた。

「一体、何があった? どうしてそんなに自暴自棄になる?！」

「なって、ないわよ……」

「いや、そんなことない。瑠璃が原因なのか? あいつも様子が変

だったし……なんならこれから行って、俺が頭を下げさせてやろうか」
急に真由子の表情が、半宵の暗がりの中でもわかるくらい明らか
に曇った。

「……それは、だめ。お願い、やめて」

「じゃあ、なんで!!」

問い詰めようとするトオルの胸に、真由子の手のひらがすつと触
れた。

「ごめん。でも、お願い。瑠璃は関係ないから」

「真由子……」

触れていた手のひらが、トオルのシャツを掴んで握り締める。彼
女の手はその胸の中のどんな感情からかはわからないが小刻みに震
えていた。

ほんの一瞬視線を逸らそうとして、すぐにまたトオルを見据えた
目は、今度は真っ直ぐだ。

「お願い。これは私の問題だから、瑠璃は少しも悪くないわ。ちょ
っと慌てて動揺しただけだと思う。だから、心配しないで」

「心配しないでって、そんなこと……」

トオルは真由子の言葉に思わず困惑してしまうのだが、まだ納得
出来ない彼の言葉を遮るように、真由子はゆっくりと首を横に振っ
た。

「忘れて。わたしも忘れるから。だからもう、この話は終わりにし
たいの」

自分がそんなふうに出来ない以上に、彼女のほうがもっと困難な
事を懇願されてしまったら、トオルにはなんて言って説き伏せたら
いいのかわからない。

「……ね、お願い」

普段は対等みたいな顔で付き合ってくれていても、こんなときだ
けは年上の貫禄で微笑する真由子に、トオルは釈然としないものを
いっぱい抱えたまま頷くしかなかった。

「わかったよ」

一つ、ため息が挟まってしまふ。一度ゆっくりと瞬きする。

視線を戻せば、そこにはいつもの真由子の顔があった。整った目元がずっと細くなった。

「もう、言わない。それでいいんだろう？」

「ごめんね。でも、ありがと」

「ああ」

自分の中で決着はついていなくとも、そこが二人にとっては終着点になってしまった。だからトオルは自分が抱えたままのモヤモヤを、なんとか丸めて呑み込む決意をするしかなかったのだ。

それはつまりトオルにとって瑠璃との決別に近いものだった。

真由子と瑠璃、二人の関係がこれまで通りにいくとは思いにくい。それなのに今までと同じように瑠璃と接することなど、トオルには出来そうにない。

結局、瑠璃とはこの時からしばらく顔を合わせることはなかったのだ。

それから一週間くらいたったある日。

トオルがビザの滞在期間の関係で帰国も検討していることを真由子に相談すると、真由子のほうはトオルに相談もなく勝手に大学を辞めてきてしまった。

あまりの事態にトオルは驚いて言葉も出なかったのだが、真由子は真由子なりにトオルの気持ちが帰国に大きく傾いているのを感じていたのだろう。

「私、日本に帰ろうかな……」

自分の存在こそがトオルをこの国に縛る一番の理由だと、真由子が気付いていないはずはなかったから、彼女がトオルの事を思っ

てそうしたのだとしてもきつと嘘ではない。

ただ、トオルにはわかっていた。

それはきつと思いの半分だ。もう半分はおそらく自分のために、

だろう。

芸術の世界では目指す場所にたどり着けないと薄々感じていた彼女が、もしも挫折の理由にトオルを使ったのだとしても、彼には責めるつもりもなかった。

トオルだって、一度は経験したのだ。

自分の全てをかけても登れない大きな壁にぶつかったとき、その喪失感を自分で埋めるのは壁を登るのと同じくらい難しいことだから。

それが優しさでも愛情でもないといわれれば、確かにそうかもしれない。ただ、たとえ逃げてでも真っ直ぐ進まなくとも、人は生きていかなくてはならないのだ。

生きていくために支え合う相手が、同じ苦しみを乗り越えた仲間ら当然心強い。

互いに寄り添い、励まし合った男女なら、そこに何かが生まれてもおかしくはない。

日本に帰国したトオルと真由子がそれから愛を育み、そして数年の後に結婚したのは、夢破れた者同士が身を寄せ合った成れの果てではなく、互いを想う優しさと純粋な愛情の結実だ。

そして若い二人があので諦めた『夢』の代わりに辿り付いたのは、新しい『夢』。

——『カーサ・エム』だった。

愛する妻の名を看板に刻み、トオルの新しい夢が始まったのだ。

今度は二人で……

Let bygones be bygones . — 双城

真由子 —

帰る直前まで心配そうな顔をしていた美純は、結局帰り際に我慢できなくなつてトオルに言ったのだ。

「ねえ、トオル。瑠璃さんがなんて言つてトオルを怒らせたのかわからないけれど、もうこれ以上怒るのは止めてあげて。……瑠璃さんだつて、多分悪気があつたわけじゃないんだと思うの」

そんなことはもちろんわかつていたし、だからといって仕方がないとすぐに気持ちを切り替えることが出来るのならトオルだつてとつくにしている。

そう、考えたのが顔に出ていたらしい。

「私だつて、一度トオルを怒らせたことがあるからわかる。……トオルが真剣に怒ったときつてすごく怖い。普段は優しくて人のことと氣遣つてくれるのに、カツとなつたら誰の声も耳に入らないみたいな雰囲気がある」

「そう、かな？」

美純がスツと上げた視線がトオルのものと交差したとき、彼女の芯の太さを感じたような気がした。

「うん、そう」

美純はじつとトオルを見つめたまま短く肯定した。

「許してあげようよ、ね？」

そしてトオルの方が視線を逸らすまで決して目を逸らそうとしないのだ。まるで自分の主張が通るまで絶対に諦めない、と言っているかのよう。

「やっぱり、私、もうちょつと居ようかな。瑠璃さんの事、心配だ

し」

そう言って視線を送ったカウンターにはいつもの三分の二くらいに小さくなった瑠璃の背中が見える。美純が「瑠璃さん」と小さく声を掛けると、彼女はほんの少しだけ顔を向け、右手を小さく左右に振った。美純もそれに手を振り返しながら笑顔を作っていたが、瑠璃の眼がカウンターテーブルの上に落ちていくと、すぐにその笑みも消えてしまった。

口元を強く結んで決意の表情にすると、もう一度店内に足を踏み入れようとする。

しかしそれをトオルが体で制した。

「ちょ、トオルっ！ どいて、なんで邪魔するの?!」

進路を遮られたことでムツとした美純が噛み付いてきた。

「もう、遅い。こんな時間まで居させたことだって、留利子さんに見つかったら大目玉だ」

「だ、だけど……あっ」

一瞬、反論しようとした彼女は表情を陰しくし、ところがすぐに何かを思い出したらしく急に俯いてしまう。口から空気が漏れて萎んだ風船のようにしゅんとしてしまった美純を見て、トオルはやっと彼女が諦めたのかと思った。

大方、留利子に怒られた時のことでも思い出したのだろう、と。それでも彼女は最後にもう一言言おうとして、だが何度も躊躇っている。

まあ、帰り際の憎まれ口の一つくらいどんなことを言われても笑顔で聞き流してやろうと、トオルはしばらく美純の口が動き出すのを扉の前で待っていたのだ。

けれども、そこから出てきたのは捨て台詞ではなかった。

「……それって、私が子供だから？」

「えっ、い、いや……」

「でも、女の悩みは女にしかわからない事もあるんだよ。トオルは瑠璃さんの事、ちゃんとわかってあげられるの？」

「……………」

「私だって女だもの。瑠璃さんがどうしてあんな苦しそうな顔をしたのか、理由はわからなくなたって、なんとなく理解はできるよ。…それともトオルは私の事、子供としか見てないってこと？ 苦しくて切なくなってるってどうしようもないのに、だけどそれ以外の答えも見つからないような胸の痛みを経験したことがない女の子だって、そう思っているの？」

「い、いや、そんな事は……そ、そんなふうに思ったことはないよ」
「……嘘。トオルってすぐ顔に出るからわかる」

そう言われたら、何を言い返したって分が悪い。

結局、トオルは降参を示すように両手を肩までかかげてひらつかせた。

「O・K、O・K、わかったよ。もう瑠璃には怒らない。ちやんと一杯奢って、乾杯する。……これでいいだろ？」

トオルは不承不承言った。胸の中のモヤモヤが消えてなくなったわけではなかったが、確かにいつまでもイライラしてる事に意味はないから、これがちょうどいいきっかけかもしれない。

「ほんと？ 約束する？」

美純はまだ半信半疑な顔だ。

「顔に出るからわかるんだろ？」

「ぶうう……………」

美純が不満の音を出して頬を膨らませた。

「それとも和解のキスでもしたほうがいいか。それで前が安心して帰るなら、してやってもいいぜ」

「いつ、ち、や……か、帰るっ！ 帰えるもん！！」

慌てて踵を返そうとした美純が脇に抱えていたバッグを扉の角にぶつけて落とした。しょうがないな、と拾ってやろうとすると、彼女はズいぶん大げさな素振りですそれを阻止し、すごい剣幕で拾い上げ胸の前に抱え込んだ。

「な、なんだよ……………」

「帰る！ 帰るっつー！」

「わ、わかったよ……お、おやすみ」

トオルが手を振って見送ろうとすると、餌を取られるのを警戒する猫みたいな様子の美純は、ほんのついさっきまでは笑顔で聞き流すつもりだったトオルに、意味深な捨て台詞を浴びせていく。

「私だって、……子供……じゃ……お、女だもん！」

「は、はあ？」

トオルは見事に怪訝な顔をしてしまった。そそくさと小走りに帰路に着く少女の背中を見送りながらカリカリと頭をかき、その背中が見えなくなると扉を閉めた。

「ふう……なんだよ、あいつ。急になに言っただ」

ひとりごちに呟きながらトオルはキッチンへと一度戻り、粗方進んでいた片付けを済ませる。

店内に残る客はもう瑠璃以外はいない。

トオルは瑠璃の前に置かれたままもうしばらく口も付けられていないバーボンウィスキーの入ったグラスを取り上げると、代わりにどつすりと濃い色をしたダーク・ラムのロックを置いた。グアテマラ産のサトウキビから造った銘柄は、見た目の色と同じくらい濃厚で甘い香りにビターな味だ。

トオルは瑠璃の隣の席を引くとドスッと腰を下ろした。

「ほら。乾杯、しないのか？」

自分のグラスを彼女の横に突き出すと、トオルは俯いたままの瑠璃に声を掛ける。

しかし瑠璃からの返事はない。

トオルは小さく溜息を付いた。

「なあ、忘れた……とまでは言わないが、もう気にはしてない。だからお前も気にするなよ」

「……………」

かかっていたグラスを一旦カウンターのの上に置くと、しばらく彼女の横顔をじつと眺めた。瑠璃は長いくて形のいいまつ毛が時々動

く以外、まったく表情を変えようとしない。肩をすくめたトオルがカウンターの上に片肘をついてもずっとそのままだった。

「俺も、さ……そんな事、言わなきゃよかったって思うことは何度もあるんだ。ただ言葉ってやつは一度口から吐き出すと取り消しも取り替えもきかないから、あとから出来ることは後悔くらいしかない」

手元のグラスを弄ぶと、砕いた氷がカラカラと音を奏でた。

その音は透き通ったガラスの鈴のようでも、悲しげな鳴き声のようでもあって、トオルは少しでもその音色が優しく響くようにそうとグラスを傾ける。

「だけどさ、生きている者同士ならあとから誤解を解く努力はできるし、もう一度歩み寄ることもできるだろ？」

グラスの中の氷を指先でつついてみる。身を振って逃げようとする透明な塊は、グラスの中の小さな世界をほんの一瞬で一回りして戻ってきた。

「そんな時に飲む酒はちょっと甘くて、少しビターなのがちょうどいい。そう思わないか」

「……そんな臭い台詞で口説かれるほど、まだオバサンじゃないわよ、あたし」

気が付くと、瑠璃が目だけでこちらを見ていた。

トオルはもう一度、自分のグラスを瑠璃の横にかかげる。

「昔を思い出させてセンチメンタルな気持ちにしたのはお前だ。少しくらい優しくしろよ」

「そう、ね。ごめんなさい、本当にそんなつもりはなかった」

「ああ、わかってる。もういいよ」

そして瑠璃が手に持ったグラスにカツッと自分のを重ねた。

口に含まれた褐色の液体は、たつぷりと年月を重ねて熟成されたからこそのまろやかな甘さと、樽から染み出したビターな後味と、しっかりとしたアルコール度数と同じくらいの優しさに満ちていた。

「あたし、いつもこういうのよね。あとになって『言わなきゃよかった

た」って後悔して……何回も痛い目にあって、それなのにまた同じことの繰り返し」

「みんな、大なり小なりそうなんだよ」

もう一口。そしてトオルの口からも一言。

「だけど、俺の後悔はもう取り返すことはできないんだ。真由子はもう……」

そう呟くと、トオルは自分のグラスを両手で包み込むようにしてその液面に何かを探すようにじっとグラスの中を見下ろした。

「俺が真由子を傷付けて、俺が真由子を死なせたんだ。……俺には誰かを幸せにする機能はついていない。一生懸命そうしているつもりでいても、自分が苦しくなったときには結局、相手の話も聞こうとしない度量の小さな男に成り下がる」

「誰もそんなふうにあなたを見てないわよ。ネガティブに考えるのは止めたら？ そっちの方が器を小さく見せるわよ」

瑠璃に何気なく言われた一言に苦笑する。どっちにしたって自分は大した男じゃない、というわけだ。そう考えること自体がマイナス思考だといわれればその通りなのだが、ただ一度陥った深みからずっと抜け出せるほどトオルは器用な人間でもなかった。

ふと、ついさっきした会話を思い出した。

「ははは、そうか。あいつにはもうわかってたんだ。とつくに俺って人間の底は見られてた……」

苦笑いが自嘲になった。

「あいつ？ ……ああ、美純ちゃんの事？」

聞き返されたが、トオルはそれには答えなかった。瑠璃はようやく体をトオルの方に向き直すと、様子を伺うように顔を覗き込んできた。だが、なんとなく見られることが苦しくなつて、身を擦るようにして少し深めに俯く。

「あんなガキンチョが、な……」

「そう思ってるからいけないんじゃない？」

簡単に返されて、トオルは思わず顔を上げて瑠璃を見た。

「あの子、今、一生懸命に大人になろうとしてるのよ。あなたに近づきたくって、一人の女として見られたくって。女のあたしから見たら、ちよっとおかしくって笑っちゃうくらいに背伸びしてる。でもね、すぐにそれも馴染むわ」

無言のまま、聞いていた。

「使い始めの頃は派手で似合わなかった口紅も、数日もすれば前に使っていたのが地味に感じるくらいになる。女はすぐに変わるわよ」「美純が、か？ まだ１７歳だぞ、あいつは」

「そう？ でも、あなたに釣り合うようにって頑張ってるあの子は、もう一人前の女よ。幾つかなんて関係ない。うかうかしてるとどんどん成長して、あつという間にあなたに追いついて、いつの間にか卒業してっちゃうかも」

瑠璃が口元で微笑してみせるのを、トオルは椅子に深く腰を落として眺めた。彼女が何を言おうとしてこんな話をしたのかはわからなかったが、多分、言っていることは正しい。

確かに初めて会った時の美純の面影は、今はもう無いような気がする。

前はもうちよつと流されやすいところがあったはずだ。だが、さつき見た彼女はとても芯の強いところがあつた。自分の主張を曲げようとしないう、信念を感じた。

女は変わるらしい。

なら、３４歳の自分はどうかだろうか？

もう二度と、と誓ったつもりだった。贖罪の意味もあつた。けれどそれが本当に正しいのかなんて、自分で答えが出せるわけでも、誰かが答えをくれるわけでもない。

そんな今の自分を見て、真由子は一体どんな顔をするのだろうか
とトオルは考える。

女は変わるらしい。

男は、——自分は、変わるのだろうか。
前を向く事はできるのだろうか。

トオルはグラスに残っていた酒を一息で飲み干した。20年以上の熟成を経たその液体が、昔とどう姿を変えているのかなんて、彼にはこれっぽちもわからない。

ただそれだけの時間を費やさなければこの味には到達しない、ということだけは間違いのない事実なのだ。

「いやいや、参ったね。想像以上だよ。君にお願いした甲斐があった」

「そう言ってもらえるとあたしもやった甲斐があります。正直に言っちゃうと、実は結構、自信作なんです」

「うん、そうだと思うよ。筆に迷いが無い、っていうのかな。それが良い意味でダイナミックさにつながっていると思う」

「ありがとうございます」

「日本人の僕がこの国で造ったワインのラベルを、日本人の君がデザインする……これって市場にとってはきつと売り文句になるから、今後も君との関係は良好にしておきたいな」

「もちろんっ！ こんなチャンスなんて滅多にももらえないですから、あたしのほうからもぜひお願いします」

「そうか、よかった」

「また精一杯、描かせてもらいます」

「ああ、そのときはよろしくね」

話の終わりは一杯のワイン。

自身がデザインしたラベルが貼られたボトルを傍らにしながら飲むその味は、これまで口にしたどんな物よりも格別の味だった。舌だけでなく、魂までも満たしていく気がするの、そのボトルに貼られたたった一枚の紙きれが、しかし自分にとって生まれて初めて対価を——『評価』を手にした創作だからかもしれない、と瑠璃は感じていた。

クライアントからは日本とバルセロナの融合、なんて漠然としたリクエストしか出されなかったから、最初はずいぶん悩んだのだ。何枚描いてもしっくりこなくて、その度に色々考えてはまた描いた。それでもやり遂げた。自分一人の力で。

その達成感に今、舌も体も震えていた。興奮が体の芯の部分を手早く長く締め付け、じっとしていると身悶えそうだった。

『評価』を得る、ということは自分を認めさせる事であって、つまりは自分の存在を他者に必要とさせる事。

自覚はなくとも彼女は『それ』を間違いなく欲していた。

生まれてからたったの一度も水を与えられた実感のない心の干ばつ地帯に、ようやく今、恵みの雨が注いだわけだから、胸の奥底から湧くその感情の実体は何なのかをちゃんと理解のはまだ難しい。

それでも、と瑠璃は思う。

自分は正しかったのだ。悪いのは、それを認めようとしないあの国だ。

瑠璃がスペイン——バルセロナに留学してから一年半が過ぎていた。この国に来たのはもちろん芸術を学ぶためだったが、しかしそれは彼女の目的の半分ではない。

もう半分はこの国でチャンスを得ること。

学生の身でありながらそれを得るのは非常に難しいことは重々わかっていてから、たとえ偶然と幸運だけがもたらしただろう今回の縁であっても、瑠璃は何が何でもモノにしたかった。

彼女は自分の描いたもの、自分の形作ったものを人々に認めさせたいとずっと思っていた。

幼い時分、それこそ物心ついた頃からすでにあつたその思いは『夢』なんて呼ぶにはもつと貪欲で、ドロつとした質感の『自我』なのかもしれない。欲望とも呼べる感情は、けれど彼女が日本に在る間は一度も満たされることはなかった。

『なんでみんなとは違うことをするの?』

『瑠璃ちゃん、お空は青いものなのよ?』

思いのままを紙に載せると、返ってくるのは否定の声、奇異の視線。

何年も、何年も溜まりに溜まったフラストレーションが、瑠璃を自然とこの国に追いやった。

その先がなぜバルセロナだったのかは、もうよく覚えていない。ただ、住んでみて感じるたのは、びっくりするほど水が合ったということ。言えば冗談のように聞こえてしまっただろうから口にしたことはないが、きっと自分の前世はカタルーニャ人であったと確信している。日本いた時の、補整下着を着けたような窮屈な感覚はもうない。

この地が自分を満たしてくれる。
若い彼女にもう一歩踏み出させるには十分な原動力だった。

「早くスペイン人の男に抱かれない。それで出来ちゃった結婚して、この国に永住したいよお」

もう誰に言った言葉なのかも忘れたが、そう思っているのは本心だ。

彼女にとってこの地にずっと留まることがとても重要で、だが難しいとなればその方法まで選んではいられない。

第一、男なんて見た目がちょっと違うだけで中身はどれも代わり映えなんてしないから、利用できる方がいいに決まっている。なにしろ言い寄ってくるのと同じ数だけ去っていったこれまでの奴らが、瑠璃の心の乾きを潤してくれたことなんて一度だってなかったから、さすがにもう奴らのことはすっぱり諦めが付いていた。

男なんて、あの国と一緒にだ。

自分を満たすのはこの国と自分だけ。

最近では少しずつ仕事の声が掛かるようになってきた瑠璃にとって、自分の欲求を満たすのは自分の創り出すものとそれに対する評価に変わっていた。

だがその事を不満に思ったりも、不愉快に感じたりもしない。
今の瑠璃は昔と違って自身の乾きを癒す方法を知っていた。それさえあれば十分だった。

あのワインのラベルの仕事は自分でもびっくりするほどの効果があったらしく、ワイナリーのオーナーからは悲鳴のような苦情のよ

うな電話をもらったことがある。

「『あれを描いたのは誰だ』って問い合わせがしょっちゅうあるんだ。まるで僕は君の代理人扱いさ」

街のほとんどの酒屋でもショーケースに並んでいるのは、素晴らしいからでもなんでもなく、ただ生産本数が多いからなのだろう。でも、それが逆に多くの人の目に触れる機会を生んでくれたわけだ。酒の席でのことだから本気かどうかはわからないが、突然専属契約を結びたいなんて声も頂いたくらいだ。

生活は充実していたし、仕事だって学生という身分を考えれば概ね順調だった。——いや、順調すぎるくらいだ。

それに今の上々の自分を、一緒に噛み締めてくれる親友だっている。

「……だからさ、それだっけ、は……譲れないで、しょおおうって」「くつくつく。確かに瑠璃らしいっていえば、らしいけどね。でも、いいの？ そんな我俣、言っちゃって。クライアントでしょ」

「いいのよっ！ だって見え見えなのよお、アタシの体目当てなの。高い報酬だったって、……ひっ、ひっく……きつとソツチのほうまで含めた金額なのよ。そんなの、じよ、冗談じゃ、にやいわる……」

「もう、飲みすぎよ」

「だいつ、じょう、ぶっ！！……まだ、飲むう」

たとえカウンターの隣からどんな目で見られているかわからなくなるくらい飲み潰れても、真由子は自分を放ったりはしなかった。いつも笑って付き合ってくれた。

瑠璃にとって数少ない、自分を認め評価してくれる存在。大事な親友だ。

そしてこんな親友を与えてくれたのも、この国なのだ。

「もう帰るわよ、瑠璃……」

ほんのちよつとしか開かなくなった瞼の向こうで苦笑いらしい表情をみせている真由子に、最近では決まり文句みたいに言うようになった一言をもらす。

「トオル……呼ば。歩くの、や……」

「だからいつも言ってるのに。飲みすぎちゃダメだって。こんなに無用心な女の子、他にいないわよ」

「そのための、用心棒じゃない」

「彼、また怒るわよ」

「いいのよ、言わせておけば」

男なんて、とは続かなかった。その不満を口にするよりも先に酔いと睡魔が勝ったからだ。けれど瑠璃はそんな綿菓子みたいに甘くて溶けるような口惜しさとたつぷりの満足感に包まれ、今夜もいつもの背中で揺られた。

満たされた日々。

欲しかったものを与え、常に乾きを潤し続けてくれる場所。

それが彼女にとつてのバルセロナ。

人は水なしでは生きていけないから。

その日はなぜか真由子の姿を学校でも見なかったから、なんとなく一日一人だった。

別に他に話す相手がいないわけでもなのだが、瑠璃は実はあんまり人と話すのは好きではないタイプだ。

というよりも彼女は会話をするのが苦手だった。

話したいことがあるのに他人の話を聞くのはなんだかウズウズするし、それに答えるよりも先に自分の話を聞いてほしい。

喋りたいことがあるから話すのに、なんで譲り合いみたいな事をしなくちゃいけないのか彼女には理解できなかったし、相手に合わせなんてもどかしくて絶対耐えられない。おまけに相手からは露骨に不快な表情までされるなら、そんなのこっちから願下げだ。

だから結局、消化不良な気持ちのまま授業を終えて、欲求不満のまま街をブラブラし、なんとなく入ったカフェで最初一杯だけコーヒーを飲んで、次からずっとワインを飲んでしまったとしても仕

方がない気がした。

一人で淡々と飲むワインがこんなにも効くとは知らずに。

気が付くと頭がぼわわとしていて、しばらくしたら眠くなった。今日はさすがにまずいだろうと思ったから立ち上がって帰ろうとしたのだが、すでに体に力が入らなくなっていた。

半ば習慣的に電話をしていた。

相手は仕事で忙しかったらしく最初は迷惑そうな口調だったのだが、そのうちに怒っているとも焦っているともつかない荒っぽい調子になって捲し立ててきた。

瑠璃は電話口の相手から言われるままに自分の居場所を伝えようとして、急に底の抜けた壺に手を突っ込んだみたいな感覚に落ちた。なんとなく入った店だったから、どこをどうやってたどり着いたかもわからなかったのだ。

店内を見回しても店名らしいものは見て取れなかったし、目に付いたのはカウンターのの上にでかでかと書かれたメニュー表が左半分スペインの公用語で右半分が現地語の『カタラン』だったというところくらいだった。だからそのままを伝えたら、さらにギャンギャンと怒鳴られた。

それ以上は取り立てた特徴はなかったし、だんだん電話していること自体が面倒くさくなってきたので、瑠璃は一方的に電話を切ってしまった。すぐに着信があったのは無視して、携帯をバッグに仕舞い込んだ。何度もなる着信音が催眠効果でもあるかのように、瑠璃は次第に意識が遠くなるのを感じていた。

ふと、気が付いたのは妙な気配を感じたからだ。

顔を上げると店の外がすっかり暗くなっている。眠ってしまったのはほんの一瞬、ということではなさそうだ。店内を見回すと、さっきまでいた客は総入れ替えしたかのように全部違う顔に変わっていた。店員だって女の子からおじさんに変わっていた。

さすがにちょっと気恥しい気がして姿勢を正す。

なにも寝かしっぱなしはないじゃない、と不満を店員に言いたい気もしたが、ともかく店を出ようかと椅子の背もたれと腰の間に手を伸ばした。普段、時間に縛られれ気がして腕時計をつけない瑠璃にとつて時間を知るための唯一の道具は携帯電話だったから、まずはそれをバッグから取り出すはずだった。

ところが——ないのだ。

あるはずのところにソレがない。

お気に入りのビトンのバッグ、その形と大きさピッタリの空間が背中と椅子の間に空いていた。まったく同じ大きさの穴が胸のなかにもぽつかりと空いたような気がした。一瞬、間をおいてその穴を飛び出してきたのは、驚嘆と冷たい汗。瞼が瞬きを忘れたんじゃないかというくらい固まってしまつて、開いたままの目は視界の右から左をゆつくりと横切った。

後悔してもどうしようもない。

それはわかつているのに幾つもの感情がうねつて、絡まり合つて、それは結局後悔のような形を成す。泣いたつて仕方ないのに瞼の裏側からじんわりと滲むものを感じる。

唇が動いたが、声にはならなかった。

ただ彼女の頭の中身と唇の意見は一致していた。

どうしよう——

電話がないから誰にも連絡は取れないし、財布がなければタクシーだって拾えない。パスポートだけは家にあるからともかく、学生証やクレジットカードや、ともかく必要な物のほとんどはあの中だ。そう思つたら急に体の奥から黒くてゾワゾワとした冷たい何かが顔を出した。奥歯がカチカチと音を立て始めた。慌てて唾を飲み込んで、気持ちを落ち着かせようとしたが効果はなかった。

カチカチ、カチカチ、と。寒くもないのに体まで震えてきた。このまま永遠に立ち上がれないんじゃないかというくらい、膝まで震

えて力が入らなくなった。

頭の中がざっと色を失って、目の前の景色がだんだん白く変わっていく。

その視界の中に急にどんっと何かが投げ込まれて、それだけが妙に鮮明で現実感があった。

バッグだった。

見覚えがあるものだと思いつくのに、たつぷり数秒は掛かった。

それがなんで突然ここに現れたのか理解するにはもっと時間が掛かった。息苦しくなって、呼吸するのを忘れていたのに気付くのと同じくらい長く掛かった。

顔を上げて、目の前に立っているのが誰かに気付くのはすぐだったのに、その目元に争った跡があるのに気付くのは、正直に告白すると翌日のこと。

「馬鹿野郎、俺はあれだけ……いつも……」

叩かれるんじゃないかと思うくらい鋭い視線を投げ付けられて初めて彼を怖いと思ったのと、感情を必死で押さえ込んでいるらしく「帰るぞ」と一言低く搾り出した声に、ギョツと心臓を締め付けられた気がしたのはほぼ同時くらいだった。

あとは腕を強く引かれ、後ろからずつと背中を見て歩き続けただけ。寮に着くまでの間ずつとそうだった。

その背中は一いつ年下のはずの、今までこれっぽちも気にも止めたことのない、大きな背中なのに。

瑠璃は掴まれた手のひらに伝わる熱よりもずつと熱い、奇妙な『何か』が喉の奥に集まって小さな塊になっていくのを感じていた。それはひと足ごとに膨らんで、熱くなって、やがて重さに耐えかねて落ちる果実のように胸の奥に沈んでいった。

それはどんな水よりも、この国で出会ったどんな人やどんな事柄よりも、あつという間に彼女の渴いたところを潤してしまった。まるで砂漠が海にでも変わったかのように、想いは水となって後から

後から溢れてきた。

瑠璃は寮に着いても顔を上げることができなかったし、満足にお礼を言うこともできなかった。

「あ……あり、が……」

結局その夜、彼はほとんど口を訊かなかった。多分、かなり怒っていたんだと思う。

でも、瑠璃が見送った背中は何んだかとても大きくて頼もしかった。

おかげで彼女はその背中が見えなくなってもまだ、胸の奥はずっと熱いままだった。

親友には隠し事などしないし、なんでも相談するべきだと、瑠璃は思う。

だからすぐ翌日には真由子に飛び付いて、話したのだ。

「ねえ、真由子。アタシね、……好きな人が出来ちゃったの……」

「嘘？ 急にどうしたのよ。悪いけど、瑠璃らしくないって思っちゃう」

「し、失礼ね！ アタシだってそういうことに無関心ってわけじゃないのよ」

「くすくす、わかってるわよ」

「ぶう……」

「で、お相手は誰？ もう、告白したの？」

「それがね……ねえ、言ったら協力してくれる？」

「うーん、どうしよっかなあ」

「もう、意地悪言わないでよっ！！」

「ふふふ、わかったわよ。ちゃんと協力します。……で？」

親友はいつも隣にいて、私のことを思ってくれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1832t/>

Love laughs at locksmith. - 年の差恋愛の始め方、続け方 -

2012年1月7日02時50分発行